夜の貴族院

　またもや真夜中の出発なので、わたしも夕方からは仮眠をとる予定だ。そのためにも、今は頑張って準備しなければならない。わたしはハルトムート達を呼んでフェアベルッケンによって隠蔽されている離宮を探すためにはどうすれば最も効率が良いのか調べたり、必要な魔法陣を準備したりすることにした。

「隠蔽の神　フェアベルッケンの印を刻んで扉や離宮自体を見えにくいようにしているようです。助言の女神　アンハルトゥングの印を使うことで、どこに隠されているのか探ることができると思います」

　わたしがアウブ・ダンケルフェルガーとの通信の内容を説明すると、ハルトムートが記憶を探るように腕を組んで俯く。

「探し物に関するような魔法陣は、貴族院の講義中にあまりございませんでした。どちらかというと特殊な魔法陣になると思いますが、ローゼマイン様はご存知ですか？」

「ローゼマイン様、アンハルトゥングで暴くことも必要ですが、フェアベルッケンの印を我々が使って敵に気付かれずに隠密行動を取ることができれば、とても有効な手段になるのではございませんか？」

　ハルトムートやレオノーレが意見を出す中、わたしはメスティオノーラの書を出してフェアベルッケンやアンハルトゥングの項目を検索してみる。もうこの執務室にいる人は全員がメスティオノーラの書を持っていることを知っているので隠す必要もない。

「ハルトムート、この魔法陣は探し物に使えそうですよ」

　自分の知識で穴埋めができる魔法陣を選別してから紙に描いてハルトムートに差し出す。

「魔法陣は平気なのですね」

「そうですね。魔法陣を描くことは別に何ともありません」

「……では、オルドナンツに使われているオルドシュネーリの魔法陣を少し改良すれば声のやり取りができるかもしれません。戦いの場に赴くには必要だと思われます」

　ハルトムートが講義で習う物以外でオルドシュネーリに関する魔法陣について調べてほしいと言う。確かに通信手段を持っているのと持っていないのでは大違いだろう。ハルトムートの着眼点に感嘆しつつ、わたしはメスティオノーラの書を検索する。

　……古い魔法陣はフェルディナンド様の方がいっぱい持っているんだよね。

　ちょうど良いのがあるだろうか、と思いながら検索していたわたしはハルトムートを見上げて、ん？　と首を傾げた。

「ハルトムートも寝不足の顔になっていませんか？　フェルディナンド様ほどではなくても休んでいないでしょう？」

「おや？　ローゼマイン様が私にもシュラートラウムの祝福をくださるのですか？」

　おどけるように眉を少し上げたハルトムートとクラリッサを見比べる。クラリッサが「お願いします」と言いたげな表情をして胸の前で指を組んだのが見えた。

「ハルトムートの頑張りはよくわかっています。祝福を与えるのを惜しむことはありませんよ」

「では、フェルディナンド様が起きたら交代で祝福をいただきましょう」

　これ以上、わたしの周辺から側近を減らすことはできないとハルトムートが首を横に振った。わたしは自分の周囲を見回した。確かに護衛騎士達は今夜の戦いに向けて、交代で休みを取っているし、起きたら全力で動き始めるフェルディナンドを補佐するためにユストクスとエックハルト兄様も休息を取っている。

「ご安心ください。私はローゼマイン様と共に休みます」

「ローゼマイン様の仮眠時間に合わせて、と言ってくださいませ、ハルトムート」

　レオノーレがうっすらと笑みを浮かべてハルトムートを睨む。

　そんなやり取りを見ながら、わたしはハルトムートとクラリッサが作った魔紙にせっせと魔法陣を描いたり、ランツェナーヴェの館から移動したと思われる貴族達の数をレティーツィアに確認したりして過ごしていた。

「ずいぶんと早起きですね、フェルディナンド様」

　もっとぐっすり眠っていると思っていたのに、フェルディナンドは五の鐘が鳴るよりも早く起きてきた。起きてきた時間は予想よりも早いけれど、顔色はずいぶんとよくなっている。

「ローゼマイン、相手の予定が狂うような祝福を行う場合は事前に相手の許可を得るように」

「では、フェルディナンド様も今度からわたくしの許可を取ってくださいね」

　許可を得ずに祝福を行ったのはお互い様だ。わたしがフェルディナンドを睨むと、「善処する」と嫌そうな顔で頷いてくれた。

「フェルディナンド様はどのような夢を見ましたか？　わたくし、素敵な図書館でたくさん本を読む夢を見たのですよ」

「……何ということもないものだった」

「おかしいですね。わたくしのお祈りが足りなかったでしょうか？」

　あっという間にフェルディナンドが眠ってしまったので祝福に使った魔力はそれほど多くなかったけれど、もっとだぱっと魔力を注いだ方が良かっただろうか。

「余計な気は回さなくてよろしい。それよりも何か連絡はあったか？　準備はどのようになっている？」

　フェルディナンドはわたしではなく、ハルトムートに説明を求めて話し始める。

「フェアベルッケンの印を持って隠密行動を行うのは良い案だ。むしろ、ダンケルフェルガーの騎士に与えたい」

「わたくし達は国境門から転移陣を使って移動する時点で非常に目立ちますものね。ダンケルフェルガーへ迎えに行った時も門が光ったそうですし……」

　隠密行動が今更になる可能性が高いとわたしが言えば、フェルディナンドは少し考え込むようにこめかみをトントンと指先で叩いて「持っておいた方が良いであろう」と言った。

「フェルディナンド様、レティーツィア様から戦いの前に即死の毒についてお話をしたいとお願いされました。レティーツィア様の立場上、大っぴらにお話できることではないようですし、わたくしの護衛騎士達が二人きりにはできないと言うので、フェルディナンド様が起きてから、とお答えしたのですけれど、お時間はよろしいですか？」

　この先の戦いでランツェナーヴェの者達が使ってくる可能性は高い。何か知っていることがあるならば教えてもらった方が良いと思う。けれど、レティーツィアの扱いをどうするのかは、被害者であるフェルディナンドの意見をある程度は尊重したいのだ。

「……構わぬ。聞いておこう。ランツェナーヴェの情報は非常に入りにくかったからな」

「では、お茶の準備をさせますね。フェルディナンド様は昼食を摂っていないので、軽食の準備も必要かしら？」

「ローゼマイン様がお昼からずっと心配されていらっしゃったので、すぐにでも軽食の準備はできますよ。エーレンフェストから持ち込んだ料理とアーレンスバッハの軽食、どちらがよろしいですか？」

　リーゼレータがクスッと微笑みながら尋ねると、ユストクスが「エーレンフェストから持ち込んだ料理をお願いします」と答えた。

　リーゼレータとゼルギウスが中心になって執務室の隣室にお茶の準備を始める。わたしはグレーティアに頼んでレティーツィアに連絡を入れてもらった。お茶の時間を少し早めて話し合う時間を作ったことを伝えて、お茶をする部屋へ来てもらう。

　レティーツィアとハルトムートからわたしの行動の報告を受けたフェルディナンドが集まった時には、完璧にお茶の準備が整い、範囲指定の盗聴防止の魔術具が作動されていた。

「それで、一体何の情報を？」

「危険な毒の入った銀の筒をランツェナーヴェの者達は持っています」

「知っている。どのような毒か、ローゼマインもエーレンフェストの戦いで見ているので詳細はいらぬ」

　フェルディナンドの短い返事にレティーツィアは少し言葉を探すように視線を動かす。

「彼等は自分達に毒が効かないようにするための薬を持っています。ですから、彼等が口元を布で覆っていなくても危険な毒を使うことができます。お気を付けください」

「薬？」

「はい。お土産にいただいたお菓子ととてもよく似た形や味をしています。けれど、最後まで口に含んでいると中心部に少しだけ苦みがありました。あの日、わたくしは供給の間へ向かう途中でディートリンデ様とレオンツィオ様に呼ばれて、それをいただいたのです」

　レティーツィアの筆頭側仕えであるロスヴィータが突然姿を消して行方がわからなくなって二日がたち、供給の間でフェルディナンドに相談する時間を取ってもらう約束をした時の話だそうだ。

「狭い部屋の中ではとても強力です。フェルディナンド様の側近達がどこかへ駆け出した後、レオンツィオ様がアウブの執務室で使いました。その時は、わたくしとわたくしの毒見として先に食べていたフェアゼーレ以外は皆……」

　レティーツィアが震える唇をぎゅっと引き結んで俯いた。エーレンフェストで魔力供給をする時は、側近の中でもアウブと血縁関係にある上級貴族だけがアウブの執務室で待機できる。その上級貴族達が一斉にあの毒にやられたのだ。自分の側近達が一斉に魔石に変わる場面が頭に思い浮かんで、わたしは思わず口元を押さえる。

「……レティーツィア、毒の脅威と解毒や中和に使える物があることはわかった。もう良い。下がれ」

「かしこまりました。……本当に、本当にお気を付けくださいませ。ランツェナーヴェの方は、わたくし達を魔力の塊のようにしか見ていません」

　レティーツィアが碧眼を悔しそうに揺らしながら退出していった。

「……大丈夫か、ローゼマイン？」

「き、気持ちは悪いですけれど、大丈夫ですよ。レティーツィア様のお話を聞くと決めたのはわたくしですし、わたくしよりレティーツィア様の方がよほどひどい光景を目の当たりにしているのですから」

　トラウマにならないはずがない。レティーツィアにこそ手厚い保護が必要だ。

「だが、レティーツィアは私に毒を向けた罪人でもある。救済はあっても良いと思うが、どのようにレティーツィアを扱うかは後回しだ。同じ思いをする者がこれ以上増えないように、ランツェナーヴェの者達を捕らえねばならぬ」

　ランツェナーヴェの者達を野放しにしておけない、と強く思った。わたしはフェルディナンドが差し出した手を取って立ち上がり、頷く。

「君はそろそろ仮眠の時間であろう？　今日もシュラートラウムの祝福は必要か？」

「昨夜よく眠れたので、今日のわたくしには効かないと思いますよ。むしろ、ハルトムートに祝福が……」

「ハルトムートの自室へ赴き、私が祝福しておくので君はさっさと寝なさい」

　図体のでかい男を運ぶのは大変だから、とフェルディナンドは軽く息を吐いた。どうやらエックハルト兄様に運ばれたのが気に入らなかったらしい。確かにわたしでは男性の部屋に入れないので、フェルディナンドにお願いした方が良いだろう。

　これはついでだ、と言いながらフェルディナンドがまたシュラートラウムの祝福をかけてくれたけれど、今日は突然眠くなることもなく自室まで普通に戻れた。でも、夢見は良かったので、これからは毎日してほしいものである。

「先日から戦いが続いている。騎士達はゆっくりと休む暇もなかったであろう。万全の体調とは言えぬはずだ」

　訓練場に集まった騎士達を見回しながら、フェルディナンドが口を開く。貴族院へ向かうアーレンスバッハの騎士が八十人、並んでいる。彼等に、わたしやフェルディナンドの護衛騎士や一部の文官達を加えたのが今回の戦力である。

　アーレンスバッハを守る戦力を残しておかなければならないため、今回動かせる余剰戦力はこれだけだ。けれど、エーレンフェストに比べればかなり人数が多いし、ダンケルフェルガーの戦力もある。アダルジーザの離宮を落とすだけならば、それほど難しくはない。

「だが、これ以上休息を取る時間はない。アーレンスバッハを荒らした者達をこのまま放置しておくことはできぬ。新たなアウブを迎えたこの地に平穏を取り戻すためにはツェントに対して反逆の意思などないところを見せねばならぬ。ランツェナーヴェの者達を引き入れた恥知らずを捕らえ、ツェントの前に突き出さねばならぬ」

　返事をするようにドンとエックハルト兄様が槍を地面に打ち付けた。それに呼応するように騎士達がガシャ！　と靴の踵を鳴らす。騎士達がまとう空気が熱くなってきた。戦いを前にした熱気が見えるようだ。

「突然襲われて命を失った同胞達の無念、守るべき者を守れなかった騎士としての屈辱、雪げるのは今だけである」

「おぅ！」

「礎を得た領主一族でありながら外国と手を組んで自領を危険に晒した愚か者を許すな！」

「おぅ！」

「アーレンスバッハの街を荒らした者達を一人残らず捕らえよ！」

「おぅ！」

　熱を孕んだ空気の中、フェルディナンドが「ローゼマイン」とわたしの名を呼んだ。わたしがゆっくりと歩み出て、フェルディナンドの一歩前に出た。わたしがすることは決まっている。これから戦いに赴く騎士達に祝福を贈るのだ。

「戦いに赴く皆に祝福を」

　シュタープを握り、わたしは唱える。

「水の女神　フリュートレーネが眷属　雷の女神 フェアドレンナと幸運の女神　グライフェシャーンの御加護がありますように」

　緑の光が騎士達に向かって降り注ぐ。アーレンスバッハの騎士達は祝福を受けたことがないのか、驚いたように軽く目を見張って上を向き、自分達に降り注ぐ緑の光を見つめている。

「炎の神　ライデンシャフトが眷属　武勇の神アングリーフと狩猟の神　シュラーゲツィールの御加護がありますように」

　次は青の光が降り注ぐ。フェルディナンドが「これだけの人数がいるのだぞ。もう十分だ」とわたしの背中を軽く叩いた。でも、わたしは頭を少し横に振って、その制止を拒否した。できるだけ多くの祝福を与えたい。少しでも戦いやすい状態であってほしい。少しでも皆の生存率を上げておきたいのだ。わたしの魔力なんて騎獣で国境門へ移動する時に激マズ回復薬でも飲んでおけばよい。

「風の女神　シュツェーリアが眷属　疾風の女神　シュタイフェリーゼと忍耐の女神　ドゥルトゼッツェンの御加護がありますように」

　夜空か海か区別がつかないような黒一色の世界に境界門と国境門がほのかに光って浮かび上がって見える。暗闇の中をわたしはフェルディナンドの騎獣に同乗させてもらい、お説教を食らいながら回復薬を飲んでいた。空中で激マズ回復薬を飲むのはのたうって危険なので、優しさ入りにするように言われたので、今回は優しさ入りだ。

「無茶をするな、この馬鹿者。あれだけの人数にあれだけの祝福をかけるなど、君の体に負担が大きいし、転移するためにも魔力が必要なことをわかっているのか？」

「わかってはいますけれど、魔力は回復させられますし、戦いの場で命を失ったら戻ってきません。祝福を重ね掛けすることで皆の生存率が上がるのでしたら少しくらい無理をしますよ……」

　できるだけ人が死ぬところを見たくないのだ。わたしの言葉にフェルディナンドが「君は本当に面倒くさい」と言いながら溜息を吐いた。

　境界門を開き、国境門を開く。今回はレッサーバスが使えないので、他の皆には階段から上がってきてもらうことになる。海の上にある扉から入っていく姿を見て、全員が入ったのを確認してから境界門を閉ざした。

　国境門に降り立ち、「ここに並んでください」と珍しそうに中を見回している騎士達に声をかけて転移陣に並んでもらって転移する。

「ケーシュルッセル　エアストエーデ」

　転移した先は貴族院の寮にある転移の間に似たような場所だった。かなり広いけれど、四方を壁に囲まれた部屋のようなところである。勝手に出ないように騎士達に命じて、わたしは自分の護衛騎士と一度アーレンスバッハの国境門へ戻り、残りの騎士達を連れてきた。

「フェアベルッケンの印を持ったか？」

　レオノーレの提案で文官達が急遽作ってくれた隠蔽用のお守りである。わたしは魔紙に魔法陣を描いて、お守り代わりに持っている。

「静かに。なるべく早く建物から出るぞ」

　密集しているところへ即死毒を使われては困る。口元は布で覆っているし、それぞれユレーヴェは持っているけれど、特にエーレンフェストから戦いを続けている騎士達はそれほど多くのユレーヴェを持っていない。

　わたしはグルトリスハイトで扉を開けた。エックハルト兄様やアンゲリカが音を立てないように外へ出て、周囲を確認する。すっとエックハルト兄様の手が挙がった。周囲に見張りの騎士達はいないらしい。

　更に先へ行ったアンゲリカが手を横に振る。どうやらその先には人影があるらしい。アンゲリカのいる方向は寮へ向かう扉が並んでいる辺りになるので、中央騎士団の騎士達がいるのかもしれない。

　ここは貴族院の中央棟だ。転移陣のある部屋を出れば、領主候補生コースの講義の時に使っている教室がある辺りだとわかる。全ての国境門へ移動できる転移陣があることからも、ここがユルゲンシュミットの聖地なのだと実感する。

　先を進むのは領主候補生の送り迎えで、この付近を歩いたことがある領主候補生の側近達だ。誰も声を発さず、静かに月明かりを反射するだけの白い建物の中を進む。夜の校舎だと思うと、何だかどこかの教室から理科室の骨格標本のような変な物が何か飛び出してきそうなスリルがある。緊張で手足が震えていた。意味のないことを叫びたくなるような緊迫した沈黙の中、騎士達が窓をそっと開けて外へ飛び出していき、次々と木立の中へ姿を消していく。

「戻らなくても良いのか？」

　小声でフェルディナンドが尋ねた。

「行きます」

　フェルディナンドが騎獣を出して、わたしを乗せて飛び立つと、木立の中で準備していた他の皆も騎獣でアーレンスバッハの寮がある方向を目指して夜空を駆け始めた。

「アウブ・ダンケルフェルガー、ローゼマインです。こちらは中央棟を出ました」

　わたしは早速ハルトムートが作ってくれたオルドシュネーリの魔法陣が刻まれた魔紙に声を吹き込み、宛先をスティロで書き込んだ。紙飛行機にしてダンケルフェルガーの寮がある方向へ飛ばす。

　夜空を紙飛行機が飛んでいった。しばらくすると遠くの方がざわめくのがわかった。

[------------------------------------------------]

アダルジーザの離宮

　ダンケルフェルガーもひとまずアーレンスバッハの寮へ向かっているはずだ。隠蔽の神　フェアベルッケンに隠された離宮を見つけるのがわたし達に任されているため、中央棟とダンケルフェルガーの寮から合流する場所として最も適しているからだ。

「フェルディナンド様は離宮へ行っても大丈夫なのですか？　その、嫌な気分になるのでしたら、外から指示を出すだけでも良いですよ？」

　わたしが聞いた範囲だけでもフェルディナンドにとって良い思い出がある場所ではないはずだ。離宮の中に踏み込むようなことはしたくないだろう。嫌な場所にわざわざ赴く必要はない。わたしがそう言うと、フェルディナンドは大きく溜息を吐いた。

「戦いが嫌いで行きたくなくてもアウブとしてここにいる君の前で、私に逃げろ、と？　余計な気を遣う必要はない。私はむしろあの離宮を粉々にしてやりたいと思っている」

「ちょっと待ってくださいませ。離宮を粉々とか、アーレンスバッハを更地にするとか、ランツェナーヴェと王族のどちらかが片付いていればよかったとか……フェルディナンド様は何だか最近思考が物騒ですよ」

　少し休んだだけでは取れない疲れのせいで、思考回路が危険方向に向かっているのではないだろうか。わたしがそう心配すると、フェルディナンドは苦笑した。

「わざわざ口にしなかっただけで、元々の思考が物騒なのであろう。最近のことではない。案ずるな」

「そこで案ずるなっておかしいですよね！？」

「では、君が勝手に案じていれば良かろう」

　……そんな面倒くさそうに言わないで！　自分のことだよ！

　ひとまず、フェルディナンドがアダルジーザの離宮を忌避しているのではなく、破壊したいと思っていることはよくわかった。ジェルヴァージオの話をした時の表情や口調がひどいものだったのでかなり心配していたのだけれど、本人は行く気のようだ。

「そういえば、フェルディナンド様は離宮の位置がわかりますか？　地図ではアーレンスバッハの寮の右斜め下ですけれど、真っ暗の上空から見てもどこがどこだか全然わかりませんね。わたくしにはアーレンスバッハの寮の方向さえわかりませんもの」

　中央棟や専門棟などが集まっている貴族院の中心部を抜ければ、ポツン、ポツンと各領地の寮とほのかに光っている円柱状の採集場所がある以外には真っ暗で広大な森が続いているだけだ。わたしには本当に今アーレンスバッハの寮へ向かっているのかどうかさえわからない。先頭を駆ける騎士達はこの夜空と黒い森しかない中でよく方向がわかるものだと感心してしまうくらいだ。

「……君はアーレンスバッハの寮の場所さえ把握できないくらいに地図が理解できない状態で、おおよその場所がわかるとアウブ・ダンケルフェルガーに向かって得意そうに言っていたのか？」

「おおよその場所ですから、嘘は言っていません。地図と実際の土地が結びつかないだけでわからないわけではないのですよ。地図の右斜め下ですから南東へ向かえば良いのです」

「それで南東へ向かえない者をわかっているとは言わぬ。グルトリスハイトを手に、指示を出す君がそのような状態でどうする？」

　フェルディナンドから地図が理解できていないと言われたけれど、そんなことは大して問題ではないのだ。わたしがわからなくてもわかる人がいるのだから。

「フェルディナンド様にお任せしておけば良いと知っていますから、わたくしに南東がわからなくても良いのですよ。フェルディナンド様は貴族院の二十不思議研究で祠の位置を調べていたでしょう？　ヒルシュール先生の研究室に資料がありました。実際に祠を調べていたようですから、おおよその位置をご存知でしょう？」

　グルトリスハイトの有無なんて全く関係ないですよ、とわたしが振り返って言うと、フェルディナンドはものすごく嫌そうな顔になって「前を向きなさい」と言った。

　遠目にアーレンスバッハの寮が見えてきた。ダンケルフェルガーの騎士達が上空にいる。騎獣がほのかに光っているし、寮を囲む森の木々が揺れて魔力差のある者の襲来に鳥が飛び立ち、小動物系の魔獣が逃げ惑って騒いでいることからもその存在感は圧倒的だ。

「ダンケルフェルガーに隠密行動は無理か」

「フェアベルッケンの印を持っているわたくし達と一緒にはなりませんよ。ダンケルフェルガーは存在自体がうるさ……いえ、とても存在感がありますから。ほほほ……」

　思わず本音が零れてしまった。口元を押さえて笑って誤魔化していると、オルドナンツが飛んできた。わたしの腕に降り立って口を開く。

「ローゼマイン様、ダンケルフェルガーです。こちらはすでにアーレンスバッハの寮の上空に到着しました。アーレンスバッハはどの辺りにいらっしゃいますか？」

　オルドナンツが三回喋り終わる前に、「視線をどこかに向けておきなさい」と言いながらフェルディナンドの手がオルドナンツを鷲掴みにした。わたしがそっぽ向いている間にフェルディナンドは魔石からオルドナンツにしたようで、返事を吹き込む。

「フェアベルッケンの印を持っているため、そちらからは見えぬようだが、こちらからは見えている。すぐに着く」

　フェルディナンドの言葉を伝える白いオルドナンツが夜空を飛んでいくのが見える。上空で待機していたダンケルフェルガーの集団が、わたし達を探すように寮の上空で旋回し始めた。

　……なんか蜂っぽい。

　普通に待機していてくれれば良いのに、まるで蜜蜂が餌場を見つけて仲間に知らせるような動きをダンケルフェルガーが見せ始めた。

「じっとしていられないのはハイスヒッツェだけではないようだな。領地の特色か？　これだけダンケルフェルガーが騒いでいれば隠密行動も何もあったものではないな」

　呆れたような口調で言いながら、フェルディナンドは身につけていたフェアベルッケンの印を外してわたしに渡し、アーレンスバッハの騎士達の最前列に出ていく。

「皆、フェアベルッケンの印を外せ！」

　フェルディナンドの号令によって一斉にフェアベルッケンの印が外される。フェアベルッケンの印は転移陣がある中央棟で中央騎士団と戦闘状態になるのを避けるための物だった。これから先は同士討ちを防ぐためにも外した方が良いだろう。

　アーレンスバッハの寮の上空を旋回しながら待機していたダンケルフェルガーの騎士達が突然姿を現したわたし達に興奮の声を上げた。

「おぉ、ここまで来ていたのか！　全く気付かなかったな！」

「フェルディナンド様、離宮はどこですか？　早速向かいましょう」

「何故ハイスヒッツェがここにいるのだ？　ずいぶんと人数が多いように思えるが……」

　聞き覚えのある声だと思えばハイスヒッツェらしい。

　ダンケルフェルガーの先頭はアウブ・ダンケルフェルガーのようだ。騎獣の上で挨拶を交わそうとしたが、「このような戦いの場で普段通りの挨拶は不要」と手を振って断られ、速く離宮へ案内するように、と言われた。

「アウブ・ダンケルフェルガー、離宮へ移動し、助言の女神　アンハルトゥングの魔法陣を使ってフェアベルッケンによる隠蔽を暴きます。結界の有無を確認後、突入。できるだけ捕獲してください」

　外患誘致の罪を犯した張本人達が生きているのと生きていないのでは、その後のアーレンスバッハの領民達への負担に差が出るだろう、とフェルディナンドが言った。要は責任を負う者が必要だということである。

「特に、ディートリンデ、アルステーデ、レオンツィオの三名は首謀者です。簡単に殺してしまわないようにお願いします」

　ついでに、中和や解毒などの手段を相手は持っているため、躊躇いなく即死毒を使ってくる可能性が高いこと、ディートリンデを始めとしたアーレンスバッハの貴族の人数、ランツェナーヴェの人数などについて情報を提示する。

「ディートリンデとその側近で十名前後、アルステーデ達は側仕えを連れているだけのはずです。ランツェナーヴェの者達は正式に挨拶をした者が十二名。その内、魔石の指輪を持っている者が八名。ですが、ここにジェルヴァージオという名のランツェナーヴェの王らしき人物は含まれません」

　王族がいればその側近が一緒だ。ランツェナーヴェの者達が何人いるのか、正直なところ、全くわからない。ランツェナーヴェの船の数を考えると、予想以上に多くの人数がいそうなのである。

「敵は領主一族とその側近です。騎士の魔力量によっては逃げられる可能性もあります」

　光の帯で縛っても魔力量の差によっては逃げられる可能性もある、とフェルディナンドが注意する。

「強敵。大いに結構」

　アウブ・ダンケルフェルガーは満足そうにそう言ったけれど、わたしとしては強敵なんて出てほしくない。捕縛なんてさっさと終わらせてしまいたい。

「この辺りだ、ローゼマイン。助言の女神　アンハルトゥングの……」

「わかっています。お任せくださいませ」

　わたしはハルトムートやクラリッサと一緒に作成した魔法陣が描かれている魔紙を取り出した。シュタープを握って、紙に描かれている魔法陣へ魔力を注ぎ込んでいく。

「光の女神の眷属たる助言の女神　アンハルトゥングよ　隠蔽の神　フェアベルッケンに隠されし物を示し給え」

　暗闇を明るく照らす光の魔法陣が上空へ上がっていき、一点を照らし出す。黒い森の中に今までは見えなかった優美な離宮の姿が白く浮かび上がった。エーレンフェストの寮と違って、二つの建物からできていて、渡り廊下で繋がっている。

　手入れをする者がいなくなったせいで荒れているようだけれど、この離宮には前庭、噴水、池などがあり、花壇の名残もたくさんある。雪に埋もれる冬以外にも長期間過ごすことを考えた設計だ。雪がなくなった領主会議の時に滞在したことがあるけれど、エーレンフェストの寮の周辺にはそんな物はなかった。

「離宮だ！」

「あそこに余所者がいるのだ！」

　周囲から「おぉ」と感嘆の声が上がると同時に、「結界の有無を確認せよ！」というアウブ・ダンケルフェルガーの指示が出る。すると、乗り込み型の騎獣に乗っていた騎士が青く光る物を騎獣から投げ捨てた。

「え？」

　重力と共に落下していくそれは、青く光る騎獣のようにも、青く光る子供が乗っているようにも見える。一体何だろうと目を瞬いていると、それはくるりと旋回し、自分で意志を持っているように動き始めた。

「バカみたいな大きさだが、あれはゲヴィンネンの駒ではないか？」

「そういえば、ダンケルフェルガーのお茶会室で青い置物を見たことがあります。あれでしょうか？　まるで貴族院の二十不思議にあるディッター勝負を始めるゲヴィンネンのようですね」

「まるで、ではなくダンケルフェルガーが実際にやったのであろう。あの不思議話ができたのは、それほど昔の話ではない」

　フェルディナンドの言葉にわたしは目を瞬いた。

「ハンネローレ様はご存じないようでしたよ？」

「貴族院に来ていない年のことならば、周囲が口を噤めばわからぬ」

「確かにそうですね」

　洗礼式を終えた子供くらいの大きさがあるゲヴィンネンの駒が魔力を帯びて青く光り、離宮を目指して飛んでいく。バリーン、ガシャガシャン！　と硬質な音を響かせて離宮の窓に突っ込んだ。

「結界はない！　突撃！　私は上から行く。ハイスヒッツェは下から来い！」

「はっ！」

　アウブ・ダンケルフェルガーが先頭に立って離宮へ突っ込み始める。手近なところから攻めるつもりなのか、手前の建物の三階にあるバルコニーに降り立ち、掃き出し窓を破壊して飛び込んでいった。アウブに負けじとダンケルフェルガーの騎士達の約半分が三階へ飛び込んでいき、もう半分が二階のバルコニーの窓を破壊しながら中へ飛び込んでいく。

「……指示を出す立場の人が一番に突っ込むのはどうなのですか？」

　アウブという立場は普通後ろで悠然と構えているようなイメージだが、アウブ・ダンケルフェルガーは一番乗りで突撃している。フェルディナンドは「何故外に見張りを残さぬ。全てこちらに押し付ける気か？」と溜息を吐いた。

「シュトラール、一班の騎士を連れ、中央騎士団の動向を探ってくれ。これだけの騒ぎになっているのに何の動きもないことが気になる」

「はっ！」

「全ての手柄をダンケルフェルガーに奪われるわけにはいかぬ。我々はもう片方の建物を攻める。二階のバルコニーから入り、二班から七班は女性の部屋がある三階を重点的に攻めろ！　捕虜を確保したら前庭へ集めるように！」

「はっ！」

「八班は捕虜の監視だ。ランツェナーヴェのレオンツィオの確認は其方等にしかできぬ」

「はっ！」

　フェルディナンドの指示を聞いていたわたしは、何故ダンケルフェルガーのように三階のバルコニーから入らないのだろうか、と疑問に思った。直後、フェルディナンドが指差した方の建物にはバルコニーが三階に全くないことに気付いた。全ての窓に植物や動物を模した、素敵だけれど頑丈そうな格子がはまっている。思わずもう片方の建物と見比べた。

「あちらは三階にバルコニーがないのですね。どうして建物に違いがあるのでしょう？」

「住む者が違うからだ。傍系王族と、ユルゲンシュミットに登録のない者が同じ建物に住むと思うか？」

　離宮の管理をする傍系王族の夫婦がいて、その子供として登録されるのはランツェナーヴェの王となる者、それから、ユルゲンシュミットの姫として育てられる女子だそうだ。ランツェナーヴェの姫達と彼女達が生んだいずれ魔石となる子供達では生活する建物さえ別らしい。侵入も逃亡も許さないと言わんばかりの格子の存在で、そこの住人がどのように扱われていたのか察せられる。

「……フェルディナンド様がこの離宮を粉々にしたくなる気持ちがよくわかりました」

「ゲルラッハの夏の館を壊した君の騎獣が使えないのは至極残念だ」

　簡単に破壊できたであろう、と言われて、わたしは思わずフェルディナンドを振り返った。

「わたくしのレッサーくんを破壊用道具のように言わないでくださいませ！　たまたま偶然が重なってそうなってしまっただけで、わたくしはゲルラッハの館を破壊するつもりなんてなかったのですよ！」

　クッとフェルディナンドが笑った時、光の帯でグルグル巻きにされた捕虜一号が窓から放り出された。「まるであの時のマティアスだな」と言いながら、フェルディナンドが騎獣を離宮の前庭に降ろす。後を追ってわたしの側近達とフェルディナンドの側近達も降りてきた。

「ローゼマインはここにいろ。私は中で指示を出してくる」

「フェルディナンド様、わたくしも……」

「歩くのも走るのも遅いのに邪魔だ。君はここで捕虜の監視を行え。帯が緩んだら、君が縛り直すのだ。ここにいる中では君が最も魔力が多い」

　騎獣が出せないわたしは確かに足手まといでしかない。それでも、わたしにできる役目を与えながらフェルディナンドがわたしの護衛騎士達に指示を出していく。

「クラリッサ、ダンケルフェルガーへ捕虜はこちらに連れて来るように指示を出しておけ」

「はい！」

「護衛騎士達はローゼマインを守れ。傷一つ付けるな」

「はっ！」

　フェルディナンドがエックハルト兄様とユストクスを連れて建物の中へ入っていく。

　クラリッサがオルドナンツを飛ばした後は、ダンケルフェルガーの騎士達が捕虜を連れて来るようになった。光の帯でグルグル巻きにされているのは若い男女が三人だ。誰も彼も寝込みを襲われることは想定していなかったようで、寝間着姿の者がほとんどだ。魔法陣による光やゲヴィンネンの駒がぶつかった音で不寝番が気付いても着替える余裕はなかっただろう。

「ダンケルフェルガーの騎士達が入った建物にいるのはランツェナーヴェの者達が多いのでしょうか」

　アーレンスバッハの騎士が連れて来られた捕虜を見下ろしてそう言った。三人ともレオンツィオと共にやって来て、アーレンスバッハで正式に挨拶をしたランツェナーヴェの者らしい。無言でじっとこちらを見ているだけで口を開こうともしない。

「もう一人、連れて来られますね」

　そう言われて視線を向けると、こちらに向かって連れて来られている捕虜が光の帯を引きちぎってダンケルフェルガーの騎士から逃げ出した。彼を捕らえた騎士より、魔力量が多かったようだ。

「レオンツィオだ！」

　捕虜の監視を任されたアーレンスバッハの騎士達が声を上げ、十人いる八班のうちの半数がレオンツィオを捕らえようと騎獣に乗って駆け出した。

「邪魔はさせない。私はランツェナーヴェの王になるのだ！」

　そう叫んだレオンツィオは騎獣に乗っていて、その手にはシュタープが握られている。

　……なんで？　この人、ランツェナーヴェの王になる人じゃないよね？

　ランツェナーヴェの王になるために育てられ、シュタープを得てランツェナーヴェへ向かったのはジェルヴァージオという男性で、レオンツィオという名前ではなかったし、フェルディナンドよりもかなり年上のはずだ。

　……シュタープ、どうやって手に入れたの？

　わたしが眉を顰めていると、おとなしく転がっていた捕虜の三人が光の帯を破ってゆらりと立ち上がった。三人の手にもシュタープがある。

「ローゼマインッ！」

[------------------------------------------------]

ランツェナーヴェの者達

　コルネリウス兄様の鋭い声に、わたしはシュタープを出した。

　三人の捕虜達がこちらに向かって飛びかかるように駆け出しながら一斉にシュタープを振り下ろして魔力を打ち出している。以前受けたものよりもずいぶんと威力が大きいけれど、わたしが神殿の青色巫女見習いの頃にビンデバルト伯爵から受けたことがある魔力の攻撃だ。

　周囲には護衛騎士達が何人もいるし、今までに自分へ向けられた攻撃の中では最も対応が簡単なものだったからだろう。恐怖は全く感じなかった。

「ゲッティルト！」

　コルネリウス兄様の声に反応したレオノーレとラウレンツが即座に盾を展開し、同時に駆け出したアンゲリカとマティアスとコルネリウス兄様がそれぞれの剣を振り下ろした。それだけで捕虜達が繰り出した魔力弾は切り払われて、軌道を変えて飛んでいく。

　……まぁ、そうなるよね。

　魔力差が圧倒的にある上級貴族のビンデバルト伯爵の攻撃を、下級騎士のダームエルや戦い方さえ知らなかった青色巫女見習い時代のわたしでも何とか逸らすことができていたくらいである。あれは盾を出しても相手には防げないと確信が持てるくらいに絶対的優位にある格上が、格下を嬲る時や不意打ちでなければ効果がない攻撃だ。わたしの護衛騎士達が同じように魔力の塊を打ち出すか、盾を出せば簡単に防ぐことができる。

「くっ！」

　悔しそうに顔を歪めた捕虜達が再びシュタープを振ろうとしたが、その時にはアンゲリカが身体強化をした素早い動きでシュティンルークと共に敵の懐に飛び込んでいた。

「アンゲリカ、ここで死なせないように気を付けて！」

　レオノーレが怒鳴るように注意を飛ばしながら、わたしの視界を塞ぐようにマントを広げる。直後、アンゲリカが少し焦ったような声で「急いで癒しを！」と言った。ちょっと注意が遅かったらしい。

「交代だ、アンゲリカ！」

　水の属性があり、多少癒しが使えるコルネリウス兄様とアンゲリカが交代する。コルネリウス兄様によって癒しが施されたのか、レオノーレのマントが下ろされた。死なない程度の癒しがされたようで、一人の捕虜が光の帯ではなく、普通の紐で縛られてコルネリウス兄様に押さえられていた。

「ハルトムート、シュタープを封じる手枷を！」

　コルネリウス兄様の声にハルトムートが準備していた手枷を取り出して駆け寄る。これで敵はシュタープを使うことができないはずだ。

　残った二人の捕虜の動きを見れば打ち出す魔力が大きく、肉弾戦もまあまあ強いことがわかった。けれど、シュタープから繰り出される攻撃は魔力を打ち出すだけだし、護衛騎士達に比べると鍛えられているわけでもない。寝ているところを襲撃されて寝間着のせいか、ダンケルフェルガーによって武装解除はされているのか、銀の武器も持っていなければ即死毒も持っていない。アンゲリカとマティアスによって、残りの二人もあっという間に取り押さえられた。

「クラリッサ、オルドナンツをダンケルフェルガーへ。敵がシュタープを持っていることを知らせてほしいのです。もう知っているでしょうが……」

　レオノーレの指示を聞いて、わたしはダンケルフェルガーの騎士達が飛び込んでいった建物へ視線を向ける。窓が魔力の打ち出しによってあちらこちらで光っているのが見えた。窓が吹き飛んだところもある。「その程度で私の攻撃が防げると思うな！」というアウブ・ダンケルフェルガーの高揚した声も聞こえてきた。

　そうこうしている間にもダンケルフェルガーの騎士達によって捕虜が連れて来られる。レオノーレが光の帯で縛られている捕虜に関しては「敵は多大な魔力とシュタープを持っています。相応の対応をお願いします」とダンケルフェルガーの騎士達に指示を出した。

　アーレンスバッハを荒らしていた魔力がないランツェナーヴェの兵士とは違うと言われた騎士達が、逃亡を防ぐために手足を折って縛り上げていく。ゲッティルトの盾を構えたままレオノーレは厳しい目で苦痛に呻く捕虜をじっと見つめる。

「……捕まったふりをして状況を確認しつつ、こちらの人数が減った途端、一斉に動き出すのですから彼等は全く訓練を受けていないわけではないようです。それなのに、どうしてこれほど魔力効率の悪い攻撃をするのでしょうか？　騎士達の縛めを解ける魔力があればもっと色々なことができるでしょうに……」

　レオノーレが不思議そうにそう言うのを聞いて、わたしは「ランツェナーヴェ王になる！」と叫んでいた男の方へ視線を向ける。レオンツィオという名前だっただろうか。彼もやはり寝間着姿で少し長めの髪を乱しながら戦っていた。戦っているというよりは逃亡しようとしていて騎士達に追い回されているようだけれど。

　レオンツィオもやはりシュタープから魔力を打ち出す以外の攻撃はできないのか、シュタープを振って魔力を何度も打ち出しながら騎獣で逃れようとしている。魔力が多いから騎獣の動きはやたら速いが、七人もいる騎士達の包囲網から逃れるのは容易ではないようで、じりじりと追い詰められているのが遠目にもわかった。じきに捕まるだろう。

「まだ慣れてないのではありませんか？　シュタープを手に入れて日が浅いのだと思います」

　騎獣は当たり前のように使えるし、魔力の打ち出しもできる。けれど、シュタープを武器に変換して戦ったり、ロートを上げたりすることはできない。それは貴族院入学前のわたしと同じだ。魔石による騎獣は作れたし、指輪によって魔力を放ったり、お祈りをしたりはできたけれど、それ以上のことはできなかった。

「手に入れたばかり、ですか？」

「えぇ。貴族院で最初に習うロートさえ上がっていません。彼等が本当に中央騎士団と繋がっているならば一番に助けを呼んだはずです」

　わたしの言葉にレオノーレが納得したように頷いた。すると、レオノーレと一緒に盾を構えたまま周囲を警戒していたラウレンツが今度は疑問を口にした。

「ランツェナーヴェの王になりたければ勝手になれば良いのに、何故あの男はユルゲンシュミットの、しかも、貴族院までやって来たのでしょうか？　ランツェナーヴェの者達がユルゲンシュミットの貴族の証であるシュタープを欲しがる理由がわかりません」

「ランツェナーヴェの王になるために必要なのかしら？　仮にそうだとすれば、これだけの人数がシュタープを得て、王の資格を得るのは不都合だと思うのですけれど……」

　ランツェナーヴェやアダルジーザの離宮に関しては貴族院の歴史で習うことでもないし、わたし達がここに来たのは外患誘致の罪を犯した前領主一族と協力者であるランツェナーヴェの者達を捕らえるためだ。詳しい事情を知らないレオノーレには不思議で仕方がないのだろう。

「詳しい事情は本人達に語ってもらった方が早そうですね。ほら、捕まったようですよ」

　わたしがダンケルフェルガーとアーレンスバッハの騎士達によって捕まったレオンツィオを指差すのと、フェルディナンド達が突入していった建物の三階でバン！　という爆発音がするのは同時だった。

　ビクッと体が震えて、思わず視線を向ける。一瞬で空気が緊張し、皆がわたしと同じように振り返った。窓が割れてバラバラとガラスが降ってくる。建物の周囲を取り巻く白の石畳に当たって硬質な音を立て、砕けた。

「これは一体どういうことですの、フェルディナンド様！？」

　ガラスの音を掻き消すようなディートリンデの高い声が響く。他の騎士によってディートリンデが捕らえられることを期待していたけれど、フェルディナンドがディートリンデの部屋に到着してしまったらしい。

「いくら死の縁から這い上がる程わたくしの愛を求めていても、このような深夜に寝室へ乱暴に入ってくるなんて恥知らずにも程が……」

　怒りの籠ったヒステリックなディートリンデの声がぷつっと途切れた。その後はもう何も聞こえない。これ以上に喋れないようにされたことは嫌でもわかる。

「フェルディナンド様にあの言い様……。エックハルト兄上が暴走していなければ良いのだが……」

　首謀者は殺さずに捕らえよという命令に違反して暴走するのではないか、とコルネリウス兄様が心配そうに言った。自分で殺そうとした相手にあの言い様である。あの場にいたらわたしが先に暴走していたかもしれない。

「大丈夫ですよ、コルネリウス。フェルディナンド様がエックハルト兄様を止めるでしょうし、癒しをかけることができます。ディートリンデ様が死んでいることはないでしょう」

　首謀者には生きていてもらわなければ困ると言ったのはフェルディナンドだ。殺すはずがない。フェルディナンドのそういう無駄に理性的で合理的なところを、わたしはある意味で信頼している。

　アーレンスバッハの騎士達によって次々と縛られた者達が運び出されてくるようになった。ユストクスによって光の帯でグルグル巻きにされ、ずるずると引きずりながら連れて来られたディートリンデは気を失っている。

　寝間着姿で縛られていて、豪奢な金髪は引きずられたせいで全体的に薄汚れている。このような公衆の面前で成人女性が髪を下ろしているというのはあり得ないので、ディートリンデの目が覚めたら大騒ぎしそうだ。

「ユストクス、死んでいませんよね？」

「エックハルトの攻撃を受けて気を失っているだけです。残念ですが、この後のことを考えて生かしています。引きずってきたので多少頭を打っていますが、これ以上頭が悪くなることはないので問題ないでしょう」

　ニコリと微笑んでいるが、ディートリンデを見下ろすユストクスの茶色の瞳には軽蔑と憎悪がはっきりと現れている。全く隠れていない。

　けれど、怒りを見せているのはユストクスだけではない。アーレンスバッハの騎士達もまたディートリンデを前に怒りを堪えきれないような顔になっている。当然だろう。ディートリンデの行動で何人もの貴族達が犠牲になり、アーレンスバッハは反逆の領地となったのだから。

「この辺りにいるのはアーレンスバッハの貴族ですか？」

　ディートリンデの後からどんどんと連れ出されてくる。ランツェナーヴェの者達とアーレンスバッハの貴族の区別がつかないわたしは、アーレンスバッハの騎士に尋ねてみた。

「はい、ローゼマイン様。ディートリンデ様の側近達です」

　ディートリンデの側近は報告を受けていた通り十人いる。まだこれから連れて来られるかもしれないけれど、誰も彼もどうしてこんなふうに縛られて転がされているのかわからないというような顔をしていた。何も言わないのは、猿轡をされているからだ。自分達を捕らえたアーレンスバッハの騎士達を反抗的に睨みつけている者も何人かいる。

　ディートリンデの側近の中で、わたしが見てすぐにわかったのはマルティナだけだったけれど、マルティナにはわたしが急成長したせいですぐに記憶の中のわたしの姿と今の姿が結びつかなかったようだ。怪訝そうな顔になった後で、大きく目を見開いた。

　……それにしても、ランツェナーヴェとアーレンスバッハで完全に建物をわけて使っていたみたいだね。

　フェルディナンド達が入っていった建物から連れ出されてくるのはアーレンスバッハの貴族ばかりだ。ゲオルギーネや養父様とよく似た色合いの髪をした、どことなくおどおどとした雰囲気の女性がディートリンデの隣に転がされる。それからすぐに縛られていても偉そうな表情を崩していない赤い髪の男性が連れて来られた。紫の瞳でじっとわたし達を見つめる。

「ローゼマイン様、こちらがアルステーデ様とブラージウス様です」

　……あぁ、この二人が……。

　ゲオルギーネの第一子でディートリンデの姉のアルステーデとその夫のブラージウス。ブラージウスは確か政変後に処刑された第二夫人の息子で、次期アウブ候補の片割れだったはずだ。

「こちらは制圧完了だ。ダンケルフェルガーの方はどうなっている？」

　そう言いながらフェルディナンドが出てきた。ラウレンツがすぐにオルドナンツを送って状況の確認をする。目につく敵は全て捕らえ、今は隠し通路や隠し扉の有無を確認中らしい。

「……目につく敵は全員捕らえた、だと？」

　フェルディナンドが軽く目を見張って捕虜達を見回す。探す者がいないような仕草に嫌な予感がした。

「フェルディナンド様、どうされたのですか？」

「……ジェルヴァージオの姿がない」

「え？」

「ここにいるランツェナーヴェ人は若い者ばかりだ。使者として正式に目通りした者がほとんどで、ジェルヴァージオがおらぬ」

　そういえば、フェルディナンドが生まれた時にはもういなかったと言っていた気がする。ならば、年齢的にはもう四十代ではないだろうか。そう思って見回すと、確かにその年代の者はいない。ジェルヴァージオ本人も、おそらくその側近達も。

　フェルディナンドがアルステーデの猿轡を取り、「ジェルヴァージオはどこだ？」と問いかける。恐怖に目を見張っているアルステーデはフェルディナンドの質問に答えるのではなく、パニックを起こしているように震える声で叫んだ。

「何故フェルディナンド様が生きているのです！？　アーレンスバッハの騎士がわたくしに剣を向けるのです！？　一体何のためにダンケルフェルガーの騎士達がこのような……ぐふっ」

　ガッとエックハルト兄様がアルステーデを踏みつけた。突然踏みつけられて咳き込むアルステーデ「フェルディナンド様はそのようなことを尋ねておらぬ。さっさと答えろ」と答えを迫る。ひっと顔を引きつらせたアルステーデが「存じません！」と叫んだ。

「ランツェナーヴェとアーレンスバッハで建物が別でしたもの。ジェルヴァージオ様がどのように夜を過ごされているかなど、わたくしは存じません！」

　アルステーデから悲鳴のような声が響く。必死に頭を左右に振っている姿からは本当に知らないのだと思う。どこまで情報を与えられているのか定かではない。

「アルステーデ、其方は何やら被害者のような顔でわめきたてているが、何故かと問いたいのはこちらだ。何故次期アウブと定められたディートリンデではなく、貴女が礎を染めたのか？　礎を染めて実質的にアウブとなったにもかかわらず、何故ディートリンデの横暴を止めなかった？　外患誘致として領地丸ごと危険に晒すにもかかわらず、何故ランツェナーヴェの者を引き入れて貴族院へやってきたのか？」

　フェルディナンドが冷たく見下ろしながら問いかけると、アルステーデは真っ青になった。

「わ、わたくしはお母様の命令で……」

「ランツェナーヴェの者達を貴族登録し、ランツェナーヴェの館にある扉を開けて転移陣を使い、貴族院の最奥の間を開けて愚かにも彼等にシュタープを与えたのであろう？　それがどれだけの罪かわからぬとは言わせぬ」

「……お、お母様のおっしゃることに間違いはありませんもの。そ、それに、わたくしの独断専行ではございません。ランツェナーヴェの者達にシュタープを与える際に最奥の間を開けたのは王族ですから」

「何！？」

　周囲の騎士達も驚きの声を上げた。外患誘致の罪を犯した前領主一族を捕らえに来たら、王族がランツェナーヴェの者達に協力していると言われたのだ。当然の反応だろう。

「アウブとしての承認を受けていないわたくしでは最後の扉が開けられませんでした。そのため、中央騎士団の騎士団長が王族にお願いしてご協力いただいたのです」

　周囲がざわめき始めたことでアルステーデは自分に非がないことを主張するように言い募る。

「中央騎士団の騎士団長だけではなく、王族が協力だと……？」

「え、えぇ、そうです。これは王族もご存じのことなのです。わたくし達ではなく、こうして貴族院へ攻め込み、離宮を襲った貴方達こそが反逆の罪に問われる可能性もございます。そ、それはご存じですの！？」

　真っ青になって震えながら必死に言い募るアルステーデの隣でブラージウスが猿轡をされたままフェルディナンドを嘲るように見上げ、フンと馬鹿にするように鼻を鳴らした。少なくともアルステーデの言い分と同じことを思っているような顔をしている。

　フェルディナンドが眉間の皺を深くした。アーレンスバッハの騎士達に動揺が走る。即死毒の対策もできているし、数でも圧倒的に有利だと楽観視し、制圧も時間の問題だと思っていたところで嫌な雰囲気になってきた。

　そこにアウブ・ダンケルフェルガーからオルドナンツが飛んでくる。

「王宮にて中央騎士団の同士討ちが起こっているらしい。ダンケルフェルガーに救援の要請があったそうだ。我々はそちらへ向かう！」

[------------------------------------------------]

協力者

　オルドナンツが三回アウブ・ダンケルフェルガーの言葉を繰り返しているうちに、あちらの建物からは騎獣が次々と飛び出し始める。素早い動きや統率力は素晴らしいが、こちらは完全に放置である。ひくっと頬を引きつらせたフェルディナンドはまだ喋っているオルドナンツを放置して、急いで新しいオルドナンツを形作った。

「アウブ・ダンケルフェルガー、王宮へ向かう前にそちらの状況の報告をお願いします。お急ぎでしたら報告と連絡のために一班分の騎士を残してください」

　途中で放り出していくな、とフェルディナンドが文句を言いつつオルドナンツを飛ばすと、離宮から駆け出していた騎獣の団体からほんの一部が空中で止まり、舞い戻るようにして再び離宮へ入っていった。

「ユストクスと二班、三班の者はアーレンスバッハの者達の尋問を、ハルトムートと四班、五班の者はランツェナーヴェの者達の尋問を行え。アーレンスバッハから貴族院へ移動してからの行動と、今現在ここにいないジェルヴァージオについてできるだけ多くの情報が欲しい。時間がないことを念頭に置き、手早く行うように」

「はっ！」

　軽く手を振ると、騎士達が捕虜達を動かし始めた。そこに背を向けて、フェルディナンドは残りの騎士達に視線を向ける。

「六班はアルステーデを連れて、あちらの建物に移動だ。七班、八班はダンケルフェルガーが残した探索の続きを行う。ローゼマインとその護衛騎士はこちらへ同行せよ」

　尋問と探索についての分担を指示すると、フェルディナンドはわたしを騎獣に同乗させてダンケルフェルガーの騎士達のところへ向かい始めた。六班の騎士の一人に宙吊りにされながら一人だけ運ばれるアルステーデが悲鳴を上げている。宙吊りは怖い。わたしはちょっとだけアルステーデに同情しつつ、フェルディナンドに尋ねた。

「フェルディナンド様、どうしてアルステーデだけを連れていくのですか？　可哀想になるくらい怖がってますけれど……」

「強者に従うことに慣れているため捕虜の中で最も情報を得やすいと判断したこと、人知れずアウブになっていたことから考えてもディートリンデと同程度の情報を持っていることから私が事情を聴くのに最も適していると判断したからだ」

　ディートリンデではまともな情報が得られないし、ブラージウスはのらりくらりと言い逃れをしそうだが、アルステーデは他者に従うことに慣れているので扱いやすいらしい。

　……何それ、怖い。

「そこで宙吊りになっている愚か者が境界門を開けなければランツェナーヴェの船が入れなかったことを考えると、彼女こそが全ての元凶と言える。ランツェナーヴェの者達を引き入れ、何人もの貴族が死に、レティーツィアが心に深い傷を負った。宙吊りなど何の罰にもならぬ。アルステーデはどれほど危険で愚かなことかわかっていながら抗えずにディートリンデやゲオルギーネの無茶な要求に従うのだ。知っている情報を全て吐き出せという私の要望に従うくらいは簡単であろう。」

　バルコニーに放り出されたアルステーデは恐怖で歯の根も合わない状態になっていた。アルステーデが口を利けるようになるまでの間に、フェルディナンドはダンケルフェルガーの報告を聞くことにしたようだ。この離宮に残されたのはハイスヒッツェと他九名の騎士が集まってくる。

「一斉に全員が飛び立つとはダンケルフェルガーは一体何を考えているのだ？」

「ダンケルフェルガーの第一目的は王族の救助と貴族院の守り。ツェントからの救援要請ですから仕方がありません」

　ハイスヒッツェはキリッとした顔で言っているが、いきなり完全に手を離されるのは困る。フェルディナンドはハイスヒッツェからどの辺りまで探索が住んでいるのか尋ねながら離宮の中へ入り、連れてきたアーレンスバッハの騎士達に地階を中心に探索を行うように命じた。

「そういえば、彼等の部屋にはよくわからぬ道具がたくさんありました。こちらに集めています」

　ハイスヒッツェに案内された部屋には、見たことがない道具がたくさん持ち込まれていた。即死毒などが入っているはずなので不用意に触るな、と注意されつつわたしはぐるりと見回す。

「これらの道具は後で文官棟にでも運び込むとしよう。ランツェナーヴェの者達が貴族院へ持ち込んだ物を私がアーレンスバッハへ持ち帰り、独占するのは他領からの風当たりが強くなる可能性が高くなるからな」

　見知らぬ道具を手放すなんてマッドサイエンティストが珍しいと思った直後、「これらの道具の研究を餌にいくつの領地が釣れるか……」という悪魔のような呟きが聞こえたような気がした。聞かなかったことにしたいけれど、確かに政治的な取引に使いたいと聞こえた。

　かなりきちんと整えられていたらしい離宮の中を歩く。政変の後、たくさん処刑される者がいた頃に閉鎖されたのであれば、もう十年くらい昔に閉められたはずだ。それなのに、布製品や家具がずいぶんと綺麗だ。ランツェナーヴェの姫は受け入れないとツェントが決めたはずなのに、ここまで整えられているなんて不思議だ。

「この離宮はまるで新しい住人が入るために整えられたように見えますけれど、どなたが準備したのでしょうね？」

「誰が準備した物でもよい。それより、気になることが多々ある。アウブ・ダンケルフェルガーのオルドナンツでは情報が全く足りぬ。王宮で一体何が起こったのだ、ハイスヒッツェ？」

　フェルディナンドは報告に来る騎士達に次々と指示を出しながら、ハイスヒッツェに尋ねる。ハイスヒッツェは騎士らしくビシッと姿勢を整えて報告を始めた。

「王宮に詰めているダンケルフェルガー出身の中央騎士団の者からルーフェンに連絡が入ったそうです。王族の護衛の交代時に突然切りかかってきた騎士が複数人いたようで、完全な不意打ちの上、敵と味方の区別がつかない混戦状態に陥っているそうです」

　ツェントは隠し部屋のように魔力的に切り離された場所に避難していて、王族が守られている部屋の外で中央騎士団が同士討ちをしている状態らしい。

「なるほど。それで確実に見分けのつく青いマントのダンケルフェルガーに救援を依頼したということか。だが、王宮は元々暗殺防止のために許可を得た者しか入れぬようになっているはずだが、ツェントは本気でダンケルフェルガーの騎士を受け入れるつもりか？」

　他領の騎士を受け入れるためには王宮全体の警戒レベルを下げることになる。

「あの、扇動者が誰かを引き入れることを目的にしているならば、うってつけの状況になると思うのですけれど……」

「ダンケルフェルガーがあれだけ騒いでいたのだ。ランツェナーヴェの者達と共にいた中央騎士団長一派に気付かれぬはずがない。自分達が貴族院で思うままに動くのに邪魔なダンケルフェルガーの騎士をまとめて片付けるのが最良だと考えたのではないか？　王宮に引き入れて即死毒を何度か使えば、かなりの数を減らせるぞ」

　いくら対策を練っているとはいえ、口元を布で覆い、ユレーヴェで手当てをするくらいしかできない。個人が持ってきているユレーヴェの量などたかが知れている。何度も使われたら大変な痛手になるだろう。そんなダンケルフェルガーに対して、敵側は中和や解毒の薬を持っている。

「アウブ・ダンケルフェルガーに注意を……」

「もちろん私から注意を促しますが、アウブが止まることはないでしょう」

　わたしがハイスヒッツェを見ると、ハイスヒッツェは少し考え込んで首を横に振った。

「さもありなん。注意しても全員が突っ込んでくるのだ。罠を張る方にとっては実に簡単であろう。おとなしく罠にかかってくれるとは限らぬが」

　……あぁ、わかる。アウブ・ダンケルフェルガーは真正面から突っ込んで罠にかかっても、力技で罠を破壊して何事もなかった顔で戦ってそうだもん。

「こちらの探索を完全に終えたら合流しましょう。色々な手段を思いつかれるフェルディナンド様がいらっしゃると王族も心強いでしょう」

　ハイスヒッツェは少々暑苦しさの残る爽やかな笑顔でそう言ったけれど、フェルディナンドは「王族が倒れていてくれたら面倒がない」と言っていた人である。王族が心強く思えるとは思えない。フェルディナンドがどさくさ紛れに色々と暗躍しそうに思えて、わたしはどちらかというと不安になる。

「救援要請はダンケルフェルガーに向けてされたことだ。アーレンスバッハに向けて要請がない限り、勝手な真似はできぬ。だから、アウブ・ダンケルフェルガーはローゼマインに号令を出してほしいと言ってきたのではないか」

　勝手に助けに行けるのであれば、不穏な空気が見えた時点でアウブ・ダンケルフェルガーが突っ込んでいただろう。要請があったという建前が大事なのだ。

「それに、アーレンスバッハは外患誘致の罪に問われている領地だ。我々が向かったところで本当に味方なのか、と受け入れる王族の方が困るであろう」

「ローゼマイン様とフェルディナンド様がいらっしゃるのに、受け入れないはずがございません」

　ハイスヒッツェは断言したけれど、王族がアーレンスバッハの騎士達を簡単に受け入れるとは思えない。受け入れたら問題だと思う。「もっと疑え、この馬鹿者！」とフェルディナンドにハリセンで叩かれるくらい馬鹿なことだとわたしでもわかる。

「救援要請がないままダンケルフェルガーに合流するよりは、姿の見えないジェルヴァージオを探す方が先だと思います」

　暴走したディートリンデやランツェナーヴェを捕らえるのはアウブ・アーレンスバッハの仕事の内だと思うけれど、中央騎士団の同士討ちはわたしが手を出さなければならないことではない。エーレンフェストの騎士団が同士討ちを始めたところで王族が助けてくれるとは思えないので、こういう時はお互い様とも思えないからだ。エーレンフェストのことはエーレンフェストで何とかしろと言われたこともあるし、中央騎士団のことは中央が何とかすれば良い。

「ハイスヒッツェ、わたくしはダンケルフェルガーの強さを信じております。頼りになるダンケルフェルガーの騎士達が助けに向かった王族よりも、連絡が取れないソランジュ先生の方がよほど気になります。わたくしは少し明るくなったら図書館の様子を見に行きたいです」

「わかった。こちらの処理が終わったら図書館へ向かおう。先にアルステーデの話を聞かねばならぬ」

　フェルディナンドが軽く手を振ると、部屋の隅に転がされていたアルステーデが騎士達によって引きずってこられた。

「ローゼマイン、君は文官として書き留めろ。いくらでも書き込める便利な道具を持っているであろう？」

　紙はもったいないので、グルトリスハイトにスティロで書き込めとフェルディナンドは言った。何だかフェルディナンドはずいぶんと便利にメスティオノーラの書を使っている気がする。

　最初はゲオルギーネに命じられていると黙秘していたアルステーデだったが、その死を知らされ、王命に反して礎を染めたところから始まって一つ一つ罪を数え上げられ、洗礼前の幼い娘の救済を取引材料に出され、次々と心を折られていった結果、アルステーデはおとなしく話し始めた。

「この離宮の鍵を持っているのは中央騎士団の騎士団長ラオブルート様で、ランツェナーヴェの館と離宮間の行き来は去年の秋が初めてでした」

　先代のアウブ・アーレンスバッハのお葬式の時にラオブルートは転移陣で行き来できることを告げたらしく、礎を染めたアルステーデは転移陣のある扉を開けるためにランツェナーヴェの館へ行くようにディートリンデやゲオルギーネに言われたことが何度かあったらしい。

「ラオブルートが離宮の鍵を持っているなんておかしくないですか？　離宮の鍵は王族が管理している者だと思うのですけれど……」

「正面玄関の鍵は王族が管理しているであろう。だが、側仕えが持つ裏口の鍵を誰が持っているのかはわからぬ。君の図書館もラザファムが出入りするための鍵を持っているであろう？」

　ゲオルギーネが立てた計画通りにレティーツィアがフェルディナンドへ毒を放ち、ディートリンデが死亡を確認したことで全てが動き始めたそうだ。ゲオルギーネはエーレンフェストへ向かい、ディートリンデがグルトリスハイトを得るため、そして、ランツェナーヴェの王族がシュタープを得るために離宮へ移動した。

「事前にわたくしはお母様とディートリンデに頼まれて、シュタープを得たいと願うランツェナーヴェの王族をアーレンスバッハの貴族として登録していました」

　離宮へ移動するとラオブルートが迎えてくれたらしい。そして、ディートリンデがグルトリスハイトを得るまで、また、ランツェナーヴェの者達がシュタープをきちんと取り込むまでの数日間を過ごすことになる離宮を案内してくれたそうだ。

　結婚前の男女が同じ建物にいることは外聞上よくないと言い張って、ディートリンデはレオンツィオと離れた部屋を希望したけれど、常に一緒にいたので外聞も何もあったものではない状態だったそうだ。

「各自が部屋を確認した後、シュタープを取るために最奥の間へ向かおうとしました。わたくしはアウブとして扉を開ける役目を負っていました」

　けれど、それはできなかったそうだ。ラオブルートが先行して扉の外の様子を窺ったところ、ジギスヴァルト王子が自分の側近を連れて回廊を歩いていたらしい。彼が祠回りをするのであれば、ランツェナーヴェの者達が見つかる可能性は高い、とその日は取り止めになったらしい。

　……それって養父様との話し合いでジギスヴァルト王子がエーレンフェストのお茶会室へ行った時の話じゃない？

　その夜、ラオブルートは王族から「緊急事態」だと呼び出された。

　離宮にいるアルステーデ達に詳細が知らされたのは次の日だった。フェルディナンドの側近が貴族院へ移動してアウブ・エーレンフェストにフェルディナンドを助けてほしいと訴えたことやディートリンデやランツェナーヴェの者達が不穏な動きをしていることを告げたそうだ。

　アーレンスバッハからの襲撃があるかもしれない、と中央棟の扉付近とアーレンスバッハの寮の周囲には中央騎士団が大量に待ち構えていたらしい。けれど、全く動きが見えないまま、時間だけが過ぎていく。

「わたくし達は騎士団の警戒が薄れるまで回復薬の作成をしていました。何かに巻き込まれても必要だから、と。ランツェナーヴェの者達は騎士団の鎧の作り方を練習していました」

　魔石の扱いは慣れているようで、ランツェナーヴェの者達が鎧を作るのはそれほど苦労しなかったらしい。他にも魔石でできることや戦うための道具の確認などをしていたそうだ。

　……深夜の奇襲でほとんど役に立たなかったみたいだけどね。

　王族も隠し部屋のような避難場所に隠れている完全警戒態勢でいつまでも続けられるわけもない。次第に見張りの騎士の数は減り、ラオブルート一派だけが貴族院の警戒に当たるようになり、ようやく動けるようになった。

「シュタープを得るために最奥の間の扉を開けようとしましたが、わたくしでは開けられませんでした。ツェントの承認を得ていなかったからでしょう」

　……その時にはわたしが礎を染め変えて、アウブの資格を失っていたからじゃないかな？

　同じことを考えたのか、フンとフェルディナンドが馬鹿にするように鼻を鳴らし、先を促した。

「けれど、それほど困りませんでした。わたくしが開けられなかった時のためにラオブルート様は先に手を打っていました。中央神殿から神殿長と青色神官がやってくることになっていたのです」

　祈念式に必要だから最奥の間を開けるように、という要請が中央神殿から毎年あるようで、その時期にランツェナーヴェの者達の来訪を合わせるように予め言われていたそうだ。当日はアナスタージウス王子とヒルデブラント王子が中央神殿の神殿長イマヌエルや青色神官達を連れてやって来たらしい。

「神殿長？　神官長ではなく？」

「最近神殿長に就任したそうです。ブラージウス様は同行しましたが、わたくしは離宮にいたので詳しくは存じません」

　自分は役に立たないのでアルステーデはもう帰りたかったけれど、ランツェナーヴェの者達にシュタープを与えて、これから先のランツェナーヴェと上手く付き合うことはアウブとして必要だから、と我慢していたそうだ。

　中央神殿の者達がやってくる日、ランツェナーヴェの者達は練習した通りに魔石で鎧を作り、ラオブルートが持ち込んだ黒い布をマントにして中央騎士団の振りをしながら最奥の間へ同行したらしい。

「神官達が小聖杯や神具を並べているのをしばらく見ていたアナスタージウス王子は貴族院の他の場所も確認してくると、騎士団の一部を連れて出ていったそうです」

　アナスタージウス王子にはツェントが普段通りの生活に戻しても問題ないのか貴族院を確認する役目もあったそうだ。図書館も見回りの範囲に入っていたらしい。

「アナスタージウス王子が出ていった後、ヒルデブラント王子によってシュタープを得るための扉が開かれた、と聞いています」

[------------------------------------------------]

アルステーデの話

　加護を得る儀式で祭壇から直接始まりの庭に行くこともできるけれど、ヒルデブラント王子がそれをしていたならば周囲の者達がもっと別の反応をしていたはずなので、ヒルデブラント王子が開けた扉は祭壇の横側にある物だろう。貴族院で実際にわたしがシュタープを得るために入ったので間違いない。

「ヒルデブラント王子が望むならばシュタープを得ても良いとツェントは許可したそうです」

「そんなはずはありません」

　わたしはアルステーデの言葉に思わず首を横に振って否定した。魔力圧縮で魔力を増やし、お祈りで神々の御加護をたくさん得られるようになれば、後で魔力の扱いに困ることになるので幼い時にシュタープを得るのは止めた方が良い。わたしは王族にそれを伝えて、シュタープの取得を一年生から三年生に戻してもらったはずだ。

「幼い時にシュタープを得る弊害をわたくしが王族に伝えたのです。ヒルデブラント王子が後々困ることになるのに、ツェントが許可を出すはずがございません」

　地下書庫に入って王族らしい手伝いができるように、と魔力圧縮や古語の勉強などの努力を重ねていたヒルデブラント王子である。これから先、成長に従って魔力はどんどん増えるだろう。それがわかっていながら父親であるツェントが許可を出すとは思えない。

「落ち着きなさい、ローゼマイン。本当にツェントが許可を出したかどうかは、アルステーデの話からはわからぬ。アルステーデ自身もそこにいたわけではなく伝聞なのだ。わかっているのは、そのようにラオブルートが王子を唆して扉を開けさせたことだけだ」

「あまりにもひどい裏切りではありませんか」

　フェルディナンドの言葉にわたしはラオブルートに怒りを募らせていく。ラオブルートは騎士団長だ。エーレンフェストで考えるならばお父様であるカルステッドと同じ立場である。メルヒオールが望んでいても養父様に却下されていた物の前で、騎士団長のお父様が「やっとアウブの許可が出ました」と言うのと同じだ。

　わたしの護衛騎士達でもお父様から「私が口添えした結果、アウブの許可が出た。問題ない」と言われれば一体何人が疑うだろうか。「カルステッド様の言葉はとても信用できません。アウブに直接確認しましょう」なんて言う側近はほとんどいないと思う。そのくらい護衛騎士でもある騎士団長は信用されているのだ。

「確かにひどい裏切りとは思うが、唆されたということは王子が元々シュタープを望んでいたのであろう。望んでいないことをいくら唆しても意味がない」

　何を理由に欲したのか知らないが、ヒルデブラント王子がシュタープを得たいと望んでいたからこそ付け込まれたのだ、とフェルディナンドは素っ気なく言った。

「幼い時分にシュタープを手に入れるのは馬鹿の所業だが、知っていて尚ヒルデブラント王子がそれを望んだならば本人の希望が叶っただけだ。ランツェナーヴェの者達にまでシュタープを与えたことも含めて、後で存分に苦労すればいい。君が思い悩むようなことではない」

　フェルディナンドは「何もかも背負い込もうとするな、馬鹿者」と言ってヒルデブラント王子についての話を打ち切ると、アルステーデを見下ろしながらフンと鼻を鳴らした。

「明らかに王族を騙しているだけではないか。このような状態ではとても王族の協力があるとは言い難い。適当な嘘を吐くのではない」

　アルステーデは紫に近い青の髪を揺らして首を横に振った後、口を噤んで一度下を向いた。

「わたくし達と協力関係にある王族はヒルデブラント王子ではありません。ジェルヴァージオ様です」

「なるほど。王族は王族でもユルゲンシュミットの王族ではなく、ランツェナーヴェの王族ということか……」

「……ジェルヴァージオ様はすでにユルゲンシュミットの王族です」

　アルステーデの思わぬ言葉に場の雰囲気が一瞬で変わった。「どういうことだ？」と護衛騎士達から声が上がり、緊張が走る。フェルディナンドの表情が険しくなった。眉間に皺が深く刻まれていく。それから、こめかみを指先でトントンと叩き始めた。

「すでに……？　ランツェナーヴェへ渡った者はメダルの登録場所を移されるはずだが、つまり、戻ったということか？　管轄は……。あぁ、そちらが本来の狙いか」

　小さな声で独り言を零しながら、フェルディナンドはパズルのピースがはまったようなスッキリ顔になった後、ものすごく面倒くさそうに息を吐いた。

「勝手に納得して終わらせないでくださいませ、フェルディナンド様」

　アダルジーザ関連の記述はわたしのメスティオノーラの書にほとんどないので、フェルディナンドが何に納得しているのか全くわからない。わたしにも説明してほしい。腕を軽く叩いて説明を求めると、フェルディナンドは仕方がなさそうに口を開いた。

「ラオブルートにとって一番重要だったのは、ランツェナーヴェの者達がシュタープを得ることではなく、ヒルデブラント王子とその側近達をその場から追い出すことだったということだ。中央神殿の者がメダルの確認や移動をしたのだな？」

　最後の言葉はアルステーデに向けられたものだった。ほぼ断定しているフェルディナンドの口調にアルステーデが「何故わかるのですか？」と恐怖に強張った顔になる。

「やはりそうか……」

「全く説明が足りていませんよ、フェルディナンド様！」

「メダルを完全に廃棄されればシュタープを扱うことができなくなる。それは知っているな？」

　高学年の範囲にはなるけれど、領主候補生の講義で習う内容だ。卒業までの全てを叩き込まれたので知っている。わたしが頷くと、フェルディナンドは講義のような口調で説明を始めた。わたしは何となく背筋を伸ばして生徒気分でスティロを握る。

「勝手にメダルを廃棄されればシュタープは使用できなくなる。そのため、ランツェナーヴェへ行った者のメダルは彼等がユルゲンシュミットを去ってからも保存される。傍系王族として登録されていた場所から外国へ出た者のメダルが保管されている場所へ移されるのだ」

　アルステーデが震えながらフェルディナンドを見る。ゲオルギーネの計画によって供給の間というアーレンスバッハの領主一族以外には入れない場所で即死毒を食らい、皆に死んだと思われていたにもかかわらず生きていて、まだ喋っていないことを見通されているのだ。アルステーデにとってはものすごく怖い存在だろう。

「フェルディナンド様は何故そのようなことをご存じなのですか？　そのような内容は貴族院でも習いませんでした」

「其方が不勉強なだけだ。私は古い資料で読んだことがある」

　……古い資料ってメスティオノーラの書ですよね。

　メスティオノーラの書を持っていないことを不勉強の一言で片付けるのはどうかと思うが、ずっと最優秀だったフェルディナンドに言われれば納得するしかないだろう。ちなみに、わたしは持っていても情報がないので調べられないけれど。

「話を戻すぞ。ジェルヴァージオのメダルも中央神殿で保管されていたはずだ。傍系王族からランツェナーヴェへ渡った者として」

「中央神殿で保管されるというのが不思議な感じですね。エーレンフェストでは貴族のメダルを城で管理するので、王宮で管理しているのかと思いました」

「彼等が生まれ育つ離宮はここで、所在地は貴族院だ。王宮とは管轄が違う」

　フェルディナンドはそれ以上言わなかったけれど、アダルジーザの離宮で生まれた者は普通の傍系王族登録とは少し違うことが感じ取れた。

「とにかく、ラオブルートはイマヌエルと組んでジェルヴァージオを傍系王族に戻したのであろう」

　メダルがあれば登録されていた魔力で本人確認ができる。いくつの属性を持っているのか目で見てわかる。

「元々ユルゲンシュミットの傍系王族として登録されていたジェルヴァージオ本人であること、全属性であること、グルトリスハイトの獲得法を知っていることがわかれば、聖典原理主義者のイマヌエルは諸手を挙げて歓迎すると思われる。何と言っても、選別の魔法陣を少し光らせただけでディートリンデを次期ツェント候補だと認定するような馬鹿揃いだからな」

　メダルの移動により、ジェルヴァージオはランツェナーヴェの者ではなく、グルトリスハイトに最も近いユルゲンシュミットの傍系王族になった。

「以上は私の推測だが、大きく外れてはいないはずだ。どうだ？」

　フェルディナンドに問われて、アルステーデは小さく震えながらコクリと頷いた。

「ジェルヴァージオ様のメダルを確認した後は、元の傍系王族のところへメダルを戻す、とイマヌエルが約束したそうです。ジェルヴァージオ様がグルトリスハイトを得て、正式にツェントとなった後、何やら褒賞を中央神殿へ贈るお約束になっているようですけれど、それはラオブルート様とイマヌエルの間の約束のようで、わたくし達は詳しく知らされていません」

　フェルディナンドの推測が当たっていることに今更ながら感嘆の息を吐く。同時に、ラオブルートの暗躍具合にも驚いた。まるでゲオルギーネのようではないか。

「中央神殿もラオブルートの管理下だなんて……。予想外に根が深くて、気の長い計画だったようですね。わたくし、イマヌエルとラオブルートが協力関係にあると思いませんでした。わたくしの聖典を検証する場ではとても仲が悪く思えたのですもの」

「その後、何かしら利害の一致があったのであろう」

　フェルディナンドはイマヌエルを選定の魔法陣を光らせたディートリンデを次期ツェント候補だと宣言した馬鹿者、と言ったけれど、わたしの脳裏に浮かんだのはシュタープで作る神具を見て気持ち悪い目をした姿だ。ラオブルートと組んだと思うと一層恐怖感が増す。

「……ローゼマイン、イマヌエルに何か思うところがあるのか？」

「貴族院で行う儀式で何度か会っているのですけれど、イマヌエルはシュタープで神具を作ったり、古い儀式を蘇らせたりすることに強い関心があるようですよ。わたくし、あの人の目が怖くて、気持ち悪くて、嫌いなのです」

　ハルトムートとは全く方向性の違う狂信で光る灰色の目が嫌だ。貴族院で儀式を行った時はもうフェルディナンドがいない時期だったので、フェルディナンドにはほとんどイマヌエルの印象がないようだけれど、わたしの記憶には不気味さがこびりついている。

「神具や儀式に強い執着を持つ、考えなしで面倒くさい聖典原理主義者はグルトリスハイトこそが重要で、それさえあればランツェナーヴェの者でもツェントにするのを躊躇わぬということか」

　フェルディナンドが何かを考えるように目を伏せて、ゆっくりと息を吐いた。

「それで、その後はどうなった？」

　ヒルデブラント王子がシュタープを得て戻ってもアナスタージウス王子はまだ戻らなかったらしい。シュタープを他の者に触れられないように、ラオブルートはヒルデブラント王子達に自分の離宮へ先に戻るように勧めたそうだ。

　ヒルデブラント王子の側近がアナスタージウス王子にオルドナンツを送り、役目を終えた中央神殿の者達と共に帰る。それを確認して、ランツェナーヴェの者達も離宮に急いで戻り、シュタープの取り込みを始めたそうだ。

「アナスタージウス王子が貴族院を見て回った後、貴族院は通常状態に戻りました。ランツェナーヴェの者達がシュタープを得たので、役目を終えたわたくしは早くアーレンスバッハへ戻りたいと思いました」

　けれど、ランツェナーヴェの館に通じる扉は開かず、アーレンスバッハの寮にも入れなくなっている。ラオブルートにおかしいと訴えると、アーレンスバッハの礎が奪われて、アウブが交代したのだと言われたそうだ。

「ディートリンデが怒って手紙をアーレンスバッハへ送っていました。そして、わたくし達を再びアーレンスバッハのアウブに戻すためにもグルトリスハイトを得なければならないと張り切って……」

「張り切って頭に花を盛って祠を回るようになったのですね」

　ディートリンデの名前を聞くだけでフェルディナンドが瀕死で倒れていた様子を思い出して何とも言えない怒りが湧き上がってくるので、わたしはどうでもいいことを考えながら意識を逸らしてニコリと微笑む。口調が少々刺々しいものになったかもしれないけれど、それくらいで済んでいる自分を褒めてあげたいくらいだ。

　わたしの言葉を聞いたアルステーデが困ったような顔になった。

「え、えぇ。わたくし達が作った回復薬をジェルヴァージオ様やディートリンデに持たせて祠を巡るようになりました。少し考えが足りなくて自己中心的なところがありますけれど、わたくし達のために頑張っていたのです。ディートリンデも根は悪い子ではないのですよ」

　それは妹を弁護する姉の台詞としては普通だったかもしれないし、姉妹としてアルステーデとディートリンデがどのような交流をしていたか知らない。けれど、その一言はわたしの逆鱗に触れた。血が沸騰するような怒りを感じる。体が熱くなってくるのに、頭の方は冷えてくるような感覚は久し振りだ。わたしは笑顔に魔力を込めて、アルステーデを真っ直ぐに見つめる。

「アルステーデ様はずいぶんと面白いことをおっしゃるのですね。即死毒では死ななかったフェルディナンド様に痺れ薬を盛って手枷をはめた上で、魔法陣を起動して魔力枯渇を狙ったりするような方の根が悪くないなんて……。さすがゲオルギーネ様の娘で、ディートリンデ様のお姉様だと思います」

「……な、そ……」

　アルステーデが大きく目を見開き、胸元を押さえて苦しそうに口をパクパクさせ始めた。その苦悶の表情を見ながら、わたしはゆっくりと魔力による威圧を強めていく。

「ローゼマイン、抑えなさい！　魔力が漏れている！」

　わたしの周囲にいた護衛騎士達が動くより早く、フェルディナンドがわたしの腕をつかんで引き寄せた。

「安心してくださいませ、フェルディナンド様。わたくしも成長しているのです。威圧する対象は選べるようになっています」

「君の怒りは理解したが、アルステーデを殺してはならぬ。それはこれから先に必要だ」

　これ以上威圧させないようにフェルディナンドはもう片方の手でわたしの視界を塞ぐ。アルステーデが咳き込むのがわかった。わたしの護衛騎士達が「ローゼマイン様！」と声を上げるのが聞こえる。

「私がローゼマインの魔力を抑えておくので、すぐにアルステーデをあちらへ連れて行け。ローゼマインの前に出すな！」

「はっ！」

　マティアスとラウレンツの声がした。アルステーデの姿が見えなくなって、わたしは行き場のない魔力と怒りを持て余す。

「フェルディナンド様、わたくし、悔しいですし、腹が立ちますし、許せません」

「わかったから魔石を直接肌に当てられたくなければ、自力で魔力を押さえ込みなさい」

　全然わかってなさそうな口調でそう言っているけれど、こんな時までわたしが魔石を忌避していることに配慮してくれているのがわかって、怒りが霧散していく。フェルディナンドを相手に怒っても仕方がない。

　わたしの魔力が押さえ込まれていくのがわかるようで、わたしの腕をつかんでいたフェルディナンドの手から力が抜けた。

「君は昔から精神的に全く成長していないな」

「神の祝福で肉体的に急成長しましたから、お祈りをしていれば精神にも急成長がくるかもしれませんよ」

「ユルゲンシュミットで一番祈っていて、その成長率では全く期待できぬ」

　視界は塞がれたままだけれど、そんな言い合いができるようになった頃には、わたしはずいぶんと落ち着いてきた。

　フェルディナンドが手を退けて、このまま放しても問題がないかどうか魔力の確認を始めた。護衛騎士達が何か言いたいけれど呑み込んでいるような顔で手を挙げかけたり降ろしたりしているけれど、アルステーデの姿はもうないので魔力が暴れることはないと思う。

「ディートリンデの性根など、今更どうでもいいことだ。重要なのはジェルヴァージオが祠を回っていたという情報ではないか。君は何を聞いていたのだ、まったく」

　体調を確認しながらそう言ったフェルディナンドの目には少しばかり焦りがあるように見える。耳に留める部分が違うと言われたわたしは、そこでようやく気が付いた。

　……祠を回るのって、ほとんど時間がかからなかったよね？

　大量の魔力が必要だけれど、回復薬さえあって魔力の回復ができれば、祠の中にどれだけ長時間いても、外の時間は全く経過していなかったはずだ。それまでに貴族院で行った儀式による魔力の奉納のおかげで必要な魔力が少なかったせいもあるけれど、わたしは一日あれば祠を回れた。

　……もしかして、ジェルヴァージオってもう祠を回り終わってる？

　ヒルシュールが不審人物達の姿を見たのは文官棟付近だったはずだ。あの近くに祠がある。今日の午後に回っていたことは確実だ。ジェルヴァージオが祠を回り終わっている可能性に気付いて、頭が冷えていく。

「暗闇に紛れて祠を回っているのであればまだ良いが、全てを終えてグルトリスハイトを得られる段階に来たからこそ中央騎士団が裏切りを明らかにしたのであれば？　彼等が王族と仰ぐジェルヴァージオは今どこにいると君は思う？」

　フェルディナンドの言葉にわたしは一気に血の気が引いた。グルトリスハイトを得たいと望む者が祠を回り終わったら、次に行く場所は一カ所だ。

「ソランジュ先生とは連絡が取れなかったとヒルシュール先生は言っていなかったか？」

[------------------------------------------------]

ソランジュの救出

　供給の間で瀕死状態だったフェルディナンドのようにソランジュが倒れているのを想像しただけで、呼吸が荒くなり全身が震えてくる。

「い、急いで図書館へ行かなくては……」

　わたしが自分の護衛騎士達を振り返ると、一緒にフェルディナンドの言葉を聞いていた護衛騎士達はコクリと頷いた。突然のことにも狼狽えず、すぐさま対処してくれる側近達の姿がとても心強い。そう思ってわたしはコルネリウス兄様に向かって足を踏み出した。

「待ちなさい。誰をここに残し、誰を連れて行くのか、誰を先行させるのか、決めなければならぬことはいくつもある」

　フェルディナンドに腕をつかんで引き留められて、わたしはフェルディナンドを睨みながら振り返った。

「そのように悠長なことを言っている場合ではありません、フェルディナンド様。わたくし、今すぐに図書館へ行ってソランジュ先生の……」

「悠長なことを言っている時間がないことは私にもわかっている。だが、闇雲に突っ込む前に情報の共有と捕らえた捕虜をどうするのか考えておかねばならぬ。この離宮の鍵は誰が持っている？　我々が図書館へ向かっている間にジェルヴァージオ達が戻ってくる可能性もないわけではない」

　祠を回っているかもしれないし、図書館にいるかもしれないし、王宮で同士討ちに参加して王族を始末しようと思っているかもしれない。ジェルヴァージオがどこで何をしているのかは全て想像でしかない、とフェルディナンドは言う。

　捕虜からあちらの狙いや動きに関する情報が得られれば、前もって対応できることがあるかもしれない。ここの見張りに残した者が少なすぎれば、こちらがやられて捕虜が解放される可能性もある。押収した道具を取り返されて武装された場合、こちらは圧倒的に不利になるだろう。フェルディナンドはそう言って、色々な可能性を上げていく。

「今回楽に勝てたのは、隠蔽の神　フェアベルッケンの守りを過信して無防備に寝ている深夜に、ダンケルフェルガーを含めて圧倒的に人数で勝った状態で奇襲したからだ。きちんと武装した状態で対峙すればどうなるかわからぬ。今はダンケルフェルガーも王宮に行っていて当てにできないことを考慮しなさい」

　わたしがアウブ・アーレンスバッハとして寮へ入るために必要なブローチの作成ができていないため、捕虜や道具を安全な場所に移動させることもできないらしい。

「入館するにも、地下書庫へ向かう扉を開けるにも、司書であるソランジュ先生は必要だ。だからこそ、連絡がつかないのであって殺されたわけではないのであろう。少しでいい。指示を終えるまで待ちなさい」

「でも、待っていて手遅れになったらどうするのですか！？　ほんの少しの時間差で取り返しのつかない事態になることは多々あります。ソランジュ先生の危険に可能な限り早く対処したいと思うのは当然ではありませんか。わたくしだけでも行かせてくださいませ」

　腕をつかんだまま放してくれないフェルディナンドに必死で訴える。冷静な顔で全ての采配が終わるまで待っているなんて、とてもできない。フェルディナンドは「その勢いで君はアーレンスバッハへ突進したのか」とわたしの護衛騎士達に同情めいた視線を向ける。

「どうしても待てないならば、君に名を捧げていない騎士を向かわせ、様子見をさせなさい。君だけは敵の有無が確認できるまで決して図書館へ近付いてはならぬ」

「何故ですか！？」

　行かなければならないと強く思っているのはわたしなのに、どうしてわたしだけは近付いてはならないのか。わたしが食ってかかると、フェルディナンドは静かにわたしを見ながら「興奮しすぎだ。落ち着きなさい」と頬をつねる。

「君だけが近付いてはならない理由は一つ。図書館の魔術具が主である君の接近を感じ取るからだ。君の魔力の影響を受ける名捧げ済みの者はどうなるのかよくわからぬが、避けておいた方が無難だと思われる」

　シュバルツ達が「ひめさま、きた」と出迎え準備をすることで、図書館に敵がいれば相手に接近を気付かれて、待ち伏せをされたり、ソランジュを人質に取られたりする可能性が高いと言われて、わたしは目を瞬いた。

「ソランジュ先生を人質に取られたら、こちらが身動きできなくなる。救いたいと願っている君がソランジュ先生を窮地に陥れることになりかねない。騎士達を遣わして内側を探るのが先だ。地下書庫へ入れるのは上級貴族以上で、更に奥へ入れるのは王族と領主候補生のみ。君が行かなければならない時は必ず来るので、少し待ちなさい」

　理路整然と諭されると、わたしは受け入れるしかなかった。

「ローゼマイン様、マティアスとラウレンツは名捧げをしているので、私とアンゲリカが何人かの騎士を連れて図書館の様子を見てこようと思います」

「お願いします、コルネリウス」

　アルステーデを連れ出していたマティアスとラウレンツが戻ってくると、入れ替わるようにコルネリウス兄様がアンゲリカと一緒に出ていった。レオノーレではなくアンゲリカを連れて行くのは、素早さとシュティンルークの存在を考慮したためだそうだ。

　わたしが二人を見送っている間もフェルディナンドは次々と指示を出して動き回っていた。魔力登録のできる扉に魔力を登録し、ハイスヒッツェ達にランツェナーヴェの道具を入れていくように命じる。

「一目で何かわからぬ道具が多い。何度も即死の毒を食らっては堪らぬし、初見の道具や武器は危険だ。銀の武器や防具も全て封じておけ」

「この備えを見ると、寝込みを圧倒的多数で襲って正解でしたね。ランツェナーヴェの者達が活動している時間であれば、道具を使って反撃されてダンケルフェルガーには決して少なくはない被害が出たでしょう」

　ハイスヒッツェが道具の山を隠し部屋に放り込みながらそう言った。銀の武器や防具がたくさん運び込まれていることからも敵の本気が伝わってくる。

「フェルディナンド様、わたくしに何かできることはございませんか？　じっとしているのが辛いのですけれど……」

「王族と傍系王族の違いについて調べてくれないか？　傍系王族に戻ったジェルヴァージオに何ができて、何ができないのか把握しておきたいと思っている。私の知らないことも君のグルトリスハイトには載っているであろう」

　さらっと課題を与えられたわたしは、グルトリスハイトを出して傍系王族について調べていく。傍系王族に登録された時点で、司書による登録がなくても図書館の出入りは可能になること、けれど、王族ではないので地下書庫の更に奥へはわたしと同じように行けないことがわかった。

「ならば、ジェルヴァージオがすでにグルトリスハイトを手に入れているということはなさそうだな」

　少し肩の力を抜いたフェルディナンドがユストクスとハルトムートに聴取の状況を問うオルドナンツが飛び、捕虜の見張りと図書館へ向かう者に分けられていく。

　コルネリウス兄様からオルドナンツが飛んできた。わたしではなく、フェルディナンドに宛てて白い鳥が図書館の様子を語る。

「この時間ですから、図書館は完全に施錠されて誰も立ち入れないようになっています。潜入の跡がないかと考えて建物の外を回ったところ、潜入の跡はありませんでしたが、執務室の窓にうっすらと明かりが見えました」

　そろそろ一の鐘が鳴るくらいの時間だ。いくら起きるのが早い人でも、側仕えがまだ起きていない時間に自室ならまだしも執務室にいるというのは考えにくい。

「窓を破って潜入することも可能ですが、敵の人数が把握できないことを考えると援軍なしには危険の方が大きいと思われます。」

「今から援軍と共に向かう。潜入跡がないならば其方等は潜入してはならぬ。図書館の魔術具に問答無用で排除されるぞ。図書館の魔術具の主であるローゼマインの到着を待て」

　シュバルツ達がどのように作られているのか研究しまくったフェルディナンドが不正な手段で潜入した者の末路についてオルドナンツに吹き込み始める。聞きたくないよ、と泣きたい気持ちで耳を塞いでいると、オルドナンツを飛ばし終えたフェルディナンドがわたしに手を差し伸べた。

「行くぞ、ローゼマイン」

「はい」

　暗闇の中を約六十騎の騎獣が駆けていく。ハルトムートとユストクスは捕虜の見張り側に残されたが、それ以外の側近達は一緒に図書館へ向かっている。

「ハルトムートが残念がっていましたよ。図書館はローゼマインの奇跡が詰まっている場所だから、と」

　クラリッサがそう言って指折りわたしがした祝福について挙げていく。初めての図書館に興奮して祝福を行い、シュバルツ達の主になった時の様子を神様表現たっぷりに述べられて、わたしは必死にクラリッサを止めた。忘れたことにしておきたい昔の所業をアーレンスバッハの騎士達にまで知られたくはない。アーレンスバッハを図書館都市にする以上、わたしは皆に尊敬される司書になりたいのだ。

「ひめさま、きた」

「ひめさま、ひさしぶり」

　フェルディナンドが言った通り、わたしは難なく図書館の扉を開けることができた。中に入ればシュバルツ達が出迎えてくれる。

「シュバルツ、ヴァイス。ソランジュ先生はどこにいるのかしら？」

　わたしが尋ねると、シュバルツ達はひょこひょこと執務室へ向かって動き始めた。

「ソランジュ、しつむしつ」

「ソランジュ、うごけない」

　わたしが思わず駆け出そうとした瞬間、フェルディナンドがわたしを止めた。

「君は後だ。ハイスヒッツェ！」

「はっ！」

　癒しの得意な騎士を連れたハイスヒッツェが警戒しながら執務室へ入っていく。一人の騎士が「罠等はありませんが、ソランジュ先生が倒れています」と声を出した。その瞬間、今までわたしを止めていたとは思えないような速さでフェルディナンドが歩き始めた。足が長い上に大股なので、わたしには咄嗟について行けない。

「あっ……」

「すまぬ」

　バランスを崩しかけたのを支えてもらい、無様に転ばずに済んだことに胸を撫で下ろしていると、フェルディナンドは溜息混じりに「後から来なさい」とわたしに言い置いて、スタスタと歩いて執務室へ入っていく。一人で先に行くなんてひどい。

「待ってくださいませ、フェルディナンド様」

　今のわたしにできるだけ速く歩いて追いかけようとしたら、レオノーレが軽く手を挙げてわたしを止めた。

「優雅にゆっくりと歩いて向かいましょう、ローゼマイン様」

「え？」

「これまでの気遣いを見ていればわかりますが、フェルディナンド様は恐らくローゼマイン様が到着する前にソランジュ先生の状態を確認して、必要ならば癒しを与えるおつもりだと思われます。殿方の配慮はありがたく受け取っておきましょう」

　レオノーレが藍色の瞳を優しく細めてそう言いながら、わたしに手本を示すようにゆっくりとした優雅な足取りで歩き始める。わたしがレオノーレと執務室の入り口を見比べていると、フェルディナンドがルングシュメールの癒しをかける声が聞こえ、緑の光が見えた。

「……レオノーレの言う通りでしたね」

「ソランジュ先生、大丈夫ですか？」

　騎士達に助け起こされるようにしてゆっくりと体を起こしているソランジュに声をかけると、ソランジュはわたしを見て少し首を傾げた。

「ローゼマインです、ソランジュ先生」

「まぁ、ローゼマイン様？　ずいぶんと大きく成長されたのですね。一目ではわかりませんでした。喜ばしいこと」

　ニコニコと微笑むその顔には疲労の色が濃い。早く休ませてあげたいけれど、何が起こったのかは確認しておかなければならない。

「ソランジュ先生、一体何があったのですか？」

「……ラオブルート様がジェルヴァージオ様という方を連れてこちらへいらっしゃいました。皆様は御存じないと思われますが、傍系王族の方でグルトリスハイトを得ようとしていらっしゃいました。昔も今も変わっていらっしゃいません」

「ソランジュ先生はジェルヴァージオをご存じなのですか？　彼は離宮で教育を受けていて、貴族院へは行っていなかったはずです」

　フェルディナンドの厳しい視線と言葉に、昔を懐かしむように目を細めていたソランジュが驚いたように目を瞬いた。

「わたくしこそフェルディナンド様がご存じだとは思いませんでした。ずっと昔に遠くへ行ってしまった方ですから。わたくしが貴族院の図書館に配属されたばかりの頃によく出入りされていて……。領主会議を終えて上級司書達がいなくなる春の終わりから秋の終わりまでの間、図書館を訪れていらっしゃいました」

「昔話は結構です。それで今ジェルヴァージオはどこに？」

　フェルディナンドの言葉と騎士達の緊迫した雰囲気をゆっくりと見回して、ソランジュは首を横に振った。

「お役に立てず申し訳ございませんが、わたくしは存じません。……昨日の夕方のことです。オルタンシアが来たとシュバルツ達が言ったので、わたくしは出迎えに向かいました」

　けれど、やって来たのはオルタンシアではなく、ジェルヴァージオとラオブルート、それから、中央騎士団の者達だったそうだ。

「オルタンシアは看護の甲斐なくはるか高みに上がっていったそうです。ラオブルート様は図書館の自室を引き払うために足を運んだとおっしゃいました」

　ラオブルートはオルタンシアの魔石を持って、図書館の奥にあるオルタンシアの部屋を開けに行った。その間、ソランジュは久し振りに機会があって、故郷の地へ戻ることができたジェルヴァージオと昔話をしていたそうだ。

「オルタンシアの部屋へ行っていたラオブルート様はすぐに戻ってきました。そして、わたくしにオルタンシアと同じ姿になりたくなければ地下書庫へ向かう鍵を出すように、といいました。脅されたわたくしは上級司書が染める鍵や地下書庫へ向かう扉を開ける鍵を差し出したのです」

　昔の馴染みにひどいことはしたくない、とジェルヴァージオが言って、外と連絡が取れないようにシュタープが使えないように手枷をはめられ、縛って転がされていたそうだ。彼等は騎士団の者達に鍵を染めさせて、地下書庫へジェルヴァージオと共に向かったらしい。

「ジェルヴァージオ様がグルトリスハイトを手にしたら、わたくしの縛めを解きにくるとおっしゃいましたが、執務室へはいらっしゃらずにラオブルート様が図書館を施錠して出ていきました。あの足音から考えると、おそらく入手はできなかったのでしょうね」

　ソランジュは悲しそうに「昔馴染みと言いながら、ずいぶんとひどい扱いでしたよ」と自分を縛っていた紐や手枷を見つめた。

「では、ジェルヴァージオはどうしたのかしら？」

　地下書庫でグルトリスハイトを得られなかったのならば、今はどこにいるのだろうか。わたしはちょっとした疑問を口にしただけだった。けれど、それに答えが返ってきた。

「ジェルヴァージオ、ひめさまといっしょ」

「ジェルヴァージオ、じじさまのところへいった」

　顔を強張らせたフェルディナンドがザッと音を立てて踵を返し、執務室を大股で出ていく。側近と半数の騎士達がフェルディナンドに続く。

「ローゼマイン様、ジェルヴァージオ様は……」

　貴女の昔馴染みは外国の勢力としてユルゲンシュミットに攻めてきました。グルトリスハイトを手に入れてツェントになる事を狙っているようです。ラオブルートがトラオクヴァール王を裏切っています。図書館の司書である貴女が鍵を渡したことを責められるかもしれません。

　不安そうに尋ねるソランジュにどこまで本当のことを言っても良いのかわからない。

「ソランジュ先生はもうお休みくださいませ。お疲れでしょう？　図書館を脅かす者がないように、シュバルツ達に守ってもらいますから」

　わたしはレオノーレにソランジュを自室へ連れて行ってもらえるようにお願いする。ソランジュを支えるようにして送っていったレオノーレが顔をしかめて戻ってきた。

「どうしたのですか、レオノーレ？」

「ソランジュ先生の部屋が魔術具で封じられていました。側仕えが出てこられないように。……部屋から出られず、主は戻ってこず、側仕えもかなり怖い時間を過ごしていたようです」

　……ラオブルートめっ！

「シュバルツ達を戦闘状態にしておきます」

　わたしは目を閉じるとレオノーレに頼んで、わたしの手をシュバルツ達の魔石へ誘導してもらった。シュバルツとヴァイスに魔力を補充し、衣装のボタンにも魔力を流して戦闘モードにしておく。二度とラオブルートを入れるつもりはない。

「シュバルツ、ヴァイス。図書館の司書であるソランジュ先生を守ってください。協力者として登録されておらず、図書館の鍵を持つ者が入ってきたら必ず鍵を取り返して追い出してくださいね」

「ソランジュ、まもる」

「かぎ、とりかえす」

　わたしはシュバルツ達にお願いすると、閲覧室へ行ってフェルディナンドのいる二階を見上げた。すぐにフェルディナンドが駆け下りてくる。その表情と足の速さから懸念が当たっていたようだ。ジェルヴァージオはすでに始まりの庭にいるらしい。

「ローゼマイン、君は騎士達と離宮へ戻れ」

　指示を出しながら階段を下りてくるフェルディナンドを見上げながら、わたしは首を横に振った。

「嫌です。一緒に行きましょう」

「危険だ。離宮で待っていなさい」

　わたしの前を通り過ぎてフェルディナンドは閲覧室を出ていこうとする。その背中が一瞬アーレンスバッハへ向かうフェルディナンドの姿と重なった。喉がひくっとなって、思わず手が伸びる。

「待ってください！　わたくしを置いて行ったら、フェルディナンド様の秘密を皆に暴露しますからね！」

「この緊急時に何を言っているのだ、君は！？」

　顔を引きつらせたフェルディナンドが振り返る。

「待っていられるわけがありませんし、魔力は多い方が良いでしょう？」

「魔力？　何を言っている？」

「え？　フェルディナンド様が昔やったこととではありませんか。大魔力をぶつけて最速で突っ込むのですよね？」

　エアヴェルミーンからお行儀が悪くて不敬だとめちゃくちゃ叱られるかもしれないけれど、最速で始まりの庭へ行くにはそれが一番だと思う。空中の魔法陣に大魔力を叩きつけて起動させて突っ込むのだ。

「何という過激なことを考えているのだ……」

「えぇ！？　すでにやっちゃったフェルディナンド様だけには言われたくないですよ」

　頭を抱えていたフェルディナンドが諦めたように溜息を吐くと、大股で近付いてきて、わたしを肩に担ぎ上げた。そのまま大股で歩き始める。呆気に取られていた護衛騎士達が慌てた様子でついて来た。

「言っておくが、私は何とか魔法陣を起動させようと思っただけで、あの場に突っ込むつもりはなかった。結果がわかっていて突っ込む君と一緒にするな」

「訪問される側から見れば一緒だと思いますけれど？」

　正規ルートではないところから突っ込んできた者の思惑などエアヴェルミーンには関係ないと思う。不慮の事故でも故意でも叱られるものは叱られるはずだ。

「……それもそうだな」

　クッと笑ってフェルディナンドが図書館を出る。騎獣を出して、わたしを乗せた。

「最速で行くぞ、ローゼマイン」

「はいっ！」

[------------------------------------------------]

始まりの庭への道

「フェルディナンド様、どちらへいらっしゃるのですか！？」

　特に説明もなく、というか詳細に説明できるはずもないので、フェルディナンドはそのまま空へ向かって駆け出した。独走するフェルディナンドの騎獣を追って、護衛騎士達やハイスヒッツェが大慌てで追いかけてくる。フェルディナンドは振り返って、彼等を止めた。

「危険だから白の建物よりも下で待機せよ！　どうしてもと同行するならば、私より速く上空にいけ！　中途半端な位置にいると死ぬぞ」

　そう怒鳴りながらもフェルディナンドは護衛騎士達を振り切って、高速でぐんぐんと上空へ駆けていく。ついて来ている者達がいるのかどうか、わたしには振り返る余裕もない。ただ落ちないように必死で手綱を握っていた。

　上空へ向かう途中で一の鐘が鳴り始めた。カラーン、カラーンと図書館、中央棟、文官棟、騎士棟、側仕え棟、それぞれの寮から澄んだ鐘の音が、まだ日の差さない貴族院に鳴り響く。

「君はライデンシャフトの槍を使え」

　貴族院全域が見渡せるほど上空へ駆け上がったフェルディナンドが自分のシュタープを出しながらそう言った。魔力をたっぷり込めろ、と言いながらフェルディナンドは片手剣に変化させて、魔力を注ぎ込んでいる。

「ライデンシャフトの槍ですか？」

「そうだ。私が合図をしたら、目を閉じて槍に変化させて落とせ。どんなに投擲が下手くそで、飛距離がなくても落とすだけならば君にもできよう。貴族院をすっぽりと覆う魔法陣だからな。当たらぬということはないはずだ」

　あまりにもひどい言い草であるが、間違ってはいない。ライデンシャフトの槍にいくら魔力を籠めたところで、わたしの腕前は敵に当てるのが難しいレベルのへっぽこだ。

　……わかってるけど！　真実は時に人をより深く傷つけるということをフェルディナンド様にはぜひ覚えてほしいよ。

「フェルディナンド様、何をなさるおつもりですか！？」

「ローゼマイン様、お止めくださいませ！」

　完全に魔力を蓄えた剣をフェルディナンドが構えた瞬間、そんな声が聞こえた。必死でついてこようとしていた護衛騎士達がようやく追いついてきたらしい。ほとんどがわたしの護衛騎士で、青いマントも少し見えた。

　フェルディナンドが彼等を見下ろしながら、「エックハルトと違って聞き分けがない」と呟いたが、フェルディナンドの言葉には絶対服従の護衛騎士と比べられる人なんているわけがないと思うのはわたしだけだろうか。

「私は危険だと言ったはずだ。何故私より下にいる？　死にたいのか？　さっさと上空へ上がれ」

　顔色を変えた護衛騎士達が次々とわたし達より上へ向かうのを待っているフェルディナンドが「時間がないというのに……」と苛立たしそうに文句を言っていて、かなり切羽詰まっているのがわかった。

「フェルディナンド様、せめて、彼等が安全な位置へ行くまで攻撃は待ってくださいね。わたくしの護衛騎士達に攻撃を仕掛けるのは、さすがに全力で阻止しますよ」

「私もそこまで非道なことはせぬ」

　駆け上がってきたハイスヒッツェが「何をされるのですか？」と尋ねてくるが、フェルディナンドはそれに答えず、剣を振りがぶった。

「其方に答える義務はない。……ローゼマイン、やるぞ」

「はい！」

　わたしはフェルディナンドに言われた通りに目を閉じてシュタープを出し、「ランツェ」と唱えた。手の中に槍の形を感じる。できるだけ魔力を籠めるように、と言われていたので、どんどんと魔力を送っていった。目を閉じていてもわかる。バチバチと魔力の火花が飛んでいるような音がしている。

「もう十分だ。落とせ」

「フェルディナンド様！？　ローゼマイン様、待っ……」

　周囲から焦りと制止の声が聞こえるけれど、こうして魔法陣を起動して始まりの庭へ向かわなければジェルヴァージオがメスティオノーラの書を手に入れることになる。アーレンスバッハで貴族達を殺して魔石を奪い、若い女性貴族をさらっていこうとしたランツェナーヴェの者をユルゲンシュミットのツェントにするわけにはいかない。

　……絶対に阻止するんだから！

　そのままパッと手を離してライデンシャフトの槍を落とす。その途端、グンと騎獣が動き、バランスを崩しかけたわたしは驚いて目を開けた。真っ暗の貴族院へ向かって青い流星のようにライデンシャフトの槍が落ちていく。

　それがわたしの視界に見えたのは、重力に任せて落ちていく槍を追いかけるようにしてフェルディナンドが騎獣を操っているせいだ。落下するような勢いで駆け下りながらフェルディナンドは剣を振り抜いた。

　虹色に光る魔力の塊が剣から放たれ、わたしが落とした槍を追い抜くようなスピードで魔法陣に接触した。魔力と魔力がぶつかって弾き合うような大きな音がして、貴族院を覆う魔法陣が眩い光を帯びて浮かび上がる。その魔法陣の中心で空と貴族院を繋ぐ光の柱が見えた。

　……風の貴色！　メスティオノーラ！？

　わたしが始まりの庭でメスティオノーラの書を授かった時も光が降ってきた。あの光ではないか、と妙な確信を持つ。

　……できるだけ早く行かなきゃ！

　わたしと同じ焦りをフェルディナンドも感じているのだろう。お腹に回されている腕に力が籠る。光の柱の下にある始まりの庭へ飛び込むために魔法陣へ騎獣ごと突っ込む。その瞬間、魔法陣から強力な風が吹き出し、突っ込んでいった勢いそのままにわたし達は思い切り弾き飛ばされた。

「きゃっ！？」

　予想外の反撃にわたしは思わず声を上げた。風に弾かれただけなので痛みはないけれど、衝撃が強すぎたのか身につけていたお守りがいくつか弾ける。フェルディナンドが舌打ちしながら騎獣を操り、魔法陣から少し離れたところで体勢を整えた。

「シュツェーリアの盾と同じ効果だ。あそこにいる者に敵意を持つ者は入れぬようだな」

　まだ光っている魔法陣と光の柱を睨みながらフェルディナンドがギリと悔しそうに奥歯を噛みしめた。前にお邪魔した時には中に誰もいなかったので通れたのだろう、とフェルディナンドが言った。

「つまり、上からは不可能ってことですね」

　アーレンスバッハを蹂躙したジェルヴァージオにも、フェルディナンドを殺せと言ったエアヴェルミーンにも親しみなんて持てない。このまま何度挑戦しても弾かれるだけだろう。

「あぁ。別の方法を考えねばならぬ。……一旦離宮へ戻って銀の衣装を着て再挑戦してみるか、最奥の間から繋がる入り口を開けるか、どちらかだな」

「シュツェーリアの盾を通り抜けようと思えば、全身を完全に銀の布で覆う必要があると思います。中へ入った時にすぐにシュタープが使えないのは危険ですよ」

　エアヴェルミーンは魔力で相手を判別していると言っていた。ならば、ジェルヴァージオは魔力の判別できる状態でいるはずだ。こちらが銀色武装をしていれば、相手の魔力攻撃は効かないが、相手がどのような武装をしているのかわからない以上、シュタープを使えない状態になるのはあまり良いとは思えない。

「……ジェルヴァージオは今まさにメスティオノーラの書を手に入れている最中ですよね？」

「間違いなくそうであろう」

　わたしは光の柱を睨む。巨大な魔法陣を確実に起動させるためにかなり魔力を使ったのに、突入することもできずに弾かれた。ジェルヴァージオがメスティオノーラの書を手に入れている最中だというのに、何かできることがないだろうか。

　……入れなくてもいいから、せめて、外から邪魔ができれば……。

「フェルディナンド様。わたくし達、魔法陣には弾かれましたけれど、光の柱の中には入れましたよね？」

「……何をする気だ？」

　身構えるフェルディナンドの前で、わたしは「リューケン」を唱えてどこかへ落ちていったライデンシャフトの槍を解除すると、「フィンスウンハン」で闇の神具であるマントを作り出す。

「ローゼマイン、それは最後の手段にするように、と言ったはずだが？」

「フェルディナンド様は嫌な顔をしますけれど、今は最後の手段を使っても良いくらいに追い詰められていると思うのです」

　ジェルヴァージオはすでに始まりの庭にいてメスティオノーラの書を授かっている最中だし、魔法陣を起動して最速で入る手段は通用しなかった。フェルディナンドが思いつく範囲でも銀色の衣装を着こんで再挑戦するか、中央騎士団の同士討ちが起こってどこかに隠れている王族に頼んで最奥の間を開けてもらうくらいしか始まりの庭には到達できないのだから。

「これであの光を遮ったら、最速でジェルヴァージオの邪魔ができるのではないかと考えたので、今の時点では最後の手段だと思っています。銀の布を取りに行って着替えたり、王族に頼んで最奥の間を開けてもらったりするよりよほど速いと思いませんか？」

　わたしの主張にフェルディナンドが「また突飛なことを……」とこめかみを軽く叩いた。

「悪くないと思うが、他にも余計なことを考えているであろう？　そちらも白状しなさい」

「魔法陣を起動するために大量の魔力を使ったので、入れないなら返してほしいと考えました。あの貴色の光は魔力の塊でしょう？」

「考えたのはそれだけではない顔をしている」

「うぐっ……」

　……どうしてバレるかな！？

　お貴族様仕様で取り繕っているはずなのにバレている。おかしい。顔を触りながら、わたしはむぅっと唇を尖らせた。

「あの光を吸収したら、わたくしの方に知識が流れ込んでこないかな？　という下心がたっぷりあります。成人までなんて待てませんもの」

　フェルディナンドにコピペを拒否されたわたしの一番の本音を聞いたフェルディナンドは、呆れたような溜息を吐きながら騎獣を光の柱に向けてくれた。

「不慮の事態で元々一つの物を私と君が分け合っている状態になっているとエアヴァルミーンは言ったのであろう？　そうでなければ、エアヴェルミーンは私達にお互いを殺して完成させよとは言うまい。ならば、他人に与えられる知識を君が得られるとは思えぬが……」

「ダメで元々。できたら『ラッキー』。やってみます」

「ラッキーとは一体何だ？　言葉遣いが乱れているぞ。このような状況で君は気を抜きすぎだ」

　……こんな状況で貴族らしさにこだわるフェルディナンド様に言われたくないけど。

　心の中で反論しつつ、お小言は「以後気を付けます」と聞き流した。

　はるか高みから降ってくる光が始まりの庭に届かないように、光の柱の中でわたしは大きく大きく闇のマントを広げていく。それと同時に、闇の神具の特性である吸収が行われ、一気に魔力が流れ込んできた。先程大量に使った魔力があっという間に回復してくる。激マズ回復薬にのたうち回る必要もなく、激マズ回復薬よりよほど速く、完全に回復である。

　……でも、フェルディナンド様が言った通り、知識は入ってこないみたい。しょんぼりへにょんだよ。

「リューケン」

「もう回復したのか？」

　闇のマントを解除したわたしを見て、フェルディナンドが驚いた声を出した。闇のマントは自分の魔力容量の最大値までしか魔力を吸収してくれない。完全回復した時点で終了である。でも、ライデンシャフトの槍に使った魔力量を考えると、驚きの魔力回復である。わたしは振り返ってフェルディナンドを見上げた。

「一番欲しかった知識は入ってきませんでしたが、魔力回復に関してはフェルディナンド様の作った激マズ回復薬よりすごかったです。さすが神様ですね。たっぷり魔力、ごちそうさまでした」

　フェルディナンドに報告すると、ぐにっと頬をつねられた。ひんやりとした空気と嫌そうな顔から察するに、どうやらフェルディナンドは神様にも対抗心を持っているらしい。ちょっと理想が高すぎると思う。

「あぅち。……でも、本当にすごいのです。今度はフェルディナンド様の番ですよ。ジェルヴァージオの邪魔もしなければなりませんし、フェルディナンド様もどーんと使ったでしょう？　神様に魔力回復してもらったらいかがですか？　こんな経験、滅多にできませんから」

　わたしに闇のマントの使い方を教えたのはフェルディナンドだ。本人が使えないとは思えない。わたしが勧めると、フェルディナンドは何とも複雑そうな顔になった。

「他の者に経験できるわけがなかろう。神々の魔力を吸収しようなどと考えるのは君くらいだ。日常的に何かあれば祈りを捧げているくせに信心深いのか、罰当たりなのかわからぬ」

　わたしに対する文句を言って、「ジェルヴァージオの好きにさせるわけにはいかぬからな」と建前を述べてから闇のマントを出し、わたしと同じように広げていく。

「ほぅ……。これはなかなか」

　ぶつぶつ文句を言っていたが、素早く魔力が満たされていくのがわかるのだろう。フェルディナンドが満足そうに唇の端を上げた。

「む？」

　フェルディナンドが「リューケン」を唱えるより先に、まるで電源が落ちたようにふっと光の柱が消えた。魔力回復の柱が消えると同時に光っていた魔法陣も消えてしまう。

「あれ？　終わっちゃいましたね」

「私はまだ完全に回復していないのだが……。もしや、君が吸収しすぎたのではないか？」

「えぇ？　わたくしのせいですか？　元々もう少しで終わるところだったのかもしれないのに、不満そうに文句を言われても困りますよ」

　わたしがフェルディナンドを睨むと、「ならば、次を考えねばならぬ」と言いながら騎獣を上空に向けた。

「君の言う通り、元々もう少しで終わるところだったならばジェルヴァージオはほぼ完成された聖典を持っていることになる。出口はどこだ？　図書館から始まりの庭へ到達した時、君はどこへ出た？」

　図書館へ戻るべきか、と言ったフェルディナンドにわたしは首を横に振った。

「図書館へは戻れませんでした。わたくしは最奥の間に出たのですけれど、フェルディナンド様は違ったのですか？」

「私は妙なところへ飛ばされるのが嫌だったので、入ったところから出た」

　つまり、無礼にも上空から飛び込んだ上に、せっかく開けてくれた出口を無視して、再び上空へ向かって騎獣で飛び立ったということだ。王族と連絡が取れなければ最奥の間から出られないので、間違っていない選択をしたと思う。

　……でも、そういうことをするからエアヴェルミーン様に嫌われるんじゃないかな？

　心配そうにわたし達の動きを見ていた護衛騎士達が、一旦やることが終わったことを察して駆け下りてくる。

「何をどうするおつもりだったのですか？　あの光の柱は何ですか？」

「説明する義務はないし、其方等が知る必要はない。何度も言わせるな。それより、ハイスヒッツェ。王族の様子はどうなっている？　これから急いで最奥の間へ行かねばならぬ。最奥の間を開けるため、一人でいいので王族を捕獲して送ってほしいとアウブ・ダンケルフェルガーに頼んでくれ。中央騎士団を抑えるのにアウブ・ダンケルフェルガーは必要だが、王族はそこにいても大して役に立たぬであろう？」

　フェルディナンドの言い分にはさすがのハイスヒッツェも顔を引きつらせた。

「王族を捕獲ですか。敬意の欠片も感じられませんが……」

「外患誘致について事前に連絡をもらい、まさに今侵略を受けているというのに対策も練れず、我が身を守るはずの中央騎士団から造反されている王族に、最奥の間を開ける鍵としての役目以上の価値があるか？」

　取り付く島もなければ、反論の余地もない。だが、真実を述べる必要がない時もあるのだ。

「あんまり王族が役に立ってないのは確かですけれど、フェルディナンド様を助けるための許可証をいただいたのですよ。もうちょっと取り繕いましょう、フェルディナンド様」

「ローゼマイン様も取り繕ってくださいませ」

　レオノーレにニコリとした笑みと共に叱られる。

「さすがにそのようなオルドナンツは送りかねます」

「そうか。ならば、私が送るので構わぬ。ローゼマイン、目を閉じていろ」

　わたしが目を閉じると、フェルディナンドの手が動くのがわかった。

「アナスタージウス王子、フェルディナンドです」

　……アナスタージウス王子？

　どうしてここでオルドナンツを送る相手がアナスタージウス王子なのか。わたしは首を傾げるが、フェルディナンドは淀みなくオルドナンツに声を吹き込んでいく。

「ランツェナーヴェからの侵略者にユルゲンシュミットの礎を奪われるのを防ぐためには、最奥の間を開ける王族が必要です。政変で王族が行った後始末を考えれば明白なように、礎を奪われた瞬間、今の王族は処分対象となります。直ちに最奥の間まで来てください」

　フェルディナンドがブンとシュタープを振るったのがわかった。

「これでよかろう。中央棟へ向かうぞ」

「フェルディナンド様、何故アナスタージウス王子なのですか？　この場合はトラオクヴァール王に送るべきでは？」

　ハイスヒッツェの問いかけはここにいる全員の疑問を代弁したものだった。フェルディナンドはぞっとするような魔王の微笑みを浮かべる。

「弱点が明確で、最も身軽で早く動けそうな男だからに決まっているではないか。エグランティーヌ様が処刑される事態になるのをアナスタージウス王子が黙ってみていると思うか？」

　……思いません。

　アナスタージウス王子の嫁馬鹿っぷりは身に染みている。エグランティーヌに迫る危機を見過ごせるような人ではない。

「でも、フェルディナンド様。わざわざ王族を呼ばなくても、最奥の間を開けるのはわたくしではできませんか？　承認は受けていませんけれど、一応アウブですよ」

「正式なアウブではない以上、君ができなかった時のための保険は必要であろう？」

　ダメだとわかってから呼んでは更に時間がかかる、とフェルディナンドは何食わぬ顔で言いながら騎獣を中央棟へ向けた。

　……王族を保険扱いしたよ、この人！

[------------------------------------------------]

フェルディナンドの怒り

「中央棟の転移扉が並ぶ辺りには中央騎士団の姿があった。まずは今すぐに動ける戦力の確保を行う。ハイスヒッツェはダンケルフェルガーに、コルネリウスはエックハルトに連絡を取り、戦力を中央棟付近の木立……。我々が最初に集った場所へ向かうように頼んでほしい」

　フェルディナンドは中央棟の近くの木立へ向かいながらオルドナンツを飛ばすように周囲の騎士達に命じる。わたしにも目を閉じて置くようにと言って、自分自身もシュトラールやツェントにオルドナンツを飛ばした。

　一班を率いて中央騎士団の動きを探るように命令を受けていたシュトラールについては合流を命じる事務的で簡素なものだったが、ツェントへ送ったオルドナンツは貴族らしく非常に遠回しな言葉を使ったものだった。どんなに遠回しでも、内容は「ツェントとしての矜持があり、他国の者に礎と奪われたくないと考えるならば、さっさとその場を片付けて信用できる中央騎士団やダンケルフェルガーを率いてこい」というものなので、あまり穏便ではない。

「あの、フェルディナンド様。ツェントやアナスタージウス王子がいらっしゃらなかった場合はどうするのですか？」

「……時間がかかって遠回りにはなるが、別の手段を使えば良いだけだ。今の危機を王族がどのように捉えて、どのように行動するのか、私は知っておきたい」

　そう言うフェルディナンドの声は不機嫌そのものだ。わたしとしても不機嫌な理由がわからないわけではない。アウブは自領の礎が狙われれば、敵から礎を守るために礎の間に籠る。そこを守れるのはアウブだけなので当然の行動だ。同様に、ツェントも国の礎を守らなければならないというのが大前提としてある。

「……フェルディナンド様はツェントが礎を守っているわけではなくて、どこかに隠れていらっしゃることが気に入らない点だと思うのですけれど、グルトリスハイトを持たないツェントは恐らく礎の場所を知らないのではありませんか？」

　礎の場所を知らないならば、礎の間には籠れない。わたしは少しだけツェントを擁護してみた。でも、全く意味はなかった。フェルディナンドに「それが何だ？」と鼻で笑われただけだった。

「礎の場所を知らないならば、奪われる前に騎士団を率いて敵を討ち取ればよかろう。せめて、討ち取ろうとする姿勢くらいは見せてほしいものだ。未成年の女性である君が苦手な戦地に立って騎士団を率いているのに、ツェントが隠れていてどうする？」

「それは過剰評価ですよ。わたくしがここにいられるのはフェルディナンド様や護衛騎士達が一緒で、わたくしを支えてくれて絶対に守ってくれるという安心感があるからですもの。騎士団長に裏切られたトラオクヴァール様には難しいでしょう」

　フェルディナンドを助けに行く直前でコルネリウス兄様やハルトムートに裏切られていたらアーレンスバッハへは行けなかった。リーゼレータやグレーティアがアーレンスバッハへついて来てくれなかったら、わたしは多分アーレンスバッハへ行くことができなかったと思う。

「側近の裏切りなど然程珍しくもなかろう。敵の息がかかったものが味方面で近付いてくるのは日常的に起こることだ。側近の動向に気を払って裏切りを早期発見したり、忠誠を得られるように努めるたり、側近を信用せず常に警戒したり、自衛するのが当然ではないか」

「わたくし、そのような日常を過ごしていませんけれど……？」

　わたしが知っている日常と違う。そこまで殺伐とした日常は過ごしていない。

「当たり前ではないか。君に近付ける相手はアウブ夫妻、私、カルステッド、エルヴィーラ、リヒャルダが吟味していたからな。秘密が多い割に視野が狭く、迂闊で間が抜けている君に近付く危険は最初から排除してある。それに、私にとってのヴェローニカのように明確な敵がいないというのも大きい」

　……言い方は相変わらずひどいけど……。

　下町との接触を制限され、面会相手は保護者によって決められ、お仕事がいっぱいで神殿と城を行き来しなければならない窮屈で大変だと思っていた自分の環境が、実は危険から遠ざけるために丁寧に整えられていたものであることを知った。目から鱗がボロボロ落ちたというか、わかっていなかった自分にがっかりする。

「……わたくし、自分で思っていた以上に過保護に守られていたのですね」

「製紙、印刷業を興し、神事によって収穫量を増やし、子供達の成績を上げ、ヴィルフリートやシャルロッテの救済を行った君にそれだけの価値があったというだけの話だ。騎士団に造反されたということは、トラオクヴァール様の価値が認められなかったのであろう。だが、そのような周囲の評価はどうでも良い。ユルゲンシュミットの国民にとって重要なのは、これから先の行動だ」

　中央棟に近い木立の中に降り立ちながらフェルディナンドが言った。

「ここで逃げ出すような者を、私は上に立つ者とは認めぬ。その場合はランツェナーヴェにユルゲンシュミットの玉座を明け渡そうとした腑抜けの愚か者で、グルトリスハイトの有無にかかわらずツェント失格だと判断するより他あるまい」

　……ツェント、頑張って！

「ダンケルフェルガーは順調に中央騎士団を捕らえているそうです。礎を守ることに関してはグルトリスハイトを持つローゼマイン様に任せるとのことでした」

「礎を守るのは王族の役目で、アウブ・アーレンスバッハの仕事ではないと反論しておけ」

　同士討ちになっているところを収めるのは大変なようで、アウブ・ダンケルフェルガーも苦戦しているようだ。特に、敵と味方が判別するのが難しいそうだ。全員を殺すわけにもいかないので、手当たり次第に捕らえているらしい。

　……手当たり次第ってところがダンケルフェルガーだな。

　ツェントがいる建物の中はダンケルフェルガーと中央騎士団が入り乱れて大変なことになっていると思う。まだ目途が立たないので、こちらへ応援に来るのは難しいそうだ。フェルディナンドはそれを聞いて、苦い顔をしていた。

「お待たせいたしました、フェルディナンド様」

　図書館前で待機していたエックハルト兄様達や合流したシュトラール達が合流してくる。すぐに報告が行われる。エックハルト兄様によると、図書館が見えるところに二人の監視役を置き、図書館へ来る者がいれば連絡が来るようになっているらしい。中央騎士団の動きを探るように言われていたシュトラールは、中央棟にいる騎士団の様子を探っていたようだ。

「各寮へ繋がる扉がある辺りを守っていた中央騎士団の騎士達は、南方からか飛んできたオルドナンツによって講堂へ入っていきました。我々が確認した人数は八名。しかし、講堂の扉が内側から開いたことからも、中にはそれ以上の人数がいることが予想されます」

　最奥の間へ繋がる扉は講堂にある。そこで待ち構えている者がいるということだ。

「中央騎士団が講堂へ入った後、アウブ・ダンケルフェルガーが率いる騎士団が王族の離宮へ繋がる扉をくぐっていきました。こちらの動きを知ることができていると判断するべきでしょう」

　シュトラールはそう言った。手薄になった途端、捕虜を取り返される恐れもあるため、ランツェナーヴェの者がいる離宮からはあまり人数を減らすべきではないそうだ。フェルディナンドはそれに同意する。

「ランツェナーヴェでシュタープを得た者は、シュタープの扱いに慣れていないだけで、ここへ来た騎士の半数よりも魔力量の多い者が多かった。彼等が作った魔術具や武器を使われると脅威だ。決して解放させるな」

「はっ！」

　シュトラールが離宮へ向けて指示を出すためにオルドナンツを飛ばし始める。その時、暗がりの中、中央棟へ向かって飛んだオルドナンツが見えた。

「エックハルト、其方はこれを付けて、こちらを監視している者を探してくれ。こちらの動きはすでにある程度知られているようだが、突入のタイミングや奇襲まで知らされると面倒だ。騎獣ではなく、身体強化で近付け」

「フェルディナンド様、これはアンゲリカの分もありますか？　時間短縮のためにも身体強化のできる者、何人かで当たった方が良いと思われます」

　何やら魔術具を渡されたエックハルト兄様がそう言って、もう一つ魔術具をもらうとアンゲリカと共に木々の間を駆けだす。

「速っ……」

「あの二人ならば手早く密偵を仕留めて戻ってくるであろう。それまでに君は自分のなすべきことを覚えよ」

　フェルディナンドが次々と指示を出して着々と準備を進めているところへ中央棟からオルドナンツが飛んできた。

「トラオクヴァールだ」

　そう名乗ったオルドナンツは、わたしの応援は空しく、少々回りくどい貴族言葉で「グルトリスハイトを得る者がいれば、その者こそが真のツェントだと思っている。新たなツェントの誕生を望む」と三回繰り返した。途中から何やら魔術具を握っていたフェルディナンドの目が半眼になっている。よくよく見てみればその目の色が揺らいでいた。

「ほぅ？　つまり、自分はグルトリスハイトを持たぬ偽物のツェントだから礎を守るために戦うつもりはない。ジェルヴァージオでも構わぬ、と……そういう答えか、これは？　どう思う、ハイスヒッツェ？」

「は、はっ！……そうですね。私にもそのように聞こえました。グルトリスハイトを手に入れた者がいれば、その者にツェントを譲る、と。それがどのような者であっても……」

「私の解釈に間違いはないようだな……」

　……怖い。怖いよ、フェルディナンド様。目がヤバいから。何かほんのりと体の周りに靄っぽい物が見えるから。

　フェルディナンドからほんのりと魔力が漏れている。暗い中にいるせいで、フェルディナンドが光っているようにも見えた。周囲の騎士達がゴクリと唾を呑んだのがわかる。ごく軽い物だが、無意識の威圧を受けているのだ。空気が圧力を増していて少し息苦しい。

「フェルディナンド様、落ち着きましょう。ね？　微妙に魔力が漏れて、ちょっぴり威圧状態になっています。フェルディナンド様のお気持ちはわかりますが、グルトリスハイトを持つ者こそがツェントというお言葉は間違っていないと思いますよ。ほとんどの仕事ができないわけですから」

　フェルディナンドがじろりとわたしを睨んだ。目の変化は収まっているが、その内には抑えがたい怒りが渦巻いているのがわかる。

「トラオクヴァール様はグルトリスハイトを手に入れられるならばディートリンデ様でもツェントを譲ろうとしていらっしゃった方ですよ。トラオクヴァール様は御自分とその一族がその後どんなふうに扱われるのか覚悟の上でツェントを譲ろうとしていらっしゃるのですから、一応筋は通っているではありませんか」

「君は馬鹿か？　どこまでおめでたい頭をしているのだ？」

　フェルディナンドの怒りの矛先がわたしに向かってきた。どうしよう。失敗したらしい。余計なことを言わずにツェントに対して怒らせておけばよかった。わたし、マジ迂闊。

「自分一人の犠牲で済むことならばまだしも、グルトリスハイトも持たぬ偽物の愚かなツェントの決断によってユルゲンシュミット全体がランツェナーヴェの支配下に置かれるのだぞ。筋が通っているかいないかは全く関係がない。明確なのは、ユルゲンシュミットのツェントとして失格の返事だということだ」

　フェルディナンドはそう言いながら周囲の騎士を見回した。

「自分達に従わぬ者には即死毒を与え、魔石や若い女性貴族をランツェナーヴェに送ろうとした彼等の所業は報告したはずだ。ジェルヴァージオに礎を奪われたらどうなるか、アーレンスバッハにおける行いを聞いても未だわからぬとは言わせぬ。同じことがアーレンスバッハだけではなくユルゲンシュミット全体で行われる可能性が高いというのに、ユルゲンシュミットを守る気がないトラオクヴァール様はツェント失格だ。違うか？」

　この場にいるのはランツェナーヴェの行いを実際にその目で見たアーレンスバッハの騎士達と、騒動を収めるために奔走したわたしの護衛騎士達やダンケルフェルガーの騎士達だ。フェルディナンドの言葉にコクリと頷く。

「グルトリスハイトを授け、ツェントを任命するメスティオノーラの化身はこちらにいる。ジェルヴァージオを排したところで、新しいツェントは誕生するのだ。それにもかかわらず、其方等はユルゲンシュミット全体でアーレンスバッハの悲劇を繰り返すことを望むのか？」

「否！」

「ジェルヴァージオはユルゲンシュミットのツェントに相応しいと思うか？」

「否！」

「トラオクヴァールの判断を尊び、ユルゲンシュミットに危険と混乱をもたらすことを望むのか？」

「否！」

「ならば、トラオクヴァール様の返答は無視し、グルトリスハイトの有無に構わずジェルヴァージオは排除する」

「応！」

　こちらを見張っていた中央騎士団の騎士を仕留めた、とエックハルト兄様が戻ってくると同時に、講堂へ向かう。斥候も立てたが、シュトラールから報告があったように各寮へ繋がっている扉が並ぶ辺りには人影もない。

　そう思っていたら、少し向こうから足音が近付いてきた。武器を構えて警戒している護衛騎士達に周囲を守られたアナスタージウスがやってくる。予想以上に早くて驚いているわたしと違って、フェルディナンドは「音を立てるな」と騎士には通じる合図を送った。

　アナスタージウスが講堂とわたし達を見比べて眉をひそめる。

「直ちに最奥の前へ来るように、というオルドナンツを飛ばしておきながら、講堂前でなにをしているのだ？」

「この中の敵を排除しなければ最奥の間へ到達することもできません。攻撃が終わるまでお待ちください」

「フェルディナンド、其方は何をどこまで知って……、誰だ？」

　フェルディナンドの隣に立っていたわたしをまじまじと見て、アナスタージウスが首を傾げる。

「お久し振りですね、アナスタージウス王子。ローゼマインです」

「ロ、……」

　黙れと言われていたことを思い出したのか、アナスタージウスは咄嗟に自分の口を塞いだ。頭を何度か横に振った後、ガクリと項垂れた。

「兄上とヒルデブラントが信じられないくらいに成長したと言っていたが、まさかこれほど成長しているとは……」

「ローゼマインの成長は今の戦いに関係がありません。後にしてください」

　フェルディナンドがそう言いながら武器を構えて、手を挙げた。わたし達からは見えないけれど、シュトラール達が動き出したはずだ。数秒後、講堂の中でいくつもの爆発音がして、奇襲に騎士達が騒ぐ声がし始めた。

「止めろ。何をしている！？」

「別動隊がハルトムートの作成した魔術具を最も高い窓から投げ込んでいるのです」

「貴族院への攻撃はツェントへの攻撃と同意だぞ！　其方等は反逆罪に問われたいのか！？」

　アナスタージウスの激昂に、フェルディナンドは涼しい顔で「問題ありません」と言って、録音の魔術具を出した。

「騎士団を率いて、ユルゲンシュミットの礎を守るために戦えという内容のオルドナンツを飛ばした結果、グルトリスハイトを手に入れた者が真のツェントだと異邦人に譲る覚悟をした返事が来ました。これが証拠です」

　魔術具から先程ツェントが送ってきたオルドナンツの言葉が流れる。新しいツェントを望む、という意味合いの言葉にアナスタージウスが顔色を失った。

「アナスタージウス王子、今のユルゲンシュミットには礎を守るツェントがいないのです。反逆罪や不敬罪になりようがありません」

　フェルディナンドの態度があまりにも悪いので、わたしは急いでフェルディナンドとアナスタージウスの間に立った。

「フェルディナンド様は自分の責任を果たさない怠惰な無能がお嫌いなので、ツェントのお返事にものすごく怒っていらっしゃるのですけれど、わたくしは、トラオクヴァール様のことを筋の通った方だと思っています」

　アナスタージウスが胡散臭いものを見る目でわたしを見た。何を言い出す気かと警戒しているのがわかる。わたしはニコリと微笑んだ。

「御自分とその一族が王族でなくなった後、どのように扱われるのか覚悟の上でツェントを譲ろうとしていらっしゃるのですもの」

　目を剥いてわたしを見るアナスタージウスに向かって更に畳みかける。

「アナスタージウス王子は、礎を守るために行動するわたくし達を反逆罪に問われるとおっしゃいました。つまり、ツェントのお言葉を受け入れるということでしょう？　アーレンスバッハで彼等は自分達に従わぬ者には即死毒を与え、魔石や若い女性貴族をランツェナーヴェに送ろうとしたのですけれど、それがユルゲンシュミット全体で行われるのです」

　ツェントの覚悟の結果によってはエグランティーヌ様も大変な目に遭いますよね？　と微笑むと、アナスタージウスが顔を引きつらせた。

「ローゼマイン、其方は……」

「ローゼマイン、無駄口を叩く前に盾を張れ」

　アナスタージウスとの会話を無駄口だと言い切ると、フェルディナンドは武器を構える騎士達を見回し、一度挙げた手を素早く下ろした。扉が開け放たれて騎士達が飛び込んでいく。わたしは何か言いたそうなアナスタージウスを無視して、即座にシュツェーリアの盾を張って自分の護衛騎士達と入って安全を確保する。

「あ、アナスタージウス王子はツェントのお言葉を受け入れるのでしたら、反逆罪に問われないように御自分の離宮へ戻った方がよろしいですよ。……それとも、エグランティーヌ様を守るために異国の者を排除し、わたくし達とご一緒します？　フェルディナンド様によると、わたくし、新しいツェントを任命できるメスティオノーラの化身なのですって」

[------------------------------------------------]

動いた祭壇

「他人に与えられるグルトリスハイトを手にしているならば、其方が真のツェントではないか！」

　アナスタージウスが声を上げ、彼の護衛騎士達が戸惑ったような声を上げる。ざわりとした雰囲気に、わたしは王族の情報伝達がどうなっているのか問い詰めたい気分になった。

「違います。わたくしはアーレンスバッハの礎を染めてしまった今、アウブ・アーレンスバッハなのです。ユルゲンシュミットの礎を染められないのでツェントにはなれません。わたくしが……」

　アーレンスバッハで何をしたのか報告はなかったのか、と質問しようとしたけれど、アナスタージウスは厳しく光るグレイの目でわたしの言葉を遮った。

「ならば、今すぐ父上にグルトリスハイトを譲り、真のツェントに任命せよ。そうすれば、あのように思い詰めて自分の無力を嘆く投げやりな言葉を口にするはずがない。父上は少しでもツェントの立場に相応しくあろうと日々の業務の間でも回復薬を多用し、できる限り祠で祈りを捧げていたのだぞ」

　……わたしもツェントがフェルディナンド様みたいに回復薬臭くて、必死に国を支えようとしてるって感じたことはあるよ。でも、すでに心を折られてるっぽい人にグルトリスハイトを渡して解決する？　余計に追い詰めることにならない？

　トラオクヴァールが自分の周囲まで含めて死を受け入れているくらいに心が病んでいるならば、余計にグルトリスハイトを渡さない方が良いと思う。フェルディナンドが作ったグルトリスハイトは一代限りだ。ついさっきフェルディナンドが失格の烙印を押した上に、何かの拍子で自ら死を選びそうなトラオクヴァールに、フェルディナンドが作ったグルトリスハイトを渡すなんて約束はできない。

「わたくしはトラオクヴァール王がどのような生活をしていたか存じません。耳にしたのは先程のオルドナンツだけですし……」

「ずいぶんと突き放した冷たい物言いだが、其方は友人であるエグランティーヌのこの先について何も思わぬのか？」

　アナスタージウスに目をすがめながらそう言われて、わたしは「何も思わないわけではないのですけれど、不思議ですね」と首を傾げる。わたしは祠参りを強要された時にエグランティーヌと「わたしが考える」普通の友人関係を築くのは無理だと悟ったのだ。これが彼等の普通の友人関係のはずなのにおかしい。

「交渉相手にとって大事な者を人質にして選択を迫るのが王族のやり方だと、わたくし、アナスタージウス王子とエグランティーヌ様から学んだのですけれど、どこかおかしかったでしょうか？」

　……養父様を追い落としてアウブ・エーレンフェストになるか、ディートリンデ様と結婚するか選択を迫ったのも王族だったから間違ってないと思うんだけどな。

　相変わらず貴族の常識は難しいと思っていると、アナスタージウスが愕然とした顔になった。苦い表情になって一度目を伏せる。

「……そうか。だが、ユルゲンシュミットのことを最優先に考えれば、其方はすぐにでもグルトリスハイトを与えて真のツェントを任じるべきではないか」

「では、個人の都合よりユルゲンシュミットのことを最優先に考えるとおっしゃったはずの王族は、外国から攻め込まれて何をしていらっしゃるのですか？　現状として先頭に立って敵を排除しようとしてくれない方を真のツェントにせよ、とおっしゃられても困ります」

　ユルゲンシュミットを維持するためにはエーレンフェストよりアーレンスバッハを優先するとか、王の養女になってグルトリスハイトを手に入れろとか要求していたのだから、非常時にはそれらしい動きを見せてほしいものだ。

「わかった。父上が動けぬならば、代わりに私が動く」

　武器を構えたアナスタージウスが自分の護衛騎士達を見回した。王族なので先頭に立ってくれるのは助かるし、王族の行動としては間違ってはいない。けれど、トラオクヴァールが動けないならば、代わりに動くのはジギスヴァルトの役目ではないのだろうか。

　……まぁ、誰が動いても解決すればそれでいいよね。

「アナスタージウス王子、口元は必ず布で覆っておいてくださいませ。相手はランツェナーヴェの即死毒を持っている可能性が高いです」

　アナスタージウス達が参戦した後、わたしはオルドナンツが出入りする講堂の扉を見つめる。扉が開いて、騎士が数人飛び出してきた。アーレンスバッハのマントを着ていて怪我をしている。回復のために一旦戦線離脱した者だろう。わたしはすぐに癒しをかけた。

「大変恐縮です、ローゼマイン様」

「中の様子はどうですか？」

「予想以上に講堂にいた中央騎士団の数が多いです」

　講堂から飛び出してきた騎士達が盾の中で回復薬を飲みながら中の状況を教えてくれる。

　高い窓から魔術具を投げ込んだ奇襲はかなり効果があったそうだ。けれど、銀色のマントをつけている者が多く、今は魔力による攻撃は防がれることが多いそうだ。

「我々は念のためにシュタープ以外の武器も持っていますが、アナスタージウス王子達はお持ちではなかったようです。けれど、アナスタージウスの護衛騎士達は倒した相手から武器を取り上げて戦っていらっしゃいます。何より、王族が参戦したことで敵側に迷いの生じているように見える者もいます」

　彼等は「王の敵を倒せ」と言われて、フェルディナンド達を攻撃しているけれど、アナスタージウスには武器を向けないらしい。そのため、こちらがずいぶんと有利になったそうだ。

「トルークを使われている可能性はありませんか？」

「……我々には見ただけではわかりません」

「ただ、ツェントを裏切った騎士団長にアナスタージウス王子が非常にお怒りで、戦いながらも問い詰めていらっしゃいます」

　騎士団長であるラオブルートが何故ツェントを裏切ったのか、いつから何を企んでいたのか問い詰めているらしい。

「魔術具や回復薬の補充が必要なので、フェルディナンド様が応援を呼んでいらっしゃいました。そろそろ到着すると思われます」

　回復した騎士達はシュツェーリアの盾を飛び出していく。わたしが戦いの中に突っ込んでいっても、怖がるだけで大して役に立たない。だから、扉の前で回復所として待機させられている。わたしが中へ入れるのは中の戦闘が終わった時と、即死毒などを使われて大きな魔力を使う洗浄や癒しが必要になった時だと言われているのだ。わかっているけれど、中の状況が気になって仕方がない。

「ここで待っているのもやきもきするのですけれど……」

　わたしが講堂中を満たせるくらいの水を簡単に呼べるように、広域魔術の補助の魔法陣が描かれた魔紙と講堂の扉を見比べながら呟くと、アンゲリカも「お気持ちはよくわかります」と焦れた表情で扉を見つめて頷いた。

「ローゼマイン様、魔術具や回復薬をお持ちいたしました」

「ハルトムート、クラリッサ、ユストクスまで……。離宮を離れても良いのですか？」

「フェルディナンド様からのご命令です。魔術具の管理は文官の仕事ですから」

　クラリッサが得意そうに胸を張ると、ハルトムートもニコリと笑った。回復薬を使った騎士へ渡せるように三人が持ってきた箱の中を確認していると、講堂の中からものすごい爆発音がして心臓が飛び跳ねる。

　……な、何が……？

　ハルトムート製の少々えげつない魔術具は混戦状態では危険なので、奇襲の時にしか使わないはずだ。ならば、何かしたのは敵側ではないだろうか。わたしが胸元を押さえて扉の方を振り返るのと、ユストクスが「姫様、大規模な癒しが必要な場合はお呼びします」と叫びながら扉に飛びつくのは同時だった。わたしはユストクスに頷き、自分の側近達に命じる。

「突入準備を。ハルトムート達がいるならば魔紙を使います」

　焦りと不安で鼓動が早くなるのを感じながら、腰につけられた革袋から魔法陣の描かれた魔紙を取り出す。魔石が目に入らないように、目を閉じて癒しを行うのは効率が悪い。わたしは緑で縁取りがされている魔紙からルングシュメールとフリュートレーネの魔法陣を取り出してシュタープを握る。

　その間にハルトムートとクラリッサはそれぞれ広域魔術の補助魔法陣が描かれた魔紙を手にしてシュタープで魔力を籠め始めた。魔紙に描かれた魔法陣は事前準備をしていれば魔石も詠唱も必要ない優れ物だが、魔紙の生産コストが高く、起動させるにも魔力をかなり使うのだ。

　レオノーレとマティアスが盾を張ってわたしの前に立った。アンゲリカとコルネリウス兄様は武器を構えて警戒の体勢を取り、ラウレンツは扉の前でいつでも開けられるように待機する。

　準備が整うまでにかかったのは、ほんの数秒間。けれど、その数秒間がとても長く感じられた。

「姫様！　癒しを！」

「行きます、クラリッサ！」

「はいっ！」

　ラウレンツが開けた扉の中にアンゲリカとコルネリウス兄様が安全確保のために飛び込む。ほぼ同時に、文官とは思えない機敏な動きでクラリッサが講堂へ突っ込んで行き、補助の魔法陣を起動し始める。

　レオノーレとマティアスとラウレンツの盾に守られながらわたしもクラリッサと同じように講堂へ駆け込んだ。脳内では敏捷に駆け込んだけれど、実際は可能な限りの早歩きだったかもしれない。その辺りについては言及しないでほしい。

　窓の多い廊下より講堂の中の方が暗い。そのせいか、クラリッサが起動させた補助魔法陣が金色に光るのがよく見えた。

「ローゼマイン様！」

　わたしはシュタープで魔紙に描かれたフリュートレーネの魔法陣に魔力を流し込み、クラリッサの起動した魔法陣を目がけてシュタープで打ち出す。わたしが魔力で打ち出した緑に光る魔法陣が金色の補助魔法陣にぶつかった。次の瞬間、緑の光を放つ魔法陣が複数に分裂したように出現し、講堂全体を清めの緑の光で染め上げていく。

「ハルトムート！」

　わたしはルングシュメールの魔法陣にも魔力を注ぎながら、次に補助魔法陣を起動させるハルトムートに声をかけた。

「どうぞ、ローゼマイン様」

　準備が整っていたハルトムートは即座に補助の魔法陣を起動させる。天井近くに浮かび上がった補助魔法陣を目がけ、わたしはルングシュメールの魔法陣を打ち出した。金色の補助の魔法陣に当たったルングシュメールの魔法陣が複数出現して、癒しの光を放つ。

「何だ、これは……？」

　騎士達が戸惑いの声を上げながら複数の魔法陣を見上げて声を上げた。何の爆発音だったのか知らないが、立ち上がる人影がたくさんあることからもひどい状態になったことはよくわかる。そうして講堂を見回したことで、中の状態が普通ではないことに気が付いた。

「……え？　講堂が……？」

　講堂はまるで卒業式の時のように変形していて、奉納舞で使われる舞台が出現し、最奥の間にある祭壇が正面に見えるようになっている。何のためにこのように変えてあるのかわからない。

　緑の光に照らされた講堂を見回し、わたしはフェルディナンド、エックハルト兄様、ハイスヒッツェ、アナスタージウスなどの知っている顔を咄嗟に探した。講堂内の祭壇に近い側から出入り口に向かって魔術具を使われたようで、癒しの光を受けている者はほぼ同心円状に倒れている。アナスタージウスとその護衛騎士達がまとまって倒れているところがあり、エックハルト兄様は右側の壁にもたれかかるように座り込んでいる。エックハルト兄様が庇ったのか、フェルディナンドが即座に立ち上がるのが見えた。

「フェル……」

　わたしが呼びかけようとした瞬間、フェルディナンドが目を見開いたのがわかった。「其方は死ね！」という大音声の怒鳴り声と同時に虹色の光がわたしを目がけて飛んでくる。

「ローゼマイン様っ！」

「ゲッティルト！」

　アンゲリカやコルネリウス兄様、そして、少し遠いところから響いたフェルディナンドの声と共に、いくつもの盾がわたしと護衛騎士達の前に出現した。かなり強力な攻撃だったようで、フェルディナンドが作った盾が二つ消し飛ぶ。

「ラオブルート……」

　祭壇の近くにいた男がこちらを見ていた。手にしている剣には再び魔力が流し込まれているようで虹色に光り始めているのがわかる。暗がりの中に光る剣が浮かび上がっているようだ。魔力を籠めていくラオブルートの目には背筋がぞっとするような明確な殺意があった。

「せっかく最も邪魔な者を始末できたと思ったのに、あのような癒しを行うとは……。其方は邪魔だ。消えろ」

　淡々とした口調で出てくる言葉はわたしの排除を望んだものだ。静かだけれど、逃れようのない殺意に捕らえられ、恐怖で足が震えて動かない。わたしは思わずつばを飲み込んだ。

「グルトリスハイトを手にするのはジェルヴァージオ様だ。あの方以外にグルトリスハイトを手にする者は必要ない。ジェルヴァージオ様の敵である其方等はいらぬ」

　ラオブルートがそう言って剣を構えた瞬間、祭壇が光った。正確には祭壇に置かれている神の像と神具が光り、ゴゴッと音を立てて神の像が動き始める。まるで奉納舞でも舞っているように、ゆっくりと回転しながら壇の上で左右に分かれ始めた。

「え？」

「何だ？」

　癒しの光を受けて立ち上がった騎士達が驚きの声を上げながら祭壇へ注目しているが、わたしはあの動きを知っている。加護を得る儀式を行った時にも動いていたし、エアヴェルミーンからメスティオノーラの書を得た時にも祭壇の上に出た時には真ん中を通れるように神の像が道を空けてくれたように動いた後の状態だった。ならば、この後はモザイク模様の壁にぽっかりと出入り口の穴が開くはずだ。

　……ジェルヴァージオが出てくる。

　同じことを考えたのだろう。フェルディナンドが険しい顔つきになった時、わたしの記憶通り、出入り口の穴が開いた。騎士達が無言で祭壇の上を見ている。

「神々に選ばれた真のツェントだ！　ジェルヴァージオ様がお戻りになる！」

　ラオブルートの声に一部で熱狂的な喝采が上がり、一部が絶望的な表情になった。そのくらいインパクトがあるのだ。神々が出迎えるように動き、祭壇の最上部から登場するというのは。

　……神に選ばれたと言われれば、納得の光景だよね。

　神々しくも見える登場を少しでも落としておこうと、わたしは口を開いた。

「今出現したのは始まりの庭へ繋がる出入り口です。わたくしもメスティオノーラの英知を授かり、あそこから出てきました。始まりの庭はシュタープを得る時や御加護を得た時などに行くところですけれど、祭壇が動くのはそれほど珍しいことではありませんよ」

「ローゼマイン様！？」

「わたくしだけではなく、エグランティーヌ様もシュタープを取得する時は始まりの庭で得たそうですし……」

　全属性を持っているならば普通だ、と言うと、熱狂的だった周囲の騎士達の反応に動揺が見られるようになった。熱狂さは減少したけれど、ジェルヴァージオを神々に選ばれたツェントして迎えたいらしいラオブルートの怒りは買ったようだ。

「ジェルヴァージオ様のお戻り前に其方を処分する！」

　怒りに震えるラオブルートが剣を振りかぶった。

[------------------------------------------------]

始まりの庭から戻った者

「ゲッティルト！」

　ラオブルートに武器を向けられた瞬間、わたしの前に再び複数の盾が現れた。回復薬を飲んでいるエックハルトやユストクスの側から離れないまま、フェルディナンドが複数の盾を展開したのだ。同じように先程の攻撃を警戒して、ハルトムートやクラリッサを含めた側近達も盾を出して構える。

　わたしの前に盾が増えたのを確認した直後、武器を握って魔力をどんどんと注ぎ込みながら祭壇を守る位置にいるラオブルートが叫んだ。

「真のツェントの敵を排除せよ！ エーレンフェストの聖女は捕らえよ！　ユルゲンシュミットのために中央神殿の聖女になってもらうのだ！」

　彼の周囲にいた中央騎士団がざっと三つに分かれて動きだした。左の一部は、わたしが行った癒しの範囲から外れているために倒れたまま動けなくなっているアナスタージウス達と、彼等に回復薬を与えたり守ったりしているハイスヒッツェ達のところへ駆け出した。

　真ん中の一部はラオブルートの動きを注視しつつ、武器を構える。右の一部は即座にシュタープの弓を構えて射始めた。

「え！？」

　矢が向けられたのは、わたしではなくフェルディナンドとその周辺に対してだ。複数の矢が次々と射かけられる。フェルディナンドの盾がすでにわたしの前に出されていることに気付いてヒュッと息を呑んだ瞬間、ユストクスと立ち上がったエックハルト、それから、彼等の周囲にいるアーレンスバッハの騎士達が急いで盾を出して矢を防いだ。

「ローゼマイン様も盾を！」

　レオノーレが鋭い声を上げる。フェルディナンド達が何とか自分達の身を守ることができていることに安堵している場合ではなかった。ラオブルートが剣を振り下ろすのが視界の端に見える。虹色の魔力の塊がどんどんと大きくなっているような勢いで自分を目がけて飛んでくる。

「ゲッティルト！」

　お祈りの言葉を唱えてシュツェーリアの盾を張る余裕はなかった。虹色の大きな光がいくつもある盾を破壊しながらぶつかってくる。フェルディナンドの盾が弾けるように消え、何とか耐えきったものの、最前列で盾を張っていたコルネリウス兄様とラウレンツが「ぐっ」と苦しそうな声を上げた。

「アンゲリカ、マティアス！　前後を交代！　ローゼマイン様はすぐに風の盾を！」

　レオノーレが早口で指示を出す。ダンケルフェルガーとのディッターの時にも初手の攻撃をゲッティルトで防ぎつつ、シュツェーリアの盾を出した。少しでも安全な場所を作ることは重要だ。わたしは祈りを捧げる。

「守りを司る風の女神　シュツェーリアよ　側に仕え……」

　護衛騎士達が前後を交代し、コルネリウス兄様とマティアスが回復薬に手を伸ばす。けれど、それより先にラオブルートの周囲で武器を構えて待機していた騎士達が次々に虹色の光の塊を打ち出してきた。大小さまざまな虹色の魔力の塊が不規則に次々と襲いかかってくる。二人は回復薬に手を伸ばすより先に盾を張った。

　それほど籠っていない物もあれば、かなり魔力が籠っている物もある。フェルディナンドの盾が破壊された今、その波状攻撃はかなり厳しい。ゲッティルトの盾に魔力を吸われるのを感じながら、わたしは祈り続ける。

「……害意持つものを近付けぬ　風の盾を　我が手に」

　キンと辺りに響くような硬質的な音がして、半球状のシュツェーリアの盾が完成した。黄色の貴色の光る柱が立ち、中央騎士団の者達が驚いたように注目する。あまり神事を見慣れていない騎士が多いのかもしれない。

　ひとまずこれで魔力攻撃は何とかかわせるはずだ。虹色の光の連続攻撃に晒されていた護衛騎士達が少し体の力を抜く。

「警戒を怠らず、すぐに回復薬を。相手は中央騎士団です」

　レオノーレが祭壇前のラオブルート達を藍色の目で睨みながら指示を出した。いくら政変で貴族の数が減り、質が落ちたとはいえ、中央騎士団は各領地の中から引き抜かれた優秀な騎士達から構成されている。

　エーレンフェストの若手では飛び抜けて強いわたしの護衛騎士達も、経験豊富なおじい様やお父様にはまだ勝てないのだ。経験を重ねている中央騎士団はかなり強敵といえるだろう。

「こちらに合流してほしいところですが、フェルディナンド様達にも余裕はそれほどないようですね」

　フェルディナンド達は矢ばかりではなく、魔術具も次々と投げ込まれてこちらとの合流を妨害されている。魔術具が頭上で炸裂し、魔力の通じない銀の針が飛び出す魔術具に苦戦しているのが見えた。おそらくランツェナーヴェから渡った物だろう。

「ローゼマイン様。盾の維持が最優先ですが、可能であればアナスタージウス王子達の回復をお祈りできませんか？　彼等が動けるようになると、戦力が大きく変わります」

　アナスタージウスには攻撃できない騎士達がいると言っていたし、彼の護衛騎士は中央騎士団だ。かなり重要な戦力であることが嫌でもわかった。アナスタージウス達が動けるようになれば、中央騎士団の相手をしつつ、彼等の回復を試みているハイスヒッツェ達も動けるようになる。

　……それができれば一番なのはわかるけど……。

　シュツェーリアの盾に次々と虹色の光が当たるのを感じながら、わたしはレオノーレにコクリと頷いた。

「……やってみます。けれど、それぞれが盾を構えていてくださいませ。中央騎士団の攻撃は魔力が強い上に、攻撃を一点に力を集中させる技術があるというか、これまで受けてきた攻撃とはまた違う強い感触と衝撃があるのです」

　護衛騎士達が盾を構えるのを確認すると、わたしは目を閉じた状態でフリュートレーネの杖を出した。予め指定した対象以外は範囲に含まれない魔紙の魔法陣より、詠唱の方が融通は利く。詠唱を長々と唱えられる余裕が必要になるけれど。

「水の女神　フリュートレーネの眷属たる癒しの女神　ルングシュメールよ」

　フリュートレーネの杖に魔力が流れていくのがわかる。アナスタージウス達だけではなく、フェルディナンド達にも癒しが必要だろう。

「我の祈りを聞き届け　聖なる力を与え給え　わたくしの味方を　癒す力を我が手に……」

「アンゲリカ、マティアス！」

　祈りの途中にコルネリウス兄様の鋭い声が閉ざされた視界の中で響く。同時に、「ローゼマイン様、集中してくださいませ」というレオノーレが叫んだ。何が起こっているのかわからなくて喉がひくっとなり、声が途切れそうになる。体が震えて、心臓の鼓動が激しくなるのを感じながらわたしは祈りを続ける。

「御身に捧ぐは聖なる調べ　至上の波紋を投げかけて　清らかなる御加護を賜わらん」

　唱え終わるとすぐに杖を消して目を開ける。シュツェーリアの盾の前にいる騎士によってコルネリウス兄様が吹っ飛ばされてきた。

「な、何事ですか！？」

「中央騎士団が攻撃しつつ、距離を縮めていたようで、ローゼマイン様の詠唱が始まると同時に銀色のマントでシュツェーリアの盾に侵入しようとしてきたのです。マティアスとアンゲリカとコルネリウスの三人が対応しています」

　レオノーレが答えてくれる。シュツェーリアの盾を張っているわたしには敵に侵入される感覚など全くなかったのに、中央騎士団が銀色の武器が入り、マントに包まれた部分が入ってきたらしい。完全に入られる前に叩き出さなければ、レスティラウトに侵入されてユーディットが弾き出された時のように、わたしの護衛騎士の方が弾き出される危険性がある。

「退いてくださいませ！　メスティオノーラの化身たるローゼマイン様に無礼を働くことはわたくしが許しません！」

　クラリッサがそう言いながら助走をつけて軽く跳躍しながら、盾の前にいる騎士達に魔術具を投げつけた。近距離でバンと魔術具が炸裂した直後、赤い粉末が飛び散って騎士達が顔を押さえて咳き込み、のたうち回る。ネガローシの詰まった魔術具だろうか。

「クラリッサ、次はこれとこれを間断なく！」

「任せてくださいませ！」

　のたうち回る騎士達の姿を見ながら得意そうに笑うクラリッサに、ハルトムートが投げる魔術具を次々と手渡している。わたしは祭壇のある方を見た。騎士達に指示を出すけれど、ラオブルートはジェルヴァージオが出てくる祭壇を守るようにその前から動かない。

　……ユーディットの投擲なら届くのに。

　ラオブルートとの距離を見ながらわたしは悔しさに歯噛みする。ユーディットが未成年で連れ出せなかったのが残念でならない。

「銀色の武器にはハルトムートの魔術具の方が効果はあるようですね。マティアスとアンゲリカは一端下がって。わたくしとラウレンツが前に出ます」

　レオノーレとラウレンツが前に出て、アンゲリカとマティアスが後ろに下がってきた。二人はわたしの近くでハルトムートから受け取った回復薬を飲み始める。

「正直なところ、ローゼマイン様からいただいた神々の祝福があるので、経験の差はあれどもここまで苦戦すると思いませんでした。まるでボニファティウス様が何人もいるようです」

　ラウレンツと交代したマティアスが回復薬を飲みながら悔しそうに中央騎士団を睨む。神々の祝福を受けてもこれだけの差があるとは、と絶望感の濃いマティアスの横顔を見ながら、わたしはゆっくりと首を振った。

「マティアス、神々から複数の祝福を得られるのはわたくし達だけではありません。騎士達が自力で祝福を得る方法を発表したのはエーレンフェストとダンケルフェルガーではありませんか。もしかしたら、すでに中央騎士団でも取り入れられているかもしれませんよ」

　ダンケルフェルガーが披露した奉納舞を取り入れて、エーレンフェストの騎士団が冬の主を倒す時に利用できるように練習していたのだ。領地対抗戦は王族もその側近達も参加するのだから、研究成果として発表された奉納舞を中央騎士団が使っていても何の不思議もない。

「海の女神の儀式を使いましょうか」

　一度全員の祝福を神々に返し、その後で再び味方に祝福を与えれば少しは優位になるだろう。中央騎士団に奉納舞を再び舞う余裕を与えなければ良いのだから、やってみる価値はありそうだ。

「ローゼマイン様、ただいま加勢します！」

　わたしがシュタープを出した瞬間、ハイスヒッツェ達が声を上げた。どうやらアナスタージウス達が回復して戦線復帰したようだ。これで少しは余裕が出るだろう。心強い声に安堵したのは、一瞬のこと。

「合流される前に潰せ！　あそこが一番弱い！」

　ラオブルートはわたし達に攻撃を集中させるように命じながら、ハイスヒッツェ達に向けて虹色の光を打ち出して合流を妨害し始めた。

　……少しでもラオブルート達の攻撃力を減らすことができれば……。

　わたしはハイスヒッツェ達が無事に合流してくれることを願いながら、シュタープを出して海の女神の印を描き、目を閉じて「シュトレイトコルベン」と唱えて杖を変化させる。

「海の女神　フェアフューレメーアよ」

　祝詞を唱えながら杖を振り回す。そこかしこで聞こえている戦いの喧騒の中にざざん、ざざんと潮騒の音が聞こえ始めた。

「何をする！？　止めろ！」

「体が突然重くなったぞ！」

「せめて味方には事前にお知らせくださいませ！」

　皆が祝福を受けて戦っていたのだ。突然、祝福を奪い取られるため、動きがおかしくなった者が何人も出ているようだ。焦った声が聞こえるけれど、わたしはそのまま儀式を続ける。

「我等に祝福をくださった神々へ　感謝の祈りと共に　魔力を奉納いたします」

　祝詞を唱え、高く空に向かってフェアフューレメーアの杖を掲げる。ドンと光の柱が立った音がした。

　……これでよし。後は、味方に祝福の重ね掛けをすれば……。

　わたしは杖の変形を解いて、目を開けた。戦いの熱と神々からの祝福を強制的に奪われて静まった講堂の様子にふっと息を吐く。

　その途端、妙な圧力を感じた。

　言葉で表現するのは難しいけれど、何かがいると感じる。しきりに辺りを見回り始めたわたしに、レオノーレが「どうかされましたか、ローゼマイン様？」と尋ねた。

「……何だか変な感じがします。妙な圧力というか気配があの辺りから……」

　わたしはそう言いながら、祭壇の最上部を指差した。最高神に迎えられるような位置にゆっくりと足を進めていたらしい一人の男が立ち止まる。ここから出てくるのはジェルヴァージオだけだろう。遠目ではよく見えなくて、わたしは視力を強化した。

　……銀髪の老けたフェルディナンド様！？ どっちかというとエアヴェルミーン様の方が似てる？

　ジェルヴァージオは銀色の長髪を背中で一つにまとめた四十代の半ばくらいで、「老けたフェルディナンド」としか表現しようのない男だった。わざわざ確認を取らなくても血縁関係を察せるくらいに似ている。フェルディナンドの年の離れた兄、もしくは、父親ではないかと思うくらいだ。

　ジェルヴァージオが祭壇の最上部からこちらを見下ろし、口を開いた。

「これは一体何事だ、ラオブルート？」

　まるで講堂の戦いが収まるのを待っていたかのようなタイミングでシンと静まった講堂の中に重々しい声が降ってきた。海の女神の儀式が終わった直後だったせいもあるあろう。命じることに慣れた者の声だったせいもあるだろう。講堂にいた者は一斉にその声の主に注目した。

「……おぉ、ジェルヴァージオ様！　どうか真のツェントの証を、神々より賜ったグルトリスハイトを我等にお見せくださいませ！」

　芝居がかった声でそう言いながらラオブルートが祭壇に向かって手を挙げる。

　ジェルヴァージオは手を前に出し、「グルトリスハイト」と唱えた。その手にメスティオノーラの神具と同じ形の聖典が現れる。最高神の神像に挟まれたところで、グルトリスハイトを掲げる男はどこからどう見てもツェントだった。

「神々に選ばれし真のツェントだ。ユルゲンシュミットは救われた！」

　感極まったようなラオブルートの声が響き、一部の中央騎士団から熱狂的な声が上がった。アナスタージウスとその護衛騎士達は真っ青になっている。けれど、講堂に広がるざわめきで最も多いのは、ジェルヴァージオとフェルディナンドを見比べる者達の声だった。

「……ローゼマイン様、彼がジェルヴァージオですか？」

「あそこから出てきたのですから、そうだと思います」

「フェルディナンド様と血縁関係にある方、ですよね？」

「よく似ていますから比較的近い繋がりがあるかもしれません。……でも、フェルディナンド様はエーレンフェストの領主一族ですよ、レオノーレ」

　わたしはアダルジーザの離宮のことも、フェルディナンドの出生も知らないことになっている。わたしはニコリと笑って誤魔化した。

[------------------------------------------------]

祭壇の最上部

「それに、あそこから出てきた者がどのような顔をしていても、わたくしがこれから行うことに何の変わりもありません」

　レオノーレに答えながら、わたしは祭壇の上にいるジェルヴァージオをじっと見つめる。このままジェルヴァージオがツェントになってしまうと、ランツェナーヴェと繋がるアーレンスバッハの礎を奪ったわたしはもちろんのこと、計画の段階で殺害が予定されていたフェルディナンド、おそらく懇意にしていたと考えられるゲオルギーネを倒したエーレンフェストの立場はひどいものになるはずだ。

　……話し合いの余地はないと考えた方がいいだろうね。

　即死毒を使って自分達に邪魔な者を排除してきたランツェナーヴェの者が、優しくて甘い対応をしてくれるとは思えない。アーレンスバッハの礎はジェルヴァージオの手の者が全力で奪いに来るだろう。ランツェナーヴェの兵士達を蹴散らし、船を破壊し、アーレンスバッハの貴族を救ったわたしを放置するはずがない。

　少なくともわたしだったら、自分と共にやってきた仲間達を倒し、故郷へ戻るために必要な船を破壊され、拠点にしている離宮を襲われて仲間が全員捕らえられたという状況になった時に、「そちらも事情があるから、いくら故郷の者を殺されたり捕らえられたりしても仕方ない」とは絶対に言わない。

「確かに敵の姿形は関係ありませんね。ですが、どのようにしてあの男を捕らえましょう？　ラオブルートが祭壇の前にいる以上、ラオブルート達中央騎士団を倒すか、最上部まで届く攻撃が必要になります。もう少し人数が増えるか、離れた者達と意志疎通ができれば……」

　視線をあちらこちらへ向けながらレオノーレが中央騎士団の動きを見つめる。その時、わたしの手元にコツンと何かが当たった。視線を下げると、五センチくらいの小さな紙飛行機がわたしの手にくっついているのが見えた。不自然な光景を見れば紙飛行機が魔紙でできた物で、わたし向けの連絡だとわかる。

　周囲の様子を窺いながら紙飛行機を広げた。そこには「グルトリスハイトと祝福の重ね掛けで注目を集めてくれ。周囲の妨害はフェアドレンナで。こちらは準備済み」とフェルディナンドの字で走り書きがされている。

　……つまり、わたしが注目を集めている間に何かやるつもりってことだよね？

　わたしは手紙を自分の護衛騎士達にも見えるように少し動かした。レオノーレがフェルディナンド達のいる場所をちらりと見て、ハルトムートとクラリッサが魔紙の入っている革袋に手を伸ばす。

「グルトリスハイト！」

　わたしはフェルディナンドの指示通りに右手を挙げてメスティオノーラの書を出した。

「なっ！？　グルトリスハイトだと！？」

「よく見ろ！　違う！　本物のグルトリスハイトはあのような大きさではない！　ジェルヴァージオ様がお持ちの物こそ本物だ！」

「何を言うか！？　ローゼマイン様のグルトリスハイトは本物だ！　国境門の開閉ができたのだからな！」

　驚きの声を上げる中央騎士団の者達やわたしの聖典が本物であることを主張するダンケルフェルガーの騎士達には構わず、わたしは先程自分が奪った祝福の重ね掛けをしていく。

　武勇の神　アングリーフ、狩猟の神　シュラーゲツィール、疾風の女神　シュタイフェリーゼ、忍耐の女神　ドゥルトゼッツェン、幸運の女神　グライフェシャーン……。次々に神々の名を挙げて祈れば、その度に貴色の柱が立ち、わたしの味方に祝福の光が降り注いでいく。

「神々より数多の祝福を受けるローゼマイン様は、次期ツェントにグルトリスハイトを与えるメスティオノーラの化身です。ユルゲンシュミットの者からツェントを選び、グルトリスハイトを授けることが、ローゼマイン様の使命。ランツェナーヴェの侵略者をわざわざツェントに戴く必要などありません」

　……ハルトムートッ！

　お祈りを途中で止めるわけにもいかず、得意そうに胸を張ったハルトムートの口を押さえることができなかったせいで、講堂中の注目を集めるのには成功した。ラオブルートの殺意に満ちた視線もしっかり集めている。

「中央神殿に籠めるだけではなく、やはり確実に息の根を止めておかねばならぬか」

「ローゼマインの側近が言う通り、侵略者をツェントに選ぶ必要などない！　ツェントの騎士団長でありながら国を守らず、父上を裏切り、外患を引き入れた其方だけは決して許さぬ！」

　完全に回復したらしいアナスタージウスとその側近にも祝福の重ね掛けはかかっている。近くにいた中央騎士団を比較的簡単に蹴散らしながらラオブルートのいる祭壇へ向かって動き始めた。

「なるほど。ここでは神々に祈りが届くのであったな……」

　祭壇の上からそんな声が降ってきた。光の柱が乱立する講堂内を感心したように見下ろしながら、ジェルヴァージオがわたしを真似るように自分の聖典を掲げ、低く響く朗々とした声で祝詞を唱え始めた。

「火の神　ライデンシャフトが眷属たる武勇の神　アングリーフよ」

　ジェルヴァージオの祈りと共に掲げられた聖典が青い光をまとい始める。

　まさかジェルヴァージオがこんなふうに容易く祝詞を唱えられるとは思わなかった。わたしは巫女見習いになった時、祝詞を覚えることに苦労した。いくつもある祝詞や馬鹿みたいに長くて多い神々の名前を覚えなければならないことに嫌気が差して、神々に愛称を付けたいと考えていたくらいだ。

「我の祈りを聞き届け　聖なる力を与え給え　全ての敵を打ち倒す武力を我等に」

　ドンと青い光の柱が立った。ジェルヴァージオを称える歓喜の声が上がり、優勢だったアナスタージウス王子達の動きが止められる。

「ふむ。私も神々の祝福を授けることができるようだな」

　ジェルヴァージオは青く光る柱を見上げて笑うと、「風の女神　シュツェーリアが眷属たる疾風の女神　シュタイフェリーゼよ」と、わたしと同じように祝福の重ね掛けを始める。このままではせっかく敵側の祝福を奪ったのに、意味がなくなってしまう。

　……祝福の重ね掛けでこっちに向けた視線がまたジェルヴァージオに向かっちゃったよ。フェルディナンド様は何をしてるの！？

　わたしに注目を集めているうちに何かするのではなかったのだろうか。わたしは思わずフェルディナンド達がいる方へ視線を向ける。ジェルヴァージオの祝福を受けた中央騎士団と戦っているエックハルト兄様が見えたけれど、フェルディナンドの姿は見えない。

「我の祈りを聞き届……ぐっ！？」

　突然祈りの言葉が途切れた。どこからか魔力による攻撃を受けたようで、ジェルヴァージオが身につけていたらしいお守りがいくつか弾け飛んだ。

「どこだ！？」

　祭壇前を守りながらアナスタージウス王子達の動きを注視していたラオブルートが驚愕の声を上げて振り返り、お守りの反撃が向かう先を捕らえようと武器を出す。

「ゲッティルト」

　フェルディナンドの声がして、祭壇の最上部に近い場所で盾が浮かび上がった。ジェルヴァージオのお守りによる反撃は即座に防がれ、フェルディナンドが姿を現す。どこからどのように上がったのかわからないけれど、隠蔽の神　フェアベルッケンのお守りを有効活用したことと、その威力を最大限に発揮するために「皆の注目を集めろ」と言われたことだけはわかった。

「其方、いつの間にそこにっ！？」

　ラオブルートが声を上げたが、まるで聞こえていないようにフェルディナンドは視線をジェルヴァージオから動かさない。騎士達が片手に盾、もう片手に武器を構える時と同じように、盾と黒い水鉄砲を構えていて次々と攻撃を繰り出していく。

「ジェルヴァージオ様！」

　祭壇に向かって駆けだしたラオブルートを見て、クラリッサが「邪魔はさせません！」と広域魔術の補助を起動させる。妨害する時はフェアドレンナとすでに指示が出ているので、わたしはハルトムートが広げた魔紙を目がけて即座にシュタープを振った。

「フェアドレンナの雷！」

　天井付近に広がった複数の魔法陣から雷が祭壇付近にいる中央騎士団に降り注ぐ。ほぼ同時に、フェルディナンドが仕込んでいたらしい魔法陣も起動したようで、エックハルト兄様やアーレンスバッハの騎士達と戦っている中央騎士団にも雷が落ち始めた。

　多数の悲鳴が上がり、彼等が身につけていたらしいお守りの反撃が魔法陣に向かって飛んでいく中、「マントだ！　銀色のマントで防げ！」とラオブルートの声が響く。魔力を防ぐ銀色の布をかざせばある程度は防げると声を出しながら、ラオブルート自身もマントを自分の頭上にかざして祭壇を駆け上っていこうとした。

「うわっ！」

　ラオブルートが何かに弾かれた。誰かの攻撃が届いたのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。ラオブルートが手を伸ばし、「……何だ、これは？　目には見えぬ壁がある」と苛立たしそうな声を上げた。

　上に上がる資格はないとばかりの弾かれ方にラオブルートは激怒しているようだが、わたしは少し安堵した。祭壇の最上部で戦う限り、余計な救援は入らないのだ。騎士でもないジェルヴァージオと一対一で戦ってフェルディナンドが負けるとは思えない。

「其方がクインタか……」

　ジェルヴァージオの言葉にも眉一つ動かさず、フェルディナンドは顔を狙って水鉄砲を打った。「余計な口を利くな」という心情が一目でわかるような攻撃だ。ジェルヴァージオは咄嗟に腕を顔の前に動かして直撃を防ぐ。お守りが弾けて、フェルディナンドの盾に反撃が飛んだ。

　わたしが持つと完全に玩具のようにしか見えない水鉄砲も、フェルディナンドが持つと本当に拳銃のように見えるから不思議だ。次々と細い魔力の線がジェルヴァージオに向かって飛び、その度にジェルヴァージオのお守りが弾けていく。反撃が来ても問題のない強さの攻撃でジェルヴァージオのお守りをどんどんと剥ぎ取っているのがすぐにわかった。

「リューケン。……ゲッティルト」

　フェルディナンドの攻撃にお守りを破壊されながら、ジェルヴァージオは掲げていた聖典を消して、代わりに盾を出した。

「……レオンツィオやラオブルートの報告通り、驚くほど似ているな」

　ジェルヴァージオの言葉にフェルディナンドは無言で魔術具を投げる。構えられていた盾を越え、ジェルヴァージオの背後で爆発した。護衛騎士達がいない状態で普通の四角い盾では自力で守れる範囲も限られてくる。

　だが、ジェルヴァージオは魔力攻撃以外のお守りも持っていたようで、反撃がフェルディナンドに向かって飛んだ。フェルディナンドは予測していたのか、盾で難なく反撃を防ぐ。

「クインタ、其方は自分の生まれに思うところはないのか？　何故このような生き方を押し付けられなければならないのか、と怒りを覚えたことはないのか？　ランツェナーヴェの在り方に、生まれる前から過酷な生き方を強要されることについて何も思わぬか？」

　全く何も思わないわけがないと思う。けれど、静かに問いかけるジェルヴァージオに対し、フェルディナンドは内面を全く見せない無表情のまま無言で再び魔術具を投げた。それはジェルヴァージオの盾によって防がれる。

「あの離宮で男として生まれた時から魔力によって選別され、魔石と化す生き方から必死に逃れなければならず、傍系王族として登録されようとも成人と共に異国の地へ送られる。その先で求められることは魔力の多い子をなし、白の建物を維持することだけだ。……やっと巡ってきた絶好の機会だ。私がユルゲンシュミットのツェントになれば、このような生き方を終わらせることができる。二度と不幸な子供が生まれることはない。そして、ユルゲンシュミットもグルトリスハイトさえ持たぬ王族に振り回されて魔力が枯渇することもないのだ」

　ランツェナーヴェとユルゲンシュミットにとって、自分がツェントになるのが有益であると説くジェルヴァージオをフェルディナンドは鼻で笑った。

「何を勘違いしているのか知らぬが、私はクインタではない。エーレンフェストの領主一族、フェルディナンドだ」

「離宮から離れたのが幼すぎて覚えていないかもしれぬが、離宮から逃れた其方の代わりに其方の母親が魔石となり、其方の母親の穴を埋めるために王女として生きるはずだった娘が……」

「先程も言ったが、私はクインタではなくフェルディナンドだ」

　フェルディナンドはフッと笑ってジェルヴァージオの言葉を遮る。それはとても不機嫌極まりない時に浮かべる社交的な微笑みで、内心の怒りや激しい感情が押し隠されているのがわたしにはわかった。

「もちろんランツェナーヴェにはランツェナーヴェの事情があるのであろう。だが、魔石を受け取り、ランツェナーヴェのために活用して生きてきた其方が何を言うのか。其方はランツェナーヴェからの侵略者。新たなツェントにグルトリスハイトを授けることができるメスティオノーラの化身を得た今、ユルゲンシュミットにおける其方の存在は混乱を招くだけで不要だ」

　キラキラとした笑顔と逆に、フェルディナンドの言葉は辛辣で容赦ない。

「私がランツェナーヴェに対して思うことなど、一つしかない。トルキューンハイトを恨みながらさっさと滅べ。そうすれば、二度と不幸な子供も生まれまい。」

「……そうか。もうよい。あの離宮から逃れた者にはどうやら我等の苦痛は理解できぬようだ。クインタ、魔石として生まれた者は疾く魔石となれ」

　ジェルヴァージオが盾を捨て、銀色の筒をフェルディナンドに向けた。レティーツィアが言っていた銀色の筒に違いない。筒を見た瞬間、考えるよりも先に手が動く。

「ヴァッシェン！」

　わたしはシュタープを掲げて、即死毒を使われた時のために準備していた魔紙を全力で打ち抜いていた。

[------------------------------------------------]

祭壇上の戦い

　……ランツェナーヴェから持ち込まれた危険物なんて全部洗い流しちゃえ！

　銀色の筒の中身が即死毒でなかったとしても全て洗い流してしまえば問題ないはずだ。わたしがそう考えながら広域魔術の補助魔法陣に「ヴァッシェン」を唱えて魔力を叩きつけたので、当然のことながら大量の水が天井付近から一斉に滝のような勢いで降り注ぎ始める。

「何だ、この水は！？」

　中央騎士団の驚愕の声の中に、「うわっ！？　渦巻いている！？　何故！？」というわたしの護衛騎士達の声が混ざった。講堂中を洗い流すような水量を想定して作成されていた補助魔法陣なので、当たり前だが魔力によって呼ばれた水は講堂を満たしていく。そこまではわたしの予定通りだった。講堂が水で満たされてから消えるまでの間、鼻でもつまんで待っていればよいと思っていた。

　しかし、全部洗い流すというところでわたしが洗濯機を想像してしまったせいだろうか、講堂内にいる者は敵味方関係なく全てを巻き込んで水が高速で渦巻き始めた。「どういうことだ、ローゼ……がぼがぼっ！」とアナスタージウスの叫ぶ声が水に呑み込まれて消える頃には、わたしも立っていることができずに体が浮いた状態で上下左右の感覚もないまま水の流れに押し流されていた。

　……ひぎゃあああぁぁぁっ！　失敗した！　誰か助けてぇ！

　完全に溺れる前に鼻をつまめた自分を褒めてあげたい。術者であるわたしも護衛騎士達もラオブルートもアナスタージウスも渦巻の中で洗濯物のようにグルグル回っている。完全に想定外だ。

　……目が回るっ！　息が！　息が！　うひぃっ！

　声にならない声で叫んでいたら、不意にポイッと空中に放り出された。自分を取り巻いていた水がなくなり、開いていた口から空気が入ってくる。呼吸が楽になって視界が急にクリアになった。水から飛び出したところなのに、もう濡れているところはなく、自分の髪がさらりと揺れているのが目に映った。

　……え？　天井？

　自分の髪と一緒に視界に映っていたのは天井だ。手を伸ばせば触れられそうなくらい近くに天井がある。水流によって自分がずいぶんと高い位置まで上げられていたことを知った瞬間、わたしの体は重力に捕らわれた。問答無用で天井との距離が開き始め、一気に血の気が引いていく。

　……落ちるっ！

「わ、わわっ！」

　重力に捕らわれて落下しているというのに、周囲の動きがやたらゆっくりとしているように感じる。わたしは何かをつかもうと必死に腕を伸ばすが、何も手に触れる物はない。

　そんな中、下の方から「ぐわっ」という誰かの苦痛を帯びた声と「ローゼマイン！」と焦りを帯びたフェルディナンドの声が聞こえ、わたしの手首にあったお守りが二つ反応した。誰かに攻撃されたのかと考えるより先にお守りから反撃の光が飛んでいき、シュルリと光の帯が自分に巻きつく。これも攻撃？　と思った時にはグンと力強く引っ張られて、重力とはまた違った力に翻弄されて落ちる角度が変わった。

「きゃああああぁぁぁっ！」

　悲鳴を上げているうちに、わたしは祭壇の上にいるフェルディナンドの腕の中に飛び込んでいたらしい。「うるさいので黙りなさい」と言われ、無事を問われるより先に「この馬鹿者、一体何をしているのだ？」と叱られ始めたので間違いない。

「え、えーと、フェルディナンド様に銀入りの筒が向けられたのでヴァッシェンをしたら、自分でも想定外の水流に巻き込まれ、放り出されて落下していたわけですけれど、改めて尋ねられると答えるのが難しいですね」

「それだけ答えられれば十分だが、君は私が同じ手を二度も食らうと思っていたのか？」

　顔を押さえて呻いているジェルヴァージオをくいっと顎で示しながらフェルディナンドが不機嫌そうに顔を歪めた。別に信用していないわけではない。心配でついついヴァッシェンしてしまっただけだ。そんなに不機嫌な顔をしないでほしいものである。助かった安心感と、お説教に対する緊張感で心臓が忙しい。

「そ、それにしても、何故わたくしだけこちらに飛ばされたのでしょう？　まだ皆は回っているのに……」

　怒りとお説教を避けるために視線を逸らした先には巨大洗濯機と化した講堂でグルグルと回っている人達の姿がある。どうやらわたしのヴァッシェンは祭壇に届いていなかったらしい。ラオブルートが阻まれた透明の壁があり、その向こうだけで水が暴れている。

　……わたしの渾身のヴァッシェン、意味がなかったよ。

　ヴァッシェンに意味がなく、フェルディナンドは自力で容易に危機を脱していた。わたしは自分の術に巻き込まれて祭壇の上に落下して、フェルディナンドのお説教である。しょんぼりへにょんだ。

「君がここに上がれる有資格者だから、回っている最中にあの壁に弾かれなかっただけであろう。私はむしろヴァッシェンが未だに消えていない方が気になる。君は何を落とすべき汚れと考えたのだ？」

　光の帯を消してわたしを降ろし、シュタープを再び水鉄砲に変形させながらフェルディナンドが数秒間で消えていないヴァッシェンの渦をちらりと見た。

「ランツェナーヴェから持ち込まれた危険物です。銀色の筒の中身が即死毒じゃなかったら危ないな、と……」

「なるほど。トルークが危険物に入っていれば洗い流すのに時間がかかるかもしれぬ」

　フェルディナンドが回復薬を手にしたジェルヴァージオに向かって水鉄砲を撃ちながら現状について思案する間に、講堂で渦巻いていた水が一瞬で消え去った。わたしと同じように水に流されて浮かんでいた騎士達がガシャドシャと音を響かせながら落下し始める。

「危ないっ！」

「騎士は鎧をまとっているのだ。落ちたところで死にはせぬ」

「わたくしの側近には文官もいるのですけれど！」

「身を乗り出すな。今度は祭壇から転がり落ちるぞ」

　フェルディナンドから冷静に指摘されたわたしは足元を確認すると、急いでハルトムートとクラリッサの姿を探した。ディッターなどでわたしが広域魔術のヴァッシェンを使うことを知っている者達は比較的冷静に行動できているようで、さっさと騎獣を出しているコルネリウス兄様とレオノーレが見える。アンゲリカが空中に広がる騎獣の羽を足場にして、身軽に飛び降りていた。

「メスティオノーラの化身たるローゼマイン様には祭壇の上が非常にお似合いですね」

「なんと神々しい！　最高神の……」

　……あ、全く問題なしでハルトムート達は元気そう。

　それほど高い位置に上がっていなかったのか、ハルトムート達はわたし達のいる祭壇を指差しながら何やら騒いでいる。詳細は聞きたくないので、聞き流した方が良さそうだ。

　……無事で何よりだけど、もうちょっと静かに。

　わたしがエーレンフェストの色のマントを探しながらホッと胸を撫で下ろした時、「何をするのか、事前に報告くらいはせぬか！」とアナスタージウスが怒鳴ったのが聞こえた。変な方向から聞こえたので視線を巡らせれば、観客席に打ち上げられているアナスタージウスらしき人影が見える。どうやらヴァッシェンに巻き込まれても無事だったようだ。

　……ラオブルートはどこ？

　祭壇を守るように陣取っていたラオブルートの姿は、もう同じ場所にない。どこへ流されてしまったのか、黒いマントが多くてわかりにくいと思いながら視力を強化したまま講堂内を見回していると、講堂の扉が乱暴に大きく開かれた。

　……今度は何！？

　思わず扉を注視すると、大量の青色マントがどわっと雪崩れ込むように入ってきた。見間違えようがない。ダンケルフェルガーの騎士達だ。

「ローゼマイン様とフェルディナンド様に加勢せよ！」

「おおおぉぉぉっ！」

　当たり前のように先頭に立っているのはアウブ・ダンケルフェルガーで、その隣には黒と青のマントを重ねてつけている女性騎士らしき姿もある。兜を付けているので、顔立ちはわかりにくいが、鎧の胸元の形から女性であることは一目瞭然だ。

「ツェントを守る騎士団長でありながら、トラオクヴァール様に毒を盛ったラオブルート、其方だけは許しません。夫が動けぬ今、妻であるわたくしが其方を討ちます」

　彼女はわたしには見分けられなかったラオブルートの位置を即座に特定し、武器を向けた。中央所属の黒いマントもまとっているけれど、口上と武器を構えてアウブ・ダンケルフェルガーと並んでいる姿は、戦場におけるハンネローレを彷彿とさせる。

「……あれはもしかしてマグダレーナ様でしょうか？」

「トラオクヴァール様を夫と呼び、アウブ・ダンケルフェルガーの隣で当然のように武器を構えられる妻が他にいるか？」

　……ツェントの妻になっても、やることは変わらないんだ……。ダンケルフェルガーってマジでダンケルフェルガー。

「アウブ・ダンケルフェルガー、ラオブルートを始め、中央騎士団における裏切者の捕獲を任せます！」

　フェルディナンドはゲッティルトの盾を出して防衛しているジェルヴァージオに攻撃を続けながら、祭壇の上から指示を出した。ダンケルフェルガーの参戦で一気に戦力が増えたのだ。下の戦いはダンケルフェルガーやアーレンスバッハの騎士達に任せた方が良いだろう。

「引き受けた！……だが、陣形が滅茶苦茶で敵味方の区別がつかぬ！　ひとまず中央騎士団の黒いマントは片端から捕らえていけ！　意見を聞いたり、顔で判別したりするのは後回しだ！」

　ダンケルフェルガーの協力に心強さを感じた直後、非常に不安になった。相変わらず大雑把で大胆だ。しかし、アウブ・ダンケルフェルガーの指示で、ダンケルフェルガーの青いマントがヴァッシェンに巻き込まれて敵味方が散らばる講堂内を敏捷に動き始める。

「……フェルディナンド様、アナスタージウス王子達もダンケルフェルガーの騎士達に捕らえられそうですけれど、本当に問題ありませんか？」

「ラオブルートをその一派を捕らえるのが最優先だ。マグダレーナ様がダンケルフェルガーと共に行動している以上、アナスタージウス王子のことは気にしなくてもよろしい」

　……本当にいいのかな？

　わたしの心の声が聞こえたのか、フェルディナンドは呆れたような溜息を吐いた。

「アナスタージウス王子の動向よりも君は一刻も早くジェルヴァージオを捕らえ、図書館都市計画の立案について考えられるようにするべきではないか？」

「そうですね！」

　元々保険として呼ばれていたアナスタージウス王子達よりも、フェルディナンドの言う通り、図書館都市計画の方が大事だ。わたしはアウブ・アーレンスバッハになってしまったので義務としてランツェナーヴェの者を捕らえる戦いに参加しているが、本音を言えばこんな戦いなんてぺぺいっと放り出して図書館都市計画を進めたい。

　……わたし、巨大図書館に薬草園を併設していた古代のアレキサンドリアみたいに、グーテンベルク達の印刷による本作りとフェルディナンド様の研究所とわたしの図書館を内包する図書館都市を設計するんだ。

　海もあるアーレンスバッハはピッタリだ。しかし、そのためにはランツェナーヴェの者達を率いていたジェルヴァージオを捕らえるなり倒すなりして、この戦いを早く終わらせなければならない。

「魔力量が均衡しているため、魔力による縛めはジェルヴァージオに効かぬ可能性が高い。私が魔力を溜める間、君に防御を任せる」

「はいっ！　守りを司る風の女神　シュツェーリアよ」

　わたしが軽く目を閉じて祝詞を口にし始めた途端、ジェルヴァージオが「其方……マインだな？」と言った。「マイン」と呼ばれたことに驚いて目を開けた瞬間、「ただの妨害だ。祝詞に集中しろ」とジェルヴァージオに牽制の攻撃を続けているフェルディナンドから叱責が飛んでくる。

「側に仕える眷属たる十二の女神よ」

「マイン、何故其方がクインタと殺し合わずに協力し合っているのだ？」

　ジェルヴァージオがゲッティルトを構えてフェルディナンドの攻撃を防ぎながら、訝しそうにそう言った。エアヴェルミーンから何か言われているのだろう。「殺し合え」というような物騒なことを言う者が他に思い当たらない。

　……エアヴェルミーン様にはその場でお断りしたんだけど、聞いてなかったかな？　聞こえてなかったかな？

　わたしは祝詞を続けながら余所事を考えて、なるべくジェルヴァージオの「マイン」という呼びかけが耳に入らないようにする。

　どのくらい前からエアヴェルミーンが始まりの庭にいるのか知らないけれど、耳が遠くなっていてもおかしくない。元神様とはいえ、寄る年波には勝てないのだろう、きっと。もしかしたら、ユルゲンシュミットの魔力がなくなっていることで、エアヴェルミーンのそういう部分にも支障が出ているのかもしれない。

「……害意持つものを近付けぬ　風の盾を　我が手に」

　キンと響く硬質な音を立ててシュツェーリアの盾が完成した。その途端、フェルディナンドがずっと牽制として使っていた水鉄砲から剣に武器を変えて魔力を溜め始める。特に打ち合わせがなくても当たり前のように役割分担ができるようになっていることに、何とも言えない安心感があった。

「クインタは其方が守らねばならぬ存在ではない。其方はむしろクインタを殺し、全てを手に入れなければならぬはずだ。そう命じられたのではないか、マイン？」

「これ以上余計なことを言わずに今すぐ死ね」

　静かにそう言いながらフェルディナンドが剣を振り下ろした。虹色の魔力の塊が剣から飛び出し、ゲッティルトで盾を構えたジェルヴァージオと一緒に神像が祭壇から吹き飛ばされる。

「きゃっ！？」

　飛ばされて空中に浮いた神像……正確には神像が身につけている神具が一斉に光った。神具から光の柱が立ち、交差する。あまりにも眩い光にわたしは思わずぎゅっと強く目を閉じた。

[------------------------------------------------]

女神の図書館

　きつく目を閉じた瞬間、平衡感覚がおかしくなった。体が傾いていて、妙な浮遊感に捕らわれる。直後、ぐいっと引き寄せられて「ぼんやりするな、馬鹿者」と小声の早口で叱られた。フェルディナンドの声だ。とりあえず、自分を捕まえている腕にしがみついておくことにした。

　これでよし！　と思った瞬間、ドシャッと落ちた。感覚的にはベッドから落ちたような感じで、大した高さではなかったようだ。でも、浮遊感のせいで完全に体勢を崩していたため、わたしは全身を打った。フェルディナンドの鎧で。

「ぎゃうっ！？」

　目を開けると、フェルディナンドの鎧しか見えなかった。どうやらわたしはフェルディナンドの上へ落下したらしい。

「いったぁ……」

「呑気なことを言っていないで、早く退きなさい！」

　険しい声でそう言われ、勢いよく体勢をひっくり返される。おわ？　と思っている間に上下が入れ替わり、フェルディナンドは素早く動いて立ち上がった。即座にシュタープを構えている。

　……自分から引き寄せたくせに、マジ理不尽！

　引き寄せられて、落とされて、転がされて、頭がぐらんぐらんする。脳みそがシェイクされたような気持ち悪さを覚えながら起き上がると、わたし達は何故か始まりの庭にいた。真っ白の石畳の円い庭の真ん中には白い大きな木ではなく、エアヴェルミーンが姿を現している。眉間の皺の深さとゆらりと立ち上るような魔力から察するに、機嫌が良いようには見えない。

　……エアヴェルミーン様、ものすごく不機嫌っぽい？　何があったんだろうね？

　わたしがエアヴェルミーンを見ながら首を傾げていると、視界の端の方で「エアヴェルミーン様？」と驚きの声が上がった。ジェルヴァージオもいたらしい。わたし達と同じようにドシャッと落ちたようで、起き上がっているのが見える。

　ぐるりと始まりの庭を見回した。シュタープを構えて臨戦態勢のフェルディナンド、エアヴェルミーンに向かって跪いたジェルヴァージオ、頭を押さえて気持ち悪さを抑えようとしているわたしの三人を不機嫌そうにエアヴェルミーンが睨んでいる。

「一刻も早くユルゲンシュミットの礎を魔力で満たさねばならぬ時に、資格を持つ其方等は一体何をしている？」

　どうやらエアヴェルミーンはわたし達に文句を言うために呼びつけて、実体化したようだ。白い木のままではお話ができないせいだろう。

「クインタ、我は非常識な方法で飛び込んできたにもかかわらず、其方にメスティオノーラの英知を与えた。だが、其方は英知を補完するために再来するどころか、全く染める気配も見せぬ。ようやく再来したかと思えば別人だった。その者も片方を殺してメスティオノーラの書を完成させよ、と命じたのにすげなく断る。やっと礎を染める気のある者が現れたと安堵していたら、英知の光は途切れ、礎へ向かうことを邪魔されているではないか。何故邪魔をするのだ、クインタ？　ユルゲンシュミットの崩壊が間近に迫っていることがわからぬか！？」

　エアヴェルミーンの怒りの大半はフェルディナンドに向いているらしい。わたしにも怒りの波動っぽい物が向けられているが、フェルディナンドと交互になっている辺り、相変わらず魔力で区別がついていないのだと思う。

　元神様から怒りを向けられているフェルディナンドは平然とした顔で「グルトリスハイト」とシュタープを変形させて、何やら調べ始めた。

「エアヴェルミーン様は崩壊が間近とおっしゃるが、ローゼマインが国境門に魔力を注いだので、崩壊するまでに二十年ほど余裕がございます。ここでユルゲンシュミットを見守ってきたエアヴェルミーン様には瞬きする程の短い時間かもしれませんが、我等にとってはこれから子が生まれて成人するより時間があるのです」

「そうなのですか？　意外と余裕があるのですね。フェルディナンド様のメスティオノーラの書にはそんなことも載っているのですか？」

　見せてくださいませ、とわたしがいそいそと立ち上がって寄っていくと、目の前でバン！　と勢いよくメスティオノーラの書を閉められた。

「見せてくれてもいいではありませんか！　フェルディナンド様のケチ！」

「一つ確認するが、君は今の状況が見えているのか？」

　わたしは、立ったまま怒りを継続させているエアヴェルミーンと跪いてかしこまっているジェルヴァージオを見比べる。悠長に読書をしていられる状況でないことは、さすがにわかった。

「見えていますよ。でも、いついかなる時も読書をできる機会を逃したくありません！」

「なるほど。よくわかった。邪魔だ。下がれ」

　ベチッと額を叩かれて、下がるように顎で示された。

「ジェルヴァージオのせいで、我々はすでに何十人と失っています。ユルゲンシュミットを中から崩壊させるランツェナーヴェの者をツェントとして戴くことはできません」

「そのような人の理は知らぬ。ユルゲンシュミットはエーヴィリーベに追われた者を匿う場所。我が贖罪の地。ユルゲンシュミットの崩壊は絶対に回避せねばならぬ。我はすでに十分すぎるほど待った。新たなツェントの誕生は邪魔させぬ。礎を染める気のない其方は疾く消えよ」

　ゆっくりとエアヴェルミーンが腕を上げる。指先がこちらに向けられた。

　ひゅっと息を呑んだフェルディナンドがわたしの前に立ち、「ゲッティルト！」と叫んだ瞬間、まるでフェルディナンドの全力攻撃のような魔力の塊が飛んでくる。

「きゃっ！？」

　硬質な音と共にフェルディナンドの盾が弾け、腕に付けていたお守りが三つ、一度に弾けた。これまで敵対した者とは大違いの魔力量だ。一気に血の気が引いた。

「行け、テルツァ。ユルゲンシュミットの礎を満たしてくるのだ」

　エアヴェルミーンの指示を受けたジェルヴァージオが静かに立ち上がる。「テルツァ」というのは「クインタ」と同じような幼名に違いない。

「リューケン　水鉄砲」

　フェルディナンドが立ち上がって背を向けたジェルヴァージオを即座に撃った。祭壇上の戦いでお守りを失っていたジェルヴァージオが太腿を撃ち抜かれ、押し殺したような呻き声を上げて倒れる。

「邪魔をするなと言ったはずだ、クインタ」

「人の理を知らぬとおっしゃった方の言い分など存じません。私は新しいツェントを立て、王族を廃し、祈りを復活させ、次世代では自力で聖典を得られる者からツェントを選択するのです。余計な邪魔をしないでいただきたい」

　ジェルヴァージオの方を向いていたエアヴェルミーンが指を動かす。わたしはフェルディナンドの前に飛び出すと、ありったけの魔力で「フィンスウンハン」を唱え、フェルディナンドと自分を守れるように闇のマントを大きく広げた。

　エアヴェルミーンの魔力攻撃を吸い取り、ずわっと大量の魔力が一気に自分の中へ流れ込んでくる。講堂で巨大洗濯機のようになっていたヴァッシェンに使った大量の魔力さえあっという間に回復していく。

　……ヤバい！　溢れる！？

　急いで魔力圧縮を始めたけれど、流れ込んできた魔力が大量すぎて圧縮が間に合わない。身体中を熱が満たし、膨れ上がってくる熱の渦に捕らわれるような苦しさに「んぅっ！」と思わず呻いた。身食いの熱に食われていくような感覚は懐かしいけれど、二度と経験したくなかった辛さだ。

　……熱い。苦しい。誰か……。

「溜め込もうとするな！　放出しろ、ローゼマイン！」

　……助けて、神様っ！

　高く上げた両手から魔力が飛び出し、わたしは始まりの庭で光の柱を立てた。祈りになったのかどうかわからない。けれど、まるでわたしの魔力に反応したように、天井部分に円く空いた穴から光が降り注いできた。

　光だけしか存在しないような視界の中に、自分と似た容貌の女性が微笑んでいた。夜空のような色合いの髪、月のような金色の瞳、おそろしく整った顔は成長した後、鏡で見た自分の姿に似ている。

「アーンヴァックスがご満悦だったけれど、本当によく似ていること。身食いならば魔力の馴染みも良いでしょうから、少しの間、体を貸してくださいませ」

　声は澄んでいて柔らかい響きをしている。言葉自体が全く違うのか、何と言っているのか聞き取れないけれど、わたしに通じる言葉に直って頭の中に直接響いてくる感じで、同時通訳を聞いているような気分だ。

「ん？　体を借りる……？」

「あら、助けを求めたのは貴女でしょう？　エアヴェルミーンを止めてきます。あのままではあの方も危険ですもの」

　彼女が「困ったこと」と言いながら頬に手を当てて首を傾げた。どこのどなたか知らないけれど、エアヴェルミーンを止めてくれるならば、それに越したことはない。さすが元神様。魔力量が段違いなのだ。とても太刀打ちできない。

「……でも、体を貸すって……」

　いくら何でも怖い。本当に返ってくるのか、その間わたしはどうしたらいいのか、不安要素が多すぎる。

「わたくしはいつまでも下にいられるわけではありませんし、貴女には快適な場所で待ってもらいます」

　少し腕を動かした瞬間、ここは図書館になった。

　床から天井まで本、本、本。あっちを向いても本棚、こっちを向いても本棚。それも、すかすかの本棚ではなく、全てに本がきちんと収められている。貴族院の図書館はもちろん、麗乃時代の図書館でも見たことがないほどの本の数に圧倒されて、わたしは言葉を失って周囲を見回す。本を読むために必要な座り心地の良さそうな椅子や書き物に適した机もあって、いくらでも読書ができそうだ。

「すごい……」

　まるでわたしがメスティオノーラの書を手に入れるために金色シュミルに出会った場所で思い浮かべたような図書館だ。そう思った瞬間、あの図書館は入ってきた者の思想を判断するための幻だったことを思い出した。

「……ここも壁に絵が描かれたような図書館ではないのですか？」

「いいえ。ここはわたくしの英知が詰まった図書館です。どの本も読めますよ。わたくしが貴女の体を借りている間、ここで待っていてくださいな」

　彼女がそう言って手を振ると、金色のシュミルが一冊の本を持ってきた。ここに座って読め、というようにわたしから近い椅子の前で本を抱えて待機している。

「いやっふぅ！　体くらい、いくらでもお貸しします！　英知の女神　メスティオノーラに祈りを！」

　わたしはビシッと祈りを捧げると、金色シュミルのところへ駆け寄った。

　一人掛けのソファのような椅子は、まふっとした座り心地でマットレスを入れたわたしの椅子より更に座り心地が良い。布の手触りは柔らかく、ほんのりと温かみを感じる。

　わたしが座ったのを確認して金色シュミルが本を手渡してくれる。もしかしたらユルゲンシュミットでは図書館でシュミルが働くと決まっているのだろうか。

　そんなことを思いながら、わたしは本を開く。かなり古い時代の言葉で書かれた本で、神様に関する話が載っているようだ。

　……聖典やダンケルフェルガーから借りた本にも似たような話があったなぁ。

　わたしは楽しくなりながら文字を追っていく。最初の話は、海の女神　フェアフューレメーアの物語だった。

　二人の男神から求婚を受けたけれど、フェアフューレメーアはどちらの求婚にも応じなかった。けれど、どちらも火の神の眷属だったせいだろうか、熱くなりすぎて引いてくれない。

　周囲の神々も巻き込んで大騒ぎになった結果、フェアフューレメーアが失恋した時には二人の内の勝者と結婚することになってしまった。まずは勝者を決めておかなければならない、と二人の男神は様々な神々を巻き込んで戦いを始めた。

　失恋をしたら、という条件を付けたので好きな相手ができるまで放置しておけば良いとのんびり構えていたフェアフューレメーアは、他の女神達から予想外に大きな戦いになったことを知らされる。

　戦いの場に急いで駆けつけたフェアフューレメーアは、神としての力を振るい、皆の熱を鎮めた。それ以来、火の眷属が争い始めたらフェアフューレメーアが呼ばれるようになった、というお話だった。

　……これってダンケルフェルガーの儀式の基になったお話じゃない？

　ダンケルフェルガーだけではなく、神様達にも呼ばれているなんてフェアフューレメーアはとても大変そうだ。争いが起こる度に呼ばれるフェアフューレメーアに同情しつつ、わたしは次のお話を読む。次は、ユーゲライゼの切ない恋物語だった。

「終わりました。次の本をお願いします」

　わたしは楽しく三冊目の本を読み終え、金色シュミルに次の本をお願いする。ドレッファングーアの目を盗んで運命の糸を盗み出して悪戯するリーベスクヒルフェと、あまりにも悪戯されることに腹を立てて報復するドレッファングーアのお話だった。リーベスクヒルフェの髪の毛を運命の糸に混ぜ込み、リーベスクヒルフェはそれに気付かず、自分と人間の男の縁を結んでしまうのだ。

「次はどんなお話だろう？　うふふん、ふふん……」

　浮かれた気分で金色シュミルが戻ってくるのを待っていたら、「ローゼマイン」と脳へ直接呼びかけるようなフェルディナンドの声が聞こえてきた。機嫌が地の底を這っているような低い声で、浮かれた気分が一瞬で消し飛んだ。

「うひゃっ！？　な、何事ですか！？」

　わたしは耳元を押さえながら周囲を見回したけれど、どこにもフェルディナンドの姿は見当たらない。周囲を本棚に囲まれた素敵空間が広がっているだけだ。

「やっと聞こえたか……。さっさと戻れ、ローゼマイン。さもなくば、君の大事な物が順番に消えることになるぞ」

　怒りをたっぷりと含んだ声は本気のものだ。今すぐに戻らなければ、魔王の怒りの八つ当たりで大変なことになる。

「ぎゃーっ！　体を返してくださいませ！　フェルディナンド様が怒ってますっ！」

「……わたくしはずっと呼びかけていたのですけれど」

　呆れたような、疲れたような感情が籠った彼女の声が聞こえた直後、わたしの視界から図書館は消えた。代わりに、映ったのはフェルディナンドの顔だった。滅茶苦茶近い。切羽詰まったような心配そうな眼差しが至近距離にある。

　先程響いてきたマジ怒りの声とは全く違う表情に驚いて、わたしが目を瞬いてはくはくと口を開け閉めした途端、フェルディナンドの薄い金色の瞳に映っていた心配の色が掻き消えて、腹立ちと怒りの混ざったものになった。同時に、わたしの手に握らされていた何かが消える。

「……ローゼマインだな？」

「はひ」

「きちんと返事をしなさい」

　言っておくが、間抜けな発声になったのはわたしが悪いわけではない。フェルディナンドに頬をつねられたので、きちんと返事ができなかっただけだ。

「へんりをしれほひかっらられをはなひれくらはいまへ」

「何を言っているのか全くわからぬ」

　……今日のフェルディナンド様、マジ理不尽！

「学習能力がないにも程があるぞ、ローゼマイン」

「ふへ？」

　怒りに任せたお説教は聞くから、頬の手を離してほしい。わたしは頬の手を軽く叩く。フェルディナンドは一度グッと力を入れた後、手を離してくれた。けれど、顔の距離は全く離れない。怒りのお説教から少しでも距離を取りたいのに、それは許されないようだ。

「君は神殿図書室に突撃して前神殿長に目を付けられ、貴族院の図書館で魔力を暴走させて王族と関わることになり、面倒事に巻き込まれた。君が図書館に意識を奪われる度に厄介事が起こっているわけだ」

　わたしの周囲で起こった厄介事は、図書館に関わらないこともいっぱいあった。図書館のせいにしないでほしい。けれど、反論したらお説教が何倍にもなることは経験上よく知っている。わたしはとりあえず頷いて聞き流すことにした。

「それにもかかわらず、自分の体を代償にメスティオノーラの図書館へ突進するなど何を考えているのだ、この馬鹿者」

「あそこ、メスティオノーラの図書館だったのですか。すごかったですよ。あっちもこっちも本、本、本の楽園でした。もう死んでもいいってくらいたくさんあって……。あそこならば研究関係の本もたくさんあると思います。フェルディナンド様も一度行ってみれば素晴らしさがわかりますよ。今度はぜひ一緒に行きましょうね」

　怒りの解消を願ってわたしがメスティオノーラの図書館へお誘いすると、フェルディナンドはひくりと一瞬頬を引きつらせた。

「ほぅ、はるか高みへ一緒に行こうとはずいぶんと斬新な誘いだな。久し振りの臨死体験では足りなかったか？」

　……はるか高み！？

[------------------------------------------------]

ツェントレース

　いきなりぶっ飛んだことを言ってくるフェルディナンドを見つめていると、フェルディナンドが「まだ戻っていないか」と忌々しそうに舌打ちした。

「戻っていないとはどういう意味ですか、フェルディナンド様？」

「ローゼマイン、君にとって大事な者の名を挙げよ。私に脅された時、君は誰を思い浮かべた？　君の体を得た女神が何をしたのか思い出せるか？　君は体を貸す前に何をしていた？　これから何をせねばならぬかわかるか？」

「え？　えーと……」

　突然何を言い出すのかと反論する間も与えられず、矢継ぎ早に問われて頭が混乱する。混乱はしているまま、何とか思い出そうとしてみたけれど、記憶にうっすらと靄がかかっているように思い出せない。すぐに頭に思い浮かぶのは、先程までいた図書館で読んだ本の内容ばかりだ。

「わかりません。……でも、先程まで読んでいた本の内容は明確に覚えているのですよ。神々に関するお話で、わたくし……」

「そちらは覚えていなくても良い。むしろ、早く忘れよ」

　フェルディナンドが嫌そうに顔をしかめて、わたしの発言を止める。

「え？　せっかく読んだ本の内容を忘れろなんてひどいですよ」

「君に体を貸してもらいやすいように、女神が少し精神的に干渉したそうだ。少しではなく、かなり深く影響を受けているようだが……」

　ちょっと体を貸すだけの気分だったけれど、精神干渉を受けているとは思わなかった。自分に何が起こっているのか考えると、ちょっと怖い。わたしは差し出された魔力の回復薬を飲みながら「……わたくし、どのような干渉を受けたのでしょう？」と問いかける。

「さて？　答えてもらえなかったからわからぬ。君は余計な干渉などしなくても本や図書館を目の前にちらつかされたら簡単に貸しそうだが、二度とこのようなことはせぬように。……君は他の魔力の影響を受けすぎる」

　フェルディナンドは声には出さず、口の形だけで「身食いだから」と言った。そこに何とも言えない苦悩の表情が見える。わたしは手を伸ばすと、フェルディナンドの眉間の皺をぐりぐりした。

「ご心配をおかけいたしました。でも、大丈夫ですよ、フェルディナンド様。死ぬまでにあんな図書館を作ってみたいという野望ができましたから、わたくし、そう簡単にはるか高みへ行くことはございません」

「……余計に心配になったが？」

　嫌そうな顔をしているくせに、薄い金色の瞳からは少し怒りや腹立ちが消えている。相変わらず感情が読みにくい人だ。多少機嫌が直ったことに安堵していると、少し離れたところからフェルディナンドとは別人の呆れたような声が響いてきた。

「そろそろ良いか？」

「え？　どなたかいらっしゃるのですか？」

　視界の中には近距離にあるフェルディナンドしか映っていなかったので、まさか他に誰かいるとは思わなかった。わたしが目を瞬いていると、フェルディナンドがわたしから離れて立ち上がる。

「ここは始まりの庭で、エアヴェルミーン様とジェルヴァージオがいる」

「あ、あ！　あぁ～！　思い出しました！　戦いの途中だったではありませんか！　フェルディナンド様、何をのんびりとしていらっしゃるのですか！？」

　わたしは急いで立ち上がってフェルディナンドを後ろに庇う。エアヴェルミーンに対して戦闘態勢を取ろうとした瞬間、わたしは後ろからフェルディナンドに小突かれた。

「落ち着きなさい。戦闘は終わっている。メスティオノーラによってこの場における命の奪い合いは禁じられた」

「え？」

　よくよく見てみれば、エアヴェルミーンもジェルヴァージオもこちらを向いているだけで、戦いの雰囲気が全くなくなっている。

「……こんなに簡単に戦いを収められるなんて、女神様ってすごいですね。神にいの……」

「祈るな、馬鹿者！　また同じ目に遭いたいのか！？」

　上げかけた手をガッと押さえられたわたしが目を瞬かせると、エアヴェルミーンが苦笑した。

「マイン、其方は身食いで他の魔力を受け入れやすい。神々との交信を行うこの場で祈ると、神々が面白がって降臨してくる可能性が高い。我にとっては懐かしい者達なのでいくらでも降臨させてもらって構わぬが、其方への負担は非常に大きい。気を付けた方が良かろう」

　エアヴェルミーンの口調がずいぶんと落ち着いている気がする。もしかしたら女神セラピーの効果だろうか。あんなに大きな素敵図書館の持ち主で、あっという間に戦いを収束させて、エアヴェルミーンをなだめてしまっているのだ。

　……女神様、マジすごいね！　メスティオノーラに感謝を！

「それで、女神様とどのようなお話をしたのですか？」

「それぞれの望みと現状についての情報を共有した結果、平和的な方法でツェントを競うことになった」

　フェルディナンドの言葉に、ジェルヴァージオが「いくら何でも簡略化しすぎだ、フェルディナンド」と顔をしかめる。ジェルヴァージオの言う通りだ。全くわからない。

「講堂がどうなっているのかを考えれば、悠長に話をしている時間などあるまい。結果だけ伝えれば十分ではないか」

　時間がないのもわかるし、フェルディナンドが効率重視なのは今に始まったことではないけれど、もう少し説明してほしいところだ。

「せめて、それぞれの望みが何なのか、どのような情報を共有したのかくらいは教えてくださいませ。わたくし、一人だけ戦闘気分が抜けていないのですけれど」

「先程までは記憶から抜けていたくせに何を言うか」

　そんなふうに睨まれても、思い出してしまったのだから仕方がないと思う。脳内が一人だけまだ戦闘状態なのだ。顔を合わせた時からお互いに敵視し合っていて「魔石になれ」とか「死ね」とか言いながらお互いに攻撃していたジェルヴァージオとフェルディナンドは雰囲気が硬いものの普通に会話していて、「クインタを殺せ」とか「ジェルヴァージオの邪魔をするな」とぐちぐち口出ししていたエアヴェルミーンはぼけーっと話を聞いているだけなんて脳が受け付けない。

「ちょっと本を読んでいる間に周囲が変わりすぎているせいで、ものすごく落ち着かなくて気持ちが悪いのです」

「神の視点について話を聞いた。ユルゲンシュミットはエーヴィリーベに迫害された者を受け入れる場所。ランツェナーヴェの者が救いを求めてユルゲンシュミットへ入ってくるならば、受け入れることは神々の視点では当然のことだそうだ」

　フェルディナンドの説明によると、外の世界で苦しんでいる魔力持ちを受け入れるためにユルゲンシュミットが作られ、外の者を受け入れることがエアヴェルミーンの役目らしい。だから、魔力持ちのランツェナーヴェの者がユルゲンシュミットで住むことを望むならば受け入れる。拒否は考えてもいないそうだ。

「神々はランツェナーヴェの者達によってアーレンスバッハの貴族達が何十人も殺されたことに関しては何も思わないのですか？」

　わたしがエアヴェルミーンを睨むと、エアヴェルミーンは何ということもない顔でゆっくりと頷いた。

「人の理とやらに我の言葉など無意味ではないか。命を奪うな、と言ったところで昔から何百、何千の者が内部で殺し合っている。ついさっきも何百人と死んだのだから、数十人が加わったくらいは騒ぐほどでもあるまい。外から数十人が入ってくることを考えれば、全く問題ないではないか」

　エアヴェルミーンから見れば、王族による内輪揉めの政変で何百人の貴族が死んでいるのもついさっきのことで、今更アーレンスバッハの貴族が数十人亡くなったところで誤差の範囲だそうだ。外から補充することになったのだから、大した問題ではないらしい。

「わたくし達にとっては数の問題ではないのですけれど……」

「人は勝手に増えるし、勝手に殺し合う。そういう存在だ。短い期間にくるくると変わる人の理など考えるだけ無駄だ」

　確かにユルゲンシュミットどころか、エーレンフェスト内の人々だって分かり合えているとは言えないし、人間間の身分や常識の差も大きい。神の常識と人間の常識が噛み合うなどと考えない方が良さそうだ。

「何より、人の理について我に語る者はもう長い間ここを訪れておらぬ」

　大昔はメスティオノーラの書を手に入れるために何人ものツェント候補が始まりの庭を訪れていた。魔力が多く満ちていた頃はエアヴェルミーンも自由に人の形を取り、人と交わり、会話する時間があったそうだ。

　けれど、ある頃からエアヴェルミーンは顕現できる魔力を得られなくなってきたそうだ。メスティオノーラの書を手に入れる者が減り、中央神殿が聖地から移動して神事が行われなくなったからだろう。それに、魔術具のグルトリスハイトを継承するようになってからは祈りを行うこともなくなってきた。始まりの庭へ入れる者さえ減ってきたに違いない。わたしが知った歴史からも簡単に想像できる。

「話し相手はどうでも良いが、今は礎に魔力を供給するツェントが不在で、国境門の魔力も薄れ、ユルゲンシュミット自体が崩壊の危機に陥っている。数十人の死など鼻で笑う規模の被害が出よう。我はツェントが一刻も早く誕生することが望みだ。それ以上は特に望んでおらぬ」

　誰でもいいからさっさと礎を染めてユルゲンシュミットを存続させろ、というのがエアヴェルミーンの望みで、礎を染められない今のツェントはツェントとして認識されていないようだ。

「そういうわけで、ひとまずユルゲンシュミットの崩壊を食い止めるため、至急礎を染めることになった」

「はい？　一体どなたがツェントを競うのですか？」

「ここにいる三人以外にもツェント候補がいるのか？」

　いるならばここへ連れてくるが良い、とエアヴェルミーンが期待に満ちた声で言う。ここにいる候補者は難ありばかりなので、新しい候補者は大歓迎だそうだ。

「自称で良ければディートリンデ様がいらっしゃいますし、王族の方々にもここへ入れる者は……」

「エアヴェルミーン様の感覚では、メスティオノーラの書を手に入れた者がツェント候補だ。グルトリスハイトでは意味がないらしい」

　……あぅ、ツェント候補の基準が大昔だった。それじゃあ王族の誰も候補になれないよ。

「エアヴェルミーン様が求めていらっしゃるのはユルゲンシュミットを魔力で満たすことだ。そのため、三人の候補がそれぞれ未だ魔力の満ちていない国境門を満たし、この始まりの庭に戻ってくる速さを競うことになった」

「勝者を礎の場所へ案内してくださるそうだ」

　フェルディナンドとジェルヴァージオがどちらも自信ありそうな顔をしている。非常に不思議な気分だ。フェルディナンドはツェントを望んでいなかったのではないだろうか。

「フェルディナンド様はツェントになってもよろしいのですか？」

「私が礎を満たせば、エアヴェルミーン様は人の理に口を出さぬそうだ。今の王族を排しようとも、入ってきたランツェナーヴェの者達を処罰しようとも、そこは人の理に合わせて勝手にすれば良いとおっしゃった」

　フェルディナンドの計画の、次代では自力でメスティオノーラの書を手に入れるように改革しようとしている部分は評価してくれているらしい。時間がかかりすぎる上に不確実なところがネックだが、フェルディナンドが礎を染めるのであれば、魔術具として作ったグルトリスハイトを手渡して新しいツェントを任命するのも、祈りなどを復活させるのも自由だそうだ。

「省略しすぎだ、クインタ。メスティオノーラは全ての命を粗末にするな、と言ったではないか。そこは考慮するように」

　エアヴェルミーンは淡々とした口調で補足する。処罰をするのは構わないが、安易な処刑は禁止だそうだ。連座やら何やら理由を付けては無罪の人までどんどんと処刑するのが当然のユルゲンシュミットで「命を粗末にするな」という言葉が聞けるとは思わなかった。

「そんなに大事な言葉、録音しておけば……」

「録音したところで女神の降臨を実際に見ていない者には君の声だ。わざわざ録音する必要があるか？」

「……そうですね」

　確かに慈悲を振り撒きたいわたしの我儘と思われれば今までと同じだ。録音しても意味がないだろう。残念だ。

「貴方はどうしてツェントになりたいのですか？」

「私がツェントになれば、あの離宮を取り壊すことも可能だ。私のような子を産むために娘達をこちらへ送る必要もなく、魔力ある者が貴族として尊重される生活を送らせることが可能になる」

　それに加えて、雪崩れ込んできたダンケルフェルガーの者達に捕らえられているだろう中央騎士団の者達を救うことも、アウブが不在になっている領地に新たなアウブを任命してランツェナーヴェの者達を住まわせることができるとジェルヴァージオが言った。

「何故ユルゲンシュミットに住もうとするのですか？　ランツェナーヴェの者達に必要なのはシュタープと魔石でしょう？」

「そうとも言えぬ」

　ジェルヴァージオによると、ランツェナーヴェでは魔力持ちを押さえつけるような物が色々と開発されていて、王族は権力を失いつつあり、魔力というエネルギーを生み出す道具のような扱いをされているらしい。

「シュタープを得てランツェナーヴェに戻り、強大な力を行使する権力者として君臨したい者と、ランツェナーヴェから脱出してユルゲンシュミットの貴族として永住したい者の二つにランツェナーヴェの王族は割れている」

　ランツェナーヴェに戻りたい者を率いているのがレオンツィオで、ユルゲンシュミットの貴族として安住の地を探す者を率いるのがジェルヴァージオだそうだ。意見に差があるけれど、どちらにとってもツェント不在のユルゲンシュミットは恰好の獲物だったそうだ。

「アーレンスバッハの貴族達を殺害したのはレオンツィオ達だが、ディートリンデ様がアーレンスバッハ内の自分の政敵ならば構わないと許可を出したと聞いている。ユルゲンシュミットにはずいぶんと怖いことを平気で行う為政者がいると思ったものだ」

　実際に会ってみれば愚かな我儘娘であったが、とジェルヴァージオが嘆息した。

「ユルゲンシュミットにおける安住の地を確かなものにするため、ランツェナーヴェの者達の処罰を取り消すため、私を受け入れてくれた中央騎士団の者達に報いるための地位が必要だ。私はツェントになる」

「それぞれに参加理由があるのはわかりましたけれど、わたくし、アウブですからツェントの礎は染められませんよ？」

　わたしがツェントレースに参加する意味がない。

「ならば、其方はアウブとして参加すれば良かろう。国境門に魔力を供給するのは、元々アウブの仕事ではないか」

「……エアヴェルミーン様、それって各領地のアウブがメスティオノーラの書を手にしていた最も初期のお話ではありませんか。まぁ、国境門に魔力を満たす必要があるのならば協力するくらいは構いませんけれど……」

　神話に近い時代で基準が止まっているエアヴェルミーンによって、わたしの参加は義務付けられた。

「ツェントになることは不可能ではない。別の者にアウブの礎を染めさせれば良い。身食いである其方の魔力は染め変えやすい故、次の者はさほど苦労すまい」

　エアヴェルミーンはそう言いながら、きちんとわたしの方を向いている。

「エアヴェルミーン様、今はフェルディナンド様の魔力と混同していないのですか？」

「今の其方はメスティオノーラの力に満ちているからな」

　……どうやらわたし、染め変えられたらしい。

　自分の腕を見下ろしてみたけれど、自分では魔力が見えないのでどうなっているのかわからない。

「言動で台無しではあるが、其方からは神々しい女神の残滓が強く感じられる。しばらく黙っていてほしいものだ」

　ジェルヴァージオが慕わしそうな視線を向けてくる。わたしを見ているのに、わたしではない者を見る目だ。

「時間が惜しい。始めるぞ。其方等が向かう先は神々が決める」

　ピッとエアヴェルミーンが指を立てて細く魔力を放つ。赤、金、緑の三色の光が降り注いできた。わたしの頭上に赤、フェルディナンドの頭上に緑、ジェルヴァージオの頭上に金の光が降り注ぐ。わたしが向かう国境門はクラッセンブルク、フェルディナンドがハウフレッツェ、ジェルヴァージオがギレッセンマイアーに決まった。

「では、行け。其方自身の手で転移陣を構築し、国境門へ向かうのだ」

「グルトリスハイト！」

　転移陣を構築するために三人が一斉にメスティオノーラの書を手にした。すぐさま空中に転移陣を描き始めた二人を横目で見つつ、わたしは転移陣の検索から始めなければならない。ちょっと悔しい思いをしながら土の国境門へ向かう転移陣を検索する。

　一歩で遅れたように見えるかもしれない。けれど、わたしには奥の手がある。革袋から魔紙を取り出し、わたしはニッと笑った。

「コピーシテペッタン！」

　一瞬で転移陣が完成した。苦い顔で「魔紙の無駄遣いだ」と言いながら手を動かし続けるフェルディナンド以外は、「何だ、それは？」と驚きの声を上げている。

　ふふんと笑いながら、わたしはメスティオノーラの書を消して、シュタープを転移陣にかざした。

「ケーシュルッセル　クラッセンブルク」

[------------------------------------------------]

魔王の暗躍

　コピペした転移陣を使って、わたしは国境門に到着した。国境門の内側はどこも大して変わらないので、魔法陣に描かれた大神の記号で判断するしかない。土の女神　ゲドゥルリーヒの記号があるので、間違いなくクラッセンブルクの国境門のようだ。

「ここに魔力を注げばいいだけだよね？……グルトリスハイト！」

　わたしはメスティオノーラの書を出すと、壁際まで移動してベシッと国境門に押し付ける。エーレンフェスト、ダンケルフェルガー、アーレンスバッハの国境門でも同じことをしたので、魔力供給は簡単だ。

　……楽勝、楽勝。うふふん。

　メスティオノーラの書を通し、国境門に向かって自分の魔力が流れていくのを感じていると、不意に転移陣が光った。魔力供給をしながら、わたしは思わず振り返る。

　……え？　何？

　この転移陣が使えるのは、メスティオノーラの書か図書館の地下書庫の奥にあるグルトリスハイトを持つ者だけだ。地下書庫に入れる王族がいない以上、転移してくるのはフェルディナンドかジェルヴァージオのどちらかしかいない。

　……まさか妨害する気じゃ……？

　そう思った瞬間、来訪者が特定できた。

「フェルディナンド様ですね！？」

「よくわかったな」

　転移陣から現れたのは、わたしが予想したようにフェルディナンドだった。

「間違えてここにやって来た……なんて可愛らしい失敗をフェルディナンド様がするはずありません。これまでの経験から考えた結果、女神様やエアヴェルミーン様が決めた競争の妨害を行うつもりだと判断しました。わたくしにはお見通しですよ！」

　わたしがビシッと決めたら、フェルディナンドには当然の顔で「そこまでわかっているならば話は早い」と肯定されてしまった。わたしの予想通りなのは、ちょっとどうかと思う。あり得ないけれど、できれば否定してほしかった。

「何を企んでいるのですか？　わたくしをどのように妨害するおつもりですか？」

「私が君を妨害してどうする？　私が阻止するのはジェルヴァージオだ」

　国境門を染める速さを競う勝負は、ツェントになる者の魔力量を量るという意味でとてもわかりやすい勝負だ。転移陣を自分で描くというスタートも、メスティオノーラの英知をどれだけ得ているのか、魔術の扱いにどれだけ長けているのか計ることができると思う。

「わたくしはコピペで済ませましたが、転移陣を描くスピードにはかなりの差があったではありませんか。戦いで消費した魔力の回復をどれだけできているのか存じませんが、効力の高い回復薬を持っているフェルディナンド様の方がかなり有利だと思います。礎を染めるツェントを決めるのですから、正々堂々と勝負してはいかがでしょうか？」

　妙な妨害や暗躍など必要ないと思う、とわたしが言うと、フェルディナンドは皮肉そうな笑みを浮かべて唇の端を上げた。

「正々堂々と？　ジェルヴァージオ妨害における最大の貢献者である君が今更何を言っている？」

「……わたくし、何かしましたか？　身に覚えがないのですけれど」

「まだ記憶が繋がっていないのか？　それとも、ただ自覚がないだけか？」

　フェルディナンドがこめかみをトントンと軽く叩きながら説明してくれたことのだが、なんと勝者に対してエアヴェルミーンが礎への道を示すことに決まった原因がわたしだった。

「ここまで自覚が薄いとは思わなかったが、ジェルヴァージオが英知を授かる瞬間を遮り、邪魔したであろう？　君が妨害したためにジェルヴァージオが得たメスティオノーラの書はかなり不完全なようだ。おまけに、君がすでに吸収しているため、再度始まりの庭を訪れても知識が増えることはないらしい」

　魔法陣に突撃して始まりの庭へ直接入ろうとしたところを邪魔された腹いせに、闇の神のマントを広げて魔力を吸収、回復した自分の行動を思い出してポンと手を打った。

「あれですか。……自覚がなかったようです」

「さもありなん。ジェルヴァージオの聖典では礎に向かうルートが途切れ途切れにしか載っていないそうだ。エアヴェルミーン様の中で、我々は不完全なメスティオノーラの書しか持ってない難ありのツェント候補だそうだ」

　エアヴェルミーンから見れば、メスティオノーラが英知を授けている最中に突然途切れて、それ以上知識を得ることができなくなったジェルヴァージオ、二人で一つの聖典を分けているために穴だらけ確定のフェルディナンドとわたししかツェント候補がいないのである。

　……崩壊しかけのユルゲンシュミットを支えるツェント候補としては、何というか絶望的だね。

「フェルディナンド様はすでにコピペで必要分は補完しているのに、それは口にしなかったのですか？」

「あぁ。私の聖典も穴だらけということになっている。実際の業務に使わぬ部分は穴も多いのだから嘘は吐いておらぬ」

「嘘とか、誇張とかはどうでもいいのです。コピペで補完したことを隠す理由を伺いたいのですよ」

「……後々のためにはその方が良いと判断したが、君はその理由を知らなくても良い」

　コピペについて口外しなかった理由は教えてくれなかったけれど、フェルディナンドが平然とした顔で「自分の知識も穴あきだ」と告げたため、エアヴェルミーンは今回の勝者に礎へ向かう道を示すことにしたそうだ。

「わたくし、そのような説明は受けていませんよ」

「余計なことを言いそうだったので、君に対する説明は最低限にしてある」

「ひどいですっ！」

　わたしはジトッとした目でフェルディナンドを睨んだ。秘密主義で、隠したまま行動されることには慣れているけれど、文句くらいは言っても罰は当たらないと思う。

「それで、わたくしに何をさせるおつもりですか？　ジェルヴァージオを攻撃するような妨害はお手伝いできませんからね」

　警戒しつつ問いかけると、フェルディナンドは「私が君にそのようなことを頼むわけがなかろう。成功率が低すぎる」と呆れた口調で言った。たとえ事実でも、そこで成功率の低さについて言及されるとちょっと悔しい。

「君は供給を終えて中央棟へ戻ったら、転移の間から出る前にハルトムートかコルネリウスに連絡を入れるようにしなさい。エーレンフェストに連絡を入れて、休息が取れるように部屋を準備しておいてもらうつもりだ」

「休息ですか？」

「君にはそろそろ休息が必要であろう？　ブローチを作る時間がなくてアーレンスバッハの寮は使えぬが、まだ君達はエーレンフェストの寮に入れるはずだ」

　わたしは自分のマントを留めているブローチに視線を移した。アーレンスバッハへ移動する前に返そうとしたら、「正式にアウブとして承認されるまで持っておけ」と言われた物だ。

「あの、フェルディナンド様。わたくしの側仕えはアーレンスバッハへ連れていきましたよ？」

「エーレンフェストにはリヒャルダ、オティーリエ、ブリュンヒルデ達、君の側仕えも残っているではないか」

「リヒャルダは養父様のところへ戻りましたし、ブリュンヒルデも結婚準備で忙しいと思います。わたくしの側仕えとして動かすのは……」

　わたしが迷惑をかけるわけにはいかないと言ったところ、フェルディナンドは「迷惑ではなく、エーレンフェストに対する助力だ」と嫌な顔をした。

「エーレンフェストが後援していることを示すのが重要だからな。国境門に魔力を注げば、派手に国境門が光る。日が上がっているのでわかりにくいだろうが、境界門に騎士を置こうとしなかったアーレンスバッハでもない限り、騎士が異変に気付かぬはずがない。国境門を擁するアウブには非常事態が目に見えてわかる。おそらく中央へ急いでやって来るであろう。そこにアウブ・エーレンフェストの姿がないのは、今後を考えると良いとは言えぬ」

　先の政変でも勝ち組と負け組には明確な差があった。これから先のユルゲンシュミットについて発言権を得られるかどうかは大きな差になる。

「他領から見える形で後方支援をしてもらわなければ、いくら事前に情報提供をしたと言ってもダンケルフェルガー以外には受け入れられにくいし、この先エーレンフェストを庇いにくい。ゲオルギーネとの戦いがあった以上、ダンケルフェルガーと違って前線で戦うことは無理でも、後方支援ならばできるはずだ」

　とっくに夜が明けている。動こうと思えば動けない時間ではない、とフェルディナンドが言った。

「エーレンフェストもこの戦いを支えたということを内外に示すためだ。遠慮する必要はないので、しっかり体を休めなさい。君はその後が大変だからな」

「え！？　フェルディナンド様、わたくしに何をさせるおつもりですか！？」

「ハウフレッツェの国境門も魔力供給をしてくれれば助かるとは思っているが、無理に、とは言わぬ」

　質問の答えをはぐらかし、フェルディナンドは細々とした注意を始めた。

「ローゼマイン、私がここから移動したら魔力供給の間は他の者が入れぬように一度転移陣を封じておくように。今の君には護衛騎士もいないのだ。いくら用心してもしすぎということはない。戻ったらハルトムート達側近の言うことをよく聞いて、休息を必ず取るように。わかったな？」

　魔力供給が容易ではないくらいに妨害したくせに、まだジェルヴァージオがやって来ることを警戒して忠告するフェルディナンドを見ていると、いかに自分が危険に対する警戒心がないのか思い知らされる。

「わたくし、他にしておくことがございますか？」

　わたしが尋ねると、少し考えるように顎に片手を当てたフェルディナンドがもう片方の手でわたしの肩を軽く押した。突然肩を押されてよろめいたわたしを引き寄せて抱き留める。

「……ビックリするではありませんか。一体何の確認ですか？」

「この程度でよろけるならば、練習は必須だな」

「練習？　一体何のでしょう？」

　フェルディナンドは難しい顔で「間に合うか？」と呟きながら転移陣を作動させる。

「ちょっと待ってくださいませ、フェルディナンド様！　説明が足りません！」

「ケーシュルッセル　エアストエーデ」

　わたしの言葉は全く聞いていないようで、フェルディナンドは割り当てられていたハウフレッツェの国境門ではなく、貴族院の中央棟へ転移していった。

　……エーレンフェストで休憩してていいって……わたし、後で一体何をさせられるの？

　きっととんでもないことが待っている。それだけは確実だ。経験上、間違いない。

　こちらの事情は考慮してくれないフェルディナンドに心の中で文句を言いつつ、わたしはフェルディナンドに言われた通り、転移陣を一時封じて、再度魔力供給を始めた。

　クラッセンブルクの国境門への魔力供給を終え、ハウフレッツェの国境門へ移動して魔力を供給する。別にフェルディナンドのためではない。魔力が満ちていないとユルゲンシュミットが困るからだ。自分にそう言い聞かせながら魔力を供給した。

　……うぅ、ちょっと無理だったっぽい。

　回復薬と魔力の使い過ぎで頭が痛み始めた。首筋から額に向かって痛みに貫かれているような感じだ。

「休憩必須ってお見通されてる。何か悔しい。……っていうか、こっちも魔力供給するってお見通されてる。そっちの方がもっと悔しいんだけど」

　わたしはブツブツと独り言を言いながら、用心のために封じていた転移陣を作動させる。光と闇がで視界がいっぱいになる。ぐらりと揺れた視界に気分が悪くなり、わたしはその場にお行儀悪く座り込んできつく目を閉じた。

「ケーシュルッセル　エアストエーデ」

　しばらく経ってから目を開けると、そこは真っ白の壁で囲まれた転移の間だった。頭痛に転移酔いが重なって気分は最悪である。

「うぐぅ、気持ち悪い……」

　しかし、このまま転移の間で寝るわけにはいかない。わたしは気力を振り絞ってコルネリウス兄様に向けて「ただいま戻りました」と連絡用の手紙を飛ばした。すると、「扉の前にいる。寮まで騎獣で戻るから口を押さえて静かに出てきてほしい」という返事が来た。

　……口を押さえて？

　首を傾げながらもゆっくりと立ち上がり、わたしは声が出ないように口元を押さえてそっと扉を開く。アーレンスバッハの騎士達のマントの色が見え、コルネリウス兄様とアンゲリカの顔が見えたと思った瞬間、アンゲリカにバサリと布をかけられ、抱き上げられた。

　……何事！？

　頭から布をすっぽりと被っているせいで、事態が全く把握できない。けれど、今の自分に求められていることは声を出さないことだ。わたしは口元をしっかり押さえ、騎獣が駆け出す動きを感じていた。

「申し訳ございません、ローゼマイン様。こうでもしなければ、女神の御力に溢れるローゼマイン様を他領の者に気付かれぬままで寮までお連れすることができなかったのです」

　布が外されたのは、エーレンフェスト寮に入ってからだった。中央棟と繋がる扉ではなく、採集場所へ向かう時に使う方の玄関扉の前だ。呆然とした顔で並んでいる護衛騎士達を見回す。

「これはフェルディナンド様の指示ですか？　フェルディナンド様は今どうしているのです？……コルネリウス、レオノーレ、マティアス、ラウレンツ？」

　アンゲリカの名前を呼ばなかったのは、フェルディナンドから大した説明をされていないと判断したからであって、忘れているわけではない。

「あ、いや。その、何と言えば良いのか……。ハルトムートが涙を流して神に祈りを捧げていたが、まさかこれほどとは思わなかったな」

「何ですか、コルネリウス兄様？」

「……女神の御力だよ。ランツェナーヴェから押収した銀色の布を使って隠し、秘密裏に寮へ連れていくようにフェルディナンド様が厳命されるわけだ」

　フェルディナンドはそんな態度を微塵も感じさせなかったので全くわからなかったが、コルネリウス兄様によると、眩しくて直視しがたいくらい今のわたしは女神の力を感じるらしい。

「ローゼマイン様、フェルディナンド様からは休息を取らせるように、と命じられています。その、周囲を混乱させないようにこちらの布を再び被せ、お部屋までアンゲリカに運ばせてもよろしいでしょうか？」

　レオノーレがひどく申し訳なさそうに、しかし、やや視線を逸らしてそう言った。これっぽっちも自覚がないけれど、今のわたしは大変な状態らしい。周囲を混乱させる気はないし、気分がよくないので一刻も早く休みたい。

「構いません」

　わたしは再び布を被せられ、アンゲリカに運ばれた状態で寮の自室に入った。銀色の布を取り外されたところには、わたしの女性側近が忙しそうに動いている様子が見えた。クラリッサだけはわたしの姿を見た途端、胸の前で手を交差させ、涙を流しながら跪いたけれど。

「ローゼマイン様、何と神々しいのでしょう！　まさに女神の化身ではございませんか。ローゼマイン様の魔力が一気に塗り替わる瞬間をこの身で感じましたが、これほど女神の御力をまとっているとは思いませんでした。闇の神の祝福を受けた髪がより一層艶を増し、光の女神の祝福を受けた瞳は女神の御力に溢れ、その佇まいには……」

「クラリッサ、何の役にも立たないことを口にするのは後回しにして、姫様が休めるようにお薬の準備をなさい。そのように職務を投げ出すような有様で姫様の側近を名乗れると思うのですか？」

　リヒャルダがクラリッサを叱り飛ばしながら、オティーリエとベルティルデに寝台の準備を進めるようにテキパキと指示を出している。クラリッサが急いで薬の準備を始めると、リヒャルダはふぅと一つ息を吐いた。

「顔色があまりにも悪いですよ、姫様。湯浴みが負担でしたら、お食事の後、ヴァッシェンで軽く汚れを落としますけれど？」

「湯浴みだけではなく、お食事も負担なのですけれど……」

「お薬を飲む前に軽くお食事を摂るようにフェルディナンド様からお言葉がありました」

　仕事ができる文官の顔でクラリッサがこれから飲む薬について説明してくれる。短時間で回復するように少し強めのお薬らしい。湯浴みからは逃れられたけれど、食事からは逃れられないようだ。ブリュンヒルデが食事を運んできたのを見て、わたしは諦めて椅子に座った。

「寮にいる騎士達から後方支援のお話が届いてすぐにジルヴェスター様からわたくし達に命令が下ったのですよ。姫様が休める環境を最優先にするということで、わたくし達と料理人が一番に移動いたしました。他の者は移動の真っ最中だと思われます」

　リヒャルダは簡単にエーレンフェストの状況を説明しながら食事の給仕をしてくれる。リヒャルダの給仕を受けるのは久し振りだ。エーレンフェストの現状を聞いた後、わたしは椅子の後ろに護衛騎士として控えているレオノーレへ視線を向けた。

「レオノーレ、わたくしが祭壇から移動した後、どのような状態だったのか教えてください」

「神像が持つ神具から七つの貴色の柱が立ち、祭壇の上にいらっしゃった三人の姿が一斉に消えました。わたくし達が驚愕に目を見張る中、ダンケルフェルガーの騎士達は黙々と中央の者達を捕らえていました」

　わたし達がいるいないに関係なく、反乱を起こした者は捕らえなければならないということだったようだ。ラオブルートはマグダレーナやアウブ・ダンケルフェルガーと対峙し、戦い、敗れたらしい。

「わたくし達もダンケルフェルガーの騎士達と共に中央騎士団の者達を捕らえていました。すると、突然ハルトムートが、ローゼマイン様の魔力が女神によって塗り替えられたと涙を流し始めたのです」

　……何それ？　どんなふうに想像しても変な人だよ。

「他の名捧げをした側近達は魔力が変わったのはわかるが、女神かどうかはわからないと言っていました。ですが、何故わからないのかとハルトムートが怒り、そこからいかに神々しい力に溢れているのか、ローゼマイン様を称え始めました。あまりにも場違いで気持ちが悪かったので、中央騎士団が片付いた後もしばらくの間……フェルディナンド様が講堂へ入ってくるまではハルトムートを縛っておきました」

　……わぉ、レオノーレったら容赦ないね。

「ところが、フェルディナンド様が一人だけ講堂へお戻りになりました。そして、ローゼマイン様にメスティオノーラが降臨し、新たなツェントが選出されることになったとおっしゃったのです。ハルトムートはどうやら嘘を吐いていなかったようですね。今、フェルディナンド様は女神に申し付けられた通りに準備を整えていらっしゃいますよ」

　同じように荒唐無稽なことを言っても、フェルディナンドの言葉ならば信用されるらしい。ちょっとだけハルトムートが可哀想になった。

「レオノーレ、具体的にフェルディナンド様は何をしていらっしゃるのかしら？」

　女神に申し付けられたことがあるなんてわたしは全く聞いていない。恐る恐る尋ねると、レオノーレは講堂に戻ってきてすぐにフェルディナンドが次々と色々な者達に脅迫混じりの指示を出していたことを教えてくれた。

「まず、エーレンフェストに休息場所や食事を作るように指示を出していました。わたくし達も指示を出されました。女神からの命を奪ってはならぬ、と命じられたおっしゃって、ジェルヴァージオが戻った時には必ず捕らえるようにと各場所に騎士達を配置していらっしゃいました」

　それから、交代で休憩や食事を摂るようにも指示があったそうだ。アーレンスバッハの騎士達は糧食で済ませたけれど、ダンケルフェルガーの騎士達は交代で寮へ戻っているらしい。戦闘時に騎士達へ食事を送るのは、後方支援の大事な役目だそうだ。

「ローゼマイン様やわたくし達のお食事はエーレンフェストから出ています。フェルディナンド様のご命令で離宮に準備されていた食材がエーレンフェストの寮へ運ばれました。昼食はアーレンスバッハの騎士達の分も準備されるそうです」

　ランツェナーヴェの館から運び込まれた物だからアーレンスバッハの食材だ、とフェルディナンドが言ったそうだ。確かにその通りだと思う。エーレンフェストには料理人を貸し出してもらったらしい。

「後は、そうですね……。コルネリウスが耳にした分ですが、図書委員をしているヒルデブラント王子に図書館へ鍵を返させろ、とおっしゃっていたようです」

　まだどこに中央騎士団の裏切者が潜んでいるのかわからないのに、今すぐに行わなければならないことか、とマグダレーナは渋ったらしい。命じている相手がフェルディナンドである。子供を心配する母親の気持ちはよくわかる。

　フェルディナンドは、ヒルデブラント王子がラオブルートに唆されてシュタープを得たこと、そのための道を開いたことでランツェナーヴェの者達もシュタープを得ていることを伝えたらしい。息子が行ったことを知って青ざめたところに、「新しいツェントが選出される今、多少なりとも罰を軽くするための口添えは必要であろう？」と微笑んだそうだ。

　……今、貴族院へ来られる図書委員で暇そうなのってヒルデブラント王子だし、たったそれだけのためにハンネローレ様をダンケルフェルガーから呼び出すことはできないと思うよ。でも、親子の情を使っても完全に逃げ道を塞ぐ魔王、怖い！

　決して食が進むとは言えないレオノーレの話を聞きながら軽い食事を終えると、クラリッサが準備している薬を飲んだ。ブリュンヒルデが食器を下げて、ベルティルデによって髪飾りを外される。リヒャルダがわたしにヴァッシェンをかけると、オティーリエがすぐに着替えさせてくれて、寝台へ入るように言われた。

「レオノーレ、今はフェルディナンド様もお休みしているのですか？」

「いいえ、フェルディナンド様はアナスタージウス王子と共に中央神殿へ向かわれました。神殿長であるイマヌエルを探すため、ハルトムートはそちらへ同行しています」

　……中央神殿？　あ、聖典の鍵！？

　領地の神殿長に渡される聖典の鍵が次期アウブの保険であるように、中央神殿の聖典の鍵はユルゲンシュミットの礎に繋がる。どうやらフェルディナンドはジェルヴァージオがツェントになるための手段を全て潰してしまうつもりのようだ。

　……フェルディナンド様、国境門に魔力供給しないで何やってるの！？

　国境門に魔力供給する速さを競うディッターで勝負しているはずなのに、フェルディナンド一人だけ宝盗りディッターをしているようだ。

「起きたら奉納舞の練習をするように、とフェルディナンド様がおっしゃいました。王族とのお話し合いも行うようです。今のうちにゆっくりお休みくださいませ」

　……奉納舞！？　王族とのお話し合い！？　聞いてないけど！？

　薬が効いてきたわたしは反論することもできず、眠りに落ちた。

[------------------------------------------------]

魔王の暗躍　付け足し

「お疲れは取れましたか、姫様？　そろそろ五の鐘が鳴る頃です。もう少しお休みしていても構わないと思われますが……」

　リヒャルダの言葉に少し考える。まだ寝ていたいような気もするけれど、気分的には非常にすっきりしていた。下手に二度寝をするより、起きてしまった方が良いだろう。

「起きます。……フェルディナンド様は戻っていらっしゃるのですか？」

「昼食はこちらで摂られて、アウブと色々な打ち合わせをしたり、方々へオルドナンツを送ったりしていらっしゃいました。今はアーレンスバッハの騎士達と離宮の方で休息を取っているはずです。姫様がアーレンスバッハのことを気にかける必要がないように、とのことでした」

　わたしはアウブとして礎を染めておきながら、まだ貴族院の寮を使うためのブローチが作れていないので、アーレンスバッハの騎士達は寮に出入りできないのだ。ランツェナーヴェの館と繋がる離宮があってよかったけれど、良い思い出があるとは思えない離宮でフェルディナンドは本当に休めるのだろうか。そちらが不安だ。

「先にお茶の準備をいたしましょう。姫様は昼食を摂っていらっしゃらないので、軽食を準備させますね」

「お願いします。お茶の準備は一階に一室を準備してもらっても良いかしら？　皆から報告を聞きたいのです」

「アウブにお伺いして、許可を得てまいります。」

　リヒャルダがそう言ったので、わたしは何度か目を瞬かせた。後方支援をするならば、それに長けた養母様の方が采配を振るっていると思っていたのだ。

「養父様もこちらにいらっしゃるのですか？」

「今の姫様を衆目に晒すと大騒ぎになるので、明後日の昼食に王族をお茶会室へお招きしてお話し合いをすることになっています。昼食中にフェルディナンド様からのご指示があり、アウブ夫妻は準備に大忙しですよ」

　少し現状について話をした後、リヒャルダは天幕の向こうへ声をかけた。

「オティーリエ、男性の側近達に連絡を。ブリュンヒルデ、ベルティルデ。姫様のお召し替えを頼みましたよ。クラリッサ、フェルディナンド様の側近に姫様の起床をお知らせしてください」

　天幕の向こうで側近達が動き出したことが物音でわかった。

　ブリュンヒルデとベルティルデの姉妹が着替えを手伝ってくれる。見たことがない衣装だ、と見下ろしていると、ブリュンヒルデが困ったように微笑んだ。

「エーレンフェストで仮縫い中の衣装の完成をものすごく急かしているのです。こちらはギルベルタ商会の衣装ではなく、フロレンツィア様の専属が整えた衣装でございます。仮縫いの時点で完成品に使う生地を使っていたため、完成を早めることができたようです。明日にはギルベルタ商会の衣装も一着届くと思われます」

　髪型を整えてくれる。その手が少し震えているようにも感じられて、わたしは鏡越しにブリュンヒルデを見つめる。視線を感じ取ったブリュンヒルデが少し視線を逸らして、言葉を探すように頬に手を当てた。

「……これが女神の御力なのだと思いますけれど、ローゼマイン様を直視するためには強い意思が必要なのです。近付けば近付くほど恐れ多いという感覚が強くなり、思わず手が震えてしまいます。少し離れると、ローゼマイン様御自身がほんのりと光をまとっていらっしゃるようにも見受けられますよ」

「お姉様……あ、いえ、ブリュンヒルデのおっしゃる通り、ローゼマイン様はとても神々しくていらっしゃいます。わたくし、こうして間近にお仕えできる機会があって、本当に嬉しいです」

　……ねぇ、ベルティルデは目をキラキラさせて崇めるようにわたしを見てるけど、女神の御力で神々しくて恐れ多いって……もう人間じゃなくない？

　ハルトムートの大袈裟な褒め言葉ならば聞き流せば良いだけだけれど、これまで普通だった側近達に崇めるような目で見つめられるのは、中身が全く変わっていないだけに結構居た堪れない気分だ。

「このような状態のローゼマイン様を見たら、ヴィルマはきっと絵に残そうとするでしょうし、孤児院の皆は祈りを捧げると思います」

　少し離れたところにいたフィリーネが眩しそうな顔でわたしを見ながらクスクスと笑う。

「普通は魔力量が大きく離れると感じられなくなりますけれど、女神の御力はどなたにも感じられるようですね。エーレンフェストから一緒に移動してきた者は皆、ローゼマイン様のお部屋の方を気にしていらっしゃいました。フェルディナンド様のご指示でお布団の上から銀色の布をかけた後は、あまり気にならなくなりましたけれど……」

　自覚は全くなかったが、周囲はなかなか大変なことになっているらしい。この女神の御力という物は消せるのだろうか。日常生活が非常に不便極まりないことになりそうだ。

「ローゼマイン様のお休み中は、他の護衛騎士達も休憩していたので、わたくしとダームエルが護衛をしていたのですよ。二度と体験することがないようなすごい戦いだったそうですね。講堂の中で溺れそうだったとラウレンツが言っていました。全く想像できなくて、わたくしも一緒に体験したかったです」

　わたしが眠っている間にユーディットとダームエルも寮に到着していたらしい。巨大洗濯機のようになっていた講堂での戦いに参加してみたかったとは、ユーディットはなかなかすごい。

「講堂での戦いではユーディットの投擲が欲しいと思っていました。ユーディットが未成年で残念でしたよ」

　ユーディットならばラオブルートに届いたのに、と思った時の話をすると、ユーディットが誇らしそうに笑った。

　そんな会話をしながら着替えを終えたわたしは、やはり面倒な女神の御力を遮るための銀色の布をヴェールのように被って、お茶を飲むための部屋へ移動する。わたしを横抱きにして歩くのは、身体強化が得意なアンゲリカだ。

　……この銀色の布って遮光性が強くて、唯一見える足元も暗くて危険なんだよ！

　できることならばレッサーくんで移動したかったが、「仮に騎獣を使う許可がアウブから出たとしても、布を被って前が見えない状態でどうやって動かすのですか？」とレオノーレから冷静なツッコミを受けて諦めた。

　……小さい子供じゃないのに抱き上げられて運ばれるなんて！

　布の中で一人「のおおおぉぉぉ！」と恥ずかしさに打ち震えているうちに、お茶という名の報告会を行う部屋へ運び込まれる。

「よく眠れたようだな？」

　フェルディナンドの声がして、わたしは布を取った。エックハルト兄様とユストクスが少し驚いたように目を見張り、「なるほど、これは確かに……」と頷いている。部屋に並んでいる側近達の中にはダームエルの姿もある。

「よく眠れたことには感謝していますけれど、フェルディナンド様は休めたのですか？」

「少々薬を使ったが、しっかり休んだ」

　少々薬を使ったというところに引っかかって、わたしはフェルディナンドを軽く睨む。

「もしかして、あの悪夢を見て飛び起きる薬ですか？」

「場所が悪くてどうせ夢見が悪いならば、薬を使った方がよく休めて効率的だ」

　……つまり、あんまり休んでないってことじゃない？

　わたしがむぅっと唇を尖らせている間に、側仕え達がお茶の支度をしていく。わたしとフェルディナンドの前に軽食が並んでいるところを見れば、フェルディナンドも昼食を摂っていないようだ。

「アーレンスバッハの騎士達が離宮を使って交代で休息を取っていることは伺いました。捕らえられていた者達はどうなったのでしょう？」

「まだ離宮に捕らえたままだ。中央騎士団が全く使い物にならぬ。罪状に関しても、王族との話し合いで決めることになった。できるだけ命を奪わぬように、という女神の意見をどうするのか話し合わねばならぬ」

　……できるだけ丸投げしたいってことですね。

「アウブ夫妻が王族の招待準備で忙しいため、アーレンスバッハの騎士達への支援はシャルロッテが采配を振るってくれている。後程改めてお礼が必要だろう」

　先日のゲオルギーネとの戦いの中、戦闘に出た養母様の代わりにシャルロッテは後方支援の責任者として活躍していたらしい。その腕を今回も振るっているそうだ。頼もしい。

「彼女は第一夫人向きだな。誰かを支えることに秀でているように感じた」

「あら、フェルディナンド様がそのように褒めるなんて珍しいですね。お礼と一緒にシャルロッテに伝えておきましょう」

「あぁ。できるだけ大々的に行うと良い。エーレンフェストの宣伝になる」

　シャルロッテの話が一段落したところで、範囲指定の盗聴防止の魔術具が作動した。わたしはブリュンヒルデが淹れてくれたお茶を飲みながらフェルディナンドを見る。

「フェルディナンド様。わたくし、悠長に眠っていてよかったのでしょうか？　始まりの庭へ行かなければならないでしょう？」

「問題あるまい。待っている相手は十年の期間が開いていても気にならない時間感覚の持ち主だ。新しいツェントを連れていく、もしくは、新しいツェントの選出が終わったことを報告に行った方が喜ばれるであろう」

　確かにエアヴェルミーンは十年以上前の政変と今回の騒動がほぼ繋がっているような時間感覚の持ち主なので、一日二日待たせたところで大した違いはなさそうだ。

「でも、ジェルヴァージオはどうなったのですか？　戻ったところを捕らえたのでしょうか？」

「いや、いずれ君に回収してもらう予定だ」

「……回収、ですか？」

　何だか嫌な響きである。

「ジェルヴァージオに何をしたのですか？」

「まず、自分の転移陣が完成すると同時にジェルヴァージオの手を打ち抜いて、集中を切らせ、描きかけの魔法陣を消滅させて時間を稼いだ」

「エアヴェルミーン様の前で、ですか！？」

　命を大事に、と言われた場所であまりにも乱暴な時間稼ぎをしていたことに目玉が飛び出るかと思った。わたしのいた国境門に現れた時にはすでに妨害行為をした後だったとは思わなかったのだ。

「命を奪うなと言われたところであるし、時間稼ぎのための攻撃だったので、一応手の傷が回復する程度の薬は渡してやったが？」

　……そんな得意そうに言うことじゃないと思うよ！？

「まず、とおっしゃいましたよね？　つまり、まだあるのですよね？　中央神殿へ向かったと聞きましたけれど……」

　貴族院でフェルディナンドがしていたことは側近達の話を繋ぎ合わせれば何となくわかるけれど、中央神殿のことは全くわからない。

「聖典とその鍵、それから、ランツェナーヴェの王とジェルヴァージオのメダルを回収してきた。あまりにもイマヌエルがうるさいので黙らせたが、命は無事だ。死ねないようにしてある」

　……ちょっと待って。何かすごく物騒な響きだったよ、今の。

　わたしは思わず自分が身につけているお守りの一つを服の上から押さえた。ここに刻まれた魔法陣を使ったのだろうか。

「回収した聖典と鍵は、君に名を捧げた側近であり、神官長職にあったハルトムートが管理している。適任であろう？」

　わたしがちらりとハルトムートに視線を向けると、壁際に並んでいるハルトムートはキリッとした顔でこちらを見ていた。寝る前に聞いた講堂での奇行は空耳だったのだろうかと思うような真面目な顔だ。

「えーと、メダルは……？」

「メダルは領主候補生の領分ではないか。ジェルヴァージオのメダルは破棄したが、ランツェナーヴェ王の分は私が管理している。こちらの処遇については王族と話し合うつもりだ」

「え？　あの、待ってくださいませ。先程破棄と聞こえたのですが……」

　ついさっき「命は奪わぬ」と言っていたのはどの口なのか。そう思ってフェルディナンドを見ると、フェルディナンドはしれっとした顔で「嘘は吐いておらぬ」と言った。

「ギレッセンマイアーの国境門にいた時に廃棄したので、命を奪うことにはならぬ。シュタープを失っただけだ。そのためにわざわざ時間稼ぎをしたり、転移陣を見張らせたりしていたのだ」

「あ……」

　突然シュタープを奪われたジェルヴァージオは、当然メスティオノーラの書も手にできなくなる。国境門への魔力供給はできず、転移陣も使えなくなって国境門から出られなくなっているはずだ。「回収」という言葉の意味がやっとわかった。

　……わたし、絶対にフェルディナンド様の敵に回りたくないよ。怖すぎる。

　フェルディナンドが「王族との話し合いをする前に主犯格を捕らえておいた方が有効ではあるが、反撃する力が残っていないくらいに弱っている方が望ましい」と言いながら優雅にお茶を飲んでいる姿を見て、そう思う。

「……でも、フェルディナンド様。ジェルヴァージオ相手にそこまで悪辣な手を使う必要があったのですか？　それほど警戒しなくても、ジェルヴァージオはあまり悪い人には見えませんでしたよ。アーレンスバッハの貴族達を襲ったのはディートリンデ様の許可を得た他の方だったようですし、話し合えば分かり合えたと……」

　最初の接し方が違えば、ジェルヴァージオとは分かり合えたかもしれない。わたしの感想にフェルディナンドは「もしや危機管理に関する記憶も消えたか？」と心配そうな顔になった。

「あの者が望んだのはランツェナーヴェの者を救うこと、今のツェントに反した中央騎士団の者達に報いることだ。今、ユルゲンシュミットにいる貴族達やランツェナーヴェの者を攻撃した我々に関しては何も口にしていない。ユルゲンシュミットのツェントを目指してはいても、思考の根本からランツェナーヴェの王だったではないか」

　腹の中で何を考えているのか知れたものではない、とフェルディナンドは言った。女神が降臨した場で諍いを興すようなことをせずに表面だけ仲良くするくらい、貴族ならば当然のことだそうだ。フェルディナンドとジェルヴァージオがずいぶんと仲良くなったと思ったけれど、別にそういうわけではなかったらしい。

「あの離宮で生き延び、ランツェナーヴェの王になるための教育を受けながら、ランツェナーヴェへ向かうことを厭ってユルゲンシュミットのツェントを目指していた男だぞ？　とても真っ当な性根の持ち主だとは思えぬ。君には想像もできぬ生い立ちだ。理解できないままで構わないが、あまり簡単に心を許すものではない。この愚か者」

「申し訳ありませんでした」

　余計なことを言ったせいでお説教を食らう羽目になった。反省しなければならない。

「ジェルヴァージオ以外のランツェナーヴェの者達の扱いはどうなるのですか？」

「明後日の話し合い次第だ」

　気が急いている時に、明後日というのはとても遠くに感じられる。じりじりとした気分で、わたしはフェルディナンドに尋ねた。

「王族とのお話し合いは日数に余裕があるようですけれど、急ぎではないのですか？」

「もっとも急ぐべきだったのは、ランツェナーヴェの者達の捕獲とツェントになる資格を持つジェルヴァージオの排除だ。それさえ終われば、国境門が光る様子に気付いて集合中のアウブ達や新しいツェントの選出で騒いでいる王族など待たせておけばよい」

　エーレンフェストやダンケルフェルガーから緊急だと連絡を入れたのに、「三日後」というような返事をしてきた者達に対して、こちらが疲労困憊のまま付き合う必要はないとフェルディナンドは言い切った。アナスタージウスやマグダレーナがこちらに協力していたので、一応意見を聞き入れて大急ぎで場を整えるということで明後日のお昼になったそうだ。

「それに、明後日以降でなければ君の衣装が仕上がらないと聞いている。さすがに必要であろう？」

「衣装は大事ですよね。何だか今は見た目が大変なことになっているようですし……」

　フェルディナンドの態度が変わらなすぎたせいで全く自覚ができなかったと文句を言うと、「中身が変わった間は態度も変えていたぞ」と睨まれた。

　……そうか。フェルディナンド様でも女神様の前だったら態度を変えるのか。無礼者街道一直線かと思ってたよ。新発見。まぁ、発見したところで、わたしに対する態度が変わるわけじゃないんだけど。

「王族とのお話し合いまで、わたくしはどのように過ごせば良いのですか？」

「奉納舞の稽古をするように言っておいたはずだが？」

「……何のために、ですか？　歩く程度ならば慣れてきましたけれど、舞うとなれば話は別です。今のわたくしでは奉納舞をまともに舞えると思えません」

　やりたくないと遠回しに訴えたら、「だから、稽古するのだ」と反論された。

「新しいツェントを連れて始まりの庭へ戻るためには御加護の再取得より、奉納舞の方が良い。他の者にはそう簡単に真似できぬからな。女神の化身と言っても過言ではないその見た目で、どこぞの誰かのように派手に転倒するわけにはいくまい？」

「わたくし、始まりの庭へ戻るために奉納舞を行うなんて初めて聞きましたよ！？」

　そんな大役のために奉納舞をするなんて聞いていない。

「そうか？　だが、新しいツェントを始まりの庭へ連れていくため、それから、真のツェント候補が舞えばどのようになるのか無駄吠えの多い外野に知らせるためにそういう流れになっている」

「流れになっているではなく、フェルディナンド様がそういう流れにしたのでしょう！」

　ふんぬぅ！　とわたしが元凶を見れば、フェルディナンドがとても不機嫌な時のキラキラ笑顔になった。

「何か問題があるか？」

「……ないです。奉納舞のお稽古に励みます」

「よろしい」

　……よろしくないよ！　わろし！

[------------------------------------------------]

顔色の悪い王族　その1

　ふらふら出歩くなと言われていたわたしは、奉納舞の練習と王族への要求について書かれた内容の暗記をするくらいしかできなかった。部屋から出られる機会は多くない。アーレンスバッハの騎士達が食事を摂りに来た時に労ったり、励ましたりする時と食事の時くらいだ。

　離宮に関する報告をするという建前で、食事時にはフェルディナンドが寮へやって来る。そのため、城にいた時のように領主一族は食堂ではなく、別室で食事を摂り、情報交換の時間になっていた。

　最初に食堂へ行った時、わたしを間近で見た養母様とシャルロッテは気後れしたような顔を見せたけれど、養父様だけは「化けたな」と言った後、「どのようにして光っているのだ、これは？」と好奇心丸出しの顔で眺め始めた。養母様に嗜められていたけれど、女神の御力を前にしても変わらない姿にかなり安心した。

「君の許可と魔石で、先程離宮の転移陣を作動させた。伝令を遣わしてあるので、早ければ鐘一つ分くらいで君の荷物を抱えた側近がこちらへやって来るであろう」

　ちなみに、離宮の使用許可はすでに得ている。元々わたしに与えられるはずの離宮だったそうなので、好きなように使っても構わないと王族に言われたらしい。フェルディナンドが不機嫌最高潮という感じの笑みを浮かべて教えてくれたが、寮に入れないアーレンスバッハの者達が野宿するようなことにならなくてよかったと思っている。

「助かりました。ありがとう存じます、フェルディナンド様。わたくしの荷物もそうですが、アーレンスバッハへ同行した側近達の多くが荷物をアーレンスバッハへ送ったはずなので、ないと困る物もあったようです。それに、アーレンスバッハだけが行き来できないのは困りますから……どうかしたのですか、養父様？」

　首を傾げてみれば、養父様だけではなかった。何だか周囲の顔色がおかしい。養父様と養母様は挙動不審でお父様と視線を交わし合っていて、シャルロッテも何か言いたそうにオロオロしている。お父様は苦い顔で、何の合図か知らないけれど、養父様に目配せした。居心地悪そうに養父様が一つ咳払いをして、口を開く。

「あ～、ゴホン。ローゼマイン。フェルディナンドが離宮の転移陣を作動させたと言ったが……」

「えぇ。救出するために必要だったので、フェルディナンド様の魔力は供給の間に登録済みなのです。まさか女神の降臨でわたくしの魔力に変化があると思いませんでしたから、フェルディナンド様の登録があって助かりました」

　フェルディナンドは今アーレンスバッハ唯一の領主一族としてわたしの代わりに色々と奔走してくれているのだ。人生、何が幸いするのかわからない。

「フェルディナンド、それは……その、つまり、そういう意味なのか？　最高神への挨拶さえ済まさずに、秋を待たずに冬の到来を早めたのだな？」

「何を言っているのだ、其方は？　少し落ち着け」

「其方は落ち着きすぎだ。わけがわからぬ！」

　……わけがわからないのはこっちですけど。

　わたしがポカーンとしていると、養母様がニコニコと穏やかな笑顔で間に割って入る。

「ジルヴェスター様、詳しいお話は殿方同士でどうぞ。今はお食事中でしてよ」

　王族とのお話し合いが行われる当日の午前中にギルベルタ商会の衣装が届けられた。エーレンフェストの染め布にフェルディナンドからもらったアーレンスバッハの薄布を使った衣装である。衣装に合わせた髪飾りも入っていた。わたしの注文通りだ。

「薄布を通してほんのりと光が見えるようで、とても美しいです。トゥーリの髪飾りも相変わらず素晴らしいですね」

「えぇ。本当に綺麗です」

　……トゥーリって誰？　わたしの髪飾り職人？

　着替えを手伝ってくれるブリュンヒルデに笑って頷きながら、わたしはものすごく混乱していた。自分の髪飾り職人の名前をすっかり忘れていたし、顔を合わせて注文したはずなのにトゥーリという人物の顔が全く思い浮かばないのだ。

　……なんで？……これが女神に体を貸した代償？

　いくら考えてみてもわからないまま、身支度は終わる。他に何を忘れているのだろうか。忘れていても問題のないことなのだろうか。背筋がひやりとした。胃の辺りが引き絞られるように痛んだ。自分が一体何を忘れているのか、どうすれば思い出せるのかわからない。自覚がないままに不自然な形で記憶を失っている。それは何とも言えない恐怖だった。

　……落ち着け。大丈夫。何か方法があるはず。

　目を覚ました直後も記憶が混乱していてエアヴェルミーン達のことをすっかり忘れていたけれど、すぐに思い出せた。希望的な予想になるけれど、女神によって消えている記憶は完全に失われているわけではないはずだ。

「姫様、フェルディナンド様がお付きですよ。先に打ち合わせを行いたいそうです」

　女神関連の相談ができる人の到着を知らされたわたしは、すぐさま部屋を出ようとした。動いた瞬間、アンゲリカに銀色の布を被せられて抱き上げられる。

「アンゲリカ、もう少し丁寧にローゼマイン様に接してくださいませ。動きが少々乱雑になってきています。ローゼマイン様は荷物ではございません。女神の化身をお運びする栄誉をいただいていることを自覚し、恭しく丁寧に扱ってくださいませ」

「わかりました。以後、気を付けます」

　クラリッサがわたしの扱いについてアンゲリカに文句を言っているのが聞こえる。確かに段々アンゲリカが慣れて、扱いが作業っぽくになってきたなとは思ったけれど、今はアンゲリカの運び方より記憶の欠損の方がよほど気になる。少々乱暴でもいいので、早く運んでほしい。

　お茶会室に入ると、フェルディナンドがすでに範囲指定の盗聴防止の魔術具を作動させて待っていた。向かい合わせにある椅子に座ると、側仕え達がお茶の準備をして範囲から出ていく。

「ローゼマイン、渡してあった内容は覚えたか？」

「覚えましたけれど……それより、大変なのです。わたくし、やはり記憶が欠けています。この髪飾りを作った職人の名前や顔が思い出せなくて……」

　わたしは自分の髪に挿されている髪飾りに触れながら、フェルディナンドに記憶の欠損について訴えた。けれど、フェルディナンドは特に動じた様子も見せずに頷いた。

「さもありなん。おそらくその衣装の布を染めた染色職人の名前や顔も繋がっていないのではないか？」

「染色職人？……繋がっていません。フェルディナンド様は何かご存じなのですか？　記憶が消えているのではなく、繋がっていないとおっしゃる根拠は何ですか？　女神様から何か伺っているのですか？　教えてくださいませ」

　わたしが思わず立ち上がると、座り直すように言われた。わたしとしては肩をつかんで揺さぶりながら問い詰めたいくらいに気が急いているのだけれど、声が聞こえないだけで姿は控えている側近達から丸見えなのだ。

「……図書館に君を押し込めておきたかったメスティオノーラが干渉したのは、読書に対する執着より深く心の内に入り込んでいる記憶だそうだ。消したわけではなく、繋がりが切れている状態だと聞いている。それ以上は具体的な答えを得られなかったが、君にとって女神の図書館より優先する存在はそれほど多くない。人物ならば予測可能だが、無意識の内に抱え込んでいる事柄に関しては予測が困難かもしれない」

　自分では全くわからないけれど、読書より深く心に根付いている記憶というのは、わたしにとって何よりも大事なことのはずだ。それが消えたままというのは困る。

「どのようにすれば、記憶が戻るのですか？　フェルディナンド様にはわかるのですか？」

「薬の類や時間がない以上、今は難しい。少なくとも新しいツェントの選出が終わってからだ。君にとって大事な存在はほとんどが平民でエーレンフェストにいる。貴族院で遭遇してすれ違うことはない。後で協力するので、もう少し待っていなさい」

「後で、ですか？　絶対ですね？」

　わたしが念を押すと、フェルディナンドは一つ頷いて請け負ってくれた。フェルディナンドが方法を知っているならば、少しは安心できる。

「打ち合わせを優先しても良いか？　時間がない」

「はい」

「アウブ・エーレンフェスト、この度は話し合いの場を提供いただき、ありがたく存じます。先の戦いではダンケルフェルガーに本物のディッターを経験させてくださり、感謝の極みです」

　四の鐘が鳴るとほぼ同時に、アウブ・ダンケルフェルガーの夫妻とその側近がやって来た。招待主はエーレンフェストのアウブ夫妻なので、二人が客を出迎えている。今日のわたしとフェルディナンドは招待客なのだ。

　お茶会室に入ってきたアウブ・ダンケルフェルガー達は先に席に着いているわたしを見て大きく目を見開いた後、真っ直ぐにわたしの前へ歩いてくる。ちらりとフェルディナンドに視線を向けると、フェルディナンドは一つ頷いた。そのまま待機していろという合図である。

　ダンケルフェルガーのアウブ夫妻がわたしの前に跪いた。

「英知の女神　メスティオノーラよ。ダンケルフェルガーにどうか祝福を賜らんことを」

　わたしの周囲の者達には今までと対応を変えないように、とフェルディナンドが予め言っておいてくれたので、ハルトムートやクラリッサを除くと、このように跪かれることはなかった。けれど、これが女神の御力を前にした貴族の普通の対応らしい。

　わたしではなくて、女神の御力に対して跪いているだけだから調子に乗ると、お力が消えた時に大変なことになる、と言われた。調子に乗るのがどういうことなのかわからないけれど、これまではわたしの方が下の立場で接していたのに、アウブ・ダンケルフェルガーがわたしの前に跪いているのだ。初めてベンノ達に跪かれた時のような居た堪れなさを感じる。

「アウブ・ダンケルフェルガー。申し訳ないのですけれど、わたくしは女神の御力を得ているだけです。中はローゼマインのままですから、女神としての祝福はできません」

「おや、それは残念ですな」

　少し砕けた対応にはなったけれど、やはり女神の御力の影響はあるようで、ダンケルフェルガーのアウブ夫妻はわたしが上位の者であるという態度は崩さない。

「まさか本物の女神の化身と共に戦えるなど、全く考えていませんでした。できることならば自分達がどのように活躍したのか、お目に入れたかったと我が領地の騎士達が悔しがっておりました」

　側仕え達がお茶を淹れ始める間も会話が始まる。主に、アウブ・ダンケルフェルガーと騎士達が今回の戦いに置いてどのような活躍をしたのかが話題だ。まだダンケルフェルガーの寮内では大規模ディッターの興奮が冷めやらぬ騎士達が多いらしい。

　ランツェナーヴェの者達の見張りや尋問をしているアーレンスバッハの騎士達は祝勝会の気分ではなく、ピリピリしているらしいのに大きな違いだ。

「王族の対応によってはアウブ・ダンケルフェルガーがツェントに任命されると伺っています。……今回の事態に王族はどのような対応をするのかしら？」

　第一夫人が心配そうにそう言ながら扉の方を見遣る。わたしも王族が心配でならない。同じように扉の方を見た時、来訪者の知らせがあったようで側仕え達によって扉が開かれた。

「アウブ・エーレンフェスト。この場の提供に感謝する」

　少し掠れたトラオクヴァールの挨拶が聞こえ、王族がぞろぞろと入って来る。げっそりとしているトラオクヴァールと第一夫人、ジギスヴァルトとアドルフィーネ、アナスタージウスとエグランティーヌ、それから、春なのに円筒状になっている毛皮のマフに両手を入れているヒルデブラントとマグダレーナ。第三夫人のマグダレーナが一緒なのは、講堂での戦いに参加したこと、ヒルデブラントの母親であることが理由だ。

　……誰の顔色も悪いな。多分アナスタージウス王子やマグダレーナ様から色々と聞かされていると思うし……。

　トラオクヴァールを先頭に王族が並んでわたしの前に跪いた。

「英知の女神　メスティオノーラよ。我等にどうか祝福を賜らんことを」

「貴方達の誠意と努力の分には報いたいと思っています。ジギスヴァルト王子には許可証もいただきましたし……」

　わたしはハルトムートに視線を向ける。すぐに革袋を持って、ハルトムートがやって来た。ジギスヴァルトは養父様とわたしを交互に見て、少し気分を害したような困った顔になる。

「いえ、それは……」

「本当に申し訳ございません。せっかく許可証をいただいたのですけれど、激しい戦いの連続だったため、鎖が傷んでしまいました。なるべく早くお返ししなければならないと思っていたのです」

　わたしはハルトムートから受け取った革袋から許可証を取り出す。本当に、可能な限り早く返さなければならないのだ。昨日の夜、お返しする物の確認をしていたら垂れ流し状態になっている女神の御力に当てられてしまい、鎖は完全に金粉化してしまったのだ。

「ローゼマイン、それを素手でつかんでは……」

「あ！」

　フェルディナンドの注意は少し遅かった。魔石部分は形を保っていたはずなのに、わたしがつまんでしまったため、サラサラと金粉になっていく。跪いている王族が信じられないものを見たように息を呑んだのがわかった。ちょっとしたうっかりだ。許してほしい。

「か、重ね重ね申し訳ございません。……でも、女神の御力で金粉化したのですから、調合の素材としては希少価値が高くて、魔力含有量も多いでしょうし、属性も多くて全ての値が高いと思われますよ」

　わたしは少しばかり視線を逸らしながら、金粉の入った革袋ごとジギスヴァルトに差し出す。革袋を受け取ったジギスヴァルトは数秒間固まっていたが、ニコリと穏やかな微笑みを浮かべて受け取ってくれた。

「この許可証がお役に立てたようで何よりです」

　ジギスヴァルトが何とか立ち直ったらしいところで、フッとフェルディナンドが笑みを漏らして、わたしの髪飾りに触れた。

「女神の御力による金粉ですか。ジギスヴァルト王子が羨ましい限りです」

　……こんなところで素材のおねだり！？　マッドサイエンティストめ。挨拶途中の王族の目が泳いでるじゃない！

　空気を読んでください、と心の中で怒りながら、わたしは女神らしい微笑みを浮かべる。

「あら、フェルディナンド様も必要でしたら、金粉化いたしますよ。ただし、御自分で素材や魔石は準備してくださいませ」

「メスティオノーラの化身の寛大なお心に感謝いたします」

　フェルディナンドが魔王のような毒々しい笑みを浮かべて、からかうような言葉を口にする。よほど新しい研究素材が嬉しいのか、ずいぶんと機嫌が良いようだ。

　……フェルディナンド様の機嫌が良いのはいいことだよ。王族のためにも……。

「お話し合いの前に昼食を摂りましょう」

　わたしが席に着くように促した。全員が席に着き、側仕え達は給仕の仕事を始める。同行させる側近は最低限の人数でお願いしているけれど、全領地の領主候補生を招いたお茶会の時よりも少し手狭な感じだ。

　ヒルデブラントのマフが外される。季節外れだと感じたマフの下にはシュタープを封じる手枷がはめられていた。王族以外の者達の視線がそこに集中する。

「シュタープは本来ならば入手しているはずがない物です。不正をして入手した物は、その使用を禁じなければなりません」

　厳しいマグダレーナの言葉にヒルデブラントが泣くのを必死にこらえているような顔で俯いた。すでに自分が犯した罪について懇々と言い聞かされたことがわかる。唆されたのであっても、罪は罪。ヴィルフリートが知らずに白の塔に入った時のことを思い出して苦い気持ちになった。

　……あの時みたいに何とかできないかな。

　ヒルデブラントを見つめていると、エグランティーヌがじっとわたしを見ていることに気が付いた。相変わらず綺麗な人だ。でも、何を求められている微笑みなのかわからないので、曖昧に微笑んでおくだけにした。

「本日はアーレンスバッハの食材をエーレンフェストの調理方法で仕上げたメニューになっています」

　養父様がメニューの紹介から昼食が始まった。食事中の話題は、中央騎士団の取り調べと今の貴族院の現状についてだった。

「ラオブルートに扇動された騎士団の取り調べはかなり進んでいます。講堂には中央騎士団の者だけではなく、ランツェナーヴェの者達も交じっていたようです。取り調べに立ち会った文官によると、講堂にいた者はかなりトルークの影響が薄れていたと聞きました。やや曖昧な部分はあるものの、記憶を読むことができるため、犯罪者や関係者の識別がかなり容易になっています」

　ジギスヴァルトの言葉に、フェルディナンドがちらりとわたしを見た。

「君がランツェナーヴェから持ち込まれた物を全て洗い流したからだ」

「水の女神の御力はすごいですね」

　まさかトルークの洗い流しまでできるとは思わなかった。巻き込まれて観覧席に打ち上げられていたアナスタージウスは嫌な顔をしていたけれど、さすがエーヴィリーベを押し流して春を招く力を持つ女神様である。

　他にもトルークを使われている者がいるかもしれないということで、中央の貴族はほぼ全員がヴァッシェンを受けているそうだ。トルーク未使用者は数秒で水が消えるが、使用された者は影響が薄れるまで消えない。

「私は今回の責任者として処刑される前に、自らの側近によって溺死させられるかと思いました」

　やや遠い目でそう言ったのはトラオクヴァールだ。ジェルヴァージオを次期ツェントにするため、暗躍していたラオブルートに長期間に渡って使われていたようで影響が一番深刻だったらしい。

「貴族院の現状ですけれど、ダンケルフェルガーからの救援要請に加えて、国境門が光ったことでアウブ・クラッセンブルクは急いで駆けつけたそうです」

「ギレッセンマイアーやハウフレッツェも同じです。領主会議の時期ではないのですけれど、貴族院に全てのアウブが集まりつつある状態ですね」

　エグランティーヌとアドルフィーネがそう言った。ダンケルフェルガーから救援要請のあった上位領地は「アーレンスバッハからランツェナーヴェの者達が中央に乗り込んでいる」という情報までしか持っていないので、すでに戦闘が終わっている貴族院で必死に情報を集めようとしているらしい。けれど、王族もダンケルフェルガーも先のことが何一つ決まっていないため、今は黙秘状態だそうだ。

　食事をおいしく感じられるくらいの現状報告を話題にし、昼食を終えると、食後のデザートとお茶が運ばれてくる。その準備をしたら、側近達は一旦下げられた。ここから先の話し合いは側近抜きで行うことになっている。

　必要になればオルドナンツで呼ぶようにして側近達に下がってもらった後、わたしは皆を見回して一度ゆっくりと深呼吸した。

「では、新しいツェントの選出についてお話を始めたいと思います。皆様もすでにご存じでしょうが、先日、わたくしに英知の女神　メスティオノーラが降臨しました。メスティオノーラもエアヴェルミーン様もいち早くユルゲンシュミットに新たなツェントをお望みです」

「では、父上にグルトリスハイトを……」

「ジギスヴァルト様」

　ジギスヴァルトがトラオクヴァールを庇うように発言しかけ、隣に座っているアドルフィーネに「上位の方のお言葉を遮っていらっしゃいます」と止められた。王族育ちで父親以外の上位を知らないせいだろう。

ジギスヴァルトはハッとしたように姿勢を正し、「申し訳ございません」とわたしに先を促す。

「神々が望むツェントは、ユルゲンシュミットの礎を染められる者。今の王族の皆様が供給しているところはユルゲンシュミットの礎ではないため、もうじき魔力が尽きてユルゲンシュミット自体が崩壊してしまうそうです」

　王族が一斉に目を見開いた。衝撃だっただろう。必死になって魔力を注いでいた礎が別物だったと言われたのだから。

「完全に別物というわけでもないのですよ。中央の王宮にある供給の間は中央神殿の祈りの間と繋がっていて、中央神殿の祈りの間にある魔術具が貴族院にある供給の間に繋がっています。その供給の間から礎に魔力が送られています。魔力を送るための魔術具に魔力が必要になるので、礎まで届いてはいるのですけれど、ユルゲンシュミットを維持するために必要な量には全く足りていません」

　貴族院にあるユルゲンシュミットの礎に届くまでに魔力のロスが多すぎるのである。徒労感に変わりはないだろう。

「では、尚更早くグルトリスハイトを……」

「えぇ、新しいツェントの選出が必要です。新しいツェントには神々からの要求を呑んでいただくことになります。先にそれをご承知おきください」

「神々からの要求だ、と？」

　アナスタージウスが目を丸くするのを見つめながら、わたしはコクリと頷いた。神々からの要求ということで、皆が一度姿勢を正した。かしこまった皆には悪いけれど、神々の要求ではなく、神々の言葉を良いように解釈したフェルディナンドの要求だ。

「一刻も早く礎を満たすこと、ランツェナーヴェの者達をユルゲンシュミットの者として受け入れること、今回の騒動に関しては命を奪う処罰は許されないこと、次代のツェントは自力でメスティオノーラより英知を得た者にすること。大まかには以上です」

　わたしの言葉にトラオクヴァールが目を見開いた。

「一刻早く礎を満たすというのは理解できます。だが、ランツェナーヴェの者達をユルゲンシュミットの者として受け入れるというのは……」

　他の者達が承知しないだろう、と苦しそうに言葉を放つ。フェルディナンドが緩く首を横に振った。

「受け入れるだけです。別に貴族として遇する必要もありません。ヒルデブラント王子と同様に貴族院に通ったわけでもなく、不正入手したシュタープです。封じてしまえばよいではありませんか。あとは、当人の罪によって牢に繋いで魔力を搾り取るか、中央神殿の神官や巫女にしてユルゲンシュミットにその魔力を捧げてもらえば良いだけです」

　ランツェナーヴェのために魔力を搾り取られるのを厭って、ユルゲンシュミットを侵略しようとした者達がユルゲンシュミットのために魔力を搾り取られることになるのだ。閉じ込められるのは可哀想だとは思うけれど、自分達の行いの結果だし、蹂躙されて突然殺されたアーレンスバッハの貴族達に比べれば命があるだけマシだと思う。わたしはフェルディナンドの意見に反対する気は起きなかった。

　……ユルゲンシュミットの貴族なんて、どうせ全員がユルゲンシュミットのために魔力を注いでいるんだから。

「つまり、魔力を奪うだけで処刑はしないということですか？　いくらこれ以上魔力を減らすことができないとはいえ、後々の禍根が残ると思うのですが……」

「えぇ、危険だと存じます」

　王族や上位領地の間では大量の処刑も仕方がないこととして教えられているのだろう。ジギスヴァルトが心配そうに顔を曇らせ、エグランティーヌも同意した。何を言っているのか、理解できない。

「え？　でも、後々の禍根を断つために、という理由で多くの命と知識が失われたために王族はグルトリスハイトを探せず、ユルゲンシュミットは魔力不足に陥ったのですよね？　後々の禍根を自分達で作り出していたではありませんか」

　面白い冗談ですね、とわたしが微笑むと、王族が一斉に顔色を変えた。もしかして、冗談ではなく、本気でまた大量処刑をするつもりだったのだろうか。

「あの、王族や勝ち組の上位領地が旧ベルケシュトック出身の上級司書を処刑したために知識の断絶が起こり、グルトリスハイトを再度手に入れることができず、魔力供給も境界線の引き直しも満足にできなくなったのですよ？　貴族達の不満が膨れ上がり、魔力が激減し、ユルゲンシュミットを崩壊の危機に導いたのは王族ですけれど、さすがにもう自覚はありますよね？　まさか自分達の行いを何一つとして反省してないというわけではありませんよね？」

　わたしが目を瞬くと、王族が少し目を逸らし、養父様がオロオロとしているのがわかった。アウブがそんなに感情を揺らすところを公に見せて良いのだろうか。もう少し威厳を持って、悠然と構えていてほしいものである。

「わたくしとしては、少々見当違いの部分があるとはいえ、グルトリスハイトがないままにユルゲンシュミットを支える努力をしてきた姿も見ていますから、できるだけ緩やかに世代交代をするために王族から新しいツェントを選出するのが一番だと思っていたのですけれど……フェルディナンド様がおっしゃった通り、少々不安になってきましたね」

　困ったわ、とわたしは頬に手を当てて首を傾げる。

「今のユルゲンシュミットの在り方はとても歪んでいます。次代のツェントの選出から、できる限り古の方法に戻すことをエアヴェルミーン様と約束いたしました」

　別に約束したわけではなく、フェルディナンドが宣言しただけだが、エアヴェルミーンはメスティオノーラの書を得たツェント候補が増えることを望んでいたので、かなり大まかに見れば間違ってはいないだろう。多分。

「古の方法ですか？」

　筋書きを書いたフェルディナンド以外は、すぐに理解できないというような顔をしている。そんな皆を見回し、わたしは新しいツェントへの要求を口にする。

「そうです。ツェントの世襲を廃止して、次代のツェントは血統によらないものとします。自力でメスティオノーラの書を得られる者がツェントとなるのです」

　次期ツェントと決まっていたジギスヴァルトは自分の立場を失うことに顔色を変えた。その妻であるアドルフィーネは諦めの表情になっている。

「そして、中央神殿を古の聖地である貴族院に戻し、ツェントを中央神殿の神殿長とします。ツェントには古の儀式の復活に力を注いでいただき、ユルゲンシュミットを魔力で満たしていただきますね。ほんの一時とはいえ、わたくしを中央神殿の神殿長へ、というお話があったのですから、別に問題はないでしょう」

　ニコリと微笑めば、顔色を失っている王族が何人もいる中で、養父様と養母様は遠い目をして我関せずというような笑みを浮かべていた。

「それから、ツェントの神殿長就任に伴い、中央の王宮や離宮を閉鎖し、ツェント一族は貴族院に住居を移動していただきます。元々王位の独占を始めた王族が暗殺を恐れて逃れるために作られた中央の王宮や離宮に住み続けるのは魔力と人員の無駄遣いですものね。貴族院へ移り、中央の直轄地ではなく、全ての領地から集めた税で生活すれば良いのです。税収で生活するのはアウブと同じですし、足りなければ自分で稼げばいいだけですから」

「ローゼマイン」

　……あ、余計なことまで付け加えてしまった。失敗、失敗。でも、この機会に上位の貴族達も自力で稼ぐことを考えたらいいと思うよ。

「このように新しいツェントには今までの王族という枠組みを壊すための生活をしていただくことになっているのですが、王族の中からどなたか立候補者はいらっしゃいますか？」

　王族がお互いに顔を見合わせている。グルトリスハイトを得たツェントになれるとはいえ、今までと生活は完全に変わるのだ。すぐに名乗りを上げられるような者はいないだろう。

「いらっしゃる場合は、その方にツェントをお願いするためにも今回の王族の失態はなるべく隠す方向で動き、ツェントとその妻子以外の王族にはアウブとして廃領地のアウブを任じるようにしたいと思います。いらっしゃらない場合は、他領のアウブ達に納得いただけるように政変以降の王族の失態を印刷してユルゲンシュミット中に配って反感を煽り、逆に、アウブ・ダンケルフェルガーの今回の活躍を物語にして華々しく吹聴して中継ぎのツェントになっていただきます」

　王族達が目を見開き、軽く口を開くほど驚いている中、べしっと太腿をはたかれた。フェルディナンドが不機嫌たっぷりのキラキラ笑顔でわたしを見ている。

「少し説明が足りないのではないか、ローゼマイン？」

　わたしだってちょっとは女神らしいことをしたいのだ。皆に印刷物を配るのは、とてもメスティオノーラの化身らしいと思う。

「世論操作に印刷物を使うのは基本中の基本です。それに、エーレンフェストの宣伝にもなります。印刷物を使って世の中を動かすなんて、とても英知の女神　メスティオノーラの化身らしいでしょう？　ダンケルフェルガーの活躍話を書くように、ディッター物語の作者にはすでに依頼済みです」

「なんと！？　我々がディッター物語の主役になるのですか！？」

　買い占めねば、興奮気味のアウブ・ダンケルフェルガーを隣に座る第一夫人が「周知のための物を買い占めてどうします？」と軽く叩く。呆れた第一夫人とフェルディナンドの表情が何だかとてもよく似ているように見えた。

「本当に君に権力を持たせたらとんでもないことになるな」

　フェルディナンドが顔を引きつらせてわたしを軽く睨んだ後、王族を見回した。

「新しいツェントが王族以外から立つ場合、皆様が案じられていた通り、外患誘致を防げなかった旧王族は後々の禍根となります。納得できない貴族達が再び担ぎ上げようとして、国が内乱状態になる可能性があります。この危険を未然に防ぐため、全員白の塔へ入っていただくことになります。神々とのお約束ですから、どのような罪人も処刑にはいたしません。ご安心ください」

　命さえ奪わなければ良いという意味合いのことを全く安心できない魔王の微笑みで言われて青ざめた王族達を見て、わたしは急いで付け加えた。

「内乱を避けるためですから、明確な罪がある方以外の生活は旧王族として補償いたしますよ。わたくし、フェルディナンド様と話し合って、待遇を大幅に改善していただきました。一日二食に加えて、なんと本を一冊お付けします！」

[------------------------------------------------]

顔色の悪い王族　その2

　残念ながらわたしの交渉結果は大して喜ばれなかったようだ。「本一冊……」と呆れたような小さな声が王族以外からも複数上がった。明らかに役に立たないと思われている。

　……普段から本を読まないから、王族は古語のお勉強が進まなかったんだよ！　ふんぬぅ！

「あの、ローゼマイン様。わたくし、質問があるのですけれどよろしいでしょうか？」

　エグランティーヌがぴたりと頬に手を当てながら、わたしとフェルディナンドを見つめる。

「わたくしは以前にお二人とお話をした時、奉納舞の検証を大々的に行ってツェント候補が各地の領主候補生から次々と出た場合は騒乱の種になるというご意見をいただいたと記憶しています。……けれど、今のお二人は次代のツェントを王族以外から選ぶとおっしゃいました。騒乱の種になることについてはどのようにお考えなのでしょうか？　教えていただいてもよろしいかしら？」

　騒乱が起こることを何よりも忌避したいエグランティーヌらしい質問だ。これは想定されていた質問事項の中にあったので、わたしはフェルディナンドとの打ち合わせ通りの答えを返す。

「王族のどなたかがツェントになれるならば、それが一番良いとわたくしは今でも思っています。余計な騒乱の種など必要ありませんから。グルトリスハイトへ至る手段がわかって一年近く経ちますが、王族はグルトリスハイトを得ることができたのでしょうか？」

　わたしがそこで言葉を止めると、フェルディナンドに軽く睨まれた。

　……でも、「一番グルトリスハイトに近かったのは、生まれながらの全属性であるエグランティーヌ様でしたよね？」なんて嫌味ったらしいこと言いにくいよ。間違ってはないんだけどね。

「いえ、それは……。ですが、ローゼマイン様が養子縁組をすることで王族にグルトリスハイトがもたらされることは決まっていましたから……」

「エグランティーヌ様、それは王族がグルトリスハイトを得るのではございません。当時の私は嘘偽りなく、王族がグルトリスハイトを得るべきだと考えておりましたが、まさかここまで王族にツェントとなるための資質や努力や矜持が全く足りないとは考えていませんでした」

「フェルディナンド！？」

　わたしの暴走は遠い目で見ていた養父様がハッとしたように目を見開き、フェルディナンドを制止しようとした。けれど、フェルディナンドは笑顔で受け流す。

　わたしが言うように準備されている答えもかなり好戦的だなと思っていたが、フェルディナンドはもっと挑発的だった。今まで王族に表面上の礼儀をきっちりと弁えていたフェルディナンドが、これほど直接的に王族を無能扱いするとは思わなくて、わたしは目を瞬く。

「エグランティーヌ様、あの時、私は騒乱を起こさずに王族がグルトリスハイトを手に入れられるように、とグルトリスハイトへ至る手掛かりをお伝えしました。そして、決してトラオクヴァール様に反意などないことを示すために王命の婚約を受け入れていました。ですが……」

　フェルディナンドはそこで言葉を切って、笑みを深める。

「手掛かりを得た王族は自分でグルトリスハイトを得るのではなく、ローゼマインに取らせようとしました。アーレンスバッハへ向かう私の代わりにエーレンフェストを守ると約束したローゼマインが、王の養女となってグルトリスハイトを得ることになり、まるで悪夢のような最悪の婚姻を強いられると聞かされたのです。その時の私の心情がわかりますか、トラオクヴァール様？　エーレンフェストを守るために離れたというのに、王族によってエーレンフェストを引っ掻き回された私がどのように思ったのか、少しは想像してみていただきたいと存じます」

　質問をしたエグランティーヌではなく、フェルディナンドは真っ直ぐにトラオクヴァールへ視線を向けていた。トラオクヴァールが唇を引き結んで項垂れている。

「いくら何でも失礼が過ぎますよ、フェルディナンド様」

「マグダレーナ、第三夫人で社交の場にはあまり出ぬ其方が知らぬだけで、私は彼にそれだけのことを強いたのだ」

　トラオクヴァールの制止にマグダレーナは「差し出口だったようです。申し訳ございません」と口を閉ざす。

「トラオクヴァール様、フェルディナンドに何を強いたのか、教えていただけますでしょうか？　私は彼の兄として、アウブ・エーレンフェストとして、知る権利があると存じます」

　フェルディナンドの婿入りに関しては蚊帳の外に追いやられていた養父様が、トラオクヴァールを見据える。トラオクヴァールはフェルディナンドに視線をやり、ゆっくりと首を横に振った。

「無理を強いた彼からの条件が決して口外しないことだったので、私から反故にする気はない。これ以上、フェルディナンドや女神の化身の怒りを買うような真似はせぬよ」

　トラオクヴァールの判断にフェルディナンドは少し安堵したように一つ頷いた。

「エグランティーヌ様、質問の答えですが、グルトリスハイトを得る方法を知ったにもかかわらず、未だに手にしていない王族を代々のツェントに据えて再び国が崩壊する危機を迎えるよりは、騒乱があったとしても魔力で満たされた国が存続する方が望ましいと考えています」

「そうですか……」

「……ですが、これまで通りに王族がツェントとしてユルゲンシュミットに君臨しているように見せかけたければ、全く方法がないわけではございません。任命されたツェントの子から最も多くメスティオノーラの書を得られる者を代々排出すれば良いのです」

　自分達の努力でツェントを続ければ良いという突き放したフェルディナンドの言葉にエグランティーヌは何か考えるようにおっとりと首を傾げる。

「王族がユルゲンシュミットの在り方を歪めてきた歴史と誰もがメスティオノーラの書を得られるように取得方法を公開するつもりではありますが、ぜひ、これからも歴代ツェントを輩出できるように努力していただきたいと存じます」

「ユルゲンシュミットの在り方を歪めてきた歴史……？」

　わたしはフェルディナンドに促されて、ツェントの資格を得るための方法が歴代のツェントによって少しずつ変わっていった話をした。中央の王宮図書館にある資料は、王族が中央へ移った後の分しかないため、これまで学んだ歴史とはずいぶんと違ったらしい。

　衝撃を振り払うように首を横に振ったジギスヴァルトがわたしを見る。

「女神の化身よ。王族というこれまでの枠組みを壊すために神々が新しいツェントを欲していることは理解しました。私が新たなツェントとなり、なるべく御心に沿うように昔のやり方を取り入れることにしたいと思います」

　ジギスヴァルトの宣言にフェルディナンドが軽く眉を上げた。アナスタージウスが不安そうにジギスヴァルトを見る。

「兄上、それは……」

「次期ツェントとして周知されている私がひとまずツェントに就任するのが最も相応しいと思っている。アナスタージウスは同意してくれるであろう？」

　抗議するように声を上げたアナスタージウスへ向けられたジギスヴァルトの穏やかな笑顔に、アナスタージウスはかけるべき言葉を見失ったような顔でそっと視線を下げた。それを了承と受け取ったのか、ジギスヴァルトは笑みを深めてわたしに視線を向ける。

「昔のやり方を取り入れますが、今回の外患誘致の罪はアーレンスバッハにございます。王族が全ての罪を背負うことには納得できません」

「兄上！」

　アナスタージウスが制しようとしたけれど、ジギスヴァルトは続けた。

「危険には陥りましたが、ダンケルフェルガー、エーレンフェストによってユルゲンシュミットは守られました。王族より先に罰する必要があるのは、アーレンスバッハの者達ではありませんか？」

　穏やかに微笑むジギスヴァルトの視線はフェルディナンドに向けられていた。フェルディナンドがディートリンデを押さえて、ランツェナーヴェの者達の侵入を防ぐことができていればこのようなことにはならなかったという思惑が透けている。他者に命じることに慣れていて、王族である自分の言葉を覆されることなど髪の毛一筋も考えていないことがよくわかった。そういう立場で、そういう育ち方をしたのだろう。

　……何だか全然理解できてないみたいなんだけど、ツェントに立候補した王族だから女神の化身ってことになってるわたしにこの態度でいいのかな？

　王族の考え方や基準がよくわからない。この場でジギスヴァルトを咎めた方が良いのかどうか。わたしがちらりとフェルディナンドに視線を送ると、フェルディナンドはキラキラ作り笑い顔になっていた。

「かしこまりました。アーレンスバッハの罪人はいつでも引き渡しできる状態になっています。ジギスヴァルト王子のお望み通り、すぐに中央へ引き渡しましょう」

　……うわぁ、応戦する気満々じゃない？　ジギスヴァルト王子、ご愁傷さまです。

　先に罰したいならさっさとやれ。受け入れ態勢が整ってないのは中央ではないか、という副音声が聞こえた気がした。こんな状態のフェルディナンドに立ち向かっていくなんて怖いこと、わたしは本以外のことでしたくない。けれど、ジギスヴァルトはどうやらなかなか勇気のある若者だったらしい。

　キラキラ笑顔のフェルディナンドを不機嫌とは悟れなくても、副音声は正確に聞き取れたようで、ジギスヴァルトは一瞬言葉に詰まってニコリと微笑んだ。

「実行犯の話だけではなく、次期アウブを支えるための婚約者としてアーレンスバッハにいた貴方について話をしているのです。御自分の罪を自覚していますか？」

　その言葉にカチンときた。王族の義務を果たしていないジギスヴァルトから、王命の義務に従って心身を削るようにして慣れない土地で執務をしていたフェルディナンドへの言い分を聞き流すことはできない。

「わたくし、ジギスヴァルト王子のお言葉がよく理解できないのですけれど、フェルディナンド様が義務を怠っているとおっしゃりたいのでしょうか？」

　フェルディナンドではなく、わたしが口を開いたことにジギスヴァルトが目を見開き、アナスタージウスが「兄上」と頭を抱える。抑えたければ、もっとしっかり早く抑えるべきだったと思う。

「王命による義務があったからこそ、フェルディナンド様は毒を受けたというのに碌に治癒する余裕もないまま戦場に立ったのではありませんか。アーレンスバッハの騎士とダンケルフェルガーの有志を率いて戦ったにもかかわらず、まだ義務が足りない、とおっしゃるのですか？」

「うむ。ローゼマイン様のおっしゃる通り、フェルディナンド様はアーレンスバッハにいるランツェナーヴェの兵士達を掃討し、エーレンフェストへ侵攻したアーレンスバッハの貴族達を追い、中央でメスティオノーラの書を得ようとするランツェナーヴェの者達を捕らえました。夫ではなく未だに婚約者という立場を考えると、領分を越えるほど真摯に義務を遂行していたことは、共に戦ったダンケルフェルガーが保証いたします」

　本当に休息を取る余裕などほとんどないままの強行軍だったことをアウブ・ダンケルフェルガーが認める。ジギスヴァルトは「そうですか」と微笑んでいるが、その目は全く納得しているようには見えなかった。

「ジギスヴァルト王子、わたくしもお伺いしたいのですけれど、フェルディナンド様が王命による義務を遂行している間、ダンケルフェルガーやエーレンフェストから危機が知らされた王族は一体何をしていたのですか？」

　遂行しなければならない義務を抱えているのは、わたしやフェルディナンドだけではないはずだ。王族が罪を負うことに納得できないと言うが、王族は一体何をしていたのか。わたしが睨むと、ジギスヴァルトが気圧されたように息を呑んだ。

「騎士団長の裏切りや中央でのトルークの蔓延にも気付かず、騎士団長の思惑に乗ってランツェナーヴェの者達へシュタープを取らせるという愚を犯し、礎を守ることを放棄し、騎士団の裏切りに右往左往する以外に何をしていたのか教えてくださいませ。わたくし、講堂での戦いでジギスヴァルト王子のお姿は拝見していませんけれど、どちらで何をしていらっしゃったのかしら？」

「私は、自分の離宮で王族として中央貴族達に指示を……」

　息苦しそうに言葉を吐き出すジギスヴァルトを、わたしはニコリと微笑んで制する。自分の離宮に引き籠っている時点で、全くユルゲンシュミットの守りになっていない。

「それは自分達の身柄ではなく、国や礎を守るという王族の義務の遂行に必要な指示でしたか？　ユルゲンシュミットの礎がある貴族院ではなく、自分達が住む中央を守っている時点で王族として失格だと、さすがにもう気付いていらっしゃると思うのですけれど、その自覚はおありですか？」

「ローゼマイン、そろそろ止めなさい。女神の化身からの糾弾に他の王族が顔色を失っている」

　フェルディナンドが軽くわたしの袖を引く。見回してみれば、確かに顔色の悪い人ばかりだ。

「そのようですね。でも、政変後の処刑の時には王族の無茶な連座や頓珍漢な糾弾に顔色どころか、命を失った者がたくさんいるというのに、命の保証だけはされている王族が自分達の失態を突きつけられて顔色を失うくらい何でもないでしょう？」

　わたしがコテリと首を傾げると、フェルディナンドが立ち上がってわたしの腕をつかむ。その顔色は悪く、焦りが誰の目にも見えるほどになっていた。

　……あれ？　フェルディナンド様が変だよ？

「ローゼマイン、目の色が変わっている自覚はあるか？　無意識に漏れ出す女神の御力が増えて軽い威圧状態になっているのだが、わかっているのか？」

　ジギスヴァルトに怒りを感じたけれど、軽い威圧状態になっている自覚は全くなかった。目を瞬くわたしに向かって、ゆっくりと手を挙げたのはトラオクヴァールだった。呼吸を整えている姿を見れば、わたしの無意識の威圧を受けていることがわかる。

「どうか私の発言をお許しください、ローゼマイン様」

　丁寧に発言の許可を求める彼の姿にジギスヴァルトがフェアドレンナの雷を受けたような顔になる。皆の注目がトラオクヴァールに集まった。

「許します」

「断罪されるべき立場を弁えぬ愚かな息子で申し訳ございません。けれど、ローゼマイン様が愚息の言葉にお心を揺らす必要はないのです。星結びを終えるまでフェルディナンドはディートリンデの連座にならないと確定しています。どうかご安心ください」

　トラオクヴァールの言葉に、わたしは胸を撫で下ろす。何だか記憶から薄れていたけれど、確かにそういう約束があった。誰が何を言ってもフェルディナンドに影響はない。ホッとわたしが息を吐いた瞬間、周囲の皆も安堵するように息を吐いた。

　フェルディナンドが真剣な眼差しでわたしの顔を覗き込み、「目の色は戻ったようだな」と呟く。わたしの目の色は戻ったようだけれど、フェルディナンドの顔にある焦りは完全に払拭されていない。

「ローゼマイン、女神の御力は自分の魔力より制御が難しいように見える。君が感情的に反応すると同時に女神の御力が膨れ上がっているようだ。このまま女神の御力が増えれば、君が君ではなくなる可能性がある。頼むから、できるだけ感情を抑えなさい。」

　君が君でなくなるという言葉に背筋がぞっとした。それは、すでに失ってしまった記憶の他にも大事な記憶の消える可能性があるということだろうか。もっと恐ろしいことが起こるということだろうか。そんなふうにフェルディナンドが指摘するということは、わたしはすでにわたしではなくなっているのかもしれない。

　……何それ、怖い！

　わたしの中で恐怖が膨れ上がるのは、ほんの一瞬だった。

「ローゼマイン！」

[------------------------------------------------]

顔色の悪い王族　その3

　フェルディナンドが焦った声を上げるのとほぼ同時に、自分の視界の端にいる者達が胸元を抑えて顔を歪め、あちらこちらから呻く声が聞こえ始める。目に映る光景は自分が威圧している時と同じだ。けれど、今、わたしは頭が真っ白になる程の怒りを感じているわけではない。怖いという感情が膨れ上がっただけだ。

「違……こんなつもりではなくて……」

　自分の中で膨れ上がった恐怖という感情が他人を苦しめている現状を目の当たりにして、自分の中にある女神の御力に対する恐怖はいや増していく。

「感情を抑えなさい、ローゼマイン」

　わたしに皆の様子を見せないように、皆を女神の御力から守るために、フェルディナンドがわたしの肩をつかむ。フェルディナンドもまた苦しげに眉を寄せ、脂汗を垂らしながら、真剣な目でわたしを見下ろしていた。あのフェルディナンドが表情を取り繕うことさえできていない。

「フェルディナンド様、離れてください。近い程、影響が……」

　わたしにとってフェルディナンドはとても大事な人だから、わたしの力で傷つけたくはないのだ。肩に置かれている手を叩きながら、わたしはフェルディナンドが離れてくれることを願う。

　次の瞬間、フェルディナンドが咳き込んだ。コフッという異音に記憶が刺激されて、平民時代の洗礼式後に神殿で同じように向かい合った記憶が途切れ途切れに浮かんでくる。

　わたしはあの時、誰かを守ろうと必死になって、当時の神殿長と神官長と対峙していた。今は誰を守っているわけでもない。ただ傷つけているだけだ。できることならば、すぐにでも止めたいし、自分の内にあるはずの力なのに、どのように扱えば良いのかわからない。

「その力を正しく使って、街を守ってくれ」

「……に怒られるような使い方はしない。約束するよ」

　不意に誰かと交わした約束が脳裏で響く。大事な約束だったはずだ。それを破ってしまった悔しさに泣きたくなってきた。これ以上感情的になってはいけない、と理性が警告を出しているのに、どうすれば抑えられるのかわからない。

「フェルディナンド様、お願いですから離れて。わたくし、どなたかと約束をしたのです。守るために力を使う、と」

　フェルディナンドの顔色を見れば、漏れ出る女神の御力が更に増えているのがわかる。何度か咳き込んだフェルディナンドの口の端から、記憶と同じ赤い血が滴った。

「離して！」

　わたしを抱きしめるように伸ばされたフェルディナンドの手を思い切り振り払って、わたしはその場から逃げ出した。勢いよく立ち上がったせいでガタンと椅子が倒れる音が響く。

　……どこまで離れたら大丈夫なんだろう？……

　わたしは逃げ場を探して部屋の中を見回した。中央棟と繋がる扉はテーブルを挟んで反対側で、そこまでたどり着く前に皆がもっと苦しい思いをする。寮に戻る扉は自分の背後にあるけれど、寮に戻れば傷つける人数が増えるだけだ。

　フェルディナンドが振り払われた自分の手を見た後、すぐさま口元の血を拭って養父様へ視線を向けた。

「アウブ・エーレンフェスト、ハルトムート達に入室許可を！」

「入れ、ハルトムート」

　養父様が片手で胸元を押さえながら、もう片手でオルドナンツを飛ばす。

　ハルトムートの腕の上でオルドナンツが「入れ、ハルトムート」と喋っているくらいに早く、寮と繋がる扉が開いてハルトムート、クラリッサ、マティアス、ラウレンツ、グレーティア、ローデリヒの六人が入ってきた。

「失礼します」

「ハルトムート、貴方達もわたくしに近付いては……」

「大丈夫です、ローゼマイン様。我々は常にローゼマイン様の御力をまとっているので、お力が増えたことやその神々しさは感じ取れますが、大した影響はないのです」

　ご安心くださいと笑いながらハルトムート達男性陣がわたしを囲むように立って、会議中の皆との間に壁を作る。壁ができれば少しは女神の御力も遮られるのか、苦痛を堪えるような呻き声は聞こえなくなった。それだけで少し恐怖が和らいで心が軽くなる。

　……ハルトムート達は本当に苦しくないんだ。

　ハルトムートやラウレンツがわたしを安心させるように笑みを浮かべている。マティアスとローデリヒは「役目を果たさなければ」という真剣そのものの表情だけれど、取り繕ったり苦痛に耐えたりしているような顔ではなく、ごく自然なものだ。

「もしかしたら必要になるかもしれない、とフェルディナンド様に言われて待機していたのですよ。女神の化身の溢れ出る魅力は下々の者にとって辛く感じることもあるでしょうから」

　ローゼマイン様のお世話をする側仕えのお仕事も一度してみたかったのです、と鼻歌でも歌い出しそうに楽しそうなクラリッサが手にしていた銀色の布を広げた。クラリッサの明るい笑顔に何だか胸が軽くなる。今のわたしが近付いても大丈夫な人がいることにホッとした。すっと孤独感や恐怖が薄れていく。

「ローゼマイン様、王族やアウブの方々の目に触れるのに布を掛けるだけでは見苦しいから、とリーゼレータ達がマント状に整えてくれたのですよ。せっかくの衣装が見えなくなってしまうのは残念ですけれど……」

　グレーティアがフード付きマントに形を変えた銀色の布をわたしに被せて、不格好な皺ができないように整えながら、さりげなくわたしの目元を拭ってくれる。普段はほとんど口を利かずに黙々と仕事をするグレーティアが、今はわたしの気分を和ませようと頑張って言葉を選んでくれているのがわかって、心がほっこりしてくる。

「ありがとう存じます、二人とも」

「あら、ローゼマイン様。お礼には及びません。思わず見惚れてしまう程にお美しいローゼマイン様の魅力に気を失う者が続出しては会議にならなくて大変ですもの。それというのも、ローゼマイン様が全ての神々より寵愛を得ていらっしゃるメスティオノーラの……」

「フェルディナンド様、いかがでしょう？　これくらいの露出でしたらお顔も見えますし、女神の御力を感じつつ、強すぎない程度に抑えられたと思います」

　クラリッサの賛美を遮るようにグレーティアが前に進み出て、フェルディナンドに声をかける。フェルディナンドが銀色のマントをつけられたわたしを見て、「問題ない。助かった」と頷いた。

「ローゼマイン様、気の利く臣下への褒美だと思って、女神の化身による癒しを見せてくださいませんか？」

　ハルトムートが茶目っ気を見せたウィンクで、女神の化身の力をまとったわたしの癒しを見たいとねだる。一見ふざけているようにも見えるハルトムートの表情だが、橙の瞳はじっとわたしの反応を探っていた。おどけた表情も口調も、わたしが断りたければ容易に断るための理由にできるようにという配慮だろう。

「ハルトムート、ありがとう存じます」

「恐れ入ります」

　わたしは「シュトレイトコルベン」と唱えて、フリュートレーネの杖を手にする。

「水の女神　フリュートレーネの眷属たるルングシュメールよ」

　ルングシュメールへの呼びかけだけで、杖の先にある緑の魔石から癒しが部屋中に降り注いでいく。席に着いていた人達の顔色が明らかに良くなって安堵の息を漏らしている。癒しはきちんと効果があったようだ。

「何と美しい……。全ての神々より神具を使うことを許されたメスティオノーラの素晴らしき……」

「其方等は下がれ。話し合いを続けたい」

　養父様が軽く手を振りながら興奮しているハルトムートを連れて下がるようにわたしの側近達に命じると、マティアスとラウレンツがすぐさまハルトムートを連行していく。二人に挟まれて連れ出されるハルトムートには先程のできる側近の面影が全くない。

　養父様はハルトムート達の代わりに側仕え達を入れて、お茶を淹れ変えさせる。側仕え達が動くことで部屋の中から緊迫感が拭い取られ、少しばかり穏やかなものに変わった。

「ローゼマイン様もお席に着かれますか？」

　グレーティアが倒れていた椅子を整えている様子を示しながらクラリッサが声をかけてくれたので、わたしはコクリと頷き、クラリッサにエスコートされて自分の席へ向かう。

「あ……」

　席の前に立っているフェルディナンドと目が合った。助けようとしてくれたところで手を振り払ってしまったので、どのように声をかければ良いのかわからなくて少し気まずい。

「あの、フェルディナンド様。痛いところはございませんか？　その、わたくし……」

「ルングシュメールの癒しがあったので問題ない。君もせっかく落ち着いたのに不用意に感情を揺らすものではない」

　フェルディナンドはクラリッサからわたしの手を取り、クラリッサとグレーティアに下がるように指示を出すと、わたしを椅子に座らせる。わたしは本当に問題がないのか、じっとフェルディナンドの顔を見つめた。女神の御力が辛いのに、無理させているのではないだろうか。

「そのように心配せずとも、こうしておけば女神の御力で他人を傷つけることはあるまい」

「あのようなことになるならば、最初からまとっていたかったです」

　わたしが自分の手に触れる銀色の布をぎゅっとつかむと、フェルディナンドは仕方がなさそうな顔でちらりと養父様へ視線を向けた。

「銀色の布はどうしてもランツェナーヴェの者達を連想させるので、王族やダンケルフェルガーとの話し合いで最初からまとっているのは印象が良くない。だが、女神の御力を知った今ならば、それを外せと言う者などこの場にはいまい」

　……それはそうかもしれないけど、周知するために自分も痛い目に遭う必要はないと思うよ。

「あぁ、そうだ。ローゼマイン、手を出しなさい。今後の再び女神の御力が暴走した時のためにこちらも持っておいた方がよかろう」

「銀色の布の他にも何か対策があるのですか？」

　何かお守りでもあるのだろうか。わたしがフェルディナンドに言われるまま両手を揃えて出せば、ポンと軽く手の上に盗聴防止の魔術具と白い箱が置かれた。何だろう、と蓋を開けようとするより先に魔力が吸い出されるような感触がして、白い箱は白い繭状に形を変えていく。何度も見たことがある物なので、これだけ変化すれば嫌でもわかった。名捧げ石だ。

「フェ、フェルディナンド様、これはどういうことですか？」

「非常事態に私が君に近付けないようでは困るではないか」

「それはそうかもしれませんけれど、今回と同じように彼等を呼べば……」

「黙りなさい」

　うにっと頬をつままれて、わたしはフェルディナンドに唇を尖らせる。そんなことのために名捧げを使うのは間違っていると思う。

「こんな騙し討ちのような名捧げ、あり得ません。もっと、何というか、とても大事な誓いではありませんか。エックハルト兄様達から捧げられているフェルディナンド様ならばご存じでしょう？」

　わたしの側近達はそれぞれに大事な思いを自分の名前に籠めて捧げてくれたのだ。エックハルト兄様達から忠誠と命を捧げられているフェルディナンドにそれがわからないはずがない。フェルディナンドがわたしを主として欲しているわけではないのに、ただの手段として名を捧げるのは、彼等の誓いが軽んじられているようでひどく悲しい気分になる。

「女神の御力が消えるまでで構わぬ。……それ以上は望まぬ」

「ですから、そのような手段として……」

「女神の御力が消えるまでだ。それほど嫌ならば、私に命じて返却すればよかろう」

「家族同然と思っている方との間に主従関係が発生するのは嫌なのです」

　お友達になれるかと思ったフィリーネにも、平民時代を知っているダームエルにも、主従としての線を引かれ、気安い関係にはなれない。わたしはフェルディナンドとの間に主従関係を入れたくないのだ。

「最初に私の命を救う手段として名捧げを利用したのは君だ。今回は諦めよ。どうせ、それほど長い期間ではない」

　頑なにそう言い切ったフェルディナンドがわたしの手から盗聴防止の魔術具だけを取って、隣の自席に座る。緊急事態だったとはいえ、先に手段として利用したと言われれば反論の余地もない。わたしはフェルディナンドの名捧げ石を握って、そっと息を吐いた。

「さて、話し合いを再開してもよろしいでしょうか？」

　皆がお茶を飲み、側仕え達が退室するのを見届けた上で、フェルディナンドが発言する。ひとまずツェントとして立候補したジギスヴァルトがいるので、ジギスヴァルトをツェントにするか否かを話し合うことになった。

「ジギスヴァルトをツェントにするのですか？……それは、その……」

　トラオクヴァールとその第一夫人がひどく心配そうにわたしとフェルディナンドを見る。

「他に立候補する者がいなければ、そうなります。こちらの選択肢としては王族の内のどなたがツェントとなり、神々の要求するユルゲンシュミットへと変化させるということですから、立候補者がいればその方にお任せいたします」

「次期ツェントとしてユルゲンシュミットの貴族達に認められている私が最適でしょう。私がツェントになり、皆を救います。ご安心ください、父上」

　ジギスヴァルトがいつも通りの穏やかな笑みでそう言った。王族をなくすためのツェントになることを、それほど誇らしそうな顔で言える心境がどうにも理解できない。

「では、ジギスヴァルト王子には神々からの要求を必ず実行してもらうために、光の女神や秩序の女神　ゲボルトヌーンに契約魔術を使って誓っていただきますね」

「契約魔術を……？」

「はい。女神の御力が消えた途端、神々の要求を無視したり、あまりにも先延ばしにしたりされては困ります。当然のことながら、新しいツェントには神々と契約していただきます」

　これはわたしと交わす契約ではない。魔術を使った神々への宣誓だ。神々と直接契約する魔術なので人間同士の契約に比べると抜け道がほとんどなくて厳しい物になる。違反したら神々から厳しい鉄槌が下るらしい。のらりくらりと神々の要求から逃れるつもりだったのだろうか、契約魔術は怖いのか、ジギスヴァルトの顔色が悪くなった。

「ほぅ、確かに神々の要求に対して神々と契約をするのは妥当でしょう」

「えぇ。グルトリスハイトを得る前に、全てのアウブの前でユルゲンシュミットをどのように導いていくのか誓うようにすれば良いのではございませんか？　そうすれば、他領のアウブにも神々の要求がどのようなものかよくわかるでしょう」

　ダンケルフェルガーのアウブ夫妻が同意したことで、契約魔術を行うことは決定となった。テーブルの上に出されていたジギスヴァルトの拳がきつく握られる。

　神々への宣誓に同意してくれれば、後は継承の儀式をいつどのように行うのか決めることになっている。それから、他の王族の扱いや廃領地になっている土地をどのように分けるのか決めればいい。

　……まだ決めること、結構あるな。

　わたしがお話し合いの流れを頭の中で思い返していると、フェルディナンドがカタリと立ち上がった。

「ジギスヴァルト王子、先程の事態で実感いただけたと思いますが、女神の化身からグルトリスハイトを賜るツェントが祭壇上で共に並び、始まりの庭へ向かうことができなければ大変なことになります。ツェントになるならば、ローゼマインに名を捧げてください。そうすれば、女神の御力の影響を防ぐことができます」

　フェルディナンドの言葉にジギスヴァルトが目を瞬いた。確かに継承の儀式で新たなツェントになる人が女神の御力に当てられて倒れたら大変だ。

　……でも、名捧げをそういう手段にはしたくないんだよ。おじい様に叱られた通りの結果になってるじゃない。

「私が名を捧げるのですか？　新たなツェントとなる者が、その後アウブ・アーレンスバッハになる者に？　それではツェントの主がアウブということになりますが……」

　いくら何でもおかしいのではないか、とジギスヴァルトが顔をしかめた。命を守る手段ではあるけれど、ジギスヴァルトの言う通り、ツェントとアウブの地位を考えればおかしい要求だとわたしも思う。

　そんなことを考えていると、苦虫を噛み潰したような顔になったトラオクヴァールがそっと挙手した。

「何でしょう、トラオクヴァール様？」

「ローゼマイン様、御前でのお目汚し、大変失礼いたします」

　断りを入れると同時に、トラオクヴァールが立ち上がってジギスヴァルトをシュタープの光の帯で縛り上げた。

「ジギスヴァルト、処刑が当然の我々に生き延びる選択肢を与え、グルトリスハイトを授けてくださる女神の化身に名を捧げて尽くすこともできぬ者にツェントとなる資格などないのだ。神々との契約を厭い、名を捧げることに拒否を示した其方はもうツェントにはなれぬ。いい加減に理解せよ。グルトリスハイトがなくとも王族としてあらねばならなかった我々の生き方が、其方の教育に深く影響していたとはいえ、失った地位にしがみつこうとする姿はあまりにも愚かで見苦しい」

　トラオクヴァールが今にも泣きそうに顔を歪めた。第一夫人が静かに目を伏せる。縛り上げられたジギスヴァルトを見下ろし、フェルディナンドはトラオクヴァールに視線を向けた。

「トラオクヴァール様の判断でジギスヴァルト王子にはツェントをさせぬということでよろしいでしょうか？」

「今のジギスヴァルトが神々の要求するツェントになれるとは思えません」

「ですが、誰かがツェントにならなければ、王族は全員が白の塔へ入ることになります。よろしいのですか？」

　フェルディナンドの言葉にトラオクヴァールはしばらく逡巡を見せる。自分で縛り上げたジギスヴァルト、自分の妻や子供達を見回した後、ゆっくりとその場に跪く。

「今となっては自力でグルトリスハイトを手にした者こそ、ユルゲンシュミットのツェントに相応しいと心底実感しております。……祭壇に上がり、女神の化身と共に姿を消したフェルディナンド様ならば、お持ちではございませんか？」

[------------------------------------------------]

顔色の悪い王族　その4

「父上、何をおっしゃるのですか！？」

　ざわりとその場がざわめき、フェルディナンドに注目が集まる。王族は跪くトラオクヴァールとフェルディナンドを見比べ、ダンケルフェルガーのアウブ夫妻はじっとフェルディナンドを注視している。

「トラオクヴァール様。そのお言葉は、王族全員が白の塔へ入ることになったとしても、という解釈でお間違いありませんか？」

　トラオクヴァールの質問に答えるのではなく、静かに問うフェルディナンドの姿に血の気の引いた顔で立ち上がったのはアナスタージウスだった。

「父上、お止めください！　貴方はツェントです。女神の化身以外の者に跪くものではありません」

「ユルゲンシュミットを治めるツェントはグルトリスハイトを持つ者でなければならぬ、アナスタージウス」

「そのグルトリスハイトはメスティオノーラの化身となったローゼマインから授けられるのです、父上。私は父上にグルトリスハイトを得て、真のツェントになっていただきたいと彼等に願いました。これまで国の行方を誰よりも案じてきた父上が最もツェントに相応しいと思っています」

　立たせようとするアナスタージウスに対して、トラオクヴァールは首を横に振る。その真剣なやり取りを見ながら、わたしは感嘆の息を吐きながら隣で立っているフェルディナンドを見上げた。

　……おぉ、完全にフェルディナンド様の予想通りだね。

　予想されていた反応や質問が出てくるので、何というか、筋書きのあるお芝居でも見ている気分だ。真剣に言い合っているトラオクヴァールとアナスタージウスには悪いけれど、フェルディナンドにはトラオクヴァールと真面目に向き合う気などさらさらないのだ。

「トラオクヴァール様、大変失礼かと存じますが、貴方の仮定には前提条件に大きな間違いがございます。祭壇に上がれるのは全ての大神の御加護を得た者であって、グルトリスハイトを持つ者ではありません」

　フェルディナンドの言葉にエグランティーヌが「そうですね」と同意を示した。エグランティーヌが口を開くとは誰も考えていなかったようで、全員の視線がそちらに向く。

「わたくしも貴族院の実技で神々の御加護を得る儀式を行った時、祭壇に上がったことがございます。シュタープを得た白い広場のようなところへ通じていたのですけれど、他には特に何もないところでした。けれど、グルトリスハイトを得ているわけではございません」

「全ての大神から御加護を得ている全属性であることが重要なのです」

　わたしが言うはずだったセリフをエグランティーヌが言ってくれたので、わたしは少しだけ補足するに留めておく。

　王族であるエグランティーヌに指摘されたトラオクヴァールが大きく目を見開く。わたしが言うよりも効果的だったと思う。祭壇に上がれることがメスティオノーラの書を所持している証拠にはならないのだ。

「だが、それでも、彼は……」

「えぇ。わたくし達に示してくださったグルトリスハイトへの手掛かりなどから考えると、フェルディナンド様はすでにお持ちか、もしくは、とても近いところへ到達しているのではないかと考えています」

　エグランティーヌはそう言いながらフェルディナンドに視線を向ける。トラオクヴァールもフェルディナンドを見た。二人とも「グルトリスハイトを得ているのか否か」を問う顔になっている。けれど、フェルディナンドを探るようにじっと見つめているエグランティーヌと、縋るように見ているトラオクヴァールではその表情には違いがあった。

「トラオクヴァール様は本当にジギスヴァルト王子の父親ですね。とてもよく似ていらっしゃる」

　跪くトラオクヴァールを見下ろすフェルディナンドはとても冷たい顔だった。「愚かで見苦しい」と実の父親に縛り上げられたジギスヴァルトとよく似ているというのが褒め言葉だと感じる者などいないだろう。その場にいた者が一斉に顔色を変えた。マグダレーナがジギスヴァルトとトラオクヴァールを見比べ、フェルディナンドを赤い瞳で軽く睨む。

「トラオクヴァール様のどの辺りがジギスヴァルト王子と似ているとおっしゃるのです？」

「ふむ。御自分に都合の悪いことは忘れ、王族という地位を笠に着て他者に自分の意を強要するジギスヴァルト王子の性根は父親譲りだと思わずにはいられませんが、マグダレーナ様の目には混沌の女神の呪いがかかっているようですね」

　目が曇っていると言ってマグダレーナの言葉を切り捨てて、フェルディナンドは軽蔑を籠めた薄い金色の目でトラオクヴァールを見下ろしながら腕を組んだ。

「トラオクヴァール様がすっかりお忘れのようですから、繰り返させていただきます。私は簒奪も反逆も考えていませんし、ツェントの地位に就きたいと望んでもいません。あの時、それを内外に示すためにアーレンスバッハへ婿入りするように、と命じた貴方に私は従ったではありませんか。命懸けでアーレンスバッハに滞在した一年半が、無駄ではなかったことを祈ります」

　フェルディナンドの言葉に養父様がテーブルの上に出している拳をきつく握り締めた。多分、今、養父様はトラオクヴァールを殴り飛ばしたいくらい怒っている。

「あの時はそれが最善だと判断したのだ」

　トラオクヴァールの言葉に口を開いたのはフェルディナンドではなく、養父様だった。

「あの時は王命でアーレンスバッハへやるのが最善で、今度はフェルディナンドがグルトリスハイトを得ているという仮定だけで、確証さえないままに、ツェントとなって今までの王族の後始末をするのが最善だと……？　いくら何でもシュラートラウムの訪れにはまだ早いのではございませんか？」

　寝言は寝てから言えという意味だが、直接それをトラオクヴァールに笑顔で言える養父様は、本当にフェルディナンドの兄だなとしみじみ思う。

　……それにしても、トラオクヴァール様も自分の発言を都合良く忘れる人だったのか。

　フェルディナンドをこれ以上トラオクヴァールの都合で使わせる気はない養父様と、ユルゲンシュミットのためならば最善の方法を取りたいトラオクヴァールが睨み合う。火花の散りそうな雰囲気の中、柔らかな声が割って入った。

「では、フェルディナンド様はグルトリスハイトを得るわけではなく、ツェントに就くつもりはないということでよろしいでしょうか？　トラオクヴァール様の申し出を受けることはないのですよね？」

　エグランティーヌが頬に手を当てて首を傾げる。いつも通りのおっとりとした微笑みに見えるけれど、その明るいオレンジ色の瞳は真剣そのものだ。

「王族が白の塔へ入る代わりに神々の要求に応えるのか、アウブ・ダンケルフェルガーがグルトリスハイトを与えられてツェントとして君臨するのか……メスティオノーラの化身から示された選択肢は二つ。私がツェントになるという選択肢は最初からありませんでした。いくらトラオクヴァール様が望んだところで、選択肢が増えるわけがございません」

「お答え、ありがとう存じます。フェルディナンド様のお考えはわかりました」

　王族は選択肢を与えられただけだとフェルディナンドは、トラオクヴァールの質問自体を切り捨てる。エグランティーヌは納得したように頷いたけれど、トラオクヴァールは納得できなかったようだ。大きく目を見開いて「ツェントは自力でグルトリスハイトを得た者がなるべきなのです」と訴える。けれど、その言葉はフェルディナンドから完全に黙殺された。

「あの、トラオクヴァール様」

　わたしは跪いたままフェルディナンドに訴えるトラオクヴァールを見兼ねて声をかけた。

「自力でグルトリスハイトを得た者をツェントに、と望む貴方が間違っているとは思いません。メスティオノーラの書の獲得方法を広め、次代からそのように選ぶつもりです。けれど、わたくしは一旦今の王族にツェントを引き受けてほしいのです」

　わたしはアドルフィーネやエグランティーヌ、マグダレーナ達を見回す。王族に嫁いで数年だったり、第三夫人として社交の場に出る機会が少なかったりした彼女達が一生白の塔で過ごす程の罪を犯しているとは思えない。

「王族の助命や連座の回避という意味もありますが、突然王族以外の者がツェントになるより、準備期間がある方が受け入れられやすいと思います。変化が大きければ大きい程、周囲からの反発も大きいですから……」

「グルトリスハイトがあれば、そのような不満を口にする貴族はおりますまい」

　偽物の王だと言われ続けたトラオクヴァールだからそう思うだけだ。わたしはゆっくりと首を横に振った。

「トラオクヴァール様はグルトリスハイトを神聖視しすぎているように見受けられます。グルトリスハイトがあっても、メスティオノーラの書を得たツェントが立っても、人は不満を口にするのですよ。人々の不満に際限はありません。できるだけ軋轢が少なく、争いが少なければ良いとは思いますが、完全になくなることなどないでしょう。それは歴史が証明しています」

　話している途中で強い視線を感じて、わたしはゆっくりと視線を移す。こちらをじっと見ているエグランティーヌと目が合った。

「エグランティーヌ様？　どうかなさいましたか？」

　わたしが呼びかけると、エグランティーヌは一度視線を下げた後、ゆっくりと顔を上げてトラオクヴァールを真っ直ぐに見た。明るいオレンジの瞳に強い光が宿っている。

「ユルゲンシュミットのためにはグルトリスハイトが必要不可欠です。ローゼマイン様がグルトリスハイトを得るならば、それを騒乱のないままに王族へもたらすためには王との養子縁組と次期ツェントであるジギスヴァルト王子との婚姻が絶対に必要だとわたくしは考えていました」

　エグランティーヌにとっては、自分との結婚を機に次期ツェントから退いたアナスタージウスや、再び争いが起こることが目に見えているヒルデブラントとの結婚ではダメだったらしい。

「けれど、今回の騒動でローゼマイン様は女神の化身として王族にグルトリスハイトを与えてくださる選択肢を示してくださいました。そうであれば、ジギスヴァルト王子との婚姻も養子縁組も必要ありません。グルトリスハイトを望んだとしても、どなたにも迷惑をかけることがない状況ですけれど、トラオクヴァール様はグルトリスハイトを望まないのでしょうか？」

　エグランティーヌに見つめられ、アナスタージウスが期待するようにトラオクヴァールを見つめる。妻達もトラオクヴァールを見ている。しかし、トラオクヴァールは首を横に振った。

「新たなツェントは自力でグルトリスハイトを得た者が相応しい。その考えを変えることはできぬ。新たなツェントになるべき人物は私ではない」

「そうですか。トラオクヴァール様のお考えはわかりました」

　エグランティーヌはトラオクヴァールに椅子に座り直すように促した後、わたしを見た。オレンジの瞳には強い決意が宿っている。

「ローゼマイン様、わたくしが女神の化身からグルトリスハイトを得てツェントになります。ローゼマイン様にわたくしの名を捧げ、神々に宣誓いたしますから、どうかグルトリスハイトをお与えくださいませ」

「エグランティーヌ、其方……」

　アナスタージウスが呆然とした顔でエグランティーヌを見つめる。エグランティーヌは「わたくし、国が乱れるのは好まないのです」とニコリと微笑んだ。

「女神の化身からグルトリスハイトを得るのは、次期ツェントだと貴族の皆様に周知されているジギスヴァルト王子が最善でした。ジギスヴァルト王子がグルトリスハイトを得ることができれば、最も長い時間をかけて緩やかに変化させることができたでしょう」

　女神の化身からジギスヴァルトがグルトリスハイトを得て、古の獲得方法を実践した次代へツェントを譲れるように努力し、他の王族は廃領地のアウブとして国に尽くす。エグランティーヌにとっての最善はそれだったそうだ。けれど、不適格だと判断された。

「治世がジギスヴァルト王子に比べると長くは続かないところが少し不安ではありますが、トラオクヴァール様がグルトリスハイトを望むのであれば、今までのご苦労が報われることが喜ばしいと思いました。」

　グルトリスハイトがないままに奮闘してきたのだ。トラオクヴァールがグルトリスハイトを得て正しいツェントとして国に尽くし、神々の要求に応じて国の在り方を変化させていくならば応援したとエグランティーヌは言う。けれど、トラオクヴァールは望まなかった。

「アナスタージウス様やヒルデブラント王子は全ての大神の御加護を得られていらっしゃいませんから、女神の化身と共に祭壇へ上がることができません。最初から今回のツェントとしては対象外です」

　アナスタージウスとヒルデブラントが悔しそうに顔を歪める。確かに祭壇に上がれないのは致命的だ。

「ジギスヴァルト王子が御加護を得られるように、アナスタージウス様は決して抜きん出ることがないように手助けしていらっしゃいましたからね」

　エグランティーヌはアナスタージウスを慰めるように微笑みながらフェルディナンドへ視線を向けた。

「そして、グルトリスハイトの有無にかかわらず、フェルディナンド様がツェントをお望みであれば、わたくしは望みませんでした。女神の化身の寵愛を受けている方と争う程無謀ではございませんし、争いは好みませんから」

　……え？　寵愛？　また勘違いしてる人がいるよ。

　クスクスとからかうように笑うエグランティーヌに反論するべきかどうか悩んで、わたしはちらりとフェルディナンドを見た。眉間に皺を寄せて顔をしかめている。いつもと同じような仏頂面に見えるけれど、これは本気で嫌がっている顔である。ここは反論した方が良さそうだ。

「エグランティーヌ様、わたくしのフェルディナンド様への思いは家族同然に対するものであって、男女間における寵愛ではありませんし、フェルディナンド様も家族愛や政略結婚までは許容できても、そういう意味合いの寵愛を受けるのは心底嫌がっておいでなのです。そこは勘違いしないでくださいませ」

　その途端、その場にいた全員がポカーンとした顔になった。皆の視線が雄弁に「何を言っているのかわからない」と告げている。

「……え？」

　皆がわかっていることをわたし一人だけがわかっていないような雰囲気だ。わたしは思わず手を伸ばすと、フェルディナンドの袖をつかんだ。

「わたくしが言っていること、間違っていませんよね、フェルディナンド様！？　一緒に皆に立ち向かいましょう」

　袖を何度か引っ張ると、フェルディナンドはものすごく嫌そうな顔になった。いくら面倒で嫌なことでも反論しなければ、無言は肯定だと誤解されるとわたしに教えたのはフェルディナンドだったはずだ。

「ほぅ、ローゼマインの言い分は間違っていないのか、フェルディナンド？」

「何故貴方が便乗するのでしょうか、アウブ・エーレンフェスト？」

「其方の兄として、ローゼマインの養父として、知っておくべき事柄だと思わぬか？」

「全く思いません」

　ニヤニヤしている養父様を目が全く笑っていないキラキラとした笑顔でフェルディナンドが睨む。笑顔で睨むとは相変わらず器用だと思う。

「申し訳ございません。わたくし、言葉選びを間違えてしまったようです。フェルディナンド様がツェントを望むのであれば、自分が望むつもりはなかったと述べたかっただけで……」

「エグランティーヌ様のおっしゃる通り、君が脱線しすぎたのだ、ローゼマイン」

　フェルディナンドはエグランティーヌに続けるように指示を出して、わたしに座り直すように軽く手を振った。確かにユルゲンシュミットを左右する大事な話し合いの場で、わざわざ反論するようなことではなかった。もしかしたら効率重視のフェルディナンドは今まで通りに勘違いさせておくことを望んでいたのかもしれない。失敗した。

「わたくしこそお話を遮ってしまって申し訳ございませんでした。続けてくださいませ」

「どなたもツェントを望まないのであれば、わたくしがなります。アウブ・エーレンフェストがおっしゃったように、王族の後始末を王族以外の方に押し付けるべきではないでしょう。それに、わたくしも子を持つ母です。できることであれば個人個人で部屋を分けられる白の塔へ入るのではなく、娘と過ごせる場があることを望みます」

　……へ？　娘！？　いつの間に！？

　わたしは大きく目を見開いた。いつの間に妊娠して出産したのか知らないけれど、結婚した時期を考えても、エグランティーヌの娘はかなり幼いに違いない。

　……エグランティーヌ様、母親になってたのか。

　だったら、親が白の塔へ入れられて親子がバラバラになってしまうよりは、ツェントでもアウブでも一緒に暮らせるほうが良いと思う。

「全属性であるエグランティーヌ様の娘であれば、次代のツェントとしての素質も高いと考えられます。アナスタージウス王子にエグランティーヌ様を支えていく覚悟があれば、グルトリスハイトを与えても問題ないのではありませんか？」

　わたしの言葉にアナスタージウスが警戒するように「どのような覚悟がいるのだ？」と尋ねる。そこまで心配そうな顔をしなくても、女性アウブの後継者になるのと同じようなものだ。

「エグランティーヌ様の妊娠や出産の時期に、アナスタージウス王子が代わりをできることが必須になります。アナスタージウス王子が祈りによって全ての大神から御加護を得て、エグランティーヌ様の代わりが務まるようになるまで二人目のお子を望むことはできなくなるくらいですね。回復薬をたくさん持って祠を回ればすぐですよ」

　わたしが「国を支える決意をしたエグランティーヌ様のためにも頑張ってくださいませ」と激励すると、アナスタージウスはひくっと頬を引きつらせた。でも、大事な嫁と可愛い娘のためならば何でもするだろう。アナスタージウスはそういう人だ。エグランティーヌの望みは絶対に叶えるという意味で、わたしはアナスタージウスを信頼している。

「エグランティーヌ様が新しいツェントになるのであれば、王族の罪はなるべく隠す方向で動くことになります。ヒルデブラント王子もシュタープを得たことだけを隠して、そのまま過ごすことはできないでしょうか？」

　わたしの言葉にマグダレーナが驚いたようにこちらを向いた。

「手枷を魔術具の腕輪のように見かけに改造して、同級生がシュタープを得る年齢まで封じておくとか……できませんか？」

「彼の側近にさせればよいが、君は相変わらず幼い者に甘すぎる」

　フェルディナンドに睨まれて、わたしは少し視線を逸らす。でも、他の王族が罪を隠されて、厳しいながらも貴族として生きていくことが決まったのに、ヒルデブラントにだけ王族から領主一族になって更に厳しい罰が下るのは可哀想ではないか。

「だが、今回のヒルデブラント王子に関しては少しばかり情状酌量の余地はある。幼さ故に情報から隔離されていただろうし、ラオブルートを警戒すべきと周囲の大人が全く考えていなかった。これで周囲の大人が罪を隠されて生きていくのに、幼い者一人が目に見える大きな罪を負うのは公平だとは思えぬからな」

　他人の目には見えぬ罰からは逃れられぬから良いか、と言いながらフェルディナンドがヒルデブラントの母親であるマグダレーナを見た。

「マグダレーナ様。ツェントから許可が出ているという言葉を信じて周囲の側近達まで碌に止めなかったのであれば、幼い子供が唆されても仕方ないと思われます。ですが、シュタープの性質や取得年齢が上がった理由だけでも教えていれば、ラオブルートの提案に飛び乗り、ランツェナーヴェの者達にシュタープを取らせるような愚行は防げたでしょう。第三夫人の子とはいえ王族だというのに、少々教育が疎かだったのではありませんか？」

　ヒルデブラントが真っ青になり、マグダレーナが「フェルディナンド様のおっしゃる通りわたくしの教育不足でした」と目を伏せる。わたしは何度か目を瞬き、首を傾げた。

　……あれ？　わたし、地下書庫でヒルデブラント王子とカリキュラム変更に関するお話をしたと思うんだけど？

　でも、余計なことを言ったらフェルディナンドが「説明があったのにあのような愚行を？」とか「甘やかす必要はなさそうだ」のようにヒルデブラントにもっと厳しいことを言いそうなので、余計なことは胸にしまっておいて、フェルディナンドを宥めることにする。

「大丈夫ですよ、フェルディナンド様。エグランティーヌ様がツェントになるのであれば、トラオクヴァール様がアウブになります。ヒルデブラント王子はもう王族ではなくなりますし、領主一族の教育としてはダンケルフェルガーを参考にすれば、きっとハンネローレ様のような優秀な領主候補生になれますから」

　ダンケルフェルガーの領主候補生はレスティラウトもハンネローレも優秀なのだ。ダンケルフェルガー出身のマグダレーナならば、ヒルデブラントを優秀な領主候補生に育てるくらいは簡単だろう。

「あの、ローゼマイン、様は……私が次代のツェントになることを応援してくださいますか？」

　ヒルデブラントが不安そうに尋ねてきた。現実的に考えると、ヒルデブラントがメスティオノーラの書を得ることはほぼ不可能だが、応援するくらいならばわたしにもできる。「もちろん応援します」と口を開こうとした瞬間、フェルディナンドに睨まれた。

「まさか女神の化身である君がこのような公の場で安請け合いをする気か？　幼子でも知っておかなければならない現実があろう」

　まだ何も言っていないのに、フェルディナンドから説教された。

「おっしゃることはわかりますけれど、このような公の場で子供の夢をすっぱり切り捨てるような真似をする必要もないでしょう？」

「後で不可能を知る方が残酷ではないか」

「不可能とはどういうことですか！？」

　目を見開くヒルデブラントにフェルディナンドが残酷な現実を伝える。

「ヒルデブラント王子が得たシュタープは、旧世代と同じ品質の物になります。これから祈りの重要性が周知され、シュタープを得るまでに魔力圧縮や属性を増やす努力をした同級生と共に三年時に得た場合のシュタープに比べるとかなり粗悪な物です」

　あまり祈りや魔力圧縮を頑張りすぎるとシュタープの容量を超えて魔力の制御が不可能になってしまう、とフェルディナンドがヒルデブラントに告げた。

「ローゼマインは元々全属性だったので大きな祠に入れましたが、ヒルデブラント王子のシュタープは属性が欠けていて大きな祠には入れません。容量を増やすことができないことを念頭に置いて成長にも気を付けなければ、貴族として致命的な欠陥を抱えることになります。そういう苦労こそが他人の目には見えぬ、ヒルデブラント王子がこれから一生背負っていく罰です」

　フェルディナンドの言葉にヒルデブラントが泣きそうな顔になった。

「つまり、私は、次代のツェントになれないのですか？」

「古代文字を勉強し、今度地下書庫の資料を読むといいですよ。当時は成人の時がシュタープの取得年齢でしたが、シュタープを得るまでに祈りを捧げ、全ての大神から御加護を得なければツェントになることはできませんでした。すでにシュタープを得ているヒルデブラント王子には不可能です」

　フェルディナンドに止めを刺され、ヒルデブラントは絶望感に満ちた顔になり、ガクリと項垂れた。

[------------------------------------------------]

ランツェナーヴェの者達の扱いと褒賞

「新しいツェントが決まったので、今後についてお話をいたしましょう。ジギスヴァルト王子も席に着いてくださいませ。境界線の引き直しや新しい領地についてのお話もするのに、アウブに着任するジギスヴァルト王子が縛られたままでは困るでしょう？」

「女神の化身に対してあのような態度を取ったジギスヴァルト王子を廃領地の新たなアウブに据えるとおっしゃるのですか？　本当によろしいのですか、ローゼマイン様？」

　トラオクヴァールがわたしと、そして、隣に座っているフェルディナンドに確認するような視線を送る。わたしはニコリと微笑んで頷いた。

「ジギスヴァルト王子は王族です。女神の御力を宿しているとはいえ、領主一族のわたくしへの対応だと考えれば罰されるようなことではありません。それに、今、ジギスヴァルト王子が罰されると二人の妻にも累が及ぶ可能性もございます」

　……これ以上ジギスヴァルト王子の関係で奥様方が苦労するのも可哀想だからね。

　ジギスヴァルトがこんなところで罪に問われたら、次期ツェントの妻からアウブの妻に格が落ちるアドルフィーネ達の未来が更に暗くなる。二人の妻がジギスヴァルトへの教育を頑張ってくれることを期待したい。

「上位の者への恭順を知らないジギスヴァルト王子に廃領地のアウブは少し荷が勝ちすぎではございませんか？」

　アドルフィーネがとても心配そうな顔になってそう言った。

「今回の騒動における王族の罪をなるべく隠す方向でグルトリスハイトを与えるとお約束いたしました。それに、ジギスヴァルト王子はグルトリスハイトを得るためには不適格でしたが、罪があるわけではないのです」

「そうですね……」

　アドルフィーネが少し顔を上げて、わたしを見つめる。琥珀の瞳が何か探るように見えるのは気のせいだろうか。エグランティーヌがツェントに立候補した時のように、アドルフィーネも何か静かに考えている気配を感じながら、わたしはジギスヴァルト王子へ視線を移した。

「ジギスヴァルト王子がこれから先アウブになった後に問題を起こした場合は、新たなツェントから相応の罰や処分が下るはずです。いきなり意識を切り替えるのは難しいと存じますが、早急にアウブとしての振る舞いを身につけてくださることを期待しましょう」

「本当にローゼマイン様は慈悲深いこと」

　王族からはそんな声が上がり、トラオクヴァールは「ローゼマイン様のご慈悲に感謝せよ」と言いながらジギスヴァルトの縛めを解く。完全に自分の存在が皆の意識に上がらないまま、どんどんと話が進んでいく現状に、ジギスヴァルトは己の立場が次期ツェントや王族から外れたことを実感したらしい。わたしにお礼の言葉を丁寧に述べながら座り直した。

　……別に慈悲じゃないんだけどね。

　わたしは胸の中でそっと呟いた。ジギスヴァルトの縛めを解いたのは、中央が抱えている廃領地のアウブになってくれる者がいなくなると、フェルディナンドの計画が狂うからだ。その穴を埋めるために計画の練り直しをすると、わたしの図書館都市計画は更に遠のいてしまう。わたしはできるだけ早く今回の王族との話し合いやグルトリスハイトの授与を終わらせて自分の記憶を取り戻したいし、図書館都市計画を進めたいのである。

「お披露目についても決めましょう。今、各領地から情報を求めて貴族達が集まってきているので、エグランティーヌ様は至急名捧げの石を作ってくださいませ。名捧げの石ができ次第、グルトリスハイトを贈り、承認の儀式を行います」

　あちらこちらの領地からアウブが集まってきている今ならば、承認式を行うことができるはずだ。

「それほど急がなくても、メスティオノーラの化身よりグルトリスハイトを賜ることが決まったことだけをアウブ達に告げ、儀式自体は領主会議の時でよろしいのではございませんか？　講堂などの準備が間に合わないと思いますけれど……」

　エグランティーヌの言葉にフェルディナンドが厳しい顔で首を横に振った。

「ローゼマインの女神の御力を領主会議の時期まで残せません。女神の御力の影響を深く受けているローゼマインは、現在アウブ・アーレンスバッハとしての行動が不可能になっています。このままでは領主会議に参加するために必要なブローチの作成もできないのです。儀式の準備は奉納舞を行う舞台と祭壇が整っていれば十分でしょう。そこは中央の文官と中央神殿の者達をアナスタージウス王子に率いていただきます」

　エグランティーヌが中央神殿の神殿長になるのだから、今は夫であるアナスタージウスが補佐すればよいとフェルディナンドが告げる。アナスタージウスが「私がまた中央神殿へ出向くのか……」と眉をひそめた。

「去年の領主会議ではローゼマインを神殿長にするという提案を耳にしました。ならば、エグランティーヌ様やアナスタージウス王子にできないはずがございません」

　フェルディナンドの言葉にエグランティーヌとアナスタージウスの視線がジギスヴァルトへ向かった。発案者、もしくは、それを推し進めようとしていた王族が誰だったのか、それだけでわかる。

「エグランティーヌ様がツェントになった後は中央神殿を解体して貴族院内に移します。御自身が立ち入ることができる神殿に整えてください。ツェントとなったエグランティーヌ様が中央神殿の神殿長となり、貴族院で神殿を運営する様子は他領の手本になるでしょう」

　隠していてもわかる王族の神殿に対する忌避感を「自分達で作り替えろ」とフェルディナンドは綺麗に流す。わたしとフェルディナンドも前神殿長がいなくなってから自分達の手で変えていったのだから、ツェントという権力者にできないはずがない。

「大丈夫ですよ、アナスタージウス王子。それほど心配しなくてもどのアウブもすぐに神殿の改革に必死になります。神殿に出入りすることを蔑まれるとしても最初の内だけです」

　領主会議で礎の位置や聖典の役割について周知するつもりなので、エグランティーヌが中央神殿へ出入りしたところでそれほど長い間蔑まれるようなことにはならないと思う。

「ついでと言っては何ですが、中央神殿へ行った時には神殿の解体と移動について神官達に連絡しておいてください。政変後に各領地からかき集めた青色神官や青色巫女は、領主会議でアウブ達の希望があれば領地へ戻します。下働きを行う灰色神官はまだしも、これからお祈りをする者が増える貴族院の神殿にはそれほど多くの青色神官や青色巫女は必要ありませんから」

　どの領地も魔力的には不足しているはずなので、青色神官や青色巫女を引き取ることを拒むアウブは少ないと思う。中央の経費削減にも繋がるはずだ。

「貴族院へツェントの住まいを移せと簡単に言うが、貴族院に住めるところなどないではないか」

　アナスタージウスが嫌な顔をすると、フェルディナンドが「ございます」と微笑んだ。

「王の養女となるはずだったローゼマインが入る予定だった離宮は、中央ではなく貴族院にございます。しばらくはそちらを住まいとすれば良いのではありませんか？　家具や内装は王族の姫に相応しい品質の物が揃っています」

「フェルディナンド、其方……」

　フェルディナンドが有無を言わせないように笑みを深める。アナスタージウスが奥歯を食いしばり、エグランティーヌがよくわからないというように目を瞬いた。わたしは真っ青になっている王族の男性陣を見ながらニコリと微笑んだ。

「今は罪人達を閉じ込めていますが、中央の牢へ移動させれば問題ないでしょう。トラオクヴァール様やジギスヴァルト王子がわたくしのために準備してくださった離宮ですもの。ユルゲンシュミットを支える魔力に余裕ができて、自分達の住まいをエントヴィッケルンで整えることができるまでの仮住まいならば十分だと思いますよ。それよりもエグランティーヌ様には早急に礎を染めていただく必要がございます」

　領主会議の時にはツェントになっていなければ、境界線の引き直しや罪人の処分を行うことができない。ツェントが礎を染めていない状態では、たとえグルトリスハイトを得たとしてもできないことが多すぎる。

「今回の首謀者であるジェルヴァージオがギレッセンマイアーの国境門に閉じ込められています。回収に行ってもらわなければなりません」

「国境門へ移動できるローゼマイン様が捕らえてくるのではないのですか？」

　丁寧な口調でわたしに向かって言いながらアナスタージウスがフェルディナンドを睨んだ。これ以上こちらへ仕事を振るな、と言いたいことがよくわかる表情だ。

「今のわたくしは不用意に外へ出ることが禁じられています。……その、この通り、銀色の布がなければどうなるかわかりませんから……」

「ローゼマインが外出できないことに加えて、今回の騒動でエグランティーヌ様には何の功績もございません。首謀者くらいは捕らえた方が良いのではありませんか？　ジェルヴァージオのシュタープはすでに封じていますし、三日ほど放置しているので多少弱っていると思います。回復薬の品質によってはあと一週間ほど元気である可能性もあるので、捕らえる時には騎士を十名ほど連れていくことをお勧めします」

　祭壇の上で戦っていた時に即死毒を出したことからも、見知らぬランツェナーヴェの道具を持っている可能性もある。転移した瞬間に攻撃されるかもしれないとフェルディナンドが注意する。

「処罰するのに首謀者の記憶が必要ではないならば、放置するのも一つの手段です。エアヴェルミーン様に禁じられたので直接手を下すことはできませんが、自然と死ぬのを待つことは可能ですから」

　記憶を見ることはできなくなるけれど、餓死させるのも一つの方法だとフェルディナンドは素っ気なく言った。よほどジェルヴァージオには思うところがあるらしい。

「ただ、ジェルヴァージオの記憶を探るのであれば、グルトリスハイトに関することがたくさん出てくるはずなので、騎士に任せるのではなくツェントになったエグランティーヌ様が探るのが望ましいと存じます」

　ユルゲンシュミットのツェントとして知っておかなければならないことが大量にあるはずだ、とフェルディナンドは言う。

「待て、フェルディナンド。いくら何でもランツェナーヴェの者達に関する記憶はエグランティーヌに重すぎる」

「ツェントという立場が軽いわけがないでしょう。それを共に背負うことが伴侶の役目であって、ツェントの重みから逃れるように唆すことではありません、アナスタージウス王子」

　逃げるな、とフェルディナンドから睨まれた二人がコクリと息を呑んだ。トラオクヴァールが申し訳なさそうに視線を下げる。

「では、ジェルヴァージオ以外の罪人の扱いについてですけれど……」

　わたしが切り出すとフェルディナンドが立ち上がり、布に包まれた一枚の登録メダルをエグランティーヌに差し出す。

「こちらは中央神殿から回収してまいりました。現在のランツェナーヴェ王のメダルです。新しくツェントになられるエグランティーヌ様に破棄をお願いいたします」

「あら、ランツェナーヴェとの交渉はなさいませんの？」

　エグランティーヌは登録メダルを受け取りながら首を傾げる。ランツェナーヴェに賠償を求め、ランツェナーヴェに非があることをアウブ達に知らしめた方が良いのではないか、と言う。

「ランツェナーヴェの者達はユルゲンシュミットの貴族を同じ人間ではなく、魔力を得るための手段と考えているようです。魔力封じるための道具や即死毒などの開発も進んでいるという証言もありました。賠償を得るどころか、使節団がそのまま全員捕らえられたり、魔石を得るために殺されたりする可能性が非常に高いことを考慮した上で、派遣を決定してください。アーレンスバッハでランツェナーヴェの者達に接してきた私としては、国境門を閉ざした上で放置するのが最善だと考えています」

　フェルディナンドの言葉に王族の顔が引きつった。彼等はトルークによって中央の貴族達を滅茶苦茶にされたが、即死毒やそれ以外の道具を使われてはいない。ランツェナーヴェの危険性をよく知らなかったようだ。

「色々な危険性を考えた結果、わたくしはアーレンスバッハからランツェナーヴェへの使者を出すつもりはございませんし、国境門を開閉する気もありません。もし、国境門を開くならば別の場所にしたいと考えています。もちろん、エグランティーヌ様がお望みであれば中央で使節団を整えてランツェナーヴェへ送ることに反対しませんし、その際はアーレンスバッハで回収している彼等の船を有料で貸与いたしますよ」

　無料でないのは、戻ってこない可能性の方が高いからだ。それに、アーレンスバッハを図書館都市にするためにはいくらお金があってもいい。

「つまり、ランツェナーヴェの捕虜を帰らせることは考えていらっしゃらないのですか？　治安や経費の面から考えると、あまり多くの者がいても困ると思うのですが……」

　ジギスヴァルトの言葉にわたしはゆっくりと首を横に振った。わたしとしては帰らせても構わないのだが、それは神々の理に反する行為だ。

「助けを求めてきた者の受け入れを拒むことは許さないとエアヴェルミーン様はおっしゃいました。……受け入れた後は人の理によって扱っても構わないそうですが、ユルゲンシュミットまでやってきてシュタープを得ようと奮闘したランツェナーヴェの者達をわたくし達の勝手な判断で追放してはならないのです」

　ユルゲンシュミットの始まりとエアヴェルミーンの贖罪など神々の理と人の理の違いについて話をすると、皆がゆっくりと息を吐いた。

「我々が貴族院で捕らえたアーレンスバッハの罪人及びランツェナーヴェの者達の処分は、王族に行っていただくのが適当だと考えています。彼等の罪はアーレンスバッハで裁ける範囲を超えています」

　フェルディナンドがそう言って王族をゆっくりと見回した。ランツェナーヴェの者達に侵入された王族の罪を少しでも隠蔽するためには、王族が共に戦った部分を誇張し、罪人を全て捕らえたことを周知しなければならない。

　処罰などについて話をするのは気分の良いものではないけれど、決めてしまわなければならないことだ。わたしは背筋を伸ばして口を開く。

「政変であれだけたくさんの処刑を行ったにもかかわらず、外患誘致の上、実際に貴族院へ攻め入っていた者達が処刑されないのでは、負け組領地の貴族達の不満が非常に大きくなると思われます。神々によって処刑が禁じられている現状で、他領のアウブを納得させられるくらいの重い処罰を科す必要もあります。二度と彼等が貴族として扱われることはないということを内外に示すため、わたくしが領地外でメダルの破棄を行いたいと思いますが、異議のある方はいらっしゃいますか？」

　シュタープを得たランツェナーヴェの者達がアーレンスバッハの貴族として登録されていることや、アーレンスバッハでメダルの破棄を行えば命を奪うことなく貴族としての資格を剥奪できることなどをフェルディナンドが述べる。誰からも反論は特に出なかった。

「罪人達にはユルゲンシュミットの各地で魔力を注いでもらうつもりです。どの土地に何人の罪人を向かわせるかについては、トラオクヴァール様とダンケルフェルガーが中心になって話し合い、新たなツェントになるエグランティーヌ様が最終的に判断してください」

　王族がどのような処罰を下すのか、監視にダンケルフェルガーを付けることで、これから先のダンケルフェルガーの発言力を強化し、クラッセンブルクの横槍を防ぐことができるとフェルディナンドは考えているらしい。

「確かに承りました」

　トラオクヴァールが粛々と受け入れた。

　中央へ罪人の処罰という面倒な仕事を丸投げできたことで、わたしがアウブとして行わなければならない仕事はメダルの破棄と、実際にアーレンスバッハで暴れていたランツェナーヴェの兵士達の処罰だけになった。気が重い仕事の大半が減ったことに安堵の息が漏れる。

「エグランティーヌ様がツェントになった後の領地の境界線とトラオクヴァール様やジギスヴァルト王子が新しくアウブになる土地などについてのお話もしなければなりませんね」

　わたしがそう言うと、フェルディナンドがシュタープを出して魔力で地図を描き始めた。

「本来のツェントが治めなければならないのは、中央の中でも貴族院のある中心の部分だけです。ツェントの魔力負担を少しでも減らすために、長い歴史の中で、中央の離宮で王族が生活できるように拡大されていった辺り一帯を削ります。そして、アーレンスバッハが管理していた旧ベルケシュトックと旧シャルファー領と中央の一部を一つの領地にまとめてトラオクヴァール様に、旧トロストヴェークと中央の一部をジギスヴァルト王子に治めていただきます」

　わたしはフェルディナンドの描いた地図を指差しながら、境界線の変更について話をすると、説明に合わせてフェルディナンドが新しい境界線を引き直していく。旧ベルケシュトックの北側にある旧シャルファーがまとめられた。

「先の政変で勝ち組に与えられた領地も境界線を引き直し、それぞれのアウブが自分の土地として治められるようにしなければなりませんね。旧ベルケシュトックの半分はダンケルフェルガーが治めてきました。境界線を引き直して治めることもできますし、もっと土地が必要であれば広げることも、不要な土地であれば手放すことも可能ですけれど？」

　今回の功労者であるダンケルフェルガーに意見を問うと、アウブ夫妻は境界線を引き直し、そのまま治めることを選択した。クラッセンブルクもそのまま旧ザウスガースを治めていくことになるだろうとエグランティーヌが発言したことで、クラッセンブルクとまとめることで決定した。

「アウブ・ダンケルフェルガー。わたくし、新しいツェントとして、今回の功績に褒賞を与えなければならないと考えています。ダンケルフェルガーは何を望みますか？　土地を望むのであれば、この地図に書き込まなくてはなりません」

　エグランティーヌが地図を示しながら問いかけると、アウブではなく第一夫人が少し考えて口を開いた。

「ダンケルフェルガーにこれ以上の土地は必要ございません。代わりに、エグランティーヌ様がツェントに立たれた後、クラッセンブルク以上の発言力をいただきたいと思います。エグランティーヌ様の治世の間、クラッセンブルクの順位をダンケルフェルガーの下位に置くことを望みます」

　今回の件で全く功績を上げていないにもかかわらず、エグランティーヌがツェントに立てばクラッセンブルクの発言力が強まってしまう。それを抑えることを望む、とダンケルフェルガーの第一夫人が望んだ。

「わたくしにグルトリスハイトを与えてくださり、ツェントに押し上げてくださるのはローゼマイン様が率いる新しいアーレンスバッハ、ダンケルフェルガー、エーレンフェストですもの。クラッセンブルクより優遇するのは当然です。わたくし、アウブ・クラッセンブルクから自分を引き立ててくれる者への心配りを忘れてはならないと教えられて育ちましたから」

　エグランティーヌがおっとりと微笑んで了承し、エーレンフェストにも望みを問いかける。

「エーレンフェストは順位を上げるのも、土地を広げるのも望んでいないと耳にしていますけれど、褒賞として望む物がございますか？」

「女神の化身としてグルトリスハイトをもたらすローゼマインを、これからアウブになるトラオクヴァール様と養子縁組をさせませんが、その承認とローゼマインが養子縁組をした場合に与えられるはずだったエーレンフェストの利を全ていただきたく存じます」

　子供に与えられる魔術具や結婚時の取り決めなどをそのままにしてほしい、と養父様が望む。

「女神の化身との養子縁組など、恐れ多いことはできません」

　トラオクヴァールもわたしとの養子縁組を行うつもりはないことを宣言し、エグランティーヌがコクリと頷いた。

「ローゼマイン様は何か望みがございますか？」

「わたくしは図書館都市計画にぜひ協力していただきたいです。具体的にはわたくしがユルゲンシュミットで印刷業を広げた時には納本制度を全ての領地で適用するように命じてくださいませ」

「……それでよろしいのでしょうか？」

　エグランティーヌが不安そうにフェルディナンドに視線を向けた。わたしに望みを尋ねているのに、何故フェルディナンドに可否を問うのか。解せぬ。

「ローゼマインの望みはそれで良いでしょう。各領地に図書館を建設させ、人を移動させるツェントの転移陣を設置して行き来を自由にできるようにしたいと言い出さなかっただけ、少しは分別が残っているようです」

　最終的には自由に行き来できるようになってほしいけれど、今の段階で難しいことはわかっている。色々と怒られた記憶があるし、わたしだって女神の化身として要求しても良いことと悪いことを少しは弁えているつもりだ。

「私としては領主会議において、アーレンスバッハの改名と新しい領地の色の選定、ローゼマインのアウブの承認を行ってほしいと思っています」

「お二人の望みは理解いたしました。エーレンフェストを二つ作るわけにはまいりませんから、どのような名を付けるのか考えておいてくださいませ」

　礎を奪った場合は領主の家名を新しい領地に付けることがほとんどだが、養女であるわたしの場合、エーレンフェストが二つになってしまう。わたしが新しい名前を考えても良いらしい。

　……どんな名前がいいかな？

　図書館都市に相応しい名前がいいと思う。わたしが内心わくわくしていると、アドルフィーネがそっと手を挙げた。

「褒章のお話が一段落したようですが、わたくしが発言してもよろしいでしょうか？」

「えぇ、もちろんです」

　アドルフィーネが琥珀の瞳でトラオクヴァールとジギスヴァルトを見て、わたしに微笑みかけた。

「本来は王族内で話し合う事柄であることは重々承知しています。けれど、わたくしは次期ツェントとドレヴァンヒェルを繋ぐためにジギスヴァルト王子に嫁ぎました。ジギスヴァルト王子が次期ツェントという立場を失うことになり、契約違反に抵触する可能性が出てまいりました」

「契約違反、ですか？」

「はい。ジギスヴァルト王子がアウブになるのであれば、ドレヴァンヒェルとわたくしの利が消え、婚姻時の契約に反します。これはジギスヴァルト王子だけの責任ではございません。光の女神に罰されることがないように、英知の女神に少しお知恵を貸していただきたく存じます」

　アドルフィーネの望むことがいまいちよくわからなくて、わたしは首を傾げた。理解できてないことを察したフェルディナンドがこめかみを叩きながら通訳してくれる。

「ジギスヴァルト王子をアウブにするのであれば、アドルフィーネ様が嫁がれることでドレヴァンヒェルが得るはずだった利益を保証するか、離婚を認めてほしいということですか？」

「えぇ、わたくし達の星結びを行ったローゼマイン様に認めていただきたいのです」

　アドルフィーネがニコリと笑った。共同研究を推し進めてくる時のグンドルフとよく似た目だと思った。

[------------------------------------------------]

アドルフィーネの相談と儀式の準備

「ジギスヴァルト王子とアドルフィーネ様の婚姻に伴うドレヴァンヒェルの利益をローゼマインが保証する義務はありません。それに関しては王族内で話し合ってください」

　フェルディナンドが断ると、アドルフィーネは「存じています」と微笑んだ。

「けれど、話し合いの前提にはローゼマイン様も関係がございます。先の政変の後、クラッセンブルクとダンケルフェルガーは褒美としてそれぞれ隣の土地を得ました。隣接する場所に得られる土地がなかったドレヴァンヒェルは、上級貴族を中央へ多く送り込むことで影響力を増すことになったのです」

　境界線で区切られている土地を管理するクラッセンブルクやダンケルフェルガーも大変だったが、減った中央貴族の穴を埋めるために大人数の上級貴族を差し出したドレヴァンヒェルも内情は大変なことになっていたらしい。

「今、クラッセンブルクとダンケルフェルガーは境界線の引き直しを行い、管理してきた土地を自領の物とすることが決まりました。では、中央の土地を削り、中央神殿を貴族院へ移動した後の中央貴族の扱いはどのような形になるのでしょうか？」

　ドレヴァンヒェルが勝ち組として得た利益は、クラッセンブルクやダンケルフェルガーと同じように保証されるのかと尋ねるアドルフィーネに、フェルディナンドが少し難しい顔になった。

「ツェントの貴族院移動や王族のアウブ就任に伴って、王族の側近達以外の中央貴族は一旦それぞれの領地に戻す予定です。その後、各領地から中央に貴族が派遣されるのは同じですが、中央貴族として採用するか否かはエグランティーヌ様とアナスタージウス王子に決定権が委ねられます。また、これから先、中央貴族には各領地の寮を住まいとして使っていただきます」

　フェルディナンドの説明を聞いたアドルフィーネは、その展開を予想していたようで「青色神官達を戻すのですから、中央貴族も各領地に一度戻すのではないかと考えたのです」とゆっくりと頷く。

「新しいツェントが新しく自分達の周囲に置く者を選択することにも、負担を減らすために中央貴族を各領地の寮で住まわせることにもわたくしは反対しません。けれど、それではクラッセンブルクやダンケルフェルガーと違って、ドレヴァンヒェルはわたくしの婚姻によってもたらされるはずだった利益だけではなく、政変の時に得たはずの利益も失うということです」

　それらの情報を基にドレヴァンヒェルと話をする、とアドルフィーネが何度か頷く。その様子を見て、わたしは思わず口を開いた。

「……アドルフィーネ様の状況は理解いたしました。エグランティーヌ様、トラオクヴァール様、ジギスヴァルト王子。どうかドレヴァンヒェルの利益についてもご考慮くださいませ」

「ローゼマイン、君が口を出すことではない」

　今のわたしが口添えをすれば命令に等しくなる、とフェルディナンドに軽く睨まれたけれど、全く後悔はしていない。

「差し出がましいことは存じています。けれど、アドルフィーネ様の焦りや必死さには共感します。口添えくらいは許してくださいませ」

　今のアドルフィーネの状況は、わたしがトラオクヴァールと養子縁組をしたのに、エーレンフェストへ与えられるはずだった利益が全てご破算になったようなものだ。わたしだったら絶対に「そんなの契約違反だ」と怒るし、ツェントの養女になったはずが廃領地のアウブの養女に格下げになった上にエーレンフェストへ利益をもたらすどころか、エーレンフェストに協力を頼んで負担をかけなければならない状況になるのであれば養子離縁を考えるだろう。

　……養子縁組と違って婚姻の場合は女性の名誉にも大きく関わるから事情が変わるだろうけどね……。

「アドルフィーネ様は政略結婚ですし、状況は理解しました。けれど、ここで今すぐに離婚を決めるのはどうでしょう？　領地の思惑やご自身の将来に大きく関わるのですから早急に決めることではないと思いますが……」

　ジギスヴァルトとアドルフィーネの婚姻は、ドレヴァンヒェルと王族、ユルゲンシュミットにおける領地の力関係を考えた結果だったはずだ。アドルフィーネの意見だけを呑んで、離婚を決めるわけにはいかないと思う。

「もちろんこの場で今すぐに決めるわけではございません。ドレヴァンヒェルの両親や王族の皆様と話し合い、トラオクヴァール様やジギスヴァルト王子がアウブに就任する領主会議までに結論を出すつもりでございます。……ただ、わたくしの星結びは古の儀式として行われました。ならば、離婚にも古の儀式が必要ではないかと考えたのです」

　普通に離婚できるのであれば問題ないけれど、今まで誰も見たことがないような古の儀式によって結ばれた夫婦が今までと同じ離婚方法で離婚できるかどうかをアドルフィーネは尋ねたいそうだ。一応結婚一年目の新婚夫婦のはずだが、どう聞いても離婚が前提である。

　……うーん、こんなものなのかなぁ……。

　政略結婚は前提が崩れればそれまでなのだろうか。せっかく夫婦になったのだから、もうちょっと助け合うなり何なりしてほしいと思ってしまう。けれど、それはどのような契約で結婚に至ったのか知らない他人のわたしが口を出すことではない。

「少々お待ちくださいませ。調べてみます。……グルトリスハイト」

　わたしはメスティオノーラの書を出して、離婚について調べてみることにした。検索している間、ジギスヴァルトが離婚を切り出したアドルフィーネに話しかけているのが見える。どうやらジギスヴァルトは離婚したくないらしい。

「アドルフィーネ、私は貴女がそれほど王族としての立場に執着しているとは思いませんでした。一年近く夫婦として過ごしてきたではありませんか」

　情が薄いと詰る響きを含んだジギスヴァルトの言葉に、アドルフィーネが不思議そうに目を瞬かせた。

「政略結婚なのですから、王族としての立場を得ることが前提ではありませんか。そもそもわたくし達が夫婦だったことがございますか？」

「私達は最高神の祝福を得た夫婦ではありませんか。それに、まだ成人したばかりの貴女が離婚ということになれば将来はどうなりますか？　再婚もできず、ドレヴァンヒェルにいることになります」

　ジギスヴァルトにそう言われて、アドルフィーネはとても困った表情になった。多分、話がずれているのだと思う。けれど、夫婦の事情や状況はこのような公の場で話すようなことではない。

　何かを言いかけて口を開いたアドルフィーネが、ジギスヴァルトに対する説明を諦めたような笑顔を浮かべる。けれど、離婚の意思を翻そうとはしなかった。

「ジギスヴァルト王子、時の女神　ドレッファングーアの糸が見えた時にそれを手に取らぬ者はいません。リーベスクヒルフェさえ、その誘惑には抗えないのです」

　アドルフィーネに離婚の意思が固く、両家の話し合いで決めるならばわたしが口を出すようなことではない。わたしはメスティオノーラの書から顔を上げて、アドルフィーネとジギスヴァルトを見た。

「アドルフィーネ様、調べたところ、これまでの離婚手続きと同じようにすれば離婚はできるようです。……ただし、これから先、ジギスヴァルト王子もアドルフィーネ様も最高神の祝福を得にくくなるようです」

　普通にお祈りした場合に比べて半分くらいしか得られなくなるらしい。

「恐れ入ります、ローゼマイン様。助かりました。わたくしのためにお時間を割いてくださってありがとう存じます」

　アドルフィーネはホッとしたように微笑んだ。最高神の祝福が減ることを告げても、アドルフィーネの琥珀色の瞳に変化はない。決意は硬そうだ。離婚方法に違いがないことを知ったアドルフィーネは、エグランティーヌやトラオクヴァールにドレヴァンヒェルとの話し合いの場を設ける約束を即座に取り付けた。優秀だ。

　アドルフィーネが質問を終えて引っ込んだのを見て、フェルディナンドが口を開く。

「では、三日もあれば名捧げの石はできるので、余裕を見て四日後にグルトリスハイトの継承式と新しいツェントのお披露目を行うということでよろしいですか？　他の儀式同様に三の鐘で開始します」

「四日後ですか！？」

　エグランティーヌが驚いた声を上げたけれど、わたしはフェルディナンドの言葉に同意する。かなり余裕のあるスケジュールだ。フェルディナンドにしてはずいぶん優しいと思う。

「素材さえあれば名捧げの石を作るのは、王族であるエグランティーヌ様にとってそれほど大変ではありませんもの。採集場所を癒す祝詞や方法も前の領主会議で教えていますから、素材採集もそれほど難しくはありませんし、二日もあれば十分ですよ」

「名捧げの石を作るだけならば二日で十分だが、それでは儀式の準備の方が間に合わぬ。エグランティーヌ様にも奉納舞の稽古は必要であろうし……」

「あぁ、確かにエグランティーヌ様と比較されるのでしたら、三、四日のお稽古では足りませんね、わたくし」

　やっと転ばずに舞えるようになってきたが、まだところどころぐらつくところもあるくらいだ。エグランティーヌと比較されるのは結構辛い。もうちょっと練習時間を取ってくれてもいいですよ、とおねだりしてみたけれど、それは却下された。

「練習時間が足りなくても何とかしなさい。可能な限り早く終わらせてアーレンスバッハへ戻らなければ祈念式に間に合わぬ。今年の収穫が壊滅的になるぞ」

「わかりました。……あ、フェルディナンド様。衣装はどうすればいいですか？」

　わたしがフェルディナンドに問いかけると、フェルディナンドが軽く眉を上げる。「何でもいい」という声が聞こえた気がした。けれど、きちんと聞いておかなければ今のわたしには着られる服が少ないのだ。

「成人しているエグランティーヌ様は成人式や星結びでまとった晴れ着があるので問題ない。君は新しいツェントにグルトリスハイトを与えるのだから、神殿長の儀式用の衣装をまとえば良いのではないか？」

　神殿長の儀式服ならば着慣れているし、間に合うのかとドキドキしなくて良いので安心だ。リーゼレータ達に頼んで、アーレンスバッハから取ってきてもらわなければならないだろう。

「儀式の当日、エグランティーヌ様は魔石の靴で奉納舞をお願いします。魔力が伝わらなくては光の柱が立ちませんから」

「わたくしも魔石の靴ですか？」

「君は完全に女神の御力を垂れ流している状態なので、靴くらいで結果は変わらぬ。好きにしなさい」

　……え？　そんなにひどい垂れ流し状態なんだ、わたし。

　全く自覚がないけれど、靴に何もしなくても柱が立ちそうという状態は普通ではない。

「それから、儀式の補佐としてハルトムートを神官長の立場に置く予定です。当日までの間、アナスタージウス王子の教育係として貸し出しましょうか？」

「待て、フェルディナンド！　ハルトムートをアナスタージウス王子の教育係にするだと！？」

　エーレンフェスト籍の上級貴族を王族の教育係にするという言葉に養父様が驚きの声を上げた。養父様をちらりと見てからフェルディナンドはアナスタージウスへ視線を向ける。

「こちらから貸し出せる人材の中で最も神事に詳しい者がハルトムートです」

「神事に最も詳しいのはフェルディナンド、其方ではないのか？」

　上級貴族に教えを請うよりは、領主候補生から教えを請う方がやりやすいと思ったのか、アナスタージウスはフェルディナンドを指名する。だが、間髪入れず、フェルディナンドはその申し出を断った。

「確かに私の方が詳しいですが、ローゼマインの代わりにアーレンスバッハの貴族達に指示を出さなければならない私にそのような余裕はございません。ハルトムートが気に入らない、もしくは、教育係などいなくても四日後に決まったエグランティーヌ様の継承式の準備ができる自信があるとアナスタージウス王子がおっしゃるならば、貸し出しはいたしません。中央神殿の者達とご準備ください」

　イマヌエルが「死なせてはない」という状況になっている中央神殿の青色神官達を率いてアナスタージウスがどこまでできるというのか。どう考えてもハルトムートの協力は必要だろう。

　……完全に退路を断ちつつ王族に恩を売るフェルディナンド様、マジ魔王。

　だが、フェルディナンドの魔王っぷりに負けているわけにはいかない。ここでやり取りされているのは、わたしの側近の貸し出しである。ハルトムートの主であるわたしの頭越しに行うことではないはずだ。

「アナスタージウス王子、わたくしの側近を四日も拘束するのですから有料ですよ。出張費は王族持ちでお願いします」

　何を言い出すのかと養父様達が目を剥いたが、ここは譲れない。わたしが魔王に勝てるとすれば商売っ気くらいなのだから。

「あと、わたくし、新しいツェントにグルトリスハイトを与える場にはハンネローレ様をご招待するとお約束したのです。アウブ・ダンケルフェルガー、ハンネローレ様も儀式の場に呼んでくださいませ」

「必ず連れてまいります」

　ダンケルフェルガーのアウブ夫妻が快く承知してくれたことにわたしが満足していると、トラオクヴァールが少し考え込んだ後、ゆっくりと挙手して発言の許可を求めた。

「ローゼマイン様、一つ提案がございます」

「何でしょう、トラオクヴァール様？」

「貴族院へ在学している各地の領主候補生を招くのはいかがでしょうか？　神事の重要性、グルトリスハイトの神秘性、それらを次期ツェント候補に最も近い者達が幼い頃からお祈りの重要性を知る良い機会だと考えます」

　これから先は神々に祈りを捧げ、自分の属性を増やしていくようになる。その先にあるツェントへの道を見せることも神殿改革の一歩になるのではないか、とトラオクヴァールが言った。

　少し考えていた養父様が「私は賛成します」とトラオクヴァールに同意する。

「ですが、招待する範囲は洗礼式を終えた者にしていただきたいと存じます。できるならば、私は領地で神殿長の役職に就いたメルヒオールにもローゼマインが行う神事を見せたいと考えています」

　養父様の言葉にわたしは小さく笑った。メルヒオール達のお手本になれるように頑張らなくてはならないだろう。

「貴族院へ向かうために必要なブローチなどの準備もあるので、貴族院入学前の子供を参加させるか否かは各アウブの判断になります。でも、幼い頃から神事に触れあうのはとても良いことではありませんか？　わたくしは賛成します」

「幼い者を参加させることで何か問題が起こった場合はどうするつもりだ？」

　じろりとフェルディナンドに睨まれたが、わたしは軽く肩を竦めた。

「エーレンフェストの神殿では洗礼式を終えたばかりの年頃の青色神官見習い達が神事の見学をしましたけれど、神事に対して真剣になった以外は特に何も起こっていません。よく教育されているはずの領主候補生が問題を起こすでしょうか？　それに、起こした場合は親の責任で良いではありませんか」

　起こるとしたら、よほど教育が行き届いていないと皆の前で知れることになる。外に出しても恥ずかしくない子供しかアウブ達も連れて来ないだろう。結果として問題が起こるはずがない。

「今回行う継承の儀式は、領主会議で例年行う星結びなどとは違って突発的な神事です。恒例の行事にはならないのですから、今回だけ特別に洗礼式を終えた子ならば参加できるようにしましょう」

　わたしが胸を張ってそう言うと、フェルディナンドが「偉そうなことを言っているが、どうせ弟妹に良いところを見せたいだけであろう」とこめかみを叩く。

　……さすがフェルディナンド様。よくぞ見抜いた。

　洗礼式を終えた領主候補生にも参加の許可が出て、儀式の流れを一通り確認し合い、話し合いは終わった。

[------------------------------------------------]

儀式の準備とエグランティーヌの名捧げ

　王族達との話し合いを終えると、アウブ夫妻もフェルディナンドもわたしも多目的ホールで自分の側近達に指示を出し始めた。わたしの周囲にはわたしの側近達が集まっている。

「ハルトムートにはグルトリスハイトの継承式の準備と、当日の神官長役をお願いします。エーレンフェストの神殿へ急いで向かい、神官長の儀式服などを整えた後はアナスタージウス王子に神事の指導をお願いします」

「かしこまりました。ローゼマイン様が行う新しい神事の準備、必ずや完璧に仕上げてみせましょう」

　ハルトムートには四日間アナスタージウス達を指導してもらうことになったことを告げ、貴族院の儀式では青色神官や巫女に扮して護衛してもらう護衛騎士達にも準備を整えるように命じる。

「ローゼマイン様がグルトリスハイトを与える新しいツェントはどなたですか？」

「エグランティーヌ様です。本当はこれから中央神殿の神殿長に就任するエグランティーヌ様が指導を受けた方が良いのですけれど、名捧げの石の準備が最優先ですからアナスタージウス王子が神事の準備を行うことになりました」

　わたしが簡単に流れを説明していると、近くにいたフェルディナンドがメモ書きをハルトムートに渡しに来た。

「儀式の手順だ。それから、エーレンフェストや中央神殿を行き来し、アナスタージウス王子と行動を共にするのであれば、鍵はローゼマインに預けておくように」

「かしこまりました」

　ハルトムートは首に下げていたらしい聖典の鍵をわたしの首にかける。そして、メモ書きを見ながら質問をいくつか行った後、すぐに踵を返して動き始めた。一度エーレンフェストへ戻らなければならない護衛騎士達も一緒だ。

「リーゼレータ、グレーティア。二人はアーレンスバッハへ持ち込んだわたくしの神殿長の儀式服や髪飾りなどの準備をお願いします。靴は魔石なので問題ありません」

「かしこまりました」

　寮にはリヒャルダやブリュンヒルデがいるので、わたしの世話をする側仕えは問題ない。二人はすぐに離宮へ向かって動き出した。同じように何か指示を受けたらしいユストクスもリーゼレータ達を追いかけるようにして多目的ホールを出ていくのが見えた。

「フィリーネ、こちらの原稿を神殿へ持ち帰って印刷するようにローゼマイン工房へお願いしてください。アウブの許可は出ています。お母様にも話を通しておいてください」

　わたしは王族から新しいツェントが立った時に配る予定で準備していた原稿をフィリーネに託す。

「印刷部数は余裕を見て二十五部です。領主会議で配布するので、急ぎの仕事になります。お母様やミュリエラと手分けしてハッセの小神殿にも仕事の振り分けをするようにお願いしてください」

「かしこまりました」

　フィリーネが原稿を抱えて出ていくと、ローデリヒが不安そうにわたしを見た。

「ローゼマイン様、私が書いているダンケルフェルガーの物語はどうなるのでしょうか？」

「アウブ・ダンケルフェルガーがツェントになることはなくなったので〆切はなくなりましたが、アウブが買い占めようと考えるほど楽しみにしているようですから書き続けてくださいませ」

　五日で書いてほしい、という〆切に悲鳴を上げていたローデリヒがあからさまに胸を撫で下ろす。無茶を言って悪かったとは思っているけれど、ローデリヒにしか書けないのだから仕方がなかったのだ。

「心を落ち着けて続きを書いてきます」

「焦る気持ちで書いた方が、臨場感が出てよかったかもしれませんよ？」

　ローデリヒの焦り具合を見ていて、ディッターについて質問を受けていたユーディットがクスクスと笑った。成人の護衛騎士が一度エーレンフェストへ戻る準備をしている今、ユーディットはわたしの護衛騎士として背後に立っている。

　急ぎの指示を終えるのを待っていたのか、フェルディナンドがやってきて、わたしの隣の椅子に座った。

「ローゼマイン、君はレティーツィアの扱いをどうするつもりだ？　アーレンスバッハの慣例に従えば君がアウブに就任すると同時に上級貴族へ下がることになる。親のいない彼女は孤児院で過ごすことになるわけだが……」

　この先の扱いによって継承式に出席させるかどうか考えなければならない、とフェルディナンドが言った。

「養子離縁してドレヴァンヒェルのご両親の元へ帰すことはできないのですか？　アーレンスバッハにいるよりも両親のところで育つ方が良いと思いますけれど……」

「レティーツィアの養親が二人共はるか高みへ上がっている。契約の解除が少々難しい。それから、君には考えが及ばないのかもしれぬが、他領で問題を起こして戻ってくる領主候補生をドレヴァンヒェルが迎え入れるかどうかわからぬ」

「……実の娘ですよ？」

　まさか迎え入れないということがあるだろうか。わたしの言葉にフェルディナンドは「やはりわからぬか」と溜息を吐いた。

「レティーツィアはアーレンスバッハの領主候補生として洗礼式を受けている。両親が引き取りを希望しても、両親の意思だけではなくアウブ・ドレヴァンヒェルの判断も大きく関わってくる。諸手を上げて歓迎されるとは思えぬし、君との繋がりを求めて引き取られた場合は厄介事の芽になる可能性もある」

　面倒くさい貴族の柵について説明しながらフェルディナンドがわたしを見る。その目が何となくレティーツィアを気遣っているようにも見えて、わたしは首を傾げた。

「フェルディナンド様はレティーツィア様を領主候補生として残した方が良いとお考えですか？　フェルディナンド様があまり近付けたくないのであれば、それ相応の処遇にいたしますよ。……レティーツィア様の件に関してはフェルディナンド様の意見を最優先にするつもりですから」

　被害者であるフェルディナンドの意見を最優先にするつもりだ。レティーツィアは可愛いけれど、わたしの中でフェルディナンドより優先順位は下がる。

「一つ確認しておきたいが、君はランツェナーヴェによる蹂躙の中で寄る辺を失くした子供達を神殿の孤児院でまた育てるつもりなので間違いないか？　アルステーデの娘も含めて……」

「はい。子供に罪はありませんから」

　エーレンフェストで行ったのと同じように被害者の子供も加害者の子供も関係なく孤児達は孤児院で育てて、アウブになるわたしが彼等の後ろ盾になるつもりだ。フラン達をエーレンフェストから移動させて前に行った時と同じようにするつもりであることを述べると、フェルディナンドはゆっくりと頷いた。

「ならば、レティーツィアの件は私に任せてもらう。……そのように不安そうな顔をしなくとも、君が心の底から忌避するようなことはせぬ。私が何かした場合は私に禁止だと命じればよかろう」

　フェルディナンドがそう言いながら立ち上がって健康診断を行う。首筋に手を当てていたフェルディナンドが眉を寄せた。

「少し熱が出てきたが、魔力を溜めすぎではないか？」

「そうかもしれません。先程ちょっと感情的にもなりましたし……」

「あれでちょっとか？」

　皮肉気に唇の端を上げながらフェルディナンドがブリュンヒルデに指示を出して、もう一枚銀色の布を用意させる。それでわたしを包み込み始めた。

「フェルディナンド様、一体何をするのですか？」

「これからまだ四日ほど部屋に籠っていなければならないのだ。ある程度魔力を抜いておいた方がよかろう。魔力を使ったら女神の御力が減るのかどうかも確認しておきたい」

　頭から銀色の布で包まれると、視界が真っ暗になる。誰かに抱き上げられる感覚に驚いて思わずわたしが小さく悲鳴を上げるのと、「ローゼマインに名を捧げた護衛騎士だけついて来い」とフェルディナンドが命じる声が響くのは同時だった。

「フェルディナンド様、名を捧げている護衛騎士は殿方ばかりです。わたくしもお供させてくださいませ！」

　クラリッサの立候補とユーディットが「クラリッサは文官ではありませんか！」と制止しようとする声が聞こえてくる。

「……名を捧げた者であれば文官でも護衛騎士でも構わぬ」

「うぅ～、護衛騎士なのにこんなに置いて行かれてばかりなんて、わたくしも名を捧げたくなってきました」

　ユーディットの嘆く声が聞こえてきたけれど、早まらないでほしい。フェルディナンドが名捧げの者を指名するのは、決して口外してはならない物を見せたり、他の者が知ってはならない場所へ向かったりする時だと決まっている。口外法度の秘密が増えるのは精神衛生上良いことではないだろう。

　視界が真っ暗のまま、どこかへ移動させられた。「ひめさま、きた」「ひめさま、ほんよむ？」というシュバルツ達の声がしたので図書館だと思う。ソランジュに人払いを頼んだフェルディナンドが階段を上がっていく。

「ローゼマイン、到着した。これで立てるか？」

「大丈夫です」

　体が傾き、足が床についた。わたしが自力で立つと、銀色の布が取られていく。クラリッサとフェルディナンドが銀色の布を完全に払ってくれた。場所は予想通り図書館で、わたしはメスティオノーラ像の前にいた。図書館のメスティオノーラ像から向かう場所なんて一つしかない。

「フェルディナンド様、まさか……」

　護衛騎士達に回れ右を命じると、フェルディナンドはわたしに盗聴防止の魔術具を手渡しながら頷いた。

「私が染めるつもりだったのだが、君の魔力に大きな変化があったせいで、今は私がアウブ・アーレンスバッハと認識されているようだ。仕方がないので君にある程度満たしてもらおうと思う。国の礎は大容量なので、君の魔力を抜くためにもちょうど良いであろう？」

　エアヴェルミーンが文句を言わない程度に国の礎を満たしておくついでに、わたしの余分な魔力を出すこともできて一石二鳥だそうだ。

「そのためにハルトムートから聖典の鍵を取り上げたのですね？」

「鍵を身につけたままアナスタージウス王子の前へ向かわせる気がなかったのも理由の一つだ。継承の儀式で君が女神の化身であること、王族よりも上位の者であることを周知させなければ、後々が危険だからな」

　そう言いながらフェルディナンドはわたしに鍵を使って礎に魔力を流し込んでくるように促す。フェルディナンドがメスティオノーラの像の抱える聖典の背表紙を開けて、鍵穴を露出させた。

「気分が悪くならない程度で良い。あまり女神の御力を流し込みすぎると、エグランティーヌ様が苦労するかもしれぬからな」

　わたしが鍵を差し込むと、女神像が音もなく動いて下へ向かう階段が現れた。わたしはフェルディナンドに見送られて階段を下りていく。階段の下には虹色の油膜のような壁があり、それを越えるとアーレンスバッハの礎と同じような物があるところへ出た。

「さすが国の礎。大きいね。……でも、ホントにちょっとしか残ってない。エアヴェルミーン様が焦るはずだよ」

　領地の礎の何倍もある大きな礎を感心しながら眺めた後、わたしはどんどんと魔力を注いでいく。ここで倒れたら困るので、魔力を注ぎすぎないように気を付けなければならない。

　アーレンスバッハの礎を染めるためにも回復薬を使ったのだ。わたしがある程度スッキリするように魔力を流したところで、六分の一も満たせていない。それでも枯渇状態からは脱却できたようで、礎の上を回っている七つの貴色の魔石の動きが少し速くなった。

「こんなもんでしょ」

　わたしは自分の中の魔力量が半分以下になっているのを感じながら、魔力供給を止めた。

「お待たせしました」

　外へ出て鍵を閉めて女神像を元の位置に戻したら、また銀色の布でグルグル巻きにされて寮へ連れ帰られる。これから四日も余裕があるのに、図書館での読書はお預けだ。

　魔力が減ってスッキリしたわたしは休息を取ったり、国の礎に魔力を流し込んだり、奉納舞の練習をしたりして四日間を過ごした。

　……奉納舞もフェルディナンド様から「まぁ、よいのではないか」って評価ももらったし、何とかなるはず！

　グルトリスハイトの継承式当日、神殿長の衣装を着せられたわたしを見ながら皆が口々に「神々しい」と言う。けれど、女神の御力が自分ではわからないので、わたしにとってはいつも通りの恰好でしかない。

「それにしても、今日はずいぶんとたくさんの魔石を付けるのですね。これも、これも見たことがありませんけれど……」

「フェルディナンド様が舞の邪魔にならないお守りを新しく作られたそうですよ」

　細い鎖を緩く大きな目で編んでいる手袋のような形で、長さは手の甲から二の腕くらいまである。ところどころにまるでビーズのように加工された虹色魔石が輝いていて、その一つ一つにお守りの魔法陣が刻み込まれていた。

「休みを取るとおっしゃったのに、フェルディナンド様は休まずに何をしているのでしょう？　三、四日で作れるような物ではないでしょうに……」

　これは儀式が終わったらシュラートラウムの祝福で強制的に休息を取らせなければならない案件ではないだろうか。わたしが唇を尖らせると、クラリッサが「フェルディナンド様は万全を期していらっしゃるのですよ」とクスクスと笑った。

「ローゼマイン様の奉納舞で女神が再び降臨しないようにしておきたいそうです。わたくしは女神を降臨させたローゼマイン様をぜひ見てみたいのですけれど……女神が降臨する時にはローゼマイン様の記憶が奪われると伺ったので我慢いたしますね」

　……奉納舞で女神が再降臨するなんて考えてもみなかったな。

　わたしは失った記憶のことを考えながら、そっと自分の腕を包む細い鎖を撫でていく。これがあれば、たとえ女神が再び降臨しても記憶を失わなくて済むのだろうか。

「ローゼマイン様、準備ができたので控室へ移動しましょう」

　他の者達に見つからないようにバサリと銀色の布で包まれて、青色巫女の恰好をしたアンゲリカに抱き上げられる。

「ハルトムートが張り切っていました。アナスタージウス王子や中央の貴族、中央神殿の者達を総動員して儀式の舞台を整えたそうですよ」

　クラリッサがそう言った。

　控室にはハルトムートがいて、エグランティーヌやアナスタージウスもすぐにやって来た。わたしを見て息を呑んだ後、二人は身分の違いを明らかにするために跪いて挨拶をする。エグランティーヌ達がまとっているのは、卒業式の時の衣装だった。

「……わたくしが卒業式で入場した時にローゼマイン様から祝福をいただいたでしょう？　あの時の衣装です。今日再びローゼマイン様の祝福をいただけるように、そして、誕生季の貴色をまとうことで神々の祝福が得られるように、と」

　懐かしさを覚える衣装を見ていると、ハルトムートが歩み寄ってきた。

「継承式の前に名捧げを行いましょう」

「かしこまりました」

　ハルトムートとアナスタージウスが見守る中、エグランティーヌが小さな白い箱を取り出して、わたしに向かって捧げ持った。エグランティーヌの金髪が自分の目線より下にあるのを不思議な気分で見下ろしながら、わたしはエグランティーヌの石を見つめる。白い箱の中に全属性の複雑な色合いをした魔石があり、その魔石には金色の文字でエグランティーヌの名が刻み込まれていた。

　……あんまり気は進まないんだけど。

　他人の命を抱え込むのは怖い。その意識は変わっていない。本来の名捧げを離れた使い方を懸念したおじい様の言葉が脳裏に浮かぶ。

　けれど、女神の御力に当てられないためにも、様々なことを知る立場になるエグランティーヌを黙らせておくためにも名捧げは必須になってしまった。それに、わたしはもうこれ以上王族からフェルディナンドへ王命が下されることを許せない。絶対にエグランティーヌはそんなことをしないという確信も持てない。彼女はユルゲンシュミットの平穏を守るためならば何でもする人だ。

　……特に命令をする気はないけど、何かあった時のために名を奪っておきます。

　アナスタージウスが何とも言えない表情でエグランティーヌとわたしを見ている。名捧げを止めたいけれど、止められないという心境がよくわかった。多分、名捧げの石を作っている間、エグランティーヌに色々と言ったに違いない。

　……アナスタージウス王子はエグランティーヌ様にわたしの魔力なんてまとってほしくないよね？

　儀式の後で女神の御力が消えたら、わたしは多分フェルディナンドの魔力に戻る。アナスタージウスは不愉快極まりないのではないだろうか。それも呑み込んでもらうしかないのだけれど。

「始めてもよろしいでしょうか、ローゼマイン様？」

「はい」

　わたしと目を合わせた後、エグランティーヌが一度ゆっくりと大きく呼吸して首を垂れた。

「わたくし、エグランティーヌはメスティオノーラの化身でいらっしゃるローゼマイン様の忠実なる臣下として、ユルゲンシュミットの新たなツェントとして一生尽くすことをここに誓い、その証として名を捧げます。わたくしの名が常にローゼマイン様と共にあることをお許しください。そして、わたくしにどうかグルトリスハイトを授け、ユルゲンシュミットを良き方向へ導くための道標を示してくださいませ」

　エグランティーヌは丁寧な手つきで名捧げの石をゆっくりと上に上げていく。わたしは捧げられた石を箱ごと手に取って魔力を注ぎ込んだ。

「ん……」

　魔力の反発に合ったエグランティーヌが胸元を押さえて、小さく呻いた。

「エグランティーヌ！」

　即座に反応してエグランティーヌに手を伸ばそうとしたアナスタージウスの手をハルトムートが押さえる。

「アナスタージウス王子、邪魔をしてはいけません。ローゼマイン様の御力で包み込まれなければ終わらないのです。……これまでの経験から魔力がかけ離れればかけ離れるほど苦しいようですから、ローゼマイン様に名捧げをした者の中では一番苦しみは少ないと思われます」

　わたしは一気に魔力を流し込んで名捧げを終わらせる。エグランティーヌが苦しそうな息を吐いた。

「大丈夫ですか、エグランティーヌ様？」

「えぇ、もう大丈夫です。お気遣いありがとう存じます、ローゼマイン様」

　ふわりと花が開くような微笑みを浮かべてエグランティーヌが顔を上げた。わたしはエグランティーヌの名捧げ石を腰の籠に入れると、椅子に座ってエグランティーヌ達にも椅子を勧める。

　今日の儀式の流れの確認を行う内に三の鐘が鳴った。

[------------------------------------------------]

閑話　ハンネローレ視点　継承の儀式　前編

「神殿や神事への忌避感を改革するために幼い子供達の参加が許可されたと伺いましたけれど、予想したほどの人数はいらっしゃいませんね」

　領主一族が座る観覧席から講堂の中を見回しました。今日は新しいツェントにグルトリスハイトの授与が行われるのです。わたくしは女神の化身となったローゼマイン様から直接ご招待をいただきました。王族とのお話し合いの中で、お願いしてくださったそうです。わたくし、間が悪いので絶対に無理だろうと諦めていました。時の女神　ドレッファングーアのお導きでしょう。

　……わたくしの間の悪さが少しずつ改善しているようです。ドレッファングーアに祈りを捧げましょう。

　側仕えのコルドゥラが作ってくれたお守りを握って祈りを捧げていると、お兄様がダンケルフェルガーの領主一族の席に並んで座っている第二夫人の娘を見下ろし、フンと鼻を鳴らしました。

「子供の姿は少なくて当然だ。本来ならば領主会議に子供を出席させるようなものではないか。貴族院にさえ入学していない洗礼式直後の子供を、王族も集うような場へ連れて来られるアウブなど早々いまい。ダンケルフェルガーでも彼等を連れてくるかどうか散々話し合ったくらいだぞ」

　ダンケルフェルガーでも第二夫人の娘は参加がすんなりと決まりましたが、他の方々に失礼がないように息子の方は参加を見送ることになりました。

　ちなみに、お兄様は「私は次期アウブだからこそ、交流を持つためにも次期ツェントがグルトリスハイトを継承する場には同席しなければならない」と言い張り、叔父様に留守をお願いしてこの場に来ています。

　エグランティーヌ様とローゼマイン様の奉納舞があると両親から聞かされた時から、目の色を変えて主張し始めたので、本当の目的は誰に目にも明らかです。筆記具を講堂へ持ち込まないというお約束をお母様がさせ、今朝は何度も持ち物の確認をされていました。

　……成人している次期アウブがこのような状態ですもの。この場に連れて来られる子供達は少ないでしょうね。

「だが、提案者であるエーレンフェストはしっかり連れてきているな。この場で神殿長の衣装を着ているなど、ずいぶんと目立つではないか」

　神殿長の儀式服を着て座っている幼い領主候補生メルヒオール様の姿が見えました。わたくしはエーレンフェストの祝勝会へお招きを受けたので面識があります。

「ローゼマイン様の後任として神殿長に就任されたそうですよ」

「これから神事や神殿の重要性を押し出していく時に神殿長か。つまり、あの者がエーレンフェストの次期アウブになるのではないか？　婚約者を奪われ、弟に次期アウブの座を奪われかけているというのにヴィルフリートは呑気そうに笑っている場合ではなかろう」

　お兄様がエーレンフェストの領主一族が座る場を見ながら毒づきます。

「婚約者を奪われたとおっしゃいますけれど、エーレンフェスト内で冬の社交界で春になったらローゼマイン様が王族の養女となり、次期ツェントに嫁ぐというお話が周知されて婚約解消状態だったそうですから……」

「それが不甲斐ないと言っているのだ。私が嫁盗りディッターの時に言った通りの結果になったではないか」

　その点に関してはお兄様のおっしゃる通りです。いくらヴィルフリート様と婚約していてもエーレンフェストではローゼマインを守り切れませんでしたし、今となっては王族が嫁盗りディッターに横槍を入れた理由がローゼマイン様を得るためだったと言われても仕方ないと思います。

「お兄様の言い分に間違いはございませんけれど、ローゼマイン様はダンケルフェルガーの第一夫人におさまる器ではございませんよ。ローゼマイン様はどなたかの手綱になるのではなく、御自身に手綱が必要な方です。残念ながらお兄様ではローゼマイン様を上手く導いていくことはできないと思います」

「それがフェルディナンドか？」

「えぇ。わたくしはエーレンフェストでそれを強く実感いたしましたから、フェルディナンド様がローゼマイン様の婚約者となられたことにとても安堵いたしました」

　先日、両親から話を聞いてわたくしも驚いたのですけれど、わたくし達が何もしなくてもローゼマイン様とフェルディナンド様はすでに婚約状態だそうです。政略結婚でも良いので、フェルディナンド様とローゼマイン様を何とか結婚させなければ、と意気込んでいたわたくしは肩透かしを食らった気分です。

　何でも、フェルディナンド様はトラオクヴァール様から「執務経験のない次期アウブ・アーレンスバッハに婿入りして支えること。それから、星結びと同時にレティーツィア様を養女とし、次期アウブとするために教育すること」と王命を下されていたそうです。

　ところが、ディートリンデ様が王命に反して御自分で礎を染めず、姉であり、上級貴族となったアルステーデに染めさせたため、次期アウブは既婚女性になってしまいました。フェルディナンド様が婿入りできる相手ではありません。そのまま領主会議を経て承認が済めば、フェルディナンド様に下された王命は自動的に取り消されたでしょう。

　けれど、アルステーデがアウブとして正式に就任するより先にローゼマイン様がアーレンスバッハの礎を染めました。ローゼマイン様は執務経験のない未婚女性のアウブです。再び王命が効力を発します。

「ヴィルフリート様とローゼマイン様の婚約はほぼ解消状態でしたし、王の承認でしたから、王命の方が優先されるのは当然ですもの。道理でフェルディナンド様が婚約者のような態度でローゼマイン様に接し、アーレンスバッハの騎士達を率いていたわけです」

「だが、トラオクヴァール王の王命を忠実に実行するとなれば、ローゼマインは星結びと同時に養女を取ることになるし、その養女を次期アウブにしなければならなくなる。王命の片方は受け入れるが、もう片方は受け入れないなど都合の良い真似は周囲が許さぬぞ」

　お兄様はそう言いながら青と黄色の×印が入った藤色のマントをまとう集団を指差しました。アーレンスバッハの領主一族の席に座っているのはレティーツィア様だけです。貴族院へ入学していないレティーツィア様がこちらにいらっしゃっているということは、まだ領主一族として扱われているようです。

「フェルディナンド様はレティーツィア様に関しても王命を貫くおつもりなのでしょうか？」

「さて、どうするつもりか……。古い王命を排しなければ養女が新しい領地の騒乱の種になるが、古い王命を排すればフェルディナンドは婚約者ではいられなくなる。今は王命に従っているように見せかけておくのが一番無難だとは思うが……」

　女神の化身として新しいツェントに大きな影響力を持つローゼマイン様の夫に収まりたい者は大勢いるし、ローゼマイン様とフェルディナンド様の星結びによって新政権でエーレンフェストの影響が非常に強くなることを懸念する領地は多い、とお兄様が不安事項を並べていきます。

「心配は心配ですけれど、お兄様が考える程度のことをフェルディナンド様が考えていらっしゃらないはずがございません。あの方は本当にあらゆる想定を行い、対策を講じるのですよ。わたくし、間近で拝見して身震いしましたもの」

　アーレンスバッハとエーレンフェストで行われた本物のディッターに参加した時のことを述べようとすると、お兄様が「それは方々から何度も聞いた」とわたくしの言葉を止めました。

「ハンネローレの言う通りです、レスティラウト。おそらくフェルディナンド様の筋書きでしょうが、エグランティーヌ様はグルトリスハイトを得るためにローゼマイン様に名捧げを行うことになっています。エグランティーヌ様から新しい王命を得ることは容易ですし、ローゼマイン様がお困りになることはありません」

　お母様の言葉にお兄様が嫌そうに顔をしかめました。

「グルトリスハイトを盾にして、新たなツェントに名捧げを強要したのか。……ダンケルフェルガーで魔王を呼ばれる男はやることが相変わらず悪辣でえげつない」

　そんな話をしているうちに、カラーン、カラーンと澄んだ鐘の音が鳴り響きます。儀式の開始を知らせる三の鐘です。大きく扉が光れると、観覧席が一気に静かになります。

　貴族院の成人式や卒業式と同じように祭壇と舞台が整えられた講堂へ、今日は楽器を持った楽師達がしずしずと入場してきました。卒業式の時は卒業生が音楽と歌を奉納しますが、今日は楽師達が演奏するようです。よく目を凝らしてみれば、お茶会の時に同行していたローゼマイン様の専属楽師の姿も見えます。

　その次に入場してきたのは、青色神官達の集団でした。同じような青色の衣装をまとう者達を先頭で率いているのは見慣れた顔をしています。

「先頭はハルトムートですね」

「あぁ、クラリッサの婚約者だな。エーレンフェストの神官長なのに貴族院の儀式で見慣れた顔になっているのが妙な気分だ」

　中央神殿の者達よりよほど接する回数が多かったせいでしょうか。わたくしの中では貴族院で神事を行う時にはハルトムートが取り仕切っている姿しか思い浮かばないのです。青い神官服をまとったハルトムートは祭壇の前に立ちました。青色神官達が定められた場所に立ち止まります。ハルトムートはゆっくりと講堂内を見回し、声量を増幅する魔術具を手にしました。

「メスティオノーラの化身に選ばれしツェント候補、エグランティーヌ様のご入場です」

　その声と共にアナスタージウス王子にエスコートされたエグランティーヌ様が優雅な微笑みを浮かべて入ってきます。入場の瞬間にどこからともなく祝福の光が降り注いできました。

「まぁ！」

「卒業式の時と同じ、神からの祝福ではないか！」

　お二人の衣装が卒業式の時と同じだったせいもあるでしょう。エグランティーヌ様にキラキラとした祝福の光が降り注ぐ様子は、卒業式とそっくり同じに見えました。当時の神殿長の「神からの祝福だ」という言葉が耳元に蘇ります。あの頃から神々は新しいツェントの候補としてエグランティーヌ様をお選びだったのだとすんなりと思える光景でした。

　柔らかに金髪を結い上げたエグランティーヌ様が祝福の光を浴びるようにして祭壇へ向かって優雅に足を進めます。新しいツェントというお役目に就くからでしょうか、以前より柔らかな雰囲気が減って、凛とした横顔を見せるようになっていらっしゃいました。アナスタージウス王子の厳しい表情からもツェントの重みが伝わってくるようです。お兄様の指先がテーブルの上で動いています。きっと絵に残したい美しさなのでしょう。

「メスティオノーラの化身でいらっしゃるローゼマイン様のご入場です」

　エグランティーヌ様が奉納舞の舞台の前で足を止めると、ハルトムートがそう言いながら扉を示しました。わたくしは必死で目を凝らします。お父様やお母様から伺っていた女神の御力を得たローゼマイン様がどのようになっているのか、とても楽しみだったのです。

　フェルディナンド様のエスコートでローゼマイン様が入ってきました。エグランティーヌ様は祝福の光を浴びていましたが、ローゼマイン様は御自身が淡く光を帯びています。離れていても女神の御力が緩やかに放たれているのを感じました。観覧席にいても感じられる程の御力です。人が持つ魔力とは違い、畏怖せざるを得ないような波動があります。

　……よくフェルディナンド様はローゼマイン様のエスコートができるものです。

　姿形がローゼマイン様でも、あまりお傍に寄りすぎるとわたくしは跪かずにはいられないでしょう。両親もそうだったと聞いています。やはりフェルディナンド様も普通ではありません。

　よくよく見てみると、ローゼマイン様が光を帯びているのは、女神の御力のせいだけではありませんでした。身につけている魔石の飾りが全て光っているのです。

　歩みに合わせて夜空の色合いの髪がさらりと揺れる度に、いくつもの虹色魔石がシャラリシャラリと細い音を響かせ、星のような輝きを作り出しています。白い衣装の内側にいくつの飾りがあるのかわかりませんが、長い袖の中に様々な色合いの光があり、腕の形がほんのりと透けています。宝飾品だけでもエグランティーヌ様とローゼマイン様のどちらの格が高いのか一目でわかりました。

　闇の神の祝福をいただいた夜空の髪も、光の女神の祝福を受けた月のような金色の瞳も伝承に残るメスティオノーラと同じ色合いです。育成の神　アーンヴァックスの御力によって年相応のお姿に成長された今のローゼマイン様は本当に女神の化身と呼ばれても何の違和感もございません。

　……わたくしが戦いの後、ローゼマイン様とお別れしてから十日くらいしか経っていないのですよ。

　たった十日くらいでここまで変化があるとは思いませんでした。同性の友人で、接する時間が多く、成長したお姿を間近で拝見したことがあるわたくしが思わず見惚れてしまう程の変化です。見慣れていない方々は唖然とするしかないでしょう。

　わたくしはお兄様の様子をちらりと見ました。お兄様は大きく目を見開き、わずかに唇を開いて完全に固まっています。よほど衝撃が大きかったようで、描くように指先が動くこともありません。しっかりと脳裏に刻み込まなければならないというように、瞬きもせずにローゼマイン様に見入っています。

「先日、ローゼマイン様に英知の女神　メスティオノーラが降臨されました。女神の御力を感じ取れない者はいないでしょう」

　ハルトムートから音量を増幅する魔術具を受け取ったエグランティーヌ様が講堂にいる貴族達に語りかけました。神々の言葉が伝えられ、ランツェナーヴェの者達との戦いについても少し触れられます。

「詳しいお話は領主会議で行います。今日はグルトリスハイトを失ったわたくし達に再びグルトリスハイトを授けてくださるそうです」

　エグランティーヌ様から魔術具を受け取ったフェルディナンド様がローゼマイン様をエスコートしながら奉納舞の舞台へ上がっていきます。ローゼマイン様が舞台に上がっただけで、奉納舞の舞台には魔法陣がくっきりと浮かび上がりました。ディートリンデ様がほんのりと浮かび上がらせた魔法陣と全く同じ物です。

「今は忘れられてしまった古い魔法陣ですが、これはツェント候補を選別するための魔法陣です。奉納舞によって自分一人の力で神々の元へ向かう道を開くことができない者はツェント候補として失格になります。これから先、メスティオノーラより英知を授かる可能性のある子供達にはよく見て、神事の大切さや神々に祈るということを感じていただきたいと存じます」

　そうおっしゃってフェルディナンド様がローゼマイン様の手を離し、奉納舞の舞台を下りていきます。そして、楽師達に交じってフェシュピールを手に取りました。

「フェルディナンド様が演奏されるのでしょうか？」

「あの場にいるのだ。演奏することは間違いないであろう」

　ピィン、ボロン、といくつかの音を確認したフェルディナンド様と共に楽師達が音を合わせます。音の調整が終わると、フェシュピールを構え直しました。

　音合わせが済んだことは舞台の上に残されたローゼマイン様にもわかったのでしょう。ローゼマイン様は円状の舞台に跪いて祝詞を口にしました。

「我は世界を創り給いし神々に祈りと感謝を捧げる者なり」

　音楽が鳴り響き、音を増幅する魔術具を近くに置いているフェルディナンド様の歌声が講堂内に響き始めます。同時に静かに俯いていたローゼマイン様が顔を上げ、体重を感じさせない軽い柔らかな動きで立ち上がります。ふわりと体が動き始め、高く亭々たる大空に向かってしなやかな両腕が伸ばされました。手の甲から手首にかけて何かまとっているようで、小さな虹色魔石が輝いて軌跡を描き出します。

「神に祈りを」

　それは誰も見たことがない、女神の舞の始まりでした。

　しんと静まった講堂内に響くのは、楽師たちが奏でる音楽とフェルディナンド様の歌声だけ。皆の視線がただ真っ直ぐにローゼマイン様に向かっています。

　……光の柱が……。

　ローゼマイン様が舞い始めると、舞台の上の魔法陣が光り始め、それぞれの大神の記号から貴色の柱がゆっくりと伸び始めました。ゆるりと上がる腕の動きに合わせるように、くるりと翻る裾の動きに合わせるように、七色の光の柱が少しずつ高さを増していきます。

「祭壇の神像が動いているぞ」

　お父様の呟きにわたくしは祭壇の神像をよく見つめました。お父様の言う通り、神々の像が勝手に動き始め、最上部への道を開いていきます。

　……これが神々の元へ向かう道でしょうか？

　貴族院で神事を行うと光の柱ができることは周知の事実ですが、このように祭壇の神像が動くのを見たのは初めてです。

「今までの貴族院の神事では起こりませんでした」

「御加護を得る儀式でも道が開かれたそうだ。おそらくツェント候補一人の魔力で満たすことが必要なのであろう」

　小声でお父様と話をしているうちに、光の柱が伸びなくなりました。舞台が女神の御力で満たされたのでしょうか。上に伸びなくなった代わりに、今度は淡い光がゆっくりと下へ流れ落ちていきます。その光はキラキラとした波となり、奉納式の時のように赤い布が敷かれた祭壇を駆け上がり始めました。光の動きに赤い布が波打つようにも見え、今度は祭壇の神像が持つ神具が次々と光を放っていきます。

　全ての神具が光った後、ローゼマイン様が跪いて動かなくなりました。それが奉納舞が終わりだと気付くのに少しかかってしまったくらいに、わたくしは夢心地で奉納舞を見つめていました。

「神に感謝を」

　ローゼマイン様の声が響いた途端、全ての神具が一斉に強い光を放ち、奉納舞の舞台にいたローゼマイン様の姿が消えました。

「ローゼマイン様の姿が消えたぞ！」

「何事だ！？」

　観覧席から口々に驚きの声が上がる中、神々の像はまた動き、道を閉ざしていきます。舞台の上に立っていた光の柱が消え、魔法陣も消えました。全てが終わったことを示すように全てが元に戻ってしまいました。ローゼマイン様のお姿が消えたこと以外には奉納舞の前後で全く何も変わらないように見えます。

　フェシュピールを置いたフェルディナンド様が立ち上がり、祭壇を見つめました。

「ローゼマインは神々の招きを受け、始まりの庭へ行ったようです。エグランティーヌ様、どうぞ。あちらで神々がお待ちです」

　ローゼマイン様の後で舞わなければならないなんて、何という仕打ちでしょうか。わたくしは青ざめた顔で奉納舞の舞台に上がるエグランティーヌ様の横顔を見つめます。

「ローゼマイン様と比べられて舞うなんて、ツェント候補としての務めとはいえエグランティーヌ様は大変ですね」

　思わず漏れた呟きにお兄様がフンと鼻を鳴らしました。

「他人事ではないぞ、ハンネローレ。其方、卒業式ではローゼマインと並んで舞うではないか」

「あ……」

　……わたくし、どうやら間が悪いのは全く直っていないようです。

[------------------------------------------------]

閑話　ハンネローレ視点　継承の儀式　後編

　エグランティーヌ様が舞台に上がりました。ローゼマイン様の時と違って魔法陣は浮かび上がっていません。けれど、跪いて手をつき、「我は世界を創り給いし神々に祈りと感謝を捧げる者なり」と唱え終わったところで、魔法陣がゆっくりと浮かび上がり始めました。

　周囲から「ほぉ……」と感嘆の息が漏れるのがわかりました。女神の御力を放つローゼマイン様でなくても同じように儀式が行えることがわかり、女神の化身が選んだツェント候補に安堵したのでしょう。

　……ローゼマイン様の時は息をすることさえ憚られるような雰囲気でしたからね。

　奉納舞のための音楽が鳴り始めます。先程と音量や歌声にずいぶんと違いがあることに気付いて、わたくしは楽師達に視線を向けました。一つ席が空いていて、フェシュピールが置かれたままになっています。

　……あら？　フェルディナンド様がいらっしゃらないようですけれど……？

　ローゼマイン様が舞っていらっしゃる時には素晴らしいお声を響かせていらっしゃったのに、今は楽師達のところにも舞台の周辺にもお姿が見えません。不思議に思ってお兄様に声をかけようとしましたが、お兄様はすでにエグランティーヌ様の舞に見入っています。声をかけても聞こえないでしょう。

　わたくしはフェルディナンド様の動向ではなく、エグランティーヌ様の舞に集中することにしました。ローゼマイン様のような神秘性はありませんけれど、素晴らしい舞です。技術だけを純粋に見ればエグランティーヌ様の方がまだ上だと思われます。

　エグランティーヌ様の舞と共に魔法陣はくっきりと浮かび始め、少しずつ光の柱も伸びています。ただ、祭壇の神像が動き始めたのは舞が終わりに近付く頃で、エグランティーヌ様が本当にツェント候補の資格を得られるのか、冷や冷やしてしまいます。

　奉納舞が終わり、神々に感謝を捧げてもエグランティーヌ様のお姿は舞台の上にありました。

「神々のお招きはなかったようだが……失敗ではないのか？」

「いや、だが、祭壇の神々は招いているようにも見えるが……」

　神々のお招きを受けたローゼマイン様の時とは違う終わりに、周囲の貴族達から不安そうな声が上がります。そんな中、祭壇の前に立っていたハルトムートが祭壇の上部を示しました。

「神々の元へ向かう道が開かれました。エグランティーヌ様、あちらで神々がお待ちです」

　ローゼマイン様のように神々に招かれて姿が消えることはありませんでしたが、祭壇の道が開かれているのでエグランティーヌ様も神々の元へ向かうことはできるようです。ハルトムートの言葉にホッと胸を撫で下ろしたのは、わたくし一人ではないでしょう。

　エグランティーヌ様がゆっくりと顔を上げて立ち上がり、いつもよりも心持ちふんわりとした柔らかな動きで祭壇へ向かいます。舞台から降りてきたエグランティーヌ様の手を取ったのはアナスタージウス王子です。お二人でゆっくりと祭壇へ向かいます。

　自力で神々への道を開き、ツェント候補としての力量を示したエグランティーヌ様の横顔はとてもお美しいものでした。

　アナスタージウス王子は祭壇の上までエグランティーヌ様をエスコートしようとしましたが、透明の壁が存在するようで祭壇へ上がることができたのはエグランティーヌ様おひとりでした。

「儀式を行った者でなければ祭壇には上がれないようですね」

「そうだな。上がれるのはツェント候補になれる素質を持った者……だけだそうだ」

　少し含みを持たせた言葉をお父様が呟きました。どういう意味なのか、わたくしにはわかりませんが、エグランティーヌ様にツェント候補としての素質があることは確定したようです。

　向かい合う最高神の間を通り、エグランティーヌ様は祭壇の最上部にある入口へ入っていきました。エグランティーヌ様のお姿が見えなくなると、神の像が元の位置に戻っていきます。

「おぉ……」

　このような継承の儀式は大人達にとっても初めてなのでしょう。エグランティーヌ様のお姿が見えなくなると、あちらこちらから感嘆の声が上がり始めました。

「素晴らしい奉納舞でしたな。貴族院の卒業式で行われる奉納舞にこのような意味があったとは驚きです。貴族院で奉納式を行うようになった時は、何を考えて……と思っていましたが、神々からのお言葉があったのでしょう」

「古の継承式はこのように行っていたのですね。今日、この目で女神の化身を見、女神の御力を感じることができた巡り合わせに感謝したくなります」

「女神の化身という言葉だけを耳にしてもすぐには信じられませんけれど、こうして実際に目にすると、それ以外の呼称が思い浮かびませんね」

　人々の口に上がるのは基本的にローゼマイン様のことで、エグランティーヌ様に関しては「女神の化身に選ばれたのだから大丈夫だろう」という意味のお言葉が多いように感じられます。

「女神の化身と新たなツェント、どちらの格が上であるかを周知させるのが目的なのであろうが、せめて、奉納舞の順序が逆であったならば、と思わずにいられぬな」

　お兄様の言葉には同意します。エグランティーヌ様の奉納舞はとてもお上手でしたし、魔法陣が浮かび上がり光の柱が立ち、神像が動きました。これらを初めて見れば、新しいツェントの誕生に心から感動したでしょう。先にローゼマイン様が更に神秘的な儀式を行ったため、どうしても見劣りするように感じてしまうのです。

「フェルディナンド様によると、ローゼマイン様の行うことはなかなか予定通りに進まないそうです」

「え？」

「わたくし達は打ち合わせに同席していましたが、フェルディナンド様の懸念通りになりましたもの」

　お母様が困ったような微笑みを浮かべました。もしかしたら、この儀式は想定外の進み方になっているのでしょうか。不意にフェルディナンド様のお姿が見えなくなっていることを思い出し、心配になってきました。辺りを見回しますが、フェルディナンド様のお姿は見当たりません。アーレンスバッハの者達と一緒に観覧席に座っていたローゼマイン様の側近達の数も減っています。

　ローゼマイン様の忠臣であるハルトムートは祭壇の上で神に祈りを捧げていますが、儀式の進行が狂ったことに驚いているようにも、ローゼマイン様やフェルディナンド様の心配をしているようにも見えません。

　祭壇を見つめても、元の位置に戻った神像はピクリとも動きません。神々の元へ向かったお二人は本当に戻ってくるのでしょうか。新たなツェントの誕生を喜んでいる講堂内で、わたくしはとても不安な気持ちになりました。

「静粛に！　新たなツェントと女神の化身であるローゼマイン様がお戻りになります！」

　ハルトムートが講堂内に声を響かせました。目を瞬かせていると、神像が再び動き出したのが目に映りました。神々の元から戻ってくるための道が開かれていきます。祭壇の最上部に出入り口が見えるようになりました。

　シンと静まり、皆が祭壇の最上部へ視線を集中させます。先に戻ってこられたのはエグランティーヌ様で、そのすぐ後にローゼマイン様のお姿が見えました。

　奉納式の舞台から忽然と姿を消したので、本当にエグランティーヌ様と同じ場所へ移動したのかどうか、少しだけフェルディナンド様のお言葉を疑っていたのですけれど、神々の元へ移動していたことは間違いないようです。

　エグランティーヌ様がローゼマイン様のエスコートをするように手を引いて、祭壇を下りてきます。ローゼマイン様から感じられる女神の御力が更に強くなっているような気がしました。

「クッ……。何故私は今筆記用具を持っていないのだ」

「神聖な儀式の最中に描き始めるからではないでしょうか？」

　お兄様の描きたい欲求がかなり募ってきたようです。このままでは領主一族として少々恥ずかしい一面を公の場で晒すことになるかもしれません。

「今日の儀式の様子を描き残さないなど、女神の化身に対する冒涜ではないか？　今すぐに部屋へ戻って……」

「静かに戻るのであれば構いませんけれど、まだ継承の儀式が終わったわけではありませんよ、レスティラウト」

　席を立ちかけたお兄様にお母様がニコリと微笑みました。

「今日の儀式の中で最も素晴らしい場面を見逃すのは冒涜にならないのかしら？　もちろん、ダンケルフェルガーの領主一族として相応しくない言動をした場合はすぐさまわたくしが退場させますけれど……」

　最後まで見たかったら黙っていなさい、とお母様の目が凄んでいます。お兄様はわずかに浮かした腰を下ろして座り直し、一度深呼吸をします。

「全てを脳裏に刻み込むしかないのか。仕方がない。全力で事に当たらせてもらおう」

　くわっと目を見開いてエグランティーヌ様とローゼマイン様を凝視するお兄様にわたくしは少しずつでいいので距離を取りたくなりました。

　……お母様、お兄様は退場させた方が良いと思います！

　ゆったりとした優雅な動きでお二人が祭壇を下りてきます。先程よりも強くなったように感じられる女神の御力ですが、エグランティーヌ様は微笑んでローゼマイン様の手を取っていらっしゃいます。

「女神の御力に平伏すこともなく、手を引いて歩くことができるなんて、さすが次期ツェントに選ばれる方ですね」

「……次期ツェントとなるために相当の覚悟をお持ちだ」

　祭壇の前、ハルトムートやその他の青色神官達と並ぶ位置までお二人が下りてきました。

　ハルトムートがローゼマイン様の隣に立ち、声量を増幅する魔術具をローゼマイン様の口元へ近付けます。

「神々より祝福を受けし新たなツェントよ、契約を司る光の女神とその眷属へ宣誓を。……ベロイヒクローネ」

　ローゼマイン様の手に光の女神の神具である冠が出現しました。エグランティーヌ様がローゼマイン様の前に跪きます。新たなツェントよりも女神の化身であるローゼマイン様の方が上位の存在であることが示されています。

　ローゼマイン様が跪くエグランティーヌ様の頭にそっと冠を被せて一歩後ろに下がると、ハルトムートがエグランティーヌ様に声量を増幅する魔術具を差し出しました。エグランティーヌ様は魔術具を手に取ると、神々への誓いを口にされます。

「長い歴史の中で少しずつ歪んできたユルゲンシュミットとツェントの在り方を見つめ直し、中央神殿の神殿長として古の儀式を復活させ、女神の化身であるローゼマイン様とお約束した通りにユルゲンシュミットを導いていくことを、わたくし、エグランティーヌは今この場で光の女神と側に仕える眷属たる十二の女神に誓います」

　エグランティーヌ様の誓いの言葉と共に、光の冠が一際眩しく輝きました。逃れようがない神々との契約にエグランティーヌ様が縛られていきます。光の女神達との契約が成立したことが一目でわかりました。

　ローゼマイン様が神具を消すと、ハルトムートがエグランティーヌ様の手から魔術具を取り、ローゼマイン様の口元へ近付けます。

「エグランティーヌ様に持たせるのであれば、ローゼマインにも持たせれば良いではないか」

　少々まどろっこしく見える祭壇の上の動きにお兄様が顔を少ししかめました。神々しいお二人の様子を目に焼き付けたいのにハルトムートがずっと視界にいるのが気に入らないようです。

「ハルトムートはローゼマイン様が魔術具に触れないようにしているのだ。女神の御力は自分の魔力と同じように制御するのが難しいようで、不用意に触れると魔石部分が金粉化するからな」

　お父様の言葉にわたくし達は思わずポカンと口を開けてしまいました。ローゼマイン様がそんなことになっているとは思いませんでした。

「余所見をするな。次はグルトリスハイトの授与だぞ」

　お父様が少し指を動かして祭壇に注目するように言いました。わたくしもお兄様も急いで祭壇のお二人へ視線を向けます。ハルトムートが持つ魔術具に声が入るように少し位置を調整したローゼマイン様が口を開きました。

「始まりの庭において、エグランティーヌ様は神々より新たなツェントとして認められました。光の女神への誓いも済ませたエグランティーヌ様に、これよりグルトリスハイトの授与を行います」

　ローゼマイン様のお言葉が終わると、ハルトムートがすぐに下がりました。ローゼマイン様がスッと右手を高く上げ、シュタープをペンに変化させます。優美に手が動き、魔力で魔法陣が空中に描き始めました。

「何の魔法陣でしょう？　見たことがありませんね……」

「全属性の魔法陣だぞ？　易々と使える者は多くあるまい」

　ざわざわとし始めた講堂に、「高く亭亭たる大空を司る」とローゼマイン様の祈りが聞こえ始めました。魔術具を使っていないので、微かにしか聞こえません。祝詞を聞かせる必要はないのか、ハルトムートはローゼマイン様の描いた魔法陣を誇らしそうに見上げているだけで魔術具を持って動こうとはしません。

「最高神は闇と光の夫婦神」

　祝詞と共に魔法陣が眩く金色に光り、その光の縁を闇のような黒が取り巻き始めます。周囲がハッとしたように光を帯び始めた魔法陣に注目しました。自然とざわめきは消えていき、皆がローゼマイン様の祝詞へ耳を傾けます。

「広く浩浩たる大地を司る、五柱の大神　水の女神　フリュートレーネ　火の神　ライデンシャフト　風の女神　シュツェーリア　土の女神　ゲドゥルリーヒ　命の神　エーヴィリーベよ」

　ローゼマイン様が神の名を唱えるごとにシュタープから魔力が流れていき、その神々を表す記号がそれぞれの貴色で光り始めます。

「我の祈りを聞き届け　御身の祝福を与え給え　御身に捧ぐは我が力　祈りと感謝を捧げて　聖なる御加護を賜わらん　穢れを清める水の力を　何者にも切れぬ火の力を　災いを寄せぬ風の力を　全てを受け入れる土の力を　決して諦めぬ命の力を　新たなツェントへ」

　全属性の祝福が跪くエグランティーヌ様に注がれます。あまりにも神々しい光景に息を呑みました。

　祝福の光が止むと、ローゼマイン様が少しハルトムートを振り返りました。ハルトムートが声量を増幅する魔術具を持って、ローゼマイン様の口元へ近付けます。

「エグランティーヌ様、皆様にツェントの証を」

　先程の祝福がグルトリスハイトを授与する光だったのでしょうか。エグランティーヌ様は何も持っていないように見えます。

　けれど、何も不安を感じていないような笑顔で立ち上がったエグランティーヌ様は胸元を押さえるようにして「グルトリスハイト！」と唱えました。

　次の瞬間、エグランティーヌ様の手にはグルトリスハイトらしき分厚い本がありました。それを高く掲げて、観覧席の皆に見えるように少し体の位置を変えていきます。

「おおおぉぉぉ！」

「本物のグルトリスハイトだ！」

「メスティオノーラの化身より賜ったぞ！」

　ユルゲンシュミット中の貴族が待ち望んだ、本物のグルトリスハイトを得たツェントが誕生したのです。わたくしのお友達が、ユルゲンシュミットに新しいツェントをもたらしたのです。

　少し前に出てグルトリスハイトを掲げて見せるエグランティーヌ様の笑顔より、わたくしには控えめに少し下がって静かに微笑むローゼマイン様の笑顔の方が美しく見えました。

「では、皆様」

　ハルトムートの感極まったような声が講堂に響きました。

「ユルゲンシュミットにグルトリスハイトをもたらした女神の化身であるローゼマイン様と新たなツェントの誕生を祝い、高く亭亭たる大空を司る、最高神　広く浩浩たる大地を司る、五柱の大神　水の女神　フリュートレーネ　火の神　ライデンシャフト　風の女神　シュツェーリア　土の女神　ゲドゥルリーヒ　命の神　エーヴィリーベに祈りと感謝を捧げましょう」

　ハルトムートの言葉の途中で神殿長の衣装をまとっているメルヒオール様がカタリと立ち上がり、それを皮切りに、アーレンスバッハ貴族達と、エーレンフェストの貴族の一部が次々と立ち上がり始めます。

「な、何でしょう？」

「よくわからぬ」

　わたくし達にはよくわからないのですが、彼等は立ち上がるのが当然のような顔をしています。

「神に祈りを！」

　祭壇上のローゼマイン様、ハルトムート、その他の青色神官達、観覧席で立ち上がっていた貴族達がバッと揃った動きで神に祈りを捧げました。祭壇のローゼマイン様からだけではなく、観覧席からもふわりふわりと祝福の光が漂い始めます。

　……エーレンフェストだけならばわかりますけれど、アーレンスバッハの貴族達が揃ってお祈りを！？

　あまりにも揃った動きにわたくしは驚いてしまいました。

「ローゼマイン様、エグランティーヌ様が退場されます。シュタープを掲げて送ってください！」

　ハルトムートの言葉にわたくし達はシュタープを掲げて光らせました。祭壇へアナスタージウス王子とフェルディナンド様が上がり、エグランティーヌ様とローゼマイン様をそれぞれエスコートして講堂を出ていきます。

　数多の光が掲げられた中を、女神の化身と新たなツェントが優雅に歩いて退出していきました。退出後、扉の前にいた青色神官達によって扉が閉ざされます。これからの神殿と神事に対する認識が大きく変わる、歴史的な継承の儀式が終わりました。

「神事の見直しを、とローゼマイン様が声を上げていたのも今となっては当然のことのように思えますね」

　儀式の終了を感じて席を立とうとしたところで、「もうしばらく着席をお願いします」というハルトムートの声が響きました。

「新たなツェントが立ったことで、領主会議では様々な案件がございます。トラオクヴァール様よりお話しいただきましょう」

　ハルトムートの言葉にトラオクヴァール様が何度か目を瞬いた後、ゆっくりと立ち上がり、祭壇へ歩いていきます。ツェントという役職を奪われることになったせいでしょうか。顔色が悪いようにも見えます。

　けれど、トラオクヴァール様は祭壇に立ち、ハルトムートから声量を増幅する魔術具を受け取るとランツェナーヴェとアーレンスバッハの反乱について、アウブ達に話し始めました。

「ユルゲンシュミットが待ち望んだ新たなツェントが誕生の陰には様々なことがありました……」

　ランツェナーヴェの反乱についての公式見解を述べた後、領主会議について話題が移ります。今まで碌な情報が入らなかったせいでしょう。どのアウブの顔も真剣そのものでトラオクヴァール様のお言葉を聞いています。

　……ずいぶん王族の行いを隠すのですね。

　お父様やお母様から話は聞いていましたが、アーレンスバッハでランツェナーヴェの兵士達と戦ったわたくしにはローゼマイン様達の活躍があまりにも隠されているような気がしてなりません。

　……ローゼマイン様のお望みだそうですけれど……。

　ランツェナーヴェや反乱に加担したアーレンスバッハの貴族達に対する処分、領主会議までに領地の境界線の引き直しが新たなツェントによって行われること、それに伴い領地の順位に様々な変動があることが告げられます。

「まったく、いつになったら部屋に戻れるのだ？」

「……お兄様は次期アウブなのですから、もっと真剣にトラオクヴァール様のお話を聞いた方が良いですよ」

　それから、トラオクヴァール様やジギスヴァルト王子がアウブとなること、混沌の女神　カーオサイファに魅入られたアーレンスバッハは女神の化身が清めるために新たな領地として色や名が与えられることなどの連絡が終わり、ようやく講堂から退出する許可が出ました。その途端、お兄様は自分の側近を連れて講堂を出ていきました。

　仕方のなさそうな顔でお母様がお兄様を見送り、わたくし達にも退出するように促します。寮に戻ってもお兄様はすでに自室に籠ってしまったようで姿が見えません。多目的ホールで側仕えにお茶を淹れてもらい、わたくしは両親と今日の儀式について話をしました。継承の儀式の荘厳さや、ローゼマイン様の神々しさについて、留守番していた者達に教えるのが目的です。

「それにしても、領主会議中に話すと言っていた内容まで先に告げて、時間稼ぎをしなければならないなんて……何があったのかしら？」

「さて？　ツェントにならなかった私が知る必要はないことだ」

　盛り上がる皆の声にかき消されるような声の両親の会話が不意に耳に届きました。

[------------------------------------------------]

神々の祝福　前編

「とりあえず新しいツェントに神々からの祝福があるように見せかけることも重要ですよね？　二人が入場する時に祝福を贈って二人の卒業式の時を再現すれば、多少神秘性が増すと思うのですけれど……」

「そこまで優遇する必要があるか？」

　魔術具のグルトリスハイトを与えるだけで十分だ、とフェルディナンドは言うけれど、新しくツェントになるエグランティーヌがすんなりと受け入れられなければ、わたしは図書館都市計画に没頭することが難しくなるかもしれない。

「君の最優先は図書館都市か」

「他に何かありますか？」

「……ないわけではないと思うが、これ以上王族に深入りする気がないならば祝福の一つくらいは構わぬ」

　実際はそんな流れでフェルディナンドのお許しが出たわけだが、全てをエグランティーヌ達に説明する必要もない。わたしは入場時に祝福を贈ることだけを告げて、二人を講堂へ送り出す。扉が一旦閉められるのと同時に指輪へ魔力を流し込んだ。

　……エグランティーヌ様もアナスタージウス王子もものすごく大変だろうけど、ツェント業頑張ってね！　応援だけはするから！

　心持ち多めにぽわっとさせるだけで、気分的には挨拶と同じような祝福である。これでよし、と頷いていると、フェルディナンドがこめかみを押さえて眉間に皺をくっきりと刻み込んだ。

「……最悪だ」

「何ですか？」

「君には自覚がないのか？　君を取り巻く女神の御力が増えている」

「へ？」

　わたしは自分の手を見てみるが、全くわからない。自分ではわからなくても、フェルディナンドはとても困った顔になっている。多分かなりよろしくない状況だ。

「フェルディナンド様、どうしたらいいですか？」

「どうしようもない。すでにあの二人が入場して儀式は始まった。このまま進めるしかあるまい」

「……進めて大丈夫でしょうか？　魔石、光り始めましたけれど……」

　女神の御力が増えた自覚はないけれど、腕の装飾品についている魔石が少しずつ光を帯び始めているのを見れば、大変なことになっているのは嫌でも理解できた。

「途中で想定外のことが起こることは予想済みだが、講堂に入る前から想定外の事態が起こるとは……。相変わらず君は私の予想を裏切ってくれる」

　舌打ちしながらフェルディナンドが自分の手持ちの魔術具などを確認し始める。色々なところに色々な物を隠しているのがちらちらと見えた。

「儀式の場に赴くというよりは、戦場に赴くような装備ですね」

「君が起こす想定外の事態にはこれでも対応できるかどうかわからぬ」

「わたくし、神事の場で回復薬を使ったことはありますけれど、攻撃用の魔術具が必要だったことなんてございませんよ」

　わたしが唇を尖らせると、フェルディナンドはフンと鼻を鳴らした。

「万が一のための用心だ。それよりも、少しは女神の化身らしくしなさい。そろそろ呼ばれるぞ」

　女神の化身らしさを出すことの重要性についてフェルディナンドがつらつらと並べていると、講堂の扉が開いた。向こうからはハルトムートの声が聞こえてくる。

「メスティオノーラの化身でいらっしゃるローゼマイン様のご入場です」

　……女神の化身か。それらしく見えればいいんだけどね。

　フェルディナンドが色々と考えたらしいので、よほど大きな失敗をしなければそれらしく見えるとは思うけれど緊張はする。わたしは差し出されたフェルディナンドの手に自分の手を重ねた。

　……おおぅ、すごく光ってるよ。

　お小言を聞いている間にも女神の御力が増えていたようだ。いつの間にか自分の腕を覆う魔石やお守りの数々がものすごく存在を誇示している。ちょっと目に刺激が強いので、視界に魔石が入らないように少し顎を上げる感じで視線を外しておく。フェルディナンドの社交的な笑顔に「余計な祝福を贈ったせいだ」と責められているような気がして、フェルディナンドの横顔からも少し視線を逸らしておいた。

　……そりゃ、祝福は贈ったけど、こんな状態になってるのはわたしのせいじゃないからね。女神様が悪いんだから。

　フェルディナンドによると、礎に供給したことで女神の御力が薄れたそうなので奉納舞で魔力を大量消費すればこのピカピカ状態も収まるだろう。

　……もうちょっとの辛抱だよ。頑張れ、わたし。

　ハルトムートやエグランティーヌが喋るのを聞き、わたしはフェルディナンドと舞台の上に上がる。それだけで足元に魔法陣が浮かび上がったのを見て、女神の御力の垂れ流し状態がかなりひどいことが視認できた。

　……のおおおぉぉぉ！　何これ？

　フェルディナンドがこめかみトントンして嫌な顔になるわけである。自分でもビックリするレベルの垂れ流しだ。

　……でも、「これから奉納舞を始めると、舞台に浮かび上がる魔法陣がありますが……」って説明が不要になったよ、フェルディナンド様。

　そんなことを考えながら、フェルディナンドの神事や魔法陣についての説明を聞く。当初の予定ではわたしが神事について喋ることになっていたのだが、「神秘性が薄れる」という理由で口を開くのを禁じられてフェルディナンドが説明することになったのである。正しい選択をしたと思うけれど、ちょっとひどい。

　説明が終わった後は奉納舞だ。ピィン、ボゥンと調弦している音が聞こえてくる。わたしは舞台の上で跪いた。

　実はフェルディナンドも音楽と歌を奉納することになっている。隠蔽の神　フェアベルッケンのお守りを使って祭壇を一緒に上がる予定なので、神々へ音楽を奉納するらしい。今まで散々無礼なことをしてきたくせに、妙なところで真面目というか律儀だ。わたしがそう指摘したら「神としての力を失っているエアヴァルミーンはともかく、御加護を得ている他の神々を蔑ろにするわけにはいかぬ」と言っていた。

　……あ、音合わせ、終わったかな？

　楽器の音が聞こえなくなったので、準備ができたのだろう。わたしはすぅっと一度ゆっくり息を吸い込んだ。

「我は世界を創り給いし神々に祈りと感謝を捧げる者なり」

　あのエグランティーヌが後から同じ奉納舞を行うのだ。観覧席にいる皆に「女神の化身って割にはいまいち……」と思われないように、なるべく上手に見えるように気合いをいれなければならない。

　……光の柱の高さだけでも負けないようにガンガン魔力を注がなくっちゃ！

　舞の技術で勝てるとは思えないので、女神の化身らしいエフェクトだけでも派手にしておきたいものである。垂れ流れている女神の御力に加えて自分の魔力も流していく。どんどんと光の柱が伸びてきた。

　……うんうん、いい調子。

　くるりと回る時に祭壇の神像が動き、道が開いているのが見えた。わたしは道を開いた後、祭壇前で待機してエグランティーヌが舞を見ることになっている。この順番ならば、たとえエグランティーヌの奉納舞で光の柱が足りなくても観覧席の貴族達にはわからないからだ。

　道が開いたことを確認したことで安堵して奉納舞に集中したため、それから、自分が身につけている魔石が輝いていたためだろう。わたしは舞台から溢れた魔力が光の波となって祭壇を上がっていったことも、神具が光ったことも気付かないまま、奉納舞を終えて舞台に再び跪いた。

「神に感謝を」

　そう言った途端、急に自分の周囲が眩しい光に包まれた。思わずぎゅっと目を閉じる。体が軽くなったような浮遊感に包まれた直後、「よく戻った。其方が二位だ、マイン」という声が聞こえた。

　……はい？

　わたしは恐る恐る目を開けて、ぐぐっとゆっくり顔を上げた。エグランティーヌの奉納舞が終わった後、エグランティーヌとフェアベルッケンのお守りを使ったフェルディナンドと三人で祭壇を上がってここへ来るはずだったのに、何故かわたしだけがすでに始まりの庭にいてエアヴァルミーンと向き合っている。

　……ちょっと待って。予定、狂いすぎなんだけど。

　すぅっと血の気が引いた。急いで周囲を見回す。始まりの庭の出入り口は見当たらず、誰かが入ってこられるようなところはない。せっかくわたしが奉納舞で開いた道は何故か閉じられている。

　……え？　エグランティーヌ様、大丈夫！？　一人で道を開ける！？　フェルディナンド様、こういう時はどうしたらいいの！？

　さすがにフェルディナンドもわたしだけが始まりの庭へ移動させられるという想定はしていなかったはずだ。

「聞こえているか、マイン？」

「……いきなりここに移動させられたことに驚きすぎて聞いていませんでした。何でしょう？」

「ツェントの争いは其方が二位だと言ったのだ」

　……え？　二位？

「エアヴェルミーン様、わたくしが二着ということはジェルヴァージオがここへ戻ったのですか！？」

　メダルを破棄して国境門に閉じ込めたと言っていたのに、あれは何かの間違いだったのだろうか。わたしが目を見開くと、エアヴァルミーンはゆっくりと首を横に振った。

「いや。テルツァが戻れば良かったのだが、アレは行方をくらました。今はどこにいるのかわからぬ」

　もしかしたら、メダルを破棄されたせいでエアヴェルミーンにはジェルヴァージオの魔力がつかめなくなっているのだろうか。それとも、本当にどこかへ移動したのだろうか。

「ジェルヴァージオが戻っていないということは、フェルディナンド様が一位で戻ったということですか？」

「うむ。テルツァの妨害をしていたあの卑怯者は其方よりも早く戻ってきた」

　……え？　いつの間に？　聞いてないよ。

　わたしがエーレンフェストの寮に籠らされている間、フェルディナンドはあちらこちらへ行っていたはずだ。どのルートを使ってここへやって来たのか知らないけれど、いくらでも時間があったと言えなくはない。

「そこを見るが良い。戻ってきたかと思えば、勝利宣言をして礎に至る道も聞かずに何やら置いて行きおった。クインタはここを物置か何かと思っているのではあるまいな」

　エアヴァルミーンが視線で示した先には銀色の布で包まれ、紐と魔石で縛られた四角の物が置かれている。他の魔力の影響を受けないように銀色の布で包まれていて、他の者が勝手に触れないようになっているそれが何か、わたしは知っていた。

　……エグランティーヌ様に授ける予定のグルトリスハイトの魔術具だよ。

　先に見せてほしいとねだったが、わたしの魔力が登録されてしまうとまた一から作り直しになると言われて封印されてしまった物である。予め始まりの庭へ持ってきて、ついでに勝利宣言もしていったらしい。

　……まぁ、フェルディナンド様らしいといえばフェルディナンド様らしいんだけど。

「其方が戻ってきたのはクインタより遅かったが、其方はあの無礼者より先に礎へたどり着いた。少なすぎて礎を染めるにも及ばぬが、魔力が増えていることは間違いない。よくぞ、あの卑怯者を出し抜いた」

　……えーと、礎に魔力を流せって指示を出したのはフェルディナンド様なんですけど。

　褒められているっぽい雰囲気なので敢えて口には出さないが、別にわたしはフェルディナンドを出し抜いたわけではない。わたしの余剰魔力を減らしたり、魔力の増減で女神の御力に変化があるのか調べたりしたがったフェルディナンドに言われるまま魔力を流していただけだ。

「そして、国境門のほとんどは其方の魔力で染められている。これらの功績を認め、我はクインタではなく、其方を新たなツェントとする」

「はい？」

　ちょっと理解が追い付かない。ツェントに任命されても困る。わたしは今メスティオノーラの化身としてエグランティーヌにグルトリスハイトの魔術具を継承させる儀式の最中だ。わたし自身がツェントになる予定は全くない。それに、勝手に予定を狂わせたらフェルディナンドに怒られる。

「クインタより早く礎を魔力で満たせ、マイン」

「そんなことをおっしゃられても、一位はフェルディナンド様ですよね？　わたくしがツェントになるのは筋違いです」

　何のための競争ですかとわたしが訴えると、エアヴェルミーンは素知らぬ顔で「だが、其方は礎に魔力を注いだではないか」と言う。

「それはそうですけれど、あれはフェルディナンド様が……」

「何より、我はあの無礼者が好かぬ。ツェントはクインタ以外の者が良いと思っている」

　好き嫌いという感情で語られると、説得するのは無理だ。色々とやらかしてきているフェルディナンドが嫌われていても何の不思議もない。

「これまでにフェルディナンド様が行ってきた数々の無礼を考えたら、確かにお気持ちはわかります。でも、フェルディナンド様が勝ったらフェルディナンド様の望んだ通りにするとおっしゃったではありませんか」

　そういう約束の競争だったはずだ。好き嫌いではなく、結果を見てほしい。それに、フェルディナンド自身がツェントになるわけではないのだ。エアヴァルミーンの望みにも沿っていると思う。

「クインタが自由にするのは、クインタが礎を満たした時の話ではないか。アレはまだ礎を満たせておらぬ。今しかない。クインタに礎を奪われる前に其方が染めるのだ」

　……いや、そんなことを決定事項のように言われても……。

　下手に礎を染めると、エグランティーヌが染め直すのが大変になるし、自分の魔力はアーレンスバッハの祈念式やエントヴィッケルンのために置いておきたい。わたしがツェントになるのが当然であるように言われても困る。わたしはツェントになる予定はない。エグランティーヌをツェントにするために、すでに皆が動き出している。

　わたしは必死にエアヴァルミーンを説得する言葉を探した。けれど、神の理で動く存在を説得するための言葉がすぐには見つからない。

「其方の魔力では心許ない。無尽蔵に力を振るうことが可能なメスティオノーラが協力してくれるそうだ。メスティオノーラの力で礎を染め終わるまで少しの間体を借りるぞ」

「ひゃっ？」

　エアヴァルミーンの言葉と共に上から光が降ってきた。直後、わたしの腕を包んでいる魔石の数々が、歯向かうようにバチバチと音を立てる。

　わたしが許可を出すより先にフェルディナンドが作ったお守りが発動した。わたしの意見などお構いなしで体を奪われるところだったことに気付き、神々の強引さに鳥肌が立った。

　……また記憶を失う！？

「ダメです！　貸しません！」

　わたしは叫ぶように宣言して自分の体に入り込もうとする存在に抗った。ぎゅっと自分の両腕を交差してつかみ、魔石に魔力を流す。

　わたしにだって譲れないことはある。これ以上、記憶を失うわけにはいかないし、考えなしに貸さないとフェルディナンドと約束した。自分の意識がない間に周囲の状況が変わっているのも嫌だ。メスティオノーラに体を貸している間、一体何があったのか、フェルディナンドは全てを教えてはくれなかった。

　……フェルディナンド様に心配かけるのも、傷つけるのも嫌なんだよ！

　絶対に貸すもんか、と強く思ったところで降り注いでいた光が消えた。同時に、エアヴァルミーンが威圧的な力を放ち始める。

「マイン、我等にたてつくか？」

「たてつくつもりはありませんけれど、前回女神様に体を貸したことでわたくしの大事な記憶が奪われたのです。まだ大事な記憶は戻っていません。これ以上、わたくしは自分にとって大事な物を失いたくないのです」

　国の礎を染めろというならば、ツェントになったエグランティーヌ様や、アーレンスバッハの土地を満たすことが大変になるけれど、一旦染めても構わない。けれど、女神に体を貸すのはお断りだ。

「記憶を失わねば良いのだな？　ならば、他の神々にも協力してもらうとしよう」

「え？　他の神々に何を……？」

「其方に祝福を。礎を満たす力を授けよう」

　エアヴァルミーンはゆっくりと手を動かす。何色もの光が一斉に降り注いできた。メスティオノーラの御力で満たされていた自分の中に、全く違う属性の御力が次々に入って来る。これまでに受けていた祝福と全く違う。複数の神々から流し込まれた御力が互いに反発し合う不快感と苦痛にわたしは悲鳴を上げた。

[------------------------------------------------]

神々の祝福　中編

「では、疾く礎を染めるが良い。……どうした、マイン？」

　悲鳴を上げて、その場に崩れるように座り込んだわたしにエアヴェルミーンが本当に不思議そうに尋ねてくる。

「い、痛い。……無理っ！　あぐぅっ……」

　様々な神々から御力を流し込まれたわたしは、座っていることもできずその場に寝転がってできるだけ体を縮めるようにして苦痛に耐えていた。メスティオノーラの御力だけならば完全に馴染んで自覚もないままに垂れ流すことができたけれど、複数の神々から流し込まれた御力は互いに反発し合っている。わたしの中でそれぞれが存在を主張して領域を拡大しようと暴れているのに、身食いの熱と違って自分の意志で動かせない。

「……ふむ。どうやら神々にも少々想定外の事態のようだ。ずいぶんと慌てている。メスティオノーラが降臨して神々の御力を整えたいそうだが、その腕の飾りを外せるか？」

「うぅっ……。んぐっ……」

　上を見ながらそう呟くエアヴェルミーンに、わたしは首を横に振る。今のようにまともに立つことさえできない状態で袖を肩まで捲り上げて留め具を探し、片手で外すような器用な真似ができるわけがない。

　エアヴェルミーンがその場にしゃがみ込み、わたしに手を伸ばすが届かない。どうやらエアヴェルミーンは人の形になってもその場から動けないようだ。

　……人型が全く役に立たってないよ！　バカバカ！

「さて、困ったな……」

　本当に困っているのかいないのかわからないような声でエアヴェルミーンがそう言いながら立ち上がる。ゆっくりと周囲を見回しているのが、苦痛の涙で歪んだわたしの視界に映った。

「……む？　誰かがここへ至る道を開こうとしているな。少々魔力が心許ないが、それを外せる者ならば招いた方が良いか？」

　道を開こうとしているのはエグランティーヌに間違いない。わたしは必死で頷いた。体の内にある神々の御力が反発し合ってどんどんと膨れ上がっている今、誰かに助けてもらわなければ本気でまずい。

　すいっとエアヴェルミーンが腕を動かすと、白一色だった始まりの庭に出入り口が開く。ほんの一瞬、出入り口の虹色の幕が揺らめいた気がした。直後、エアヴェルミーンの周囲で小爆発がいくつも起こる。

　……あ、フェルディナンド様だ。

　隠蔽の神　フェアベルッケンのお守りを身について始まりの庭に忍び込んで、そのままエアヴェルミーンに攻撃を食らわすような人が他にいるはずがない。けれど、その攻撃はほとんど効果がなかったようで、エアヴェルミーンは面倒くさそうに顔をしかめただけだった。

「奉納された魔力はクインタの物ではなかったはずだが、其方、また卑怯な手を使ったな。まぁ、良い。マインの腕の飾りを外せ」

「何のために、だ？」

「メスティオノーラを降臨させるためだ」

「断る」

　……待って。断らないで！

　隠蔽のお守りを外したようでフェルディナンドの姿が見えるようになった。魔術具をいくつか手にしてわたしとエアヴェルミーンの距離を視線で測っているフェルディナンドは完全に戦闘態勢になっている。だが、ここで断られたら神々の御力にわたしが堪えられない。わたしは死に物狂いで震える手をフェルディナンドに向けて伸ばす。けれど、フェルディナンドはエアヴェルミーンと睨み合ったまま、こちらを向いてくれない。

　……助けて、フェルディナンド様。

　「なるほど。マインをこのまま死に追いやり、其方がメスティオノーラの書を完成させて礎を得ようというのか。確かに自分の手を汚さず、効率的ではある。実に其方らしいやり方だ。……非常に無念だが、其方がツェントになることを認めるより他仕方があるまい。マイン、残念ながら其方を支援してツェントにするには時間が足りなかったようだ」

　完全に諦めた口調でものすごく残念そうにエアヴェルミーンが首を横に振った。

「クインタ、あまりマインを苦しめるのも可哀想だ。少しでも慈悲の心があるならば、死ぬまで待たずにさっさと止めを刺してやれ。そして、さっさと礎を染めに行くが良い」

　フェルディナンドがひどく困惑した顔になって、わたしとエアヴェルミーンを見比べる。助けてほしいと訴えるわたしの視線に気づいたのか、フェルディナンドがエアヴェルミーンの動きを警戒したまま、わたしの側に跪いた。

「……メスティオノーラを降臨させればローゼマインは助かるのか？」

「神々の力を動かせるのは神だけだ。人にも我にもできぬ」

　ギリッとフェルディナンドが奥歯を噛みしめたのがわかった。

「君はメスティオノーラを降臨させることに異論はないのか、ローゼマイン？」

「ん……。たす、け……痛っ！」

　わたしが何とか頷くと、フェルディナンドは手にしていた魔術具を片付け、代わりの物を取り出し始めた。「口に含んでおけ」と食いしばっていたわたしの口をこじ開けて何か固形状の物を入れて、自分の口にも何か入れる。

　そして、わたしに背を向けて立ち上がるとエアヴェルミーンに向けて何か撃った。大きく広がるマントの向こうでパンという音が響く。

「効力は少し弱めてある。ローゼマインが助かるまでの間、これ以上余計なことができぬようにしばらく固まっているが良い」

「あ……ぐ……」

　エアヴェルミーンが苦痛の声を上げ始めた。最初の攻撃は効かなかったようなのに、今度は一体何をしたのだろうか。そう思った直後、フェルディナンドは銀色の筒を放り出した。どうやら即死毒をエアヴェルミーンに向けて放ったらしい。

　……口の中の物ってもしかして解毒剤？　結構苦いんだけど。

　エアヴェルミーンを動けないようにすると、フェルディナンドはすぐにわたしの袖を捲って腕の飾りを外し始めた。

「痛いですっ……。うぐぅっ……」

「苦痛かもしれぬが、暴れるな」

　そんな難しいことを言われても困る。少し体勢を変えるだけでも苦しいのだ。いつも通りにわたしの苦痛の呻き声は無視してさっさと終わらせてほしい。

「……あの、フェルディナンド様、ローゼマイン様。儀式の途中で一体何をなさっているのでしょう？」

　ものすごく困惑したエグランティーヌの声が響いた。そういえばエグランティーヌが道を開いたのだ。すっかり忘れていたが、本当ならばフェルディナンドではなくエグランティーヌが来るはずだった。

「ローゼマインにメスティオノーラを降臨させるため、お守りの一部を外しているところです。ぼんやりしていないで早くこちらへ来て手伝ってください。ローゼマインに何があれば貴女もはるか高みに向かうことになるのですが、理解していますか？」

　フェルディナンドの焦りを含んだ声にエグランティーヌがわたしのところへやってくる。苦痛に呻くわたしの姿を見て、一瞬で顔色を変えた。

「フェルディナンド様、ローゼマイン様に一体何が起こったのですか？」

「存じません。一つ確実なのは、メスティオノーラを降臨させねばローゼマインが死ぬということだけです」

　苛立たしそうにフェルディナンドがそう言った時、片方の腕のお守りが外れた。

「フェルディナンド様、ローゼマイン様を抱き上げて押さえていてくださいませ。留め金が見えません」

　エグランティーヌにそう言われて、フェルディナンドはわたしが暴れないようにがっちりと固める勢いで抱きしめる。その間にエグランティーヌがもう片方の袖を捲っていく。二人が分担して協力すると、すぐにもう片方のお守りは外れた。

　お守りが外れた直後、メスティオノーラの声が脳裏に響いた。

「少しの間、退いていなさい。今回は貴女を図書館へ入れません」

　そうして、わたしの意識はひょいっと退けられて、何もない白い空間に置きざりにされたのだった。

　……女神の図書館に出入り禁止されたってこと！？　のおおおぉぉぉ！

　死後の楽しみがなくなったことに打ちひしがれていると、「終わりました。お戻りなさい」というメスティオノーラの声が響いた。

「あの、何が起こったのですか？　わたくしの体に何をしたのですか？」

　わたしは急いでメスティオノーラに質問する。前回、フェルディナンドからは全てを教えてもらえなかった。今回も同じことになりそうなので、女神様から正しい情報が欲しい。

「前回わたくしが貴女の体に降りたことで完全にわたくしの力に染まりました。そのため、複数の神々の力が反発し合うことになったのです。時間がたって影響が薄れていればこれほどの苦痛はなかったのでしょうけれど、今回はほとんど時間が経っていなかったことで、貴女は不必要に苦しむことになったようです」

　メスティオノーラは「それが苦痛の原因の一つ」と言う。つまり、他にも理由があるということである。わたしは「二つ目は何ですか？」と先を促した。

「クインタの魔術具によってわたくしの降臨が防がれたでしょう？　ですから、エアヴェルミーン様に協力を頼まれた神々は妨害に負けない勢いで祝福の力を注ぎ込んだのです。それが原因の二つ目でしょう」

　……ちょ、ちょっと、神様達……。

　フェルディナンドが作ったお守りは神の降臨を防ぐものだ。神々の祝福を防ぐような物ではない。そのため、他の神々の御力が防がれることはなく、そのまま受け入れる結果となったそうだ。防がれることを前提とした神々の御力は、人の体には過ぎた祝福だったということである。

「神々に悪気があったわけではないのですけれど、エアヴェルミーン様に抗うクインタへの意趣返しではあったようですね」

　その結果として、わたしが苦しむことになったのならば、ひどいとばっちりである。

「巻き込んでしまった貴女には済まないことをしたと思っていますよ。……でも、お話はここまでにした方が良さそうですね。辛抱の足りないクインタが暴れ出す前にお戻りなさい」

　暴れ出すなんてまるで猛獣のような言い方をされているけれど、フェルディナンドは効率的で手段を選ばないところがあるだけで、基本的には辛抱強い方だ。

「辛抱が足りないということはないと思うのですけれど……」

「そうかしら？　クインタはエーヴィリーベの影響が強くて、彼のゲドゥルリーヒが関連すると辛抱強さは消し飛ぶようです。できることであれば、もう貴女達はエアヴェルミーン様に近付かないでくださいませ」

　メスティオノーラは真剣にエアヴェルミーンのことを案じている。命の恩人としてメスティオノーラがエアヴェルミーンに色々と融通する話を読んだことがあるけれど、あの神話は本当のお話なのだろうか。メスティオノーラにとってエアヴェルミーンは大事な存在なのかもしれない。始まりの庭に飛び込んでくると同時に攻撃するフェルディナンドを近付けたくないのは理解できた。

　……フェルディナンド様が始まりの庭でしたことだけを箇条書きにしたら、本当に猛獣っぽいかも。

「わかりました。戻ったらできるだけ早くフェルディナンド様を連れて、始まりの庭を離れます」

「えぇ。そして、ユルゲンシュミットの礎を染めてちょうだい。それをエアヴェルミーン様が望み、神々は御力を貸したのですから」

　大変な事態にはなったけれど、神々はユルゲンシュミットの存続を願ってくれているらしい。影響力を少しでも薄れさせるためにも御力を使う必要はあるし、今回も助けてくれたし、これまでに色々と祝福をいただいているのだ。神々の望みを叶えることに否はない。

「お世話になりました、女神様。神に祈りを！」

　意識が戻ると、フェルディナンドの顔がまた間近にあった。前回と同じように心配そうな顔をしている。

「ローゼマイン、体の調子はどうだ？　メスティオノーラが降臨して何やらしていたようだが、君がまとっている神々の御力に何の変化もない。本当に大丈夫か？　君の大事な物を失っていないか？」

　わたしが複数の神々の御力をまとった時にはすぐに判別できたけれど、メスティオノーラが降臨しても何の変化もないため、フェルディナンドは不信感でいっぱいのようだ。

　わたしは自分の手を少し動かしてみる。苦痛はあまりない。

「体に違和感が残っているけれど、苦痛は少なくなっています」

「ならば良い。私が説明を受けた限りでは他の神々の御力を分けて固めているだけらしい。時間が経てば魔力が回復するように神々の御力も増えるので、なるべく早く授けられた力を使わなければならないそうだ」

「使うだけでいいのですか？」

　礎を染める約束をしているし、この後はアーレンスバッハの祈念式もある。神々の御力を使うだけならば、それほど難しいことではない。

「魔力を回復させれば、少し薄れるとはいえ神々の御力も回復するらしい。……影響力が完全になくなるまで苦しみが続くと聞いている」

「ちょっと待ってくださいませ。影響力がなくなるまでというのは一体どれくらい期間なのですか？　長い期間、苦しみ続けるなんて嫌ですよ。何か方法はないのですか？」

「……ないわけではない」

　フェルディナンドが少し目を逸らしてそう言いながら、わたしを立ち上がらせる。

「まぁ、フェルディナンド様。そのような言い方ではローゼマイン様も不安に思われますよ。女神様のおっしゃった通りに教えて差し上げなければ……」

　エグランティーヌが瞳を瞬かせてフェルディナンドに注意した。エグランティーヌの意見に賛成だ。隠し事はよくない。特に、わたしに関することならば尚更だ。わたしがじとっとフェルディナンドを見上げると、フェルディナンドは嫌そうな顔をしながら教えてくれた。

「今のように神々の御力が溢れそうになっている状態では、人の魔力で神々の御力を打ち消すのは難しいが、枯渇直前まで魔力を使った直後ならば可能だそうだ」

「つまり、枯渇するくらいに魔力を使った後にフェルディナンド様に染めてもらえばいいだけなのでしょうか？　これから魔力を使わなければならないところはたくさんあるので何とかなりそうですね」

　意外と簡単な方法だったことに安堵していると、エグランティーヌが少し困ったように眉尻を下げた笑みを浮かべる。

「ローゼマイン様は秋を待たずに冬の到来を早めることになりますけれど、命には代えられませんもの。仕方がありません。仕方がありませんけれど……」

「あら？　冬の到来を早めるということは、またアーレンスバッハに冬を呼ぶのですか？　確かにエーヴィリーベの剣を使うと魔力を極限まで使いますけれど、ちょっと魔力の無駄遣いですよね？」

「違う、ローゼマイン。そうではない」

　フェルディナンドが軽く手を振りながら深い溜息を吐いて、「余計なことを言うな」と言わんばかりの厳しい視線をエグランティーヌに向ける。

「ローゼマインへの説明は後で私が行います。エグランティーヌ様はグルトリスハイトの登録を終えたのでしょうか？」

「えぇ。終わりました」

　そう言いながら、エグランティーヌは大きめの魔石が付いたブレスレットを見せてくれる。あれがグルトリスハイトらしい。シュタープを変形したように見せるために、普段は装飾品として身につけられるようになっているそうだ。フェルディナンドも感心するレベルの母の愛らしい。

「それは一代限りのグルトリスハイトです。エグランティーヌ様以外には使えません」

「わかっています。わたくしに、そして、王族にグルトリスハイトを授けてくださったこと、誠にありがとう存じます」

　エグランティーヌがわたしとフェルディナンドの前に跪いた。

「其方等、マインが元に戻ったならば疾く去れ」

　声がした方を振り返ればエアヴェルミーンが嫌な顔をしながら腕を振った。出入り口を作り出すと、ゆっくりと白い大木に戻っていく。ユルゲンシュミットの存続を願い、神々に助力を願ったら、フェルディナンドに攻撃されたエアヴェルミーンは、ある意味で非常に可哀想な存在だ。

「エアヴェルミーン様、わたくし、女神様とお約束したので礎を染めてきます。ご安心くださいませ」

　エアヴェルミーンがわずかに頷いたのが見えた。

「ローゼマイン、君がユルゲンシュミットの礎を染めるのは……」

　フェルディナンドが止めようとしたが、わたしはゆるく首を振る。

「そのためにいただいた神々の御力ですし、人の身には過ぎた御力を賜ったようですから、どんどん使う必要があるのです。実は、こうしてお話している今も女神様が整えてくださった神々の御力が少しずつ膨れ上がっています」

　苦痛を感じずにいられる時間は決して長くはない。女神の化身扱いされているわたしが貴族達の集まる場で倒れて苦痛に呻くような姿を見せるわけにはいかないのだ。

「予想以上に時間がないのか。礎を染める準備は整えておく。なるべく早く儀式を終えるぞ」

　フェルディナンドはそう言いながら、白い大木の周囲に落ちている枝を拾い始めた。

「何ですか、それ？」

「エアヴェルミーンの髪を切り落とした後に出たのだから、この木の枝であろう」

「え？　髪を切り落としたとはどういうことですか！？　そういうことをするからフェルディナンド様は女神様にまで警戒されるのですよ！」

　エアヴェルミーンの髪を切り落とすなんて何ということをしているのか。そんなことを女神の前でしていたのならば、猛獣扱いされても仕方がないと思う。

「君がいらないならば置いて行くことも吝かではないが、せっかく落ちている素材だ。魔紙の研究をしてみたいと思わないか？」

「落ちている物は有効活用した方がいいと思います」

　フェルディナンドがニヤリと笑った。神々の御力が体の中で膨れ上がった気がする。

　……これから先フェルディナンド様を始まりの庭に近付けないようにしますから！　今回だけは見逃してください、神様！

　フェアベルッケンのお守りを手にしたフェルディナンドが先に行き、違和感と苦痛が完全には消えていないわたしはエグランティーヌに手を引かれて祭壇を一段、一段ゆっくりと下りていく。

「何だか色々なことがありすぎて、まだ儀式をしていたのかという気分になりますね」

「えぇ、本当に。短時間に色々なことが起こりすぎました。全てに対応しようとするフェルディナンド様には感嘆いたします」

　祭壇をゆっくりと下りながらエグランティーヌが小声で教えてくれる。

　わたしが忽然と姿を消したことに真っ青になったこと。フェルディナンドから予め言われていた通り、自分の魔力を籠めた魔石を最初に舞台へ押し付けて魔法陣を浮かび上がらせたこと。祭壇を上がって始まりの庭にたどり着いたら、わたしが苦痛に呻いていて驚いたこと。お守りを外すと女神が降臨し、フェルディナンドと喧嘩を始めたこと。白い大木があったはずの場所にエアヴェルミーンが立っていて、そんな尊い存在に対して躊躇なくフェルディナンドが攻撃したこと。

「女神様とフェルディナンド様が喧嘩をしたのですか？」

「えぇ。エアヴェルミーン様に対する言動に英知の女神が、ローゼマイン様に対する仕打ちに関してフェルディナンド様が怒っていらっしゃいました。……英知の女神はエアヴェルミーン様を、フェルディナンド様はローゼマイン様をとても大事にしていらっしゃるようでしたよ」

「神話が真実ならば命の恩人ですから、わたくしにとってのフェルディナンド様のような存在かもしれないとは考えました」

　図書館で本を読むより大事な存在なのだろう、とわたしが言うと、エグランティーヌが困った子を見るような目でわたしを見た。

「冬の到来を早めるのをフェルディナンド様が躊躇うお気持ちがよくわかりますね」

　突然エグランティーヌの口から「冬の到来」についての話が出て、わたしは首を傾げる。会話の流れがおかしい。とりあえず今までわたしが考えていた「冬の到来」とは意味が違うことはわかった。

　……後でフェルディナンド様に聞いてみなきゃ。

「エグランティーヌ様、始まりの庭で見聞きしたことは他言無用です。あまり命令はしたくありませんが、これは命令せざるを得ません」

「心得ています。とても他言できるようなことではありませんでしたから。それより、一刻も早く儀式を終わらせましょう、ローゼマイン様」

　ゆっくりと神々の御力が膨らんできている。そのせいで少し震え始めたわたしの手を一度強く握ったエグランティーヌが王族らしい社交的な笑みを浮かべる。わたしも頷いて、女神の化身らしく見えるように微笑んだ。

[------------------------------------------------]

神々の祝福　後編

　祭壇を降りると、ハルトムートが「痛々しくも何と神々しい……」と陶酔した表情で呟いた。フェルディナンドが事情を説明したのだろう。

「では、光の女神との契約を……。ローゼマイン様、魔術具の位置はこの辺りでよろしいでしょうか？」

　ハルトムートが周囲で準備する様子に頷き、わたしは光の女神の神具を出した。それを跪くエグランティーヌの頭にそっと被せる。エグランティーヌが立ち上がっても落ちないように、傾いていないように綺麗に被せるのは意外と難しい。わかっていたことだが、冠一つに困るわたしに側仕えの適性はないようだ。

　エグランティーヌの誓いの言葉と共に、光の冠が一際眩しく輝く。その瞬間、わたしの中にある神々の祝福の一部が反応した。神々の御力の中には光の眷属の御力も含まれていたようだ。

　……これ、全属性の祝福をしたらどうなるんだろう？

　この後、わたしはエグランティーヌに全属性の祝福を贈ることになっている。エグランティーヌはその祝福でグルトリスハイトを得たような振りをすることになっているのだ。ハルトムートやエグランティーヌと何の打ち合わせもなく取り止めはできないし、他の神々しいグルトリスハイトの授け方が咄嗟には思い浮かばない。

　声量を増幅する魔術具の位置を調整しているハルトムートと目が合う。ハルトムートが何かに気付いたように目を瞬き、わずかに動揺した表情になった。フェアベルッケンのお守りを持っているフェルディナンドを探すように、ハルトムートの視線がさまよう。

　……ダメ！　大事な儀式をこんなところで止められないよ。

　わたしはハルトムートが動こうとするのを制して口を開き、グルトリスハイトの授与を宣言する。シュタープを出して「スティロ」を唱え、決められていた通りに全属性の派手な祝福を行った。

「高く亭亭たる大空を司る……」

　祈りの言葉と共に大神の記号が光る。その度に体の中にある神々の御力が蠢いて膨れていくのがわかった。全属性の祝福がエグランティーヌに降り注ぐ間に、わたしの体は発熱したように熱くなってくる。

「エグランティーヌ様、皆様にツェントの証を」

　わたしはエグランティーヌに場を譲って後ろに下がった。ハルトムートがわたしのやや後ろに付き、「大丈夫ですか？」と小声で尋ねてくる。わたしが返事をするより先に、どこにいるのか知らないけれど、フェルディナンドの声が聞こえてきた。

「礎に向かう準備はある程度整えてきたが……熱が出ている顔になっているぞ」

「祝福に神々の御力が反応して膨れ上がるのです」

「女神に言われた通り、礎へ向かう必要があるな。他者に礎の所在を知られぬように、全員を講堂に留めねばならぬ。時間稼ぎは任せるぞ、ハルトムート」

　突然のフェルディナンドからの無茶振りにハルトムートが「は？」と声を上げる。けれど、その声はグルトリスハイトを掲げるエグランティーヌに向けられた歓声に打ち消された。

「この後、新ツェントからアウブに向けてする予定だった話をトラオクヴァール様に任せよ。それでも、時間が足りなければ領主会議に関する部分を話して引き延ばすように」

「……かしこまりました」

　かなり大雑把な打ち合わせが手短に行われているうちに、少しずつ歓声が収まっていく。どうやらグルトリスハイトの存在は信用してもらえたらしい。わたしは自分に課せられていた「女神の化身」の役目をきちんと果たせたことに安堵の息を吐いた。

　……後は、意識を失わずに退場するだけ。

「では、皆様」

　儀式予定の変更や時間稼ぎを丸投げされたハルトムートがやや緊張を感じさせる声で、閉めの挨拶をする。

「神に祈りを！」

　挨拶だから、ここで祈りを捧げるのは避けようがない。けれど、ふわりと指輪から祝福の光が漏れ、熱が上がったことには頭を抱えたくなった。

　……のおおおぉぉぉ……。わたしのバカバカ。

「ローゼマイン様、エグランティーヌ様が退場されます。シュタープを掲げて送ってください！」

　儀式の進行が変わったことを関係者に伝え、主役の退場を促すハルトムートの声が響く。フェアベルッケンのお守りを外したフェルディナンドと驚きを必死に呑み込んでいるアナスタージウスがエスコートのために祭壇前にやって来た。

「この非常時に君は本当に馬鹿ではないか？」

「……フェルディナンド様こそ、この非常時に今更わかりきったことを言わないでくださいませ」

　社交的な微笑みを浮かべながら小声で文句を言い合いつつ、できるだけ急いで退場する。どれだけ急いでも足取りがやや覚束ない感じになってきて、フェルディナンドの腕をつかむ自分の手が震えてくるのを止めることはできなかった。

「ハルトムート達が時間稼ぎをしているうちに全て終わらせるぞ」

　講堂の扉が完全に閉まった瞬間、社交用のにこやかな笑顔をかなぐり捨てたフェルディナンドはわたしを、正確にはわたしを取り巻く神々の御力を睨んだ。

「大丈夫か、ローゼマイン？」

「あんまり大丈夫じゃありません。行儀が悪いと言われようが、女神の化身らしい立ち居振る舞いについてお説教されようが、このまま座り込みたいくらいです」

　気持ちが悪くて吐きそうだ。吐き出したいのは、次々と流し込まれた神々の御力なのだけれど。

「ローゼマイン様、こちらをどうぞ」

　講堂の外には何故かグレーティアやクラリッサが銀色の布を持って構えていて、すぐにわたしに被せてくれる。布を被せられた瞬間、周囲の皆がふっと体の力を抜いたことからも、この体に流し込まれた御力の影響がとても強いことは察せられた。

「グレーティア、クラリッサ。どうしてここに……？」

「儀式の途中でフェルディナンド様から、名捧げ組は銀色の布を準備してここで待機するように命じられました」

　マント状になっている銀色の布の裾などを整えながらクラリッサがそう言うと、わたしにフードを被せて整えていたグレーティアが呆れた顔になる。

「クラリッサはどうしてもローゼマイン様の儀式を見たいと言って、一度講堂に戻ったではありませんか」

「ローゼマイン様より速くここへ戻ってきて待機していたのですから許してくださいませ」

　軽口を交わしているけれど、二人の表情はわたしを気遣うものだ。二人がわたしの準備を整えている間にもフェルディナンドは次々と指示を出していく。

「同行する護衛騎士はエックハルト、マティアス、ラウレンツの三人。今のローゼマインに近付けぬ者は護衛騎士としても不要だ。それに、これから国家規模の機密を扱う以上、同行者の言動を縛る必要がある。ローゼマイン、私、エグランティーヌ様に名捧げをした者以外の同行を禁じる」

　同行したければ名を捧げよ、とエグランティーヌの側近達を黙らせたフェルディナンドがそのままアナスタージウスにも視線を向けた。

「もちろんアナスタージウス王子も同じです」

「何だと！？」

「これから向かう先はツェントではなく、名捧げもしていなくて言動を縛ることもできない貴方を向かわせることができる場所ではありません」

　青色神官に扮するわたしの側近達と一緒に待機しているように言われたアナスタージウスがひくりと頬を引きつらせた。その反応に構わず、フェルディナンドは銀色のマントをまとったわたしを横抱きで抱き上げる。自力で立っている必要がなくなっただけでもかなり楽になった。

「ならば、フェルディナンド。其方は……」

「アナスタージウス様」

　食ってかかろうとするアナスタージウスの腕をエグランティーヌが軽く叩いて注意を引くと、優雅な動きでするりとアナスタージウスの隣を離れてフェルディナンドの半歩後ろに付く。

「わたくし達がどこへ向かうのか、そして、今のローゼマイン様の体調がおわかりになりませんか？　今は本当に時間がないのです。ローゼマイン様にもしものことがあった場合をお考えくださいませ」

　わたしとフェルディナンドを悔しそうに見たアナスタージウスが、「時間を稼げばよいのだな？」と一歩下がる。フェルディナンドは首を振った。

「こちらのことが終わり次第、エグランティーヌ様には新ツェントの役目として国境門の犯罪者を捕らえに行くことになっています。アナスタージウス王子と護衛騎士達にはそちらの準備をお願いします」

　役目を得たアナスタージウスと側近達がマントを翻して動き始める。その場に名を捧げた者しかいなくなった。周囲を見回したエグランティーヌがフェルディナンドを見上げる。

「急ぎましょう、フェルディナンド様。どんどん神々の御力が強くなっているように思えます」

「……同行中に起こったことを他に知らせてはならぬと命じられるか、ローゼマイン？」

「同行中に、起こった……ことを他に知らせてはなりません」

　わたしが同行者に他言無用を命じると、フェルディナンドが大股で歩き始めた。歩みに合わせた揺れで、体の中の熱が暴れ始める。少しでも揺れを軽減したくて、わたしはすぐ目の前にあるフェルディナンドの服をつかんだ。フェルディナンドが更に足を速めた。

　フェルディナンドはエグランティーヌ様を置きざりにしそうな速さで図書館へ向かうと、出迎えに来ているソランジュに話しかける。

「ソランジュ先生、先程オルドナンツで告げた通りです。しばらくの間、執務室で御待機ください。他の何者も図書館へ立ち入らせぬようにお願いします」

「えぇ。春の訪れに対する立ち居振る舞いは存じています。お任せくださいませ」

　ソランジュはそう言って一歩下がり、わたし達が通りやすいように少し下がって跪く。

「……エグランティーヌ様、新しいツェントのご誕生、心よりお祝い申し上げます。これからどうぞよろしくお願いいたします」

「こちらこそご指導よろしくお願いします、ソランジュ先生」

　図書館がツェントの誕生に深く関わることを知れば、軽率な扱いなどできるわけがない。エグランティーヌはまた今度ソランジュと話し合うことを約束して歩き出す。

「ローデリヒはハルトムートに退場許可の連絡を。ユストクスとエックハルトは図書館に近付く者の警戒を。それ以外の護衛騎士は背を向けた状態でこの場の警護を」

「はっ！」

　二階まで同行した護衛騎士達に次々と指示を出し、グレーティアとクラリッサにはわたしから銀色の布を外し、首から下げて身につけている鍵を出すように命じる。

「ローゼマイン様、失礼いたしますね」

　グレーティアが断りを入れてきたけれど、それに頷くくらいしかできない。フェルディナンドに抱き上げられたままの状態でフードが外され、ずるりと首元から鍵が引っ張り出される。クラリッサに手伝ってもらいながら鍵を手にしたグレーティアが丁寧な手つきで、手早く鍵を取った。

「鍵をエグランティーヌ様に手渡し、其方等も背を向けよ」

　二人が背を向けると、フェルディナンドはエグランティーヌに鍵の使い方を教えた。エグランティーヌがメスティオノーラ像のグルトリスハイトの背表紙部分を開けて鍵を差し込めば、女神像が動いて礎に至る階段が現れる。

「まぁ……」

　目を丸くするエグランティーヌを先に向かわせ、フェルディナンドはわたしを抱えて下りていく。虹色の幕を潜り抜けると、そこにあるのはユルゲンシュミットの礎である。

　フェルディナンドに降ろされたわたしは、べたっと礎に触れて早速魔力供給を始めた。ずわっと吸い出されていく魔力と共に神々の御力も礎に流れ込んで行く。呼吸が楽になり、苦痛が軽減し、熱が引いていくのが自分でわかった。

　……あぁ、生き返る。

「中央神殿長の聖典の鍵はユルゲンシュミットの礎に、各領地の聖典の鍵は領地の礎に至るための鍵になっています。はるか昔のツェントやアウブが神殿長であったことの証明で、これから先、王族や領主一族が神殿長を努めなければならない理由でもあります」

　詳しくはグルトリスハイトをご覧ください、と言いながらフェルディナンドがエグランティーヌに鍵や礎の説明をしていく。

「こちらの礎はエアヴェルミーン様や英知の女神が望んだ通り、一度ローゼマインの魔力で染めます。それでおそらく礎の枯渇とユルゲンシュミットの崩壊の回避を強く望んでいた神々も気が済むでしょう」

　これまでの歴史を振り返れば、一度礎が満たされた後の染め替えには寛容だとフェルディナンドが言う。

「神々の御力を染め変えることがどのくらい大変かわかりませんが、王族の無知の結果なのでエグランティーヌ様とアナスタージウス王子に頑張っていただくしかありません」

「はい」

　この場しか話をする時間はないという理由で、フェルディナンドはこれから先の予定について一方的に話を進め、エグランティーヌはそれを必死に聞いている。

「領主会議までに境界線の引き直しと新領地の作成を行わなければ、トラオクヴァール様とジギスヴァルト王子をアウブに任命することができません。エグランティーヌ様の急務です。新しく領地を作成する前に旧領地の神具を回収することができれば、新しく神具を作成する負担がなくなります」

　……神々の御力がどんどん出てくるのはいいんだけど……。

　わたしがアーレンスバッハの礎を染めた時は途中で回復薬が必要だった。それなのに、領地の礎をよりずっと大きな国の礎を満たさなければならない今回は、魔力が枯渇する気配が微塵もない。

「フェルディナンド様、大変です。いくら供給しても魔力が減っている気がしません。流れていくのはわかるのに、自分の中の魔力があまり減らないのです。本当に礎を満たせば魔力が枯渇するのでしょうか？　仮に枯渇しなかった場合、どうすればいいですか？」

　神々の御加護を得る儀式の後、魔力消費量に変化があった時の感覚をもっと極端にしたような感じだと説明すると、フェルディナンドが「この礎に魔力供給する以上に魔力を使う必要があるのか」と考え込んだ。

「声に力が戻ったが、君の体調はどうだ？」

「神々の御力を流したら熱が下がったので、まだまだ大丈夫ですよ。魔力が減らない方が困ります」

「そうか。ならば、境界線の引き直しも併せて行うことにしよう。新領地の作成は新アウブと相談する必要がある上に、エグランティーヌ様がツェントであることを見せる場になるため、君が手を出すことはできぬが、境界線の引き直しに関してはすでに話し合いも終えている。問題なかろう」

　わたしの体調を最優先に考えるフェルディナンドの言葉にエグランティーヌがコクリと頷いた。

「境界線の引き直しをお願いできると、わたくしも助かります。ですが、境界線の引き直しに関しては少し訂正がございます。アウブ・ドレヴァンヒェルやアドルフィーネ様とのお話し合いの結果、ジギスヴァルト王子の新領地になるはずだった土地の一部がドレヴァンヒェルに与えられることになりました」

　政略結婚であったにもかかわらず、契約の条項が満たせないため、ジギスヴァルトとアドルフィーネは離婚することが正式に決定したそうだ。ジギスヴァルトは違約金として、自分の領地になるはずだった中央の土地の一部をドレヴァンヒェルに譲渡することになったらしい。

「どこでしょう？」

「リンデンタールの北側からドレヴァンヒェルに隣接するこの辺り一帯です」

　エグランティーヌの指示に合わせてフェルディナンドが地図を書き換えていく。小領地くらいの大きさがあるのでドレヴァンヒェルがぐっと大きくなり、ジギスヴァルトの領地予定地がぐっと減った。

「ジギスヴァルト王子は中領地のアウブになりますね」

「初年度は王族出身のアウブの領地ということで順位も優遇されますが、ナーエラッヒェ様の出身地であるハウフレッツェも遠いので、それほどの援助は見込めないでしょう。来年からは厳しいことになると思います」

　エグランティーヌの言葉にわたしは肩を竦めた。

「マグダレーナ様経由でダンケルフェルガーの支援が得られるとはいえ、反乱を起こす貴族を多く抱える旧ベルケシュトックの一部を治めるトラオクヴァール様に比べれば厳しくはないと思います。ジギスヴァルト王子が得るのは中央が管理していた土地ばかりですし、それほど苦労することはないでしょう」

　貴族院の奉納式で皆から掻き集めた魔力は全て中央や中央が管理していた土地に使われていたのだから荒れているとは思えない。真面目にアウブをすれば、それほどの苦労はないだろう。

「ドレヴァンヒェルに戻られたアドルフィーネ様は、この辺りのギーベになる予定だそうです。ローゼマイン様の図書館都市に触発され、研究都市にしたいとおっしゃっていました」

　一度王族へ嫁いでいたアドルフィーネが領地外で再婚相手を探すのは難しい。そのため、ドレヴァンヒェルに戻り、ギーベとなるそうだ。ドレヴァンヒェルは領主一族も多いし、中央へ出ていた貴族も一度は領地へ戻されるため、領地内であれば再婚も難しくはないらしい。自分で自分の進む道を作ったようで何よりである。

「ローゼマイン、礎を満たせたのであれば、境界線を引き直しなさい。アウブがギーベの境界を引き直すのと同じだ。線の引き方は私の地図を参考にするように。……あぁ、エグランティーヌ様、大変申し訳ございませんが、ローゼマインの採点をお願いします」

「採点、ですか？」

　フェルディナンドの依頼にエグランティーヌが目を丸くした。

「エグランティーヌ様は領主候補生コースの教師ではありませんか。ローゼマインは冬の行方不明で貴族院の講義を終えていないと聞いています。これから行う境界線の引き直しと、アーレンスバッハへ戻ってから行うメダルの破棄で領主候補生コースの採点を行ってください」

　ついでに、奉納舞は今日の儀式で採点してもらうように奉納舞の教師と話をつけてほしい、とエグランティーヌに頼んでいる。いくら何でも強引過ぎると思う。突然の無茶振りに驚いているエグランティーヌのためにも、わたしは断固として反対したい。

「強引すぎです、フェルディナンド様。抜き打ち試験なんてひどいと思います。少しくらいはエグランティーヌ様にも心の準備が必要ですよ」

　わたしの訴えをフェルディナンドは鼻で笑った後、ジロリと睨んできた。

「私が教えたことを覚えていれば問題なく合格できるはずだ。まさかあの忙しい中で教えたことを忘れたと言うのではあるまいな？」

「お、覚えていますよ！」

　多分、と心の中で付け加える。

「ならば、問題あるまい。大体、貴族院の再試験に時間を取られて困るのは誰だと思っている？」

　フェルディナンドに冷たく見下ろされながらわたしは少し考える。再試験に時間を取られた場合、困るのは誰だろうか。

「一番大変になるのはフェルディナンド様ですね。次点でわたくしとフェルディナンド様の側近でしょうか」

「その通りだ。故に、君の再試験に関する予定は私が決め、先生方との交渉も領主会議中に私が行う。君は全ての試験を一発で合格すればいいのだ。……さぁ、境界線の引き直しをしなさい」

　フェルディナンドに言われてわたしはシュタープを取り出す。

　ユルゲンシュミットの礎を教材に使って行われた境界線の変更の再試験において、数多の神々の祝福を受けた女神の化身は無事合格を得た。

[------------------------------------------------]

魔力枯渇計画

　礎を染めた上に、教材ではなく、実際のユルゲンシュミットで境界線の引き直しまで行ったのに魔力が残っている。図書館を出る前に、手当たり次第魔術具に魔力を供給してきたけれど、それでもまだ四分の一くらい残っている。どう考えても異常事態だ。ここまでして残ると、どうすれば魔力を使い切れるのかわからない。

「フェルディナンド様、合格は嬉しいですけれど、わたくしの魔力は枯渇しませんでした。どうしたらいいのでしょうか？」

　ジェルヴァージオの回収へエグランティーヌとアナスタージウス達を送り出した後、わたしは中央棟の奥にある扉から離宮へ移動し、フェルディナンドの騎獣に同乗させてもらってアーレンスバッハの採集場所へ移動中だ。騎獣用の魔石に登録されている魔力と今の神々の御力に差がありすぎて、レッサーくんは使えないのだ。騎獣を使えば少しずつでも魔力を使うことができるのに残念である。

「君の今日の活動量や体調を考慮すると、寝る前に回復薬を使いたいところだが、魔力を枯渇させねば使えそうもない。できるだけ早く魔力を使い切らねば君の体力が先に尽きる。次々と試していくしかあるまい。祝詞を唱えずに魔力供給をするだけならば問題ないのか、神事に加わること自体が危険なのか、検証が必要だ」

　祝詞さえ唱えなければ問題ないのであれば、解決はかなり楽になる。その検証を行うために、わたし達はアーレンスバッハの採集場所へやってきた。離宮にいた貴族達も素材採集のために同行させている。

「ひどい状態ですね」

　全く管理されていなくて放置されているせいか、貧相な素材しかなさそうなアーレンスバッハの採集場所に、わたしは目を丸くする。あまりにもエーレンフェストの採集地と違う。これでは学生達が講義で使う素材を採集するのも大変だろう。

「他の領地のほとんどは土地の癒しを行えるようになっていると思うのですけれど……」

「それは上位領地だけだろう。負け組の中小領地は癒し方を知っていても魔力が足りず、実行が難しいと思われる。アーレンスバッハの場合はディートリンデの王族や君への敵対心と怠慢の結果だ」

　フンと鼻を鳴らしてフェルディナンドは側近以外のアーレンスバッハの騎士や文官達に上空で待機するように命じると、採集場所へ降り立った。

　魔獣もほとんど出ないくらいに荒れた採集場所だ。ここを回復させるのは結構魔力を使うだろう。初めてエーレンフェストの採集場所を癒した時には回復薬を使ったことを思い出し、魔力の減り具合へ期待をかける。

「ローゼマイン、やるぞ」

「はい」

　グレーティアとクラリッサに銀色の布を外してもらい、わたしは地面に跪いて両手を付けた。採集場所に埋め込まれている魔法陣に魔力が流れ込み、魔法陣が緑に光りながら浮かび上がる。

「神々の御力に変化は？」

「特にありません。でも、このままでは魔法陣が浮かび上がるだけで土地が癒されませんね。祝詞は必要そうです」

「祝詞は私が唱える。そのまま魔力を流していなさい」

　フェルディナンドはそう言って、フリュートレーネに祈りを捧げ始めた。魔法陣が起動し、緑の光を放ちながらゆっくりと上へ、上へ上がっていく。魔力がどんどんと流れ込んで行くにつれて土地に魔力が満ち、草木が伸び始めて青い葉が茂り、蕾が顔を出して花が綻び始める。

　エーレンフェストでは見慣れた光景だが、これまで癒しを行ってこなかったアーレンスバッハの貴族達にとっては奇跡のような光景に見えるらしい。

「おおおぉぉぉ！　素晴らしい！　女神の化身の御力だ！」

「ほんの一瞬でこれほど採集場所が豊かになるなど信じられぬ」

　女神の化身の御力に盛り上がる貴族達の声を遠くに聞きながら、わたしは自分の中の神々の御力がじわりと膨れるのを感じていた。

「どうだ、ローゼマイン？」

「……少し反応があります。でも、光の女神の神具を使った時よりは反応が小さいですね。ここは荒れていて魔力が大量に必要だったので、癒しを行う前より増えているということはありません」

「そうか。ならば、荒れた土地の多いアーレンスバッハに君の魔力を注ぐことはできそうだな」

　フェルディナンドが少しだけ表情を緩めた。多分、他の人にはわからないくらいに少しだけ。わたしの魔力を枯渇させる手段が全くないわけではないとわかってホッとしたのだと思う。

「アーレンスバッハの土地を満たす時に祝詞を口にして祈念式を行うのではなく、シュタープで聖杯を出して魔力を垂れ流していくのはどうでしょう？」

「試してみる価値はあるが、先程の儀式で光の女神の神具を使った時はどうであった？」

　フェルディナンドの指摘で光の女神の神具を使った時を思い返す。エグランティーヌが誓って神具が光った瞬間、神々の御力が増えた。あまり良くはなさそうだ。

「その表情ではあまり期待しない方が良さそうだな」

「神殿にある神具に魔力を流していくのはどうでしょう？　昔のツェントが作った神具ならばそう簡単に壊れないと思います。ゲドゥルリーヒの聖杯に魔力を流しながらアーレンスバッハの上空を騎獣で駆けてダパダパ降らせていくとか……」

　わたしの思い付きを吟味するようにフェルディナンドが顎に手を当てて視線を落とす。

「ふむ。脳裏に思い浮かぶ絵面は良くないが、それができれば祈念式が楽に終わりそうだ。調合で魔力を使うのも有効かもしれぬ。ちょうど新しい素材が手に入ったところだからな」

「魔石や魔術具は金粉化の可能性が高いですけれどね」

　返却しようとしただけでジギスヴァルトの許可証が金粉になってしまったことを思い出し、わたしは少し肩を竦める。魔石はまだしも、魔術具に触るのは怖い。下手に触ると壊してしまう。

「魔石が金粉になるのは、君の図書館都市計画に使用するのだから全く困らぬ。金粉作りはこれからここで採集された素材で行うことになっている。エントヴィッケルンはできるだけ早く行う必要があるからな」

　できるだけ早くランツェナーヴェの者達に荒らされた街を整えたり、これからエグランティーヌ達が使うことになっている離宮と繋がるランツェナーヴェの館を取り壊したりしなければならないそうだ。

「エントヴィッケルンが最高神のお名前を使う神事でなかったら、今すぐに図書館都市を造りますよ、わたくしは。……使いたい時に自分のためには使えないのに、枯渇はさせなければ命の危機だなんて」

　わたしが唇を尖らせて文句を言うと、フェルディナンドがなだめるように軽くわたしの頭を叩く。

「文句を言ったところで何も変わらぬ。解決方法がないわけではないのだから、一つ一つ試してみるより他あるまい」

「……そうですね。今回はフェルディナンド様が一緒なので心強いです」

　わたしがへらりと笑って見せると、フェルディナンドは眉間に皺を刻んで視線を上に向けた。

「其方等、騒いでいないで直ちに採集を行え！」

　上空で神の奇跡だと騒いでいる貴族達に向かってフェルディナンドから叱責が飛ぶ。

「これから其方等が採集する素材は、ランツェナーヴェの者達に荒らされたアーレンスバッハでエントヴィッケルンを行うための金粉に利用する。自分達の屋敷になることを念頭におき、できるだけ属性値の高い物を採集するように」

　表情を引き締めて採集を始めた貴族達に向かって、儀式の後片付けを中央貴族に押し付けて同行していた神官長服のハルトムートが祭壇にいる時と同じような調子で口を開く。

「あまりにも荒れていた今回はローゼマイン様の御力をお借りしました。ですが、エントヴィッケルン用の素材採集が終われば、学生達や領主会議に出席する貴族達が自分達の魔力で満たすことになります。貴族院で神事の復活が見直され、貴族が神々の御加護を得るために他の領地はすでにお祈りを始めていることはご存知ですか？」

　アーレンスバッハは貴族院で行われた神事に参加したことがありませんが、とハルトムートが微笑めば、ダンケルフェルガーの青のマントをまとうクラリッサが「ダンケルフェルガーではもう神事が盛んに行われています」と何度も頷いた。

　……ダンケルフェルガーでしてるのって、神事っていうよりはディッターじゃない？

　前後の儀式の研究のためにディッターをしなければならない、とディッターの回数が以前より増え、それで御加護が増えたために大人達もディッターの回数が増えたことをハンネローレから聞いた気がする。いつのことだったか覚えていないけれど。

「アーレンスバッハでも早く貴族が神事を行うようにしなければ、ローゼマイン様がいらっしゃる領地だというのに最も御加護を得られないという結果になってしまいます。罪人となったディートリンデがこれまで拒否していたため、アーレンスバッハは神事やお祈りに関して他領に比べて出遅れていることを忘れないようにしてください」

「混沌の女神に魅入られた土地を清めるために女神の化身をアウブに戴くことになったというのに、領地の貴族が神事を厭うようではそれほど遠くない未来に女神も愛想が尽きるかもしれませんもの」

　アーレンスバッハの貴族達を洗脳していたハルトムートとクラリッサの言葉に貴族達が顔色を変えて採集を始めた。

「シュトラール、こちらの統率は頼む。エーレンフェストの側近達は一度寮へ戻るぞ。リーゼレータ達が準備を整えているはずだ」

「はっ！」

　エーレンフェストの寮へ戻ると、養父様達が駆け寄ってきた。神々の御力が増したことは観覧席にいた者達にもわかったのに、儀式が終わっても先に退場したわたし達が一向に戻ってこないことを心配してくれていたらしい。

「知らせが合った通り、話ができるように部屋の準備は整っている。フェルディナンドが儀式中にこそこそと動き回っていたようだが、ローゼマインは大丈夫なのか？」

「それについても説明する」

　話の中心はわたしのことだと匂わせて、フェルディナンドは案内を促した。養父様、養母様、フェルディナンド、わたし以外は部屋から出され、範囲指定の魔術具を作動させる。

「……込み入った事情は全て省くが、ローゼマインは再びメスティオノーラを降臨させた上に、他の神々からの御力も賜った。全てはユルゲンシュミットの礎を満たすためだ」

「満たせたのか？」

「あぁ。だが、まだローゼマインの体の中には神々の御力が残っている。人の身には過ぎた力で早急に一度魔力を枯渇させ、人の魔力で上書きする必要があるそうだ」

　さすがに勢いに任せた神々の失敗とは言わずに、フェルディナンドが言葉を濁す。そう簡単には気付かなそうなフェルディナンドの物言いの違いに目敏く気付いたのは養父様だった。

「……つまり、神々の命令で冬の到来を早めると言いたいのか？」

「しつこいぞ、ジルヴェスター。ローゼマインは特殊な身の上だから、冬の到来を早めなくても色は移るし、美しく染め上げることも難しくない。故に、そのようなことはせぬ。基本的に薬で行うし、以前と同じように記憶を見る魔術具を使うだけだ。本題はそれではない」

　フェルディナンドが嫌な顔をして養父様を睨んだ。刺々しい雰囲気になった二人を見ながら、わたしは首を傾げた。

「冬の到来を早めるというのはどういう意味ですか？　最近よく聞くのですが、わたくし、よくわからなくて……。あ、冬を呼ぶ魔法陣を使うのと違うことはわかっています」

　その瞬間、空気が凍った。養父様も養母様も笑顔のままで固まっている。思い切り爆弾を落とした後の空気である。やっちゃった、ということが肌でわかった。

「申し訳ありません。もしかして聞いてはいけないことでしたか？　でも、わたくしには関係がないことではありませんよね？　どなたに質問すれば良いのか教えてくださいませ」

「……リヒャルダ辺りに頼むのが一番かもしれぬが、今回の質問は後で其方が大変なことになるぞ」

　養父様がフェルディナンドをちらりと見れば、フェルディナンドが面倒くさそうに溜息を吐いた。

「ローゼマインにはわたくしから説明します。さすがに殿方では難しいでしょう。秋の訪れを待たずに冬の到来を早めるという言葉の意味を知るためには、秋に籠められた意味を知らなければなりません」

　わたしは神様表現で用いられる秋の意味について養母様に問われて、それに対して答えていく。

「実りと収穫ですよね？　シュツェーリアの神具から防御や守り、芸術関係の眷属が多いことから芸事そのものを指したり、時間や速さ、情報を示したりすることもあります。他には……別れでしょうか？」

　恋物語でやたらと多い表現を思い出して、わたしは述べていく。

「最近の恋物語で失恋や別れを意味することが多いユーゲライゼですけれど、わたくしが知っている聖典の知識ではユーゲライゼは失恋よりも巣立ちの時に出てくる方が多いのです。成人した男性の領主候補生が城から出る時、女性の領主候補生が婚姻によって領地を出る時に昔はユーゲライゼに御加護を祈っていました」

　そういう知識があるから恋物語で余計に混乱するんだけど、と思っているとフェルディナンドは「そこまで詳しく知っているのに何故繋がらぬ？」とこめかみを押さえた。

「今回はそちらの解釈でいいのです、ローゼマイン。秋には収穫の他に成熟や成人という意味があります。冬がどのような季節なのか、こちらは大神の行動を基に考えてくださいませ。聖典の通りの解釈で大丈夫です」

　養母様がニコリと微笑んでそう言った。

「えーと、聖典通りに解釈すると、つまり、成人を待たずに……うひゃあああぁぁぁ！」

　繋がった瞬間、わたしはとんでもない羞恥に襲われた。周囲が気まずくなるはずだ。同時に、わたしは自分の言葉を思い出す。「魔力を使った後にフェルディナンド様に染めてもらえばいいだけ」とエグランティーヌに向かって口にした。どう考えても明け透けすぎる誘い言葉ではないか。

　……いやあああぁぁぁ！　誰か、時間を戻して！　お願いだから！

　エグランティーヌが何とも複雑な顔をしていた意味を知って泣きたくなった。恥ずかしくて堪らない。この場で穴を掘って埋まれるものならば埋まりたい。椅子から滑り落ちるようにしてしゃがみこんで床をとりあえず叩いてみるけれど、厚みのあるカーペットに覆われた床は掘れそうもなかった。

「ようやく意味が繋がったかと思えば、何をしている？」

「最悪ですよ。だ、だって、養父様。秋を待たずに冬の到来って、魔力を染めるって、その……あの……」

　しゃがみこんだまま、養父様を見上げ、何と言っていいのかわからずに口をパクパクさせると、養父様と同じように見下ろしてきたフェルディナンドが「そのような行為はせぬ。だから、落ち着きなさい」と全てを悟ったような顔で言う。

　以前「貴方の色に染めてください」がかなり直接的なお誘いだって教えてもらったのに、どうして魔力を染め変えるという話が出た時に閨事と繋がらなかったのか。自分がフェルディナンドに染められた経験が薬と魔術具を使ったものだったからだ。

「全部フェルディナンド様のせいだと思います！」

「君の特殊な生い立ちのせいであろう。私のせいではない。ついでに、察しが悪いのは君のせいだ」

「ローゼマインの特殊な生い立ち、ですか？」

　フロレンツィアが目を瞬き、わたし達を見回す。フェルディナンドとジルヴェスターが視線を交わし合い、首を横に振った。

「詳しくは話せませんが、ローゼマインは普通の貴族とは体質が全く違います。そのため、ジルヴェスターの養女になるより以前から私の魔力の影響下にあったようです。今、私が染め直したところで、名捧げをしていた者達も以前の魔力に戻ったとしか思わないでしょう」

　魔力量ならばまだしも魔力の色は外から見てわかるような物ではない。主の魔力をうっすらとまとう名捧げをした者に感じ取れるくらいだ。

「グルトリスハイトをエグランティーヌ様に授与したことで、神々の御力が消えたように周知するので、他の者のことは気にしなくて良い」

「気にしなくて良いとおっしゃられても、それでは女神の御力をまとってから名捧げをしたエグランティーヌ様の誤解は解けないではありませんか！　養父様達も同じように誤解したのですよ？　お薬を使うだけなのに……その、魔力を染めると言っても、決して……ほ、星結びが必要になるようなことをするのではなくて……。うぅ、誤解なのに……」

　別に破廉恥なことなんてしないのに、と涙目で頭を抱えていると、フェルディナンドが至極冷静な顔で注意してくる。

「あまり感情を揺らすな、ローゼマイン。魔力だけではなく、神々の御力まで不安定になる」

「落ち着いていられませんよ。だって、わたくし……」

　自分がそんな話題の中心になることなんてこれまで全くなかったのだ。恋愛関係はからっきしで、婚約者から「婚約者としての其方といるのは苦痛」だと言われるような女である。そんな話が出るとは思わないではないか。恥ずかしさで死にそうだ。

「誤解が解けても恥ずかしいものは恥ずかしいであろうが、そのような女心をフェルディナンドが理解してくれるはずもない。そのくらいはローゼマインもいい加減に悟れ」

「もう悟っています」

　わたしが養父様を睨むと、フェルディナンドが嫌な顔をした。

「……ならば、そろそろみっともない体勢は止めなさい。今の君は魔力を枯渇させるまで回復薬を使うこともできないのだ。できるだけ体力を消耗させないように気を付けなければならぬ」

　席に着くように促されて、わたしはゆっくりと立ち上がって席に座り直す。

「本題だが、ローゼマインの魔力を枯渇させなければならぬ。しかし、これがなかなかの難問だ」

　神々の御力がなかなか減らない上に、魔力が回復すれば神々の御力が反発しあって死にかけることをフェルディナンドが伝えると養父様と養母様がそろって目を見開いた。

「アーレンスバッハでは早急にエントヴィッケルンを行う必要があるため、ローゼマインの状態を利用して金粉を作成する予定だ。ゲルラッハの戦いによってローゼマインが破壊したギーベの館の再建に必要な金粉も作成して返そうと思う。必要な金粉の分の素材は今日中にローゼマインの部屋まで運んでくれ」

　アーレンスバッハの採集場所で採れる素材だけでは大して魔力は減らないので、エーレンフェストにも協力するように、とフェルディナンドが言う。

「あぁ、エントヴィッケルンを行う時には移住するグーテンベルク達の住まいも作ることになる。グレッシェルで行ったエントヴィッケルンの時の設計図の写しを見せてほしい」

　プランタン商会やギルベルタ商会は自分達の店を設計していたはずだ、とフェルディナンドが言った。移転予定がなかった工房はアーレンスバッハの物を参考にするらしい。

「ついでに、グーテンベルクへ移住命令を出してくれないか？　領主会議の後、一部の者には移住し、ローゼマインの専属として動いてほしいと思っている。一部の者は中央へ移動する準備をしていたはずなので問題なかろう」

　決して平民達への無茶振りではないことをフェルディナンドが強調した。わたしが移った時に一緒に移動しなければ、新しい土地で専属として動くのは難しくなるので、それで問題はない。

「……移住命令を出すのは別に構わぬが、自分と共に移動させる下町の商人達に其方が直接会わなくて良いのか？」

　そう言いながら養父様がわたしを見た。ベンノ達グーテンベルクの顔がいくつも思い浮かぶ。懐かしいし、会える機会があるならば会いたいと思う。でも、今のわたしには下町の記憶がぽっかりとないのだ。わたしはフェルディナンドに視線を向ける。

「わたくし、女神の降臨によって一部の記憶を失っているのです。……その会合には髪飾り職人も同席しますか？」

「おそらく。だからこそ、今は止めておいた方が良かろう。顔を合わせた結果、記憶が繋がっても繋がらなくても君は間違いなく取り乱すと予測できる。神々の御力が暴れた場合は自分だけではなく、周囲にも危険だ。せめて、神々の御力を消し、側近を排して会える場を整えなければならないと思う」

　フェルディナンドの懸念がどうにも実感できなくて首を傾げる。記憶にない者との面会がどのようなものになるのか、わたしにはさっぱり予想できないせいだ。首を傾げるわたしを見たフェルディナンドが少し目を伏せた。

「ジルヴェスター、今夜はこの寮で金粉を作らせるが、それでも魔力が減らなければ明日にはアーレンスバッハへ戻る。これだけ魔力を減らすことができた今のうちに神々の御力を消し去ることができなければ、回復した魔力とそれに伴って増加する神々の御力に耐えられず、ローゼマインははるか高みに向かうことになるであろう。名を捧げた者全員を伴として……」

　新しいツェントがはるか高みに向かうことを示唆されてジルヴェスターがきつく目を閉じた。

「ユルゲンシュミットの命運を握っているも同然ではないか。おまけに記憶まで失っただと？……ローゼマインにはどこまで重荷が付きまとうのだ」

「大丈夫ですよ、養父様。よく意識しなければ記憶がないことが認識できないので、あまり不便はないのですよ」

　わたしが養父様を慰めようとしてそう言えば、フェルディナンドは緩く首を横に振った。

「不便がなくとも不安がないわけがなかろう。さっさと魔力を枯渇させるぞ。今のままでは記憶を取り戻すこともできぬ」

　フェルディナンドがそう言いながらわたしを抱き上げて部屋の出入り口を目指して歩き出す。

「できる限りの協力はする。ローゼマインは頼んだぞ、フェルディナンド」

　養父様がオルドナンツを飛ばして話し合いの終了を知らせれば、扉が開いて側近達が入ってこようとする。

「フェルディナンド様、自分の部屋に戻るだけですから歩けます。下ろしてくださいませ」

　秋の訪れを待たずに冬の到来を早めるとか、魔力で染めてほしいと言っていた意味を今更ながら理解したところなのに、こうして抱き上げるのは勘弁してほしい。

「君に歩かせたら魔力より先に体力が尽きるではないか。今夜中に魔力が減らなければ、君は回復薬を使えぬ状態でアーレンスバッハを満たす旅に出ることになることになるのだぞ。事の重大さを理解しているのか？　今はおとなしくしていなさい」

　……おとなしくするから離れてほしいって言ってるのに！　フェルディナンド様のバカバカ！　鈍感！

[------------------------------------------------]

金粉作りと帰還

「退室するので、其方等は一旦下がれ。邪魔だ」

　入ってこようとする養父様達の側近達を押し退けるようにしてフェルディナンドはわたしを抱きかかえたまま部屋を出た。部屋の外にはわたしやフェルディナンドの側近達もいて、抱きかかえられて出てきたわたしの姿に目を剥いた。

「フェルディナンド様！？　ローゼマイン様に何か異変があったのですか！？」

　一番に駆け寄ってきたのはハルトムートだが、わたしが想像していたような破廉恥を咎めたり、からかったりするような響きは全くなく、もっと切実で切羽詰まった感じの焦りを帯びた声に思えた。コルネリウス兄様も質問したそうな顔をしているけれど、それは決して今の状況を咎める顔ではない。

　……あれ？　もしかして、この状態を妙に意識しちゃってるの、わたしだけ？

「少しでもローゼマインの体力の消耗を抑えることを念頭に置き、一人で歩き回らせないように気を付けてほしい。場合によっては、今後回復薬が使えぬ可能性がある」

「薬が全く使えないのですか？　体力を大幅に回復させるお薬も、ですか？」

　ハルトムートの質問に側近達が食い入るような目でフェルディナンドを見た。

「あれは体力を回復させる効果が強いが、全く魔力が回復しないわけではないのだ。今はほんの少し魔力が回復しただけでも神々の御力は大きく膨れ上がって、ローゼマインにとっては体の負担になるようだ。私はできる限り使いたくないと思っている」

　フェルディナンドは腹立たしそうに「魔力が全く回復しない回復薬を研究する時間もない」と言いながら、アンゲリカにわたしを渡す。

「ローゼマイン様は大変なことになっているようですね」

　わかっているのかわかっていないのか微妙な口調でアンゲリカに慰められて、わたしは少し視線を逸らした。皆が考えている「大変」と、わたしが考えている「大変」に結構ズレがあるようだ。

　……エグランティーヌ様に破廉恥なことを口走っちゃってどうしよう！？　なんて考えている場合じゃないみたい。

　フェルディナンドだけでなく周囲の側近達は、わたしが誰に抱えられていても別に気にしていないようだ。あまりにも皆が普通の顔をしているので、恥ずかしいと思う自分が恥ずかしくなってきた。

　よくよく考えれば、わたしは麗乃時代からずっと色恋沙汰には縁遠かったのだ。今になっていきなり色恋沙汰が起こるわけがないし、起こりもしないことで動揺する方がおかしいだろう。

　……わたしなんて本と恋愛していたらいいし、中身が変わらなきゃ妖怪本スキーがまともな恋愛なんてできるわけないし、そもそもフェルディナンド様が恋愛なんてあり得ないし、変に意識するなんて自意識過剰にも程があるよ。うんうん。

　自分に言い聞かせて、わたしはゆっくり深呼吸する。エグランティーヌに対する失敗は痛かったが、わたしが気にするほど周囲はフェルディナンドとの接触を咎めていないようだ。

　……あれ？　でも、ほんの少し前までは距離感を大事にって言われてたのに、なんでだろう？　非常事態だから？　いや、でも、あの頃も非常事態だったよね？

　何だか不思議に思ってわたしが質問しようと顔を上げた時、フェルディナンドは側近達をぐるりと見回して口を開いた。

「本日の金粉作成で今夜中に魔力枯渇まで魔力を使うことができれば良いが、今までの消費率を考えると楽観視はできぬ。また、一晩寝れば魔力が多少とはいえ回復してしまう。どの程度ローゼマインの魔力が回復するのか調べる必要はあるが、全く回復しないということはなかろう。そのため、明日中にアーレンスバッハを魔力で満たす旅へ出発できるように準備は整えておきたい」

　急すぎる予定に反論する側近はおらず、むしろ、「そこまで時間がないのか」と焦りを含んだ顔になった。

「アーレンスバッハへの同行許可を得ている側近達はこれから寮内の荷物をまとめ、アーレンスバッハへ戻って祈念式の出発準備をするように。アーレンスバッハ領内は不作だったため、料理人と食材の手配には特に配慮が必要になる。いざという時には体力を大幅に回復させる薬を使えるように、ローゼマインが使う薬の類は私が準備する。ハルトムート、其方は神殿長の衣装のまま神殿へ赴き、神具を借りてくるように。貴族が祈念式を行うと言えば、文句は言われまい」

　せっかくなので全ての神具を神々の御力で満たしてしまえ、とフェルディナンドが言った。祈念式で聖杯の魔力は使ってしまうので、残っている青色神官達の魔力の受け皿は聖杯だけで良いらしい。

「リヒャルダ、後で騎士達が金粉にするための素材を運んでくるはずだ。エーレンフェスト側の側仕えか文官を玄関口に待機させておいてほしい。それと、アーレンスバッハ向けの雑務はこちらで引き受けているが、今日の儀式を行ったことでローゼマインに直接オルドナンツが飛ぶことも考えられる。他領のアウブや王族との面会依頼などは全て断ってほしい」

　神々の御力を使い切る以上に緊急の用件などないので、領主会議の場で話し合えば十分だそうだ。フェルディナンドの言葉に、リヒャルダは「かしこまりました」と了承する。

「ローゼマイン、私はこれからなるべく大きさを揃えた騎獣用の魔石を虹色魔石で準備するので、君の魔力で染めて全ての石をくっつけて大きくし、今の魔力で使える騎獣を作りなさい」

　貴重な虹色魔石をいくつもくっつけて騎獣を作ったところで、魔力を染め変えたら使えなくなる。フェルディナンドならば何かに調合に使えるのかもしれないが、金粉にもなっていない他人の魔力で染まった騎獣用魔石の使い道がすぐには思い浮かばない。

「……すぐに使えなくなるので、虹色魔石をたくさん使うのは勿体ないと思いますよ？」

「勿体ないかもしれぬが、何日も続くことが予想できる旅で君や旅慣れない側近に休める場所がないと困るではないか。ギーベの館に出入りすれば無駄に体力を消耗するので、立ち入る予定はないのだ。騎士ならばまだしも、側仕えは農村の冬の館で過ごしたり、野営をしたりしたことがないであろう。少しでも安全で快適に休める場所は確保しておくべきだ」

　わたしはポンと手を打った。確かにギーベの館を借りることにすると、長ったらしい挨拶から始まって、食事も共に摂らなければならないため、時間ばかりが無駄に過ぎていく。そもそもフェルディナンドから回復薬の使用を可能な限り避けるように言われたわたしには、見知らぬ土地の見知らぬ貴族との社交を連日行える体力などない。

　それに、騎士でもない普通の貴族女性ならば、野営の経験者はいないと思う。側近達のためにもレッサーバスは重宝するはずだ。

　……レッサーくんのすごさがやっとフェルディナンド様にもわかってもらえたよ！

「君は騎獣の魔石作りをした後、部屋に運び込まれる素材を次々と金粉化して少しでも魔力を消費しておきなさい。一晩寝ることでどの程度魔力が回復したか、明日の朝に尋ねるので魔力量を常に意識しておくように。それから、絶対に余計な体力を使うようなことや大きく感情を揺らすようなことはせず、おとなしく届けられる素材を金粉にしていなさい」

　わたしの命の危機はわたしに名を捧げた者全員にとっても危機である、とフェルディナンドは厳しい顔で何度も念を押した。ゴクリと息を呑む音が周囲から聞こえてくる。命の重みがずっしりと圧し掛かってくる。

「離宮の貴族達はこれから順次アーレンスバッハへ帰していく。其方等も準備が整い次第、離宮へ移動するように。リヒャルダ、ローゼマインを頼む」

「かしこまりました」

　指示を出すだけ出すと、フェルディナンドはユストクスとエックハルト兄様を連れて速足で去っていく。その様子を見送るでもなく、ハルトムートが踵を返して階段を上がり始めた。

「我々も準備を急ぎましょう」

　アーレンスバッハへ一足先に戻る側近達が多く、皆が忙しなさそうにバタバタと動き回る中、シャルロッテとその側近達がエーレンフェストの採集場で騎士達が採集してきた素材を運び込んできた。

「神々の御力の影響が体の負担になるため、少しでも早くその影響を消し去らなければならないとお母様から簡単な事情説明を受けました。こちらの素材があれば、少しは負担が減るでしょうか？　今はお姉様のためにカルステッドが採集場所へ騎士を率いていきましたよ」

　シャルロッテは自分の側近に素材の入った袋を運ばせながら、忙しなく立ち働く側近達の動きに目を留めた。来客を迎えるよりも出発準備を優先している側近が多い部屋の様子を見回し、わたしはリヒャルダに視線を向ける。素材を運び込んでくるのは文官や側仕えだと思っていたので、シャルロッテを迎える準備は全くしていなかったのだ。

「リヒャルダ……」

「このような有様ですから、シャルロッテ様の入室はご遠慮いただきたいと申し上げたのですけれど、どうしても姫様にお話をしたいと押し切られたのでございます」

　リヒャルダの言葉に、わたしはシャルロッテに視線を移す。シャルロッテは困ったように眉尻を下げた。

「リヒャルダに無理を言ったのですけれど、わたくしがお話する前からすでに出発の準備が始まっているのですね。少し安心いたしました。わたくし、お母様から説明を受けた時に、お姉様はできるだけ早く貴族院を離れた方が良いと思ったので、進言しようと思っていたのです」

　シャルロッテは安心したと言いながらも、気遣わしそうに藍色の瞳を揺らしてわたしを見つめる。わたしが気付いていないことにシャルロッテは気付いているように思えてならない。

「ねぇ、シャルロッテ。できるだけ早く、とはどういうことでしょう？」

「お姉様がお言葉や行動で示してくださったではありませんか。神事を行えば光の柱が立つ貴族院はユルゲンシュミットで神々に最も近い場所だと……。その分、神々の影響が大きい可能性が高く、神々の影響を抑えるならば早く離れた方がお姉様のお体には負担が少なくなるのではないでしょうか」

　シャルロッテの説明にわたしは目を瞬いた。言われてみればその通りだ。わかっていたけれど、わかっていなかった。わたしはできるだけ早く貴族院を離れた方が良い。

「叔父様が準備を整えてくださっているならば安心です。お姉様は他者の命をとても大事にするのに、御自分の命を軽んじるところがございますから」

「……そのようなことはありませんよ。わたくしは図書館都市を造って、本に囲まれて過ごすのですから」

　少し答えを躊躇ってしまったのは、「女神の図書館へ行けるんだったら死ぬのも怖くない」と考えたことがあるからだ。出入り禁止されてしまったので、今はメスティオノーラからお許しが出るまで死ねないと思っている。

「お姉様の図書館都市へわたくしも遊びに行きたいと思っています。ですから、必ず神々の御力を消してくださいませ。わたくしはこれで失礼しますね」

　側近達の邪魔になるから、とシャルロッテはすぐに退室していく。もう少し話をしたかったが、今はゆっくりともてなす余裕のもないのだ。仕方がない。

　持ち込まれた袋の中に手を突っ込んで、わたしは中に詰まっている素材を次々と金粉にし始めた。ぐりぐり掻き回して、固形物がなくなったら次の袋に手を突っ込む感じだ。神々の御力がなくても金粉にするのは苦労しなかったくらいなので、神々の御力がある今はいくら金粉を作っても魔力を使っている気がしない。金粉作りはあまり効果がないと思う。

　……エーレンフェストと自分の図書館都市のためと思って頑張るけど、魔力は減らなそう。

　エーレンフェストの素材を金粉にしているうちにアーレンスバッハからも素材が届く。それも金粉にしていく。

　夕食の時にはフェルディナンドから革の袋にいっぱいの虹色魔石が届けられた。わたしは夕食後それに魔力を注いで染めると、「まるまれ。くっつけ」と念じながら騎獣用の魔石を作成していった。神々の御力のせいだろう。いつもの見慣れた淡い黄色のような色合いではなく、虹色のレッサーくんができあがった。

　……おおぅ、あまり望んでいない方向にレッサーくんが進化したよ。虹色って微妙過ぎる。

　でも、大量の虹色魔石を扱ったことで少し魔力が減った気がする。ちょっと嬉しくなって、わたしは就寝時間までせっせと金粉作りをしていた。

　次の日、朝食を終えると、わたしは神殿長の儀式服に着替えさせられて多目的ホールへ運び込まれた。そこでギリギリまで金粉作りをしながらフェルディナンドがやって来るのを待つ。

「ローゼマイン、一晩でどの程度の魔力が回復した？」

「……そうですね。虹色魔石で騎獣を作った分と金粉作成に使った分は完全に回復していますね」

　騎獣作成で魔力枯渇まで一歩進んだのに、寝て起きたら二歩下がっていたくらいの気分だ。わたしが唇を尖らせると、できあがっている金粉の量を見ていたフェルディナンドがこめかみを押さえた。

「一晩寝るだけでそこまで回復するのか。神々の御力による苦痛や影響などは？」

「魔力が回復した分だけ大変になりますけれど、魔力自体が四分の一くらいですから今はまだ大丈夫です」

　立っていられないとか、呻く以外に何もできないというような苦痛はない。精々ちょっと発熱して頭がぼうっとするとか、体が少し重いような感じがするだけだ。わたしの発言にフェルディナンドは表情を険しくした。

「回復薬を飲まなくても、それだけの魔力が回復するのか。……本当に時間はなさそうだな」

　そう言いながらフェルディナンドがわたしの護衛騎士に視線を向ける。この寮にいる護衛騎士はダームエルとユーディットだけだ。二人以外はすでにアーレンスバッハで準備している。

「ローゼマインは我々が連れていく。其方等は領主会議後にローゼマインの関係者が速やかにエーレンフェストから新しい領地へ移動できるように尽力せよ」

「はっ！」

　フェルディナンドは当たり前の顔でわたしを抱き上げて歩き出す。寮を出たところにはアーレンスバッハの騎士達だけではなく、他領の貴族達もいた。わたしの姿を見て、貴族達が道を塞ぐようにしてザッと跪く。

「女神の化身よ。どうかアーレンスバッハだけではなく、我等の領地にも英知と祝福をお恵みください」

　見せかけの祝福さえ躊躇ってしまう状況で、一体どのように返事をすれば良いのかわからなくて、わたしはフェルディナンドの服をつかんだ。フェルディナンドは厳しい表情で首を横に振った。

「今回の騒動の原因であるアーレンスバッハより先に政変の負け組を救済してほしいという訴えだ。無視して構わぬ。政変のいざこざは王族が何とかすることだからな。それより、急がねばならぬ。下がれ」

　フェルディナンドは他領の貴族達にそう言いながらアーレンスバッハの騎士達に目配せする。騎士達が他領の貴族達を押し退けて道を作り始めた。

「道を塞ぐのではない。ローゼマイン様が通れぬ」

　中央棟の転移扉が並ぶ廊下をフェルディナンドが速足で歩いていく。王族の離宮に繋がる扉より更に奥、今はフェアベルッケンの印が解かれている最奥の扉を騎士が開き、わたしは離宮へ移動した。

　離宮に到着すると、窓に格子の付いた建物から隣の建物へ移動する。格子の付いた建物はアダルジーザの姫君や洗礼式前の子供がいたと思われる建物で、もう片方の綺麗に整えられている建物は傍系王族として登録された者達が住んでいた建物だそうだ。

　ランツェナーヴェの館と繋がる転移陣があるのは傍系王族の建物なので、フェルディナンドは足を止めようともせずに移動する。ガランとして人の気配がない離宮の中を騎士達がずんずん進んでいく。

「先に我々が行く」

　転移陣に乗れるのは三人までだ。わたし、フェルディナンド、エックハルト兄様の三人で転移すると、その先ではわたしの側近達が待ち構えていた。フェルディナンドはわたしをアンゲリカに押し付けるようにして渡すと、すぐに身を翻して離宮へ戻っていく。

「フェルディナンド様が最終確認をして完全に離宮とこの館を閉ざすのだそうです。何かの間違いで離宮からこちらへ侵入されると困りますから」

　レオノーレがそう教えてくれた。わたしは「これから新しいツェントが使うのだから、アーレンスバッハの者達が出入りできないようにしておかなければならない」と聞いていたが、他領の者の侵入を防ぐためという名目で閉ざすことになっているらしい。

「出発準備は整っています、ローゼマイン様。先に城へ戻るように命じられているので、騎獣で向かいましょう。少しでも魔力を消費した方が良いならば、ローゼマイン様も騎獣を使われますか？」

　新しく作ったのでしょう？　とハルトムートに問われて、わたしはコクリと頷いた。アンゲリカに下ろしてもらい、虹色レッサーくんをお披露目する。

「造形は変わらないのですけれど、色が虹色になって、ちょっと可愛らしさがなくなってしまったのです」

　しょんぼりへにょんという気分で、わたしが一人乗りサイズにした虹色レッサーに乗り込むと、「そんなことはありませんよ」と皆が慰めてくれる。

　……うぅ……。皆、優しい。

「可愛らしくはありませんが、非常に神々しいです。女神の化身に相応しい乗り物だと思います」

「えぇ。このような全属性に輝く騎獣は初めて見ました！　素晴らしいです」

　慰めてくれるなんて優しいと思っていたが、どうやら本気で皆はそう思っているようだ。わたしとしては前のレッサーくんの方が可愛いと思うのだが、グリュンのようだとドン引きしていた皆が今は全属性の輝きに歓喜している。

　……ごめん。こっちの感覚はやっぱり理解できないみたい。

　わたしは女神の化身らしい色合いだと称賛されながら騎獣で城へ戻った。虹色レッサーくんを微妙だと思うのはわたしだけのようで、側近達だけではなく城の者達も全属性の輝きに目を見張っている。

「とても美しい騎獣だと思います、ローゼマイン様」

「新しいアウブの騎獣からは全ての神々からの御力を感じます。なんと尊い……」

　……形は一緒なのに！　美しいって！

「ローゼマイン様、騎獣は片付けて、こちらへお座りくださいませ。先に神具へ魔力を籠めてください。それから、こちらの聖杯を使うことができるのかどうか試しておくように、と言われています」

　どうにも納得できないまま、わたしはハルトムートが神殿から持ち出してきた神具に魔力をどんどん込めていく。何人もの青色神官達が長時間かけて魔力を満たす神具も、結構すぐに魔力が満ちた。少し減ったが、それでも枯渇には程遠い。

「神具はこれほど簡単に魔力が満ちる物ではないでしょう？」

「なんと豊富な魔力でしょう」

　その後、聖杯をつかんで傾けていると、虹色の液体が流れてきた。水の女神に祈る祝詞を唱えなければ自分の魔力の色がそのまま流れてくるようだ。祈念式では緑の液体が流れてくるのを見ていたので、妙な気分になる。

「ローゼマイン様の魔力を直接流す分には問題ないようですね」

「祈念式の時はフリュートレーネの貴色でしょう？　これで土地が満たせるかしら？」

「試してみましょう」

　ハルトムートが聖杯を手に取って、無造作に城の庭へ撒き散らした。わたしは勝手に動かないように言われているので椅子に座ったままだが、貴族達は庭の様子を見下ろして感嘆の声を上げる。

「見てくださいませ。花が開きましたよ」

「少し緑が濃くなっているのでは？」

　聖杯から零れた虹色の液体に周囲の貴族達が「さすが女神の化身だ」と驚きの声を上げる。そんな称賛が少し耳障りに思えてきた。わたしは早くこの御力を消したいのだ。神々の御力を詰め込まれただけで、わたし自身は別にすごくも素晴らしくもない。神々の御力が消えたら元に戻ることを、一体どれだけの人が理解しているのだろうか。

　……神々の御力が消えても、この人達はわたしをこの領地のアウブとして認めてくれるのかな？

　そんな不安の方がじわりと胸に広がってきた。何だか神々の御力を手放すのが少し怖くなってくる。このまま神々の御力を抱えたままいる方が良いのではないかとさえ感じた。

「ローゼマイン様がこの御力でアーレンスバッハの全てを浄化し、満たしてくださるのですね」

　感極まって喜びの表情を見せている貴族達を見回して、ハルトムートがフッと冷たく笑った。

「貴方達は何か勘違いしているのではありませんか？　ローゼマイン様は貴方達のために罪に塗れたアーレンスバッハを清め、満たすのではありません。ローゼマイン様のための図書館都市を造るために相応しくないので整えるだけです」

「今のままでは、とてもローゼマイン様のお住まいには相応しくありませんもの。貴方達はアーレンスバッハの貴族だと主張して罪人になるか、ローゼマイン様を崇め臣民となるか、どちらかの道しか残されていないことを自覚するべきでしょう。少し教育が行き届いていないかもしれませんね」

　クラリッサが当然の顔でハルトムートの主張に大きく頷いたけれど、そんな狂信者っぽい人ばかりいる領地も正直嫌だ。領民は本好きであってほしいけれど、もっと普通でいい。

「ハルトムート、クラリッサ……」

「ローゼマイン様、実は新しいツェントから文書が届いているのです。領主会議の場で発表するために、新しい領地の名前、色、紋章に希望があれば伝えてほしい、と。フェルディナンド様は祈念式の後で良いとおっしゃいましたが、これから図書館都市の住民になるのだと皆に自覚を持たせるためにも、早く新領地の名を決めませんか？」

　図書館都市に相応しい希望の名前がございますか？　と問われて、わたしは少し考える。

　新しい領地の名前。

　本がいっぱいの図書館都市に相応しい名前。

　それを考えるだけで、何だかわくわくしてきた。アーレンスバッハの貴族達が何を言っても、わたしはここで自分のための図書館都市を造るのだという気分がもこもこと芽吹いてくる。芽吹きの女神　ブルーアンファに祈りを捧げかけて、思い止まった。

　……祈っちゃダメだ。我慢、我慢。

　でも、名前を考えたり、紋章を考えたりするだけで図書館都市に一歩近付いたような気分になる。頭の中には貴族院で提出した都市計画が展開中だ。

　……薬草園を併設する図書館があった古代都市アレキサンドリアと、印刷が発達した後で書店数が世界一位になるくらいに本が集まる交易都市になったベネツィアのどっちがいいかな？　それとも、世界の図書館の名前を取る？　ああぁぁ、悩む。

　わたしが楽しく悩んでいると、フェルディナンド達が騎獣で戻ってきた。

「待たせた。すぐに出発するぞ」

「フェルディナンド様はアレキサンドリアとベネツィアとどちらが新しい領地の名前に相応しいと思いますか？」

「この緊急時にそれは今すぐ必要なことか？」

[------------------------------------------------]

魔力散布祈念式　前編

　うきうきとした気分で尋ねたらフェルディナンドにものすごく冷たい目で見られた。何でも一応相談した方が良いかと思ったのだが、確かに今すぐ必要なことではない。

「緊急時こそ楽しいことを考えれば前向きな気分になれると思ったのですけれど、フェルディナンド様をわずらわせるような話題ではありませんでしたね。神様にでも尋ねて、わたくしの独断で決めましょう」

　……ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な。か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り。

　右がアレキサンドリア、左がベネツィアと脳内で想定して指を動かしていると、フェルディナンドにガシッと手をつかまれた。

「待ちなさい。今は神々に祈るのではない。君は一体何を考えているのだ？　前向きになるのは悪くないが、君の名付けには注意が必要だ。耳慣れない響きがある。その名前を選択肢に挙げた由来や思い入れを聞いた上で判断すべきではないか？」

　フェルディナンドの言葉にわたしの側近達が何度か頷いた。

「そうですね。領地の名前はとても大事ですから、皆の意見を尋ねてじっくりと吟味した方がよろしいでしょう」

「領地の名前はローゼマイン様だけではなく、代々アウブが使うことになりますから」

　図書館の魔術具に「ケンサク」と「オパック」の名前候補を挙げたら却下されて、いつの間にか「アドレット」になっていた時と同じような雰囲気がしている。

　……ん？　もしかして、またそれとなく却下されちゃう？

　図書館の魔術具の名前ならば、また作れば自分の付けたい名前を付けられるので構わないが、図書館都市の名前を付けられるのは一度だけだ。この命名権を譲る気はない。

「アレキサンドリアというのは……」

「緊急時だと言ったであろう。夜には話をする時間が取れるので、夜にしなさい。君の図書館都市計画についても話をしたいと思っていたところだ。設計図がなければエントヴィッケルンもできぬからな。新しい領地の名前を決めるのはその時でよかろう。それよりも、なるべく荒地から癒していきたいので転移陣を描きなさい」

　フェルディナンドにパタパタと手を振って流されてしまったが、夜に話ができるならば構わない。わたしは「グルトリスハイト」と唱えてメスティオノーラの書を出し、コピペで転移陣を出す。

　おぉ、と感嘆の声が上がる中、すぐ近くまで近寄ってきたフェルディナンドがぼそりと尋ねた。

「神具を使って大丈夫なのか？」

「……ちょっと迂闊でしたが、転移させるために魔力を使えば多分大丈夫だと思います」

「この馬鹿者」

　転移陣を準備して魔力を注ぎ込むのはわたしだが、転移陣を作動させるのはアーレンスバッハの礎にアウブ認定されているフェルディナンドだ。フェルディナンドはやや大きめの魔石を手に、シュタープを出して「ネンリュッセル　ビンデバルト」と唱えた。

　わたしとフェルディナンドの側近達に加えて専属料理人や食材なども移動させるので、予想していた以上に魔力が減った。そうはいっても、残っている魔力量から考えると微々たる量だけれど。

「人の気配がなくてガランとしていますね」

　以前にここへやって来た時は「んまぁ！」の大合唱や宴会とディッターで盛り上がるダンケルフェルガーの騎士達の姿があったが、今は荒れて緑が少ない土地しか見えない。

「完全に封鎖して、下働きの者達も近隣の町へ移動させたからな。君が新しいギーベを任命するまではこのままだ」

　領主会議で正式にわたしがアウブになるまで新しいギーベを任命することができないため、ビンデバルトの館は閉ざされたままだ。正確には、任命できなくはないけれど、新しいツェントを蔑ろにしているように見えるため、しない方が無難だそうだ。

「早く任命しなければ、この土地で暮らす平民も大変でしょう」

　祈念式や収穫祭を行い、徴税する貴族がいなければ平民達は税を納めることができない。まとめてくれる貴族がいなくても、税金を払っていなかったら罰を受けるのは平民になるのだ。

「できるだけ早く任命できるよう領主会議までに何人か候補は見繕っておくので、君の騎獣を出して側仕えや料理人が動けるようにしなさい」

「はい」

　わたしは虹色レッサーくんを出し、キャンピングカーのような内装をイメージしながらどんどんと大きくしていく。わたしだけが寝られる場所ではなく、皆が寝られるようにするのだ。

「どうですか？　これで皆が安全に寝られます」

　二階建てバスのような大きさになったレッサーくんを見せると、フェルディナンドはこめかみをトントンと叩きながら更に要求を重ねてくる。男女で階を分けられるようにしなさいとか、下働きの者が休む場所は別に作れとか、狭すぎるとか、天井が低すぎるとか、キャンピングカーに求められる以上の広さが求められ、最終的に二階建ての家のような代物になってしまった。

「フェルディナンド様。もうレッサーくんが『車』に見えないのですけれど……」

　騎獣とは一体何なのか、わたしがフェルディナンドに問いたくなったところでフェルディナンドは「相変わらず君の騎獣は非常識の塊だが、これでよかろう」と満足そうに何度か頷いた。

　……フェルディナンド様にだけは非常識だと言われたくないですよっ！　ふんぬぅ！

「ここの井戸を使って構わないので、食事や寝床の準備をするように。ローゼマインと私は護衛騎士を連れて土地を癒してくる」

　騎獣が消えないようにするための魔石を置いて、側仕えや料理人達を残し、わたしは聖杯を抱えてフェルディナンドの騎獣に同乗させてもらう。ビンデバルトの夏の館を中心に、午前中は北東を癒し、午後は南へ向かうのだそうだ。

「では、早速農村へ行きましょう」

　空へ駆け上がった白いライオンの上でわたしがフェルディナンドにそう言うと、フェルディナンドは首を横に振りながら農村の上空を通り過ぎていく。

「いや。先に人里から離れた場所へ魔力を注ぐ予定だ」

「どうしてですか？　祈念式なのですから農村へ行けば良いのではありませんか？」

　収穫量を増やすためには農村へ向かうのが一番だ。これだけ魔力が薄くなっている土地なのだから、農村を優先しなければならないと思う。

「駄目だ。これだけ領地内の魔力が枯れた状態で農村だけに魔力を注ぐと、魔獣が農村へ押し寄せる確率が高い。先に魔獣が多く生息する辺りに魔力を流した上で農村に魔力を配らなければ農民が襲われる」

　領地の魔力が乏しくて魔力に飢えているのは魔獣も同じで、魔獣が魔力豊富になった農村を襲うことがないように山や森を癒しておく必要があるのだそうだ。

「では、山や森まで早く移動しなければなりませんね。聖杯から魔力が零れ始めました」

　わたしが抱えている聖杯から虹色の液体が溢れ始めたのを見て、フェルディナンドの騎獣がグッとスピードを上げた。

　聖杯から流れ出す虹色の液体が降り注ぐと、土地の色が黒みを帯びたり、突然緑の部分が増えたりして、景色が本来の色を取り戻したように鮮やかになっていくのが目に見えてわかる。

　わたしの本来の魔力ではお祈りをしなければこんなふうに土地自体を癒すことはできない。せいぜい魔力目当ての魔獣や魔木が巨大化するくらいだ。

　……神々の御力って本当にすごいな。

　しかし、わたしが感嘆しながら下を見下ろしていられたのはそれほど長い時間のことではなかった。すぐに腕がプルプルしてきた。

「フェルディナンド様、大変です。聖杯を抱えている腕が疲れてきたのですけれど……」

「四の鐘までもう少し間我慢しなさい」

「できる限り我慢はしますけれど、聖杯を落としそうです」

　神具の聖杯は結構大きい。80センチほどの高さのワイングラスのような形だ。自分の魔力で染めると、重さをほとんど感じないので重くはないけれど、これをずっと抱えているのは大変である。

　フェルディナンドに聖杯を抱えるのも手伝ってもらって四の鐘が鳴るまで頑張ったけれど、正直なところ、「もう無理！」と声を大にして言いたい。魔力はちょっとずつ減っているし、土地は癒されているけれど、散布方法は考え直す必要がある。

　昼食のためにレッサーバスのところへ戻ると、先に戻ったハルトムートが留守番をしていた側仕え達に滔々と語っている姿が見えた。

「女神降臨と言われても納得できるほど非常に神秘的で美しい光景でした。神々の御力を得て光り輝く女神の化身が、そのたおやかな手の内にある聖杯から全属性の輝きを注げば、ゲドゥルリーヒは癒されて潤い、ブルーアンファの訪れと共に若葉が次々と芽生え、アーンヴァックスの導きにより葉は青さを増して……」

「ハルトムート、それは緊急時の今伺わなければならないことでしょうか？　今でなくてもよろしいのでしたら、ローゼマイン様がお休みなった後に聞かせてくださいませ」

「主の活躍ですから非常に気になるお話ですけれど、わたくし、ローゼマイン様の給仕を優先しなければなりませんから失礼いたしますね」

　リーゼレータやグレーティアは慣れた調子でハルトムートの賛美を流しているけれど、フェルディナンドの側仕えとして同行しているゼルギウスは目を白黒させながら頑張って相槌を打っている。

「フェルディナンド様、ゼルギウスを助けてあげなくてもいいのですか？」

「ユストクスが向かった。問題ない」

　ゼルギウスのところへ向かったユストクスがゼルギウスの手からフェルディナンドに給仕する予定だったお皿などを取ると、こちらへ歩いてくる。

「……あれは助けたと言わずに、生贄にしたというのですよ」

「側仕えにとって最優先すべきは主の世話だ。問題ない」

　……頑張って、ゼルギウス。

　心の中で応援を送って、わたしはリーゼレータが並べてくれるお皿へ視線を向ける。ふわりと温かそうな湯気が出ているお皿を見ていると、リーゼレータが少し体を傾けてわたしの顔を覗き込んできた。

「ローゼマイン様、何だかお疲れの顔になっていらっしゃいませんか？」

「聖杯を抱えているのも結構大変なのです。午後からは紐か何かでお腹の辺りに括りつけておいて、わたくしは手を添えておくだけにした方が良いかもしれません」

「紐でお腹に……ですか？」

　少し想像するようにリーゼレータが視線を上に向けた後、微妙な表情になってフェルディナンドを見た。わたしは何やら考え込んでいるフェルディナンドに訴える。

「たとえ女神の化身らしくないと言われても、自分で優雅に抱えているなんて無理なのですよ」

「それは午前中に理解している。だが、魔力の減り具合はどうだ？　腹に括りつけるような美しくない行動をする価値があるのか？」

　図書館都市の名付けが後回しにされるような非常時に美しさなんてどうでもいいと思うのはわたしだけだろうか。

「魔力の減り方はイイ感じですよ。この調子で一日魔力を撒いていたら、一晩寝て回復する分を考えても……五日くらいで枯渇すると思います」

「午前中で疲れを感じている君の体力が全く考慮に入っていないようだが？」

「わたくしの体力を考慮するのはフェルディナンド様の役目ではありませんか」

　そんなに苛立たしそうに睨まれても困る。このやり方が最も効率的だと主治医であるフェルディナンドが判断したから、わたしはそれに従っただけなのだ。

「……つまり、もっと効率の良い方法が必要だということか」

　フェルディナンドは考え込みながら昼食を摂っていたが、結局、午後からはお腹に聖杯を括りつけて同じように魔力を撒き散らすことになった。

「疲れました……」

「見ればわかる。カンナヴィッツではしゃいで無駄に体力を消耗した君が悪い」

　ビンデバルト全域と南にあるカンナヴィッツを満たしたわたしは、夕食を摂る頃にはかなりぐったりだった。

「ビンデバルトにはなかった海がカンナヴィッツは広がっていたのですもの」

「海くらいはアーレンスバッハに来てから何度も見たではないか」

「お城から景色としての海は何度か見ましたけれど、神々の御力によってカンナヴィッツの暗く濁った色合いの海が青く透き通っていき、最終的には魚がキラキラと光りながら跳ねるようになる光景は全く別ではありませんか」

　漁に出ていた漁師達がどんどんと変わっていく海に歓声を上げながら船から手を振ってくれた。わたしはそんな彼等に手を振り返したり、サービスでちょっと多めに魔力を注いだりしていたので、非常に疲れた。そんなことで余計な体力を使ったと言われれば反論の余地はないが、お魚パラダイスができあがる瞬間に少し興奮するくらいは仕方がないと思う。

　虹色レッサーくんのところへたどり着いて、夕食を摂る。同行した側近達がフーゴとエラにお魚を渡しているのが見える。お土産は必須なので、漁師達から買ってきたのだ。食材の保存に使われている時を止める魔術具の中に入れて、道中でゆっくりと食べたいものである。

「ローゼマイン様はこちらへどうぞ。フェルディナンド様はこちらへ」

　先に夕食を摂るのは領主一族であるわたしとフェルディナンドだけで、側近達は下げ渡しを摂ることになる。わたしはできる限り早く食べて、側近達が食事できるように頑張った。

　食後はお茶を飲みながら側近達が食事を終えるのをのんびりと待つのである。

　護衛騎士には先に食事を終えたエックハルト兄様とラウレンツが付き、側仕えはお茶を淹れると食事をするために下がっていった。

　わたしはレッサーバスの中のソファに座ってお茶を飲む。隣に座っているフェルディナンドがお茶を飲むのを待って、話しかけた。

「さぁ、フェルディナンド様。図書館都市の計画についてお話をしましょう」

「……君は先程疲れたと言っていなかったか？　今日はもう興奮しそうな話題は避けた方がよかろう」

「エラが急いで作って加えてくれた魚の塩焼きがあったので、元気が回復したのです。それに、夜になったらお話をするとおっしゃったではありませんか。わたくし、楽しみにしていたのですよ」

　フェルディナンドはわたしの額や手首に触れて診察をした後、仕方がなさそうに座り直して盗聴防止の魔術具を出した。

「候補はアレキサンドリアとベネツィアだったか？　君の命名にしては比較的まともな響きだが、由来は？　夢の世界が関係あるのであろう？」

「まともな響きとはずいぶんと失敬な物言いではありませんか」

「自分の名前でさえ碌な候補を挙げられなかった君が何を言うのだ？」

　フンと笑われて、わたしはつーんと顔を逸らした。貴族となり、マインから改名する時に強くなって新登場というイメージで名前の候補を挙げて「残念すぎるにも程がある」とフェルディナンドに言われたことを思い出す。でも、その前後や細かい部分があまり思い出せない。

「ローゼマイン？」

「あ、由来でしたね。アレキサンドリアは巨大図書館に薬草園を併設していた古代都市の名前です。世界中から本を集める図書館都市でした。ベネツィアはグーテンベルクによる印刷が始まった後、世界一本屋が多かった交易都市の名前です。わたくし、ベネツィアのように本がたくさんあって、交易によって本がたくさん集まる街にしたいのです」

　わたしの説明を聞いていたフェルディナンドが少し考え込んだ後、言いにくそうに口を開いた。

「ベネツィアは止めた方がよかろう。ランツェナーヴェの言葉に響きが似ている。神々の世界から取ったことにしても、あまり良くない勘繰りをされそうだ」

「ランツェナーヴェを連想させる響きが良くないことはわかりました。では、アレキサンドリアならば構いませんか？」

「アレキサンドリア、か。エーレンフェストとの繋がりがわかるような名が良いと思うのだが……」

　エーレンフェストの領主一族が礎を得たとわかるような名を付けた方が良いとフェルディナンドに言われて、一瞬だけ「エーレンドリア」が思い浮かんだ。何だか食べ物の名前っぽく感じて急いで打ち消す。

　……組み合わせたらダメだ！

「アレキサンドリアがいいと思います。グーテンベルク達の印刷による本作りとフェルディナンド様の研究所とわたくしの図書館を内包する図書館都市にはぴったりだと思うのです。アレキサンドリアの薬草園には大量の標本とか、研究資料がありましたし、図書館も大きくて旅人が……」

　わたしが必死に言い募っていると、フェルディナンドは少し呆れた顔になった。

「私に意見を尋ねている割に、全く譲る気がないであろう？　まぁ、君が手に入れた領地だ。よほど不都合のある名前でなければ構わぬ」

「ありがとう存じます。では、このままアレキサンドリアの計画を立てましょう」

　わたしが喜んでいると、フェルディナンドが少しばかり複雑な顔になった。

「それにしても、今の君はずいぶんとあちらの世界への執着が色濃く思えるが……」

「うーん、多分記憶が繋がっていないせいでしょうね。商人に片足を突っ込んでいた時や神殿で過ごしていた時のことがちらほらと飛び飛びに思い浮かぶだけで平民時代のことがほとんど思い出せません。昔のことを思い出そうとしたら、読書が何よりも大事だった麗乃時代に記憶が飛んでしまうので、どうしてもあちらの印象が濃くなるみたいです」

　今のわたしにはマインの頃の記憶がかなり足りない。ローゼマイン時代はほとんど違和感を覚えないので、フェルディナンドの言葉を信じるならば、わたしはマイン時代に読書よりも大事なものをたくさん得ていたことになる。髪飾り職人や染色職人の記憶が消えているだろうとフェルディナンドは言っていたけれど、彼女達はわたしにとってどういう存在だったのだろうか。

「……日常生活に不都合はないのですけれどね」

「いや、根幹となる存在を取り払われたせいであろう。私が知っている君との差異を感じることが何度もあった。不都合は起こり得る」

　どういうところが違うのですか？　とは何となく質問できなかった。フェルディナンドの口からどちらかの自分を否定されるような言葉は聞きたくない。わたしはニコリと微笑んで話題を変える。

「記憶を取り戻すにも神々の御力を消さなければならないのですよね？　だったら、今考えてもどうにもなりません。それより、領地の色はどうしましょう？　昔は国境門の貴色に合わせていたのですよね？　でしたら、アレキサンドリアは黒に近い色合いが良いと思われるのですけれど」

　完全な黒はまだ王族の印象が強いから、周囲の貴族達の反応を考えると黒は避けた方がいいかもしれない。わたしがそう言うと、フェルディナンドはわたしの様子をじっと観察しながら口を動かした。

「こちらの色を昔に合わせて国境門に合わせるならば、中央も貴族院への移動に伴い、白のマントに変えるように進言した方がよかろう。ツェントは本来白をまとっていたからな」

「本来の由来を公表すれば、わたくし達も白をまとうことになりますよ」

　メスティオノーラの書を賜ったツェント候補がメスティオノーラと間違われてエーヴィリーベに襲われないように白をまとっていた。昔のツェントやアウブの色が白だったのだ。それが神殿長服の始まりである。

「完全に本来の由来に合わせれば、白をまとえるのは君だけだ。エグランティーヌ様が得たのはメスティオノーラの書ではないし、私は所持していないことになっている」

「中央を白にすれば十分ですね」

　ユルゲンシュミットの中でわたしだけ白だなんて、仲間外れっぽくて嫌だ。わたしは皆に埋没して読書をして過ごしたいのだ。

「アレキサンドリアの色は君の髪の色で良いのではないか？　闇の神からメスティオノーラが賜った髪の色だ。女神の化身が治める新しい領地の色に相応しいであろう。君の髪の色には映えぬが……」

　残念そうに言いながらフェルディナンドが手を伸ばしてわたしの髪に触れる。当たり前のように伸ばされた指に何となく、あれ？　と思った。

　……フェルディナンド様って、こんなふうに髪を触る人だったっけ？

「どうした、ローゼマイン？」

「いえ、何でもありません。領地の色は領内の貴族全員が身に付ける色ですから、自分の髪の色合いに合う人も合わない人もいるでしょう？　わたくしの髪に合うか合わないかはこの際どうでもいいと思います」

　正直なところ、わたしは領地の色は何色でも構わないのだ。わたしは自分の髪に触れているフェルディナンドの指先を視界の端に留めながら、「紋章はレッサーくんがいいです」と主張した。

　その途端、フェルディナンドの指がパッと離された。

「却下だ。これから先のアウブ・アレキサンドリアが代々使う紋章だぞ。君の好みでグリュンに決めてはならぬ。名前の継承を止めたのだから、エーレンフェストと関係があることを示して獅子の紋章を継承するか、グリュンよりは君の図書館で多く稼働することになる図書館の魔術具からシュミルにする方が良い」

　とてもわたしの領地らしい紋章だと思ったのだが、即座に却下された上に代案が出されていく。何が何でもレッサーくんは受け付けないことがその態度でわかる。

「シュミルは弱すぎて紋章にする領地はないとおっしゃったではありませんか」

「その辺りにいるシュミルは弱いが、図書館の魔術具は強い。額の魔石を必ず意匠に入れて、ただのシュミルと区別すれば良かろう」

　シュミルなんて紋章としてはあり得ないと言っていた人が、シュミルを紋章の候補に挙げるとは思わなかった。

「そこまでレッサーくんがお嫌いですか！？」

「珍妙なグリュンの紋章を持たねばならないのは君だけではないのだぞ。そこまで頑なならば、周囲の意見を聞いてみれば良かろう。賛同者などいるはずがない」

　わたしは盗聴防止の魔術具を置いて、護衛として立っているエックハルト兄様とラウレンツを振り返った。ちょうど食事を終えたリーゼレータ達も様子を見に来たのが見える。

「皆は新領地アレキサンドリアの紋章の意匠にわたくしの騎獣と図書館の魔術具、どちらが相応しいと思いますか？」

　顔を見合わせた皆が「図書館の魔術具でしょう」と声を揃えて言った。

「シュミルの紋章はとても可愛らしいと思います」

「紋章の意匠には強さが大事だとフェルディナンド様は以前おっしゃったのですよ」

　わたしがリーゼレータにそう言うと、話を聞いていたグレーティアがニコリと微笑んだ。

「ユーディットによると、大鎌を持った魔術具は大変強かったそうです。シュミルの意匠に鎌を加えればいかがでしょう？」

　……そんなの嫌！

「鎌を持たせるくらいならば本を持たせます！」

「さすがローゼマイン様。良い案です。本を持つ図書館の魔術具を意匠にするのであれば、ローゼマイン様の図書館都市を象徴する紋章になると思います」

　ラウレンツが爽やかな笑顔でポンと手を打った。

「図書館の魔術具に本……。女神の化身に相応しく、本はメスティオノーラの書にいたしますか？」

「あまり細かすぎるのは後々面倒ではないか？」

「ローゼマイン工房の紋章が本とインクと植物からできているので、そちらを絡めても良いかもしれませんね」

「それは悪くない」

　あれ？　あれ？　と思っているうちに、側近達とフェルディナンドの間で紋章がどんどんと決められていく。「……レッサーくんはそんなにダメですか？」というわたしの言葉は完全に聞き流された。

[------------------------------------------------]

魔力散布祈念式　中編

　寝て起きたら魔力が回復していることにこれほど絶望的な気分になるとは思わなかった。せっかく減らしたのに、また増えているのだ。積んでも積んでも鬼にぶち壊される賽の河原の絶望感に似ている気がする。魔力が増えると苦痛も増えることを考えると、地獄の責め苦よりひどいのかもしれない。

　……だるい。頭がぼーっとする。

　昨日一日外にいて、魔力を垂れ流しながら海や魚に興奮していたのが良くなかったのだろう。朝から体が重い。しかし、ここで寝ていたらまた魔力が回復してしまう。とりあえず起きて魔力の使い道を考えるしかなさそうだ。

　朝食を摂るためにのっそりと食堂へ向かうと、フェルディナンドが朝食を摂っていた。いくら広めに作っているとはいえ、わたしやフェルディナンドの部屋も寝台と着替えスペースくらいしかないので、食事は必然的に食堂で行うことになる。

　わたしは席に着いて、差し出された野菜と果物のジュースをちびちびと飲み始める。回復薬が使えない今、体力を回復させるためには食事は大事なので食べなければならない。頭ではわかっていても食は進まなかった。

　食事を終えたフェルディナンドが立ち上がり、わたしの隣に立つ。これ幸いとわたしは食事の手を止めた。

「一目で不調が伝わってくるが、体調はどのような感じだ？」

「……お魚の罪深さに震えています」

「カンナヴィッツではしゃぎすぎて熱を出し、寒気がしていると正しく報告しなさい」

　この馬鹿者、と叱られながらフェルディナンドが額や首筋に触れるのを受け入れる。熱がある時はひやりとした手の感触がとても心地良い。

「魔力と体力の均衡を見定めながら領地に魔力を効率良く注ぐ計画が早くも頓挫するとは思わなかったな。今日はどうするべきか……」

「申し訳ございません。でも、午前中くらいなら……」

「この状態で外出するつもりか？　それとも、回復薬を使うのか？」

　ものすごい目で睨まれて、わたしは即座に首を横に振った。普通に寝ただけの回復量で絶望的な気分になっているのに、今の状態で回復薬を飲んで魔力が回復したら、それこそ魔力枯渇への道が遠のきすぎて人目も憚らず泣きたくなるだろう。

「……わたくしが外出するのではなく、レッサーくんを移動させるくらいはできると言いたかったのです」

「移動してどうするつもりだ？　騎獣を動かすくらいでは今の君の魔力は減らぬであろう？　魔力を使うためには君が動かねばなるまい」

　わたしは必死で頭を動かす。自分が動かなくても魔力を使う方法が必要だ。自分でできない時にはどうすればいいか。答えは簡単だ。自分の代わりに、誰かにしてもらえば良い。

「わたくしが神々の御力を込めた神具があるでしょう？　祝詞さえ唱えれば神具を使うことは誰にでもできることですから、あれを皆に使ってもらうのはどうでしょう？」

「神具を？」

　フェルディナンドが片方の眉を上げてわたしを見下ろしている。わたしはゆっくりと頷いた。

「皆には悪いのですが、フリュートレーネの杖で周囲の土地を癒し、ライデンシャフトの槍で魔獣を倒し、シュツェーリアの盾でレッサーくんの周囲を守り、ゲドゥルリーヒの杯を使ってギーベのいないビンデバルトで祈念式を行ってもらうのです。神具の御力が空になればわたくしがまた神々の御力を注ぎます。癒しと魔獣狩りをまとめて行えるような場所に心当たりはございませんか？」

　そうすれば、ギリギリ寝たままでも何とか神々の御力を使うことができると思う。わたしは体力を回復させたくても、何もせずに寝ていることさえできないのだ。

「あとは、そうですね……。フェルディナンド様は採集場の癒しの魔法陣を描けますよね？　それをあちらこちらに描いていただいて、わたくしが魔力を注ぐというのはどうでしょう？　午前中に寝ていれば、午後は魔法陣に魔力を注ぐだけならばできると思うのですけれど……」

「少々自分の体力を過信しすぎだと思わなくもないが、騎獣に同乗して一日外にいるよりは体力の消耗も少ないであろう。……だが、それだけ色々な方法を思いつくということは、かなり状況は良くないな」

「どういう意味ですか？」

　フェルディナンドが難しい顔になって、腰に下げている薬入れに手を伸ばす。試験管のような細長い筒を手に取って、朝食のために並べられているスプーンにほんの一滴を垂らした。

「君の癖だが、直そうとしたり隠されたりすると面倒なので、君が自覚する必要はない。それより、これを……」

　わたしの癖なのに教えてくれず、フェルディナンドはスプーンを差し出した。金属のスプーンの上にほんのりと赤い液体が見える。わたしはスプーンを手に取って、一滴だけ落とされた薬をなめてみた。苦みが強くて、舌の先にピリピリとした刺激を感じる。ほんの一滴でこれほど苦みと刺激が強いのだ。薬として出されても、とても飲めない。

「ものすごく苦いですけれど何ですか？　魔力が回復する薬ですか？　舌が痺れそうな味なら、先にそう言ってくださいませ。全く心の準備ができませんでしたよ」

　わたしがフェルディナンドを見上げると、フェルディナンドの方が苦い薬を飲まされたように眉間に深い皺を刻み込んでいた。

「これくらいならばほぼ影響はない。ハルトムート、聖杯以外の神具はどこにある？　神殿へ返したのか？」

「いいえ。ローゼマイン様の神事に神具は不可欠ですから私の荷物として持参し、聖杯と共に保管しています」

　得意顔でハルトムートが胸を張る。さすがハルトムート、と感心したところでコルネリウス兄様がわざとらしく肩を竦めるのが見えた。

「神殿へ神具を返しに行っていたら置いて行かれるから仕方がなく持参した、と聞いた気がするのですが？」

「おや、私がローゼマイン様の御力が籠った神具を他人に託す、と？」

　ハルトムートがコルネリウス兄様に圧力のある笑顔を向けていると、フェルディナンドが「裏事情はどうでも良いから黙りなさい」と手を振る。

「神具に魔力を流すのは効率的なのか？」

「少なくとも壊れる確率が低いですし、全ての神具に注いだ時は少し減った実感がありました。全ての神具の魔力を何度か使っていただくのが理想ですが、ただ寝ているだけという状態よりは魔力が増えない分、安心できます」

　わたしの言葉にフェルディナンドが「そうか」と頷き、何度かこめかみを軽く叩く。何を考えているのか知らないけれど、色々なことをまとめて考えている時の癖だ。

「よろしい。朝食後は君の提案通りに動くとしよう。側近達には朝食が終わり次第、神具を使って土地の癒し、魔獣狩り、祈念式を手分けして行ってもらう。私は一度転移陣で城へ戻り、いくつか用件を終わらせてくる。午後からは癒しと魔獣狩りをまとめて行えるザイツェンの西側かヴルカタークへこの騎獣ごと移動してもらうので、転移陣を稼働させた後はお昼まで君は休んでいなさい」

　フェルディナンドはそれだけ言うと、踵を返した。ユストクスがゼルギウスの手に片付け途中のお皿を置くと、フェルディナンドの背中を追う。わたしも一緒に立ち上がろうとした途端、リーゼレータにそっと肩を押さえられた。

「ローゼマイン様のお食事はまだ終わっていらっしゃいませんよ」

　リーゼレータに見張られながらの朝食を終えると、わたしはフェルディナンドが城へ戻るために使う転移陣へ魔力を注ぎ込んで送り出す。フェルディナンドが連れて戻ったのはエックハルト兄様とユストクスと護衛騎士を数人だ。片付けや昼食の準備のために必要な側仕えのゼルギウスや、レッサーくんの周囲の警戒やわたしの側近達に同行する騎士達は残されている。

　わたしはまず自分の側近達に指示を出した。わたしの部屋を守る護衛騎士はアンゲリカで、扉の外に待機。レッサーくんを守るためにシュツェーリアの盾を外で展開するのがレオノーレだ。それ以外の護衛騎士達は魔獣狩りと、ビンデバルトの祈念式に赴くハルトムートの護衛に分かれてもらう。クラリッサは神事に携わる絶好の機会だからハルトムートの祈念式に同行したいと言った。

「新ツェントへのグルトリスハイト授与で嫌でも神事に対する見方が変わりましたし、これからどんどんと変えていくのですからローゼマイン様の臣下であるわたくしが神事に参加するのは当然だと思うのです」

　神殿への出入りは世間体を盾に禁じられたけれど、貴族院での神事はダンケルフェルガーでも行っているので問題ない、とクラリッサが主張する。確かに聖典の鍵と礎の関係を暴露する領主会議以降は、他領でも領主一族が神殿への出入りをすることになる。外で行う神事に参加するのは、特に問題ないだろう。

　……もう完全に祝詞を覚えてるくらい張り切ってるし……。

　ちょっとぶっ飛んだ言動に惑わされがちだが、クラリッサも優秀なのである。優秀だからこそ残念な感じが拭えないのだが、ハルトムートとはお似合いだ。

「コルネリウスとマティアスはアーレンスバッハの騎士達と魔獣狩りですか……」

　アンゲリカが羨ましそうにコルネリウス兄様を見ている。体を動かすのが好きなアンゲリカはお留守番より魔獣狩りが魅力的に思えるのだろう。だが、今回はただの魔獣狩りではない。目的が魔獣狩りではなく神具を使用して魔力を空にすることだ。

「アンゲリカがすぐに祝詞を覚えられるならば行っても構わないのですよ」

　ライデンシャフトの槍も空の状態から全ての魔力を込めた本人が使うのであれば祝詞は必要ないが、別人の魔力も混じっている場合は祝詞が必要だ。シュタープで出した神具や自分の魔力で完全に染まっている魔石を使った場合は祝詞を簡略化できるが、他の者も魔力を奉納する神殿の神具を使う時は正式な祝詞が必要になる。

「祝詞……。わたくしには向きませんね」

　あっさりとアンゲリカは祝詞を覚えるより、部屋の護衛を選んだ。予想通りだ。むしろ、「頑張って覚えます」と言われた方が驚く。

　わたしの護衛騎士達が神具を使うための祝詞を確認して何度か唱えて練習している間に、シュトラールに頼んで騎士達も班分けをしてもらい、魔獣狩り、祈念式、レッサーくんの警備に就いてもらう。

「では、いってまいります。ローゼマイン様はお休みください」

　ハルトムートが管理していた神具を抱えて出発した。

　布団の中でうつらうつらしている間に四の鐘が鳴った。熱っぽさは少しマシになったけれど、魔力回復で神々の御力が膨れていて気持ち悪い。

　……寝るのが嫌いになりそうだよ。

　どんよりとした気分で起き上がると、リーゼレータが心配そうにわたしを覗き込んでいて、昼食のために皆が戻ってきたことを教えてくれた。

「神具の魔力は全て空にしたそうです。……先にお持ちいたしましょうか？」

「お願いしてもいいかしら？」

　リーゼレータとクラリッサが神具をハルトムートから預かって持ってきてくれ、わたしはそれに魔力を込めていく。眠る前くらいに戻って不快感が減り、ホッと安堵の息を吐いた。

「少しお顔の色が良くなりましたね。グレーティアが準備をしていますから昼食にいたしましょうか？　寝台の上でお食事していただくことになるので恐縮ですけれど、時間を短縮するためにお部屋で昼食を摂ってほしいそうです」

「フェルディナンド様もお戻りになったのですね」

　効率重視の指示が誰から出されたものか、すぐにわかる。わたし達が食堂で食べれば側近達は順番を待たなければならないが、わたし達が部屋で食べれば目に触れないところで大半の側近が昼食を摂ることができる。優雅ではないので、普段は使わない裏技だ。

　リーゼレータが出ていくと、代わりに、お盆の上に食事を載せたグレーティアが入って来る。寝台の上で食べられるように準備がされ、グレーティアが給仕してくれた。

「フェルディナンド様の昼食を準備するユストクスから伺いましたが、ザイツェンとヴルカタークのギーベに通達を出したり、エーレンフェストと連絡を取ったり、新ツェントとのやり取りを行ったり、午前中は非常に忙しかったようですよ」

　グレーティアがユストクスから聞いた情報を流してくれる。城で精力的に動いていたらしいフェルディナンドは大量の仕事道具と一緒に戻ってきたそうだ。

「ヴルカタークのギーベからの報告によると、旧ベルケシュトック方面から魔獣がアレキサンドリア側へ移動しているそうです。こちらが神々の御力に満たされ始めたので、魔力を求めて移動しているのではないか、ということでした」

　最も神々の御力に満ちていて、魔力に飢えた魔獣に狙われるのはわたしなので、厳重な警戒が必要であること。せっかく癒した土地を荒らされないように、なるべく早くザイツェンやヴルカタークの方面へ向かうことが告げられた。

「やりすぎ注意ではあるが、ライデンシャフトの槍を何度も使う好機……だそうです。神々の御力を蓄えたライデンシャフトの槍を使った後は、フリュートレーネの杖がなければ土地が大変なことになるので、きっとローゼマイン様の魔力を大幅に減らすことができるでしょう」

　……うん、本当にそうだったらいいんだけどね。

「ギーベへの通達は済んだ。これからザイツェンとヴルカタークの境界付近へ移動する」

　ザイツェンはエーレンフェストとの境界門があるグリーベルやガルドゥーンの南側にあり、ヴルカタークはザイツェンの西隣の土地で、グリーベルの南西とイルクナーの南側に隣接している。

　ザイツェンの西からヴルカタークの辺りは、わたしがユレーヴェの素材を採集する時にリーズファルケの卵を得たローエンベルクの山がある山岳地帯と繋がっているそうだ。簡単に言うと、火山もある山岳地帯ということだ。山が多くて木が多いので、アレキサンドリアで製紙業をするならば、この辺りが適しているといえる。

　……イルクナーと隣接してるってことは、似たような魔木も多いと思うんだよね。

「さすがに何の連絡もなく、魔力を振り撒き、魔獣狩りを行うわけにはいかぬからな」

　海の様子が一変する様子からもわかるように、神々の御力は強力すぎる。これまでの魔力が乏しい土地には影響が強すぎるので、ギーベとのやり取りが必要不可欠になるらしい。

　……ただ土地を癒せばいいってものじゃないところが面倒だよね。

　わたしはフェルディナンドから説明を受けた後、レッサーくんを運転してフェルディナンドとその護衛騎士達の先導について行く。二階建ての家が飛んでいるような今の状況は外から見ると非常にシュールなようで、農民達が目を剥いてこちらを指差して騒いでいるそうだ。外の見回りから戻ってきたレオノーレから聞いた。今、外に出ているのはアンゲリカだ。

「魔獣です、レオノーレ！」

　アンゲリカがそう言いながら助手席の外側をココンと叩く。うみょんと出入り口を開けば、レオノーレが「守りを司る風の女神　シュツェーリアよ　側に仕える眷属たる十二の女神よ……」と祝詞唱えながらシュツェーリアの盾を持って飛び出し、アンゲリカが代わりに中へ入ってきた。

「強い魔獣が多いです。土地の魔力がないので共食いをしていたのだろう、と誰かが言っていました」

　アンゲリカのキリッとした報告にわたしは頷きながら一度空中で停止する。戦いが終わるまでは勝手に動かないように言われているのだ。

　昼食時に報告があった通り、魔力が乏しいところで神々の御力で光りながら移動しているレッサーくんは絶好の獲物に見えるようで、すでに何度か強い魔獣に襲われていた。普段ならば強そうな魔獣が出たらギャーギャー騒いでいるわたしだが、今日は「よし、カモン！」という気分で魔獣を迎えてあげられる。

「またライデンシャフトの槍とフリュートレーネの杖が使用できそうですね」

　敵の接近を封じるためにレオノーレがシュツェーリアの盾を展開してレッサーくんを守り、コルネリウス兄様やマティアスが交代でライデンシャフトの槍を使って攻撃する。魔獣を倒した後、クレーターのように抉られた跡はフリュートレーネの杖で癒すのだ。わたしが魔力を込めた神具が大活躍である。

　……一度使ったら魔力が完全になくなるところが素晴らしく思えるなんて初めてだよ。ライデンシャフト、ありがとう！

「ローゼマイン様、魔力の補充をお願いします」

　神具に込められた魔力がなくなると、護衛騎士達は神具を持ってレッサーくんの中へ戻ってくる。魔獣に一度襲われると土地の癒しが終わるまでその場に止まるので移動速度はゆっくりしたものだが、魔力が減ると神々の御力による苦痛が減るのでホッとする。予想以上に魔力が減っていて嬉しい。

　……これで今夜は落ち着いて眠れそうだよ。

　魔獣を狩りながら移動し、ザイツェンとヴルカタークの境界付近にレッサーくんを着地させた。その途端、フェルディナンドから「レオノーレ、すぐにシュツェーリアの盾を展開せよ」と指示が飛ぶ。

「守りを司る風の女神　シュツェーリアよ　側に仕える眷属たる十二の女神よ……」

　レオノーレがシュツェーリアの盾を使って周囲の守りを固めると、一旦休憩だ。もう夕食の時間が近付いている。わたしは運転席から後ろ側の大きな家の方へ移動する。外から見ると、今のレッサーくんはレッサーパンダの顔が付いた巨大なゾウガメっぽい。大きな家が甲羅のように見える。

　……やっぱり何か可愛くない。居心地は良いんだけど。

　一階の食堂の隣にある居間のようなスペースに向かうと、フェルディナンドがこれから先の指示を出しているのが見えた。

「ローゼマイン、体調はどうだ？」

「神具に何度も魔力を奉納したので不快感は結構薄れましたし、午前中寝ていられたので体調も結構いいですよ。……でも、何だかお腹が空きました」

「あら？　少しお元気になられたのですね。朝も昼も量が少なかったので心配していましたが、夕食は多めに準備させましょう」

　クスクスと笑いながらリーゼレータが料理人に伝えるために身を翻していく。わたしがグレーティアに示されたソファに座ると、フェルディナンドが近付いてきて健康診断をしていく。

「……午前よりは良くなっているが、決して体調が良いとは言えぬな」

　自分ではかなり良くなったと思っていたけれど、ひやりとした手が心地良かったので熱が完全に下がっていないことはフェルディナンドに言われなくてもわかった。でも、フェルディナンドが難しい顔をするほどは悪くない。

「食欲が出たのですから、体調は良好で構わないと思います」

「少し食欲が出たからといって、暴飲暴食は避けるように」

　わたしの主張にフェルディナンドが少し考え込むようにこめかみを軽く叩く。また淑女らしくないとか、食欲で体調を決めるなとか考えているのだろうか。フェルディナンドは主治医らしい無表情で淡々と注意をすると、居間を出ていった。

「しませんよ。失礼な……」

　暴飲暴食はしなかった。できなかった。お腹が空いているはずなのに体が受け付けず、どうしても少量しか食べられないまま、わたしは夕食を終えた。

　側近達が食事を摂る間、食後のお茶を飲むために居間へ向かおうとしたが、フェルディナンドに止められた。

「やはり体調が良くないのであろう。君は食後のお茶を飲むより休んだ方が良い。明日は聖杯で魔力を撒きたいからな」

　昨夜と同じように図書館都市計画のお話をしたかったのに、フェルディナンドが城から持って戻ってきた設計図が気になっていたのに、自室へ戻るように促される。

　……寝るの嫌だよ。起きたらまた魔力が増えてる。

　空いたお腹を押さえながら、わたしは寝台に横になった。

[------------------------------------------------]

魔力散布祈念式　後編

　夜中に目が覚めた。冷たい汗で背中がじっとりとしていて、ひどく嫌な目覚めだ。何か夢を見ていたはずだけれど、思い出せない。繋がっていない記憶が繋がりそうで繋がらない苛立ちに顔をしかめていると、不寝番をしてくれていたらしいレオノーレが天幕を開けて顔を覗かせた。

「ローゼマイン様、お顔の色が良くありませんね。神具をお持ちしましょうか？　お目覚めの時に神具へ魔力を流すと不快感が軽減することをリーゼレータから伺い、神具の魔力は全て使っていますから」

　レオノーレによると、夕食の後にわざわざ護衛騎士達が神具の魔力を空にしてくれたそうだ。その心遣いが嬉しくて、わたしは神具を持ってきてもらうことにする。

　……お腹は空いているし、寝起きは最悪だし、体はだるいし……。

　重たい頭を抱えるようにして寝台の端に座り、レオノーレが持ってきてくれた神具に魔力を流し込んでいく。グレーティアが緩く髪を束ねただけの状態で慌ただしく入室してきた。レオノーレに起こされたのだと思う。名捧げをしたグレーティアでなければ、銀色の布を外したわたしに触れられないので、どうしてもグレーティアの負担は大きい。

　グレーティアはわたしの寝汗がひどいことに気付き、すぐに着替えの準備を始めた。

「お風呂の準備はしなくてもヴァッシェンで十分です、グレーティア。その辺りにある魔石を利用してくださいませ」

　わたしが魔力を込めた魔石は大量にある。グレーティアに使用許可を出しながら、わたしはレオノーレが差し出す神具に魔力を流し込んでいく。

　グレーティアのヴァッシェンですっきりとした気分になり、別の寝間着に着替えたところでレオノーレがシュツェーリアの盾を差し出した。これが最後の神具だ。それにも魔力を注いでいく。不意に何かの気配を感じて、シュツェーリアの盾に手を触れたまま、わたしは周囲を見回した。

「どうかなさいましたか、ローゼマイン様？」

「下の方……。方角的には食堂か居間の辺り何かがいる気配がします。ジェルヴァージオが祭壇の奥から出てきた時に似た、何かが近くにいるような感じの……。まさかジェルヴァージオではありませんよね？　そういえば、わたくし、あの後彼がどうしたのか報告を受けていないのですけれど……」

　わたしが気配のある方向を探りながらそう言うと、レオノーレは何か合点がいったように頷く。少し考えるように視線を上に向けた後、クスと小さく微笑んだ。

「ここはローゼマイン様の騎獣の中ですから、許可もない何者かが侵入できるとは思えません。居間でお仕事をするとおっしゃったフェルディナンド様でしょう。お気になるのでしたら確認に向かいますか？　神具に魔力供給をしても顔色がまだ優れませんから、少し見ていただいた方が良いかもしれません」

　レオノーレがそう言いながらグレーティアを振り返る。

「グレーティア。悪いけれど、ローゼマイン様のお召し替えを。そのままでも横になれる締め付けの緩い部屋着がいいでしょう。こちらに戻った後はローゼマイン様にそのままお休みいただくので、貴女は部屋に下がっても大丈夫ですよ」

「恐れ入ります」

　部屋着に着替えさせられ、かっちりではないけれど髪をまとめられた。銀色のマントを羽織らされ、レオノーレと一緒に部屋を出ると、アンゲリカが「遅くなりました」と駆け寄ってきてスッとわたしを抱き上げた。

「ローゼマイン様、わたくしがお部屋に到着するまでお待ちくださいませ。極力歩かせるな、と命じられています」

　キリッとした顔でアンゲリカに注意されて、わたしは小さく笑いながらおとなしくアンゲリカに身を委ねた。

　一階の居間から明かりが漏れている。近付くと、エックハルト兄様が顔を出した。

「入りなさい、とフェルディナンド様がおっしゃっている」

「わたくしが来ていることがわかったのですか？」

「それだけ神々の御力を放っている者が移動してわからぬはずがなかろう」

　……神々の御力って猫の鈴みたい？

　居間に入ると、普段は食後のお茶を飲んでいるスペースが完全に執務室のような状態になっていた。自室には寝台と着替えなどの荷物を置くくらいのスペースしかないので、城から持ってきた仕事をフェルディナンドは居間で行っているようだ。

「どうした？　眠れないのか？」

「もう覚えていないのですけれど、嫌な夢を見て目が覚めたようです。神具に魔力を注いでいたら何かいる気配がして……」

　ジェルヴァージオが祭壇の奥から出てきた時のように、姿が見えていないのに何かがいるような気配を感じたのだ、と答える。

「一体何かと思ったのですけれど、今回感じたのはフェルディナンド様だったようです」

「ほぉ……」

　フェルディナンドが自分の隣に座るように、ソファの空いている部分を指差した。アンゲリカが指示された場所にわたしを降ろす。今までは感じなかった妙な気配がフェルディナンドからしているせいか、ちょっと落ち着かない。

「フェルディナンド様、ジェルヴァージオはどうなったのですか？」

「エグランティーヌ様達が捕らえ、記憶を覗いたそうだ。その内、正式な処罰について発表があろう」

　捕まっているという報告にわたしはホッと安堵の息を吐いた。

「逃亡していたらどうしようかと思ったので、無事に捕らえられたのであれば一安心ですね」

「エグランティーヌ様やアナスタージウス王子は共に向かった護衛騎士の半数を失ったそうなので、無事に、とは言えぬと思うが……」

「え！？　半数とはどういうことですか？」

　わたしは目を瞬いたが、フェルディナンドは興味なさそうな顔で積み上がった資料の中から紙をいくつも取り出し始める。

「新ツェントと彼女を支える夫が乗り越えるべき問題だ。君が余計なことを考える必要はない。それよりも、早急に行わなければならないアレキサンドリアの設計について話をしたい」

　並べられた紙類が新しいアレキサンドリアの設計図だと気付いた瞬間、ジェルヴァージオのことは頭から飛んで行った。

「君が語っていた理想の街をなるべく取り込もうと思ったが、あまりにも図書館が中心すぎる」

「そのようなことをおっしゃられても図書館を中心にしなければ、何を中心にするのですか？」

　わたしが造る街並みの中心に図書館がなくてどうするのか。わたしが文句を言うと、フェルディナンドが嫌な顔になった。

「貴族街の中心は城と図書館と研究施設で問題ないと思われる。君が頻繁に出入りし、自室の確保まで狙っている図書館だ。城と離れた場所に作るのは不用意な危険を招くことになりかねない。君は城の自室と図書室の自室を転移陣で繋ぐつもりのようだが、護衛騎士が転移陣に乗せてもらえなかった場合、護衛騎士のためにも距離が離れすぎるのはどうかと思う」

　あまりにも不特定多数の者が出入りするのは警備の関係上、許可できないらしい。ただ、南北で地位に差が出るエーレンフェストと違って、アレキサンドリアでは街の中心部へ向かうほど地位が高くなるようにすることで各家庭と図書館の距離をなるべく近くしたり、城の図書室と図書館を別に作ることで見習いや洗礼式を終えた子供の立ち入りが簡単になるようにしたり、工夫してくれているらしい。

「でも、わたくしは誰にでも利用できる図書館が欲しいです。……うぅ、わたくしの領地なのですよ。アレキサンドリアでは誰でも本が読めることが大事なのですよ」

「街の将来の方向性としては間違っていないが、平民の識字率を考えると時期尚早だと言わざるを得ない。貴族の反発も大きかろう」

　理想の街づくりから外れている気がする。わたしの訴えにフェルディナンドが「他人の話は最後まで聞きなさい」と手を振った。

「アレキサンドリアは女神の化身の新領地なので、平民を含んだ街全体を考えた場合は神殿を中心にすべきだと思う」

　せっかく一から作り直すのだから、エーレンフェストの神殿の良いところを取り入れれば良いらしい。工房、孤児院、青色神官達の生活の場、神々に祈りを捧げて儀式を行う礼拝室を設置した神殿を下町と貴族街の間に置くのだそうだ。

「そして、いつだったか話をしていた神殿教室を富豪相手に行えば、平民の出入りが次第に当然になる。最初は神殿教室の利用者だけという形になるが、平民にも立ち入ることが可能な図書室を設置することはできよう。あまり急ぐ必要はない。大事なのは最初の一歩をいかに受け入れてもらうか、だ」

　貴族院の図書館と同じで、本の盗難などを防ぐためには保証金の制度などが必要で、しばらくの間は会員制の図書館になるだろう、とフェルディナンドは言った。でも、それは麗乃時代の図書館の歴史を振り返っても同じことがあった。もっと時代を進めたくて少し歯痒い感じはするが、印刷業が盛んになって本の値段が下がらなければ難しいこともわかっている。

「富豪相手の神殿教室と神殿図書室の開放はとても良いと思います」

　富豪の子供が貴族との繋がりを作り、立ち居振る舞いなどを身につける場として神殿教室を開けば、富豪の子供は神殿教室に通うのが当たり前になる。何とか伸し上がろうとする商人達や貴族のパトロンを探す職人も入ろうとするだろう。それらの動きはグーテンベルク達を見れば明らかだ。

「それから、君が言っていた区画整理という視点は実に面白いが、君が整理すると街の機能が図書館と印刷業に偏りすぎる。もう少し現実に合わせた整理が必要だ。まずランツェナーヴェの被害を受けた港、貴族街、神殿、商業ギルドや各協会など平民にとって中心的な建物を先に作り、平民の意見を聞きながら区画整理を行うのでどうであろうか？」

　今まで命令しかしていない文官達を鍛える場にすればちょうど良い、とフェルディナンドが微笑む。

「街全体で大掛かりなエントヴィッケルンを行うと、平民の負担になりますから、平民と話をする場を設け、順次立て替えていく形で良いと思います。建物の様式はアーレンスバッハの物を参考にしましょう。気候一つとってもエーレンフェストとは違います。その土地に合った様式が一番良いですから」

「プランタン商会とギルベルタ商会については店の間取りをグレッシェルのエントヴィッケルン時に提出されていた物を採用する予定だったが？」

「こちらの様式の間取りを送り、彼等の判断に委ねてください」

　気候には合わせた方が良いけれど、使い勝手の世間取りは個人個人で全く違う。何を重視するのかは本人達が選べばいいと思う。

「住まいや店がなければ移動させられないので、商業ギルドなどが立ち並ぶ下町の中心部にグーテンベルク達の店や工房もエントヴィッケルンで新しく作るつもりだ」

「これだけ細かく気を配っていただいているのですから問題はないでしょうけれど、職人達の家族が住む部分は確保できていますか？」

「……あぁ、もちろんだ」

　フェルディナンドが少し目を伏せた後、広げていた紙を手早く片付け始めた。

「もうちょっと見ていたかったのにひどいですよ、フェルディナンド様。もう一度広げてくださいませ」

「君が興奮しすぎて大変なことになりそうなので、今日はここまでよかろう。……そろそろ一の鐘が鳴るぞ。一度眠った方が良さそうだ。少しは気が済んだであろう？　眠れそうか？」

　フェルディナンドに問われて、わたしは首を横に振った。

「……眠ると魔力が増えるので今はあまり眠りたくありません。どうしても眠りたくなった時に眠ります」

「空腹感はどうだ？　空腹を訴えていた割には夕食があまり食べられなかったようだが、まだ空腹感が続いているのではないか？　むしろ、もっとひどくなっているということは？」

　フェルディナンドに問われて、わたしはコクリと頷いた。夕食の後も空腹感は続いているし、今はもっとお腹が空いている。

「……フェルディナンド様のおっしゃる通りです。何か心当たりがあるのですか？」

　フェルディナンドは「全くないわけではない」と言った後、周囲を見回す。何か探しているような表情を見せた後、自分の手をヴァッシェンした。

「フェルディナンド様？」

　フェルディナンドは自分の指先にほんのりと赤い薬を少し垂らし、薬の付いた指先をわたしの唇に押し当てた。すぐに離れた指先がハンカチで拭われるのを見ていると、フェルディナンドに「苦いか？」と問われた。

　わたしは苦くて刺激的な味を想像しながら唇を少し舐めてみる。予想していた味に比べると苦みはほとんどない。舌はまだピリピリするけれど。

「いえ……。それほどではありません」

「ならば、良い。ならば、君が感じている空腹感は魔力が減りすぎていることに起因すると考えられる。魔力が減りすぎたことにより、体が危機を訴えているのだ。確実に魔力枯渇に近付いているといえよう」

　普通は魔力が減った時点で回復薬を使う。長期間魔力が減り続け、眠って回復したはずなのにすぐさま魔力を使って回復させないという事態が長期化することはまずないために感じないそうだ。

「私はアーレンスバッハの供給の間で飢餓感を覚えた。一気に魔力を使うのではなく、少しずつ少しずつ削り取られていく時に感じるのだと思われる。……だが、ここから時間をかけると非常に苦しくなる。この後はできるだけ一気に減らしたいところだ」

「これ以上、苦しくなるのですか？」

　もう嫌だよと思ったわたしは、思わずフェルディナンドから少し離れようとした。

「一気に枯渇状態へ持っていきたい。神々の御力が減少すれば、染め直すのに苦痛が少なくなることにも確認が持てたからな」

「……そうですか」

　フェルディナンドは何やらやる気になっているけれど、この苦痛がまだ続くことを考えると、わたし自身はどうしても及び腰になってしまう。

「君は私に癒しの魔法陣をいくつも描くように言ったであろう？　あの魔法陣をコピペとやらで、いくつも同時に行うことはできないか？」

　コピペには神々の名前を唱える必要がないではないか、とフェルディナンドが言った。わたしは少し考えて首を傾げる。

「確かに神々の名前は必要ありませんし、癒しの魔法陣を写すだけでしたら、ヴァッシェンなどと違って力加減ができずに津波のような天災規模の失敗が起こる可能性は低いと思います。でも、それほど大きな魔紙がありませんよ。コピペは魔力があるところにしか写せないのです」

「魔力が満ちているところに写せるならば、少々乏しいとはいえ魔力を含んだ土地を魔紙に見立てることはできるのではないか？」

　フェルディナンドの言う通り、地面は確かに魔力を含んでいる。貴族院の採集場でも地面に魔法陣が埋め込まれているのだから、できないわけではないだろう。

「外で実験したことがありませんけれど、できないことはないと思います。でも、仮に地面にコピペができたとしても魔法陣の拡大がどれほどできるのかわかりません。拡大や縮小の研究は時間がなくて行えていませんから」

　時間がないから拡大や縮小の実験は後回しにしろと言ったのは、他ならぬフェルディナンドである。それを思い出したのか、フェルディナンドも少し眉を寄せた。

「そうか……。貴族院全体を覆っていた魔法陣のように巨大な魔法陣でアレキサンドリア全体を癒しの魔法陣で覆うことができるのではないかと思ったのだが、君の非常識なコピペでも無理そうだな」

「わたしのコピペを非常識だと言う前に、御自分の発想の非常識さを自覚してくださいませ。あれは古代の、現在よりずっと神々が身近だった頃にエアヴェルミーン様と神々が協力して作り上げた大規模魔術ではありませんか」

　それをアレキサンドリアで行おうとするフェルディナンドに非常識呼ばわりされたくない。古代のツェントがエアヴェルミーンを通じて神々の協力を取り付け、エアヴェルミーンの魔石を基点としていくつもの魔法陣を組み合わせて貴族院を成立させている魔法陣である。

「あのような規模のことを今の時代に行えるわけが……」

　わたしはそこで言葉を止めた。何かが今頭の中で閃いたのだ。

「ある、かもしれません」

「待ちなさい！　エアヴェルミーンや神々の協力を取り付けに行くのは却下だ。他の方法を考えよう。君がこの騎獣の魔石をでき得る限り大きく広げ、そこに癒しの魔法陣を写し、クラリッサの広域魔術の補助魔術でできる限り範囲を広げた方がよほど確実ではないか」

　自分で言い出したくせに、フェルディナンドはすぐさま却下を出した。わたしはうーん、と考え込んだ後、「グルトリスハイト」とメスティオノーラの書を出して検索する。

「……いえ。エアヴェルミーン様や神々に協力をお願いしに行く必要はございません。エアヴェルミーン様の欠片ならばフェルディナンド様が持っていますし、神々の御力もここにありますから」

　わたしが自分の手をにぎにぎとして見せると、フェルディナンドが片方の眉を上げた。

「これだけ苦しい思いをしているのですから、ちょっとくらい神々の御力を自分勝手に利用してもいいと思いませんか？　それに、古代の大規模魔術の復元、フェルディナンド様は興味があるでしょう？」

　ふふっと笑うと、フェルディナンドは「悠長に研究する時間などないぞ」と嫌な顔をした。けれど、何やらブツブツ言いながら新しい紙を取り出すのだから興味は非常にあるようだ。

「貴族院の魔法陣のように複数の属性でいくつもの効果がある魔法陣を重ねて設置するのではなく、癒しの魔法陣だけを広げていくならばそれほど難しくないと思うのです。ほら、フェルディナンド様も見てくださいませ」

　わたしは古代の大規模魔術について書かれている自分のメスティオノーラの書をフェルディナンドに見せた。側近達がいるこの場でフェルディナンドが自分のメスティオノーラの書を出すことはできないだろう。

　フェルディナンドが少し頭を寄せて覗き込み、魔法陣を睨むように見つめる。

「ふむ。これで範囲を決めているならば、礎に起点を置き、全ての境界門を終点として魔法陣を設置すればアレキサンドリア全体を覆うことができそうだな。基点に設置するエアヴェルミーンの魔石の代わりはアレか……」

「恒常性というか耐久性は落ちるでしょうけれど、神々の御力で魔石化させれば効力は問題ないと思うのですよ」

「いや、一度きりで良いならば別の御力を注ぐより、あのまま利用した方がここ書かれたやり方に沿うはずだ。実験を繰り返す時間も素材もない以上、できる限り元の魔法陣に忠実な形で再現した方がよかろう。失敗はできぬ」

　フェルディナンドがそう言いながら、手元の紙にものすごい勢いで何やら書き始めた。単語がダーッと並んでいるので、覚書に近いものだと思う。書く手を止めずにフェルディナンドは口を動かす。

「ローゼマイン、朝食終了後には騎獣を片付けて城へ戻る。城の隠し部屋で基点にするエアヴェルミーンの欠片に魔法陣のコピペを行ってほしい。それ以外の時間は体力の温存だ。私の文官に命じて全てのギーベに通達を、それから、ハルトムートには神具を神殿へ戻させなさい。クラリッサやローデリヒには貴族街の貴族達へ周知をさせよ」

「わかりました」

「レオノーレ、エックハルト。護衛騎士から各境界門へ見張りを出すことになる。その人選を行い、仕事の割り振りを考えるように。それから、側近達へ朝食後に城へ戻る旨の周知と準備を頼む」

「はっ！」

　次々と指示を出していくフェルディナンドの声が一瞬遠くなった。熱の広がりを感じて、わたしは急いでメスティオノーラの書を閉じる。長時間使いすぎたようだ。

　フェルディナンドが心配そうにわたしの顔を覗き込み、額や手首に触れて顔をしかめた。

「実際に境界門へ赴いて魔法陣の設置を行う部分は私が行うつもりだが、神々の御力を持ち、コピペで時間短縮が可能な君でなければ魔法陣の準備に非常に時間がかかる。どれだけ急いでも魔法陣を起動できるのは夜になるであろう。……あと一日、耐えられるか？」

「いつまで続くのかわからなかった時に比べれば、ずっと気が楽ですよ」

　へらりと笑って見せると、フェルディナンドが「妙な強がりは止めなさい」と眉間に深い皺を刻み込む。でも、あと一日くらいならば何とかなると思うのだ。

「せめて、朝食後の移動や調合に備えて部屋で休みなさい。私も少し休みたい」

　フェルディナンドは手早く資料類を片付け始めた。エックハルト兄様がそれを手伝い始める。わたしは夕食後から寝ていて眠気があまりないので意識になかったけれど、フェルディナンドはほぼ徹夜状態だ。これで朝食後にまた動き回るつもりだろうか。

　……「できるだけ急いでも夜」って言ってたから、休憩するつもりなんてないんだろうけど心配だな。

　朝食を終えると、城へ戻った。それぞれが指示のあった通りに動いていく。わたしはフェルディナンドの隠し部屋にいた。フェルディナンドにエアヴェルミーンの白い枝をランツェナーヴェのナイフで少し削って平らにしてもらい、そこに癒しの魔法陣をコピペで刻み込んでいくのだ。

「結構縮小しなければ枝に魔法陣が入りきらないので、最初は縮小の研究から始めなければなりませんね」

「君は馬鹿ではないか？　そのような時間はない。諦めて元になる魔法陣を小さく描けばよかろう」

　魔紙の上で縮小と拡大の実験をしようとしたら、フェルディナンドに冷たい目で睨まれた。そういうフェルディナンドは大量の魔石やら金粉やら貴重そうな素材を次々と投入しながら何かを作っている。「細かく描くの、苦手なので描いてください」とはとても言えない雰囲気だと思っていると、魔紙が一枚飛んできた。

「この魔法陣を写せるか試してみなさい」

　わたしはフェルディナンドが描いてくれた魔法陣をコピペしていく。癒すの魔法陣や枝を魔法陣の基点とするための魔法陣など、言われた通りに準備した。今の状態ではほとんど魔力も減らないので、魔法陣のコピペはすぐに終わる。

「終わりました、フェルディナンド様」

「では、神々の御力を込めた魔石の準備をしなさい」

　わたしは全属性の魔石ばかりを集めて丸めてくっつけて円柱状にすると、エアヴェルミーンの枝をガスッと刺した。本来はこの上に魔石を置くのだが、枝なので安定する形を模索した結果、突き刺すことにしてみた。意外と安定感がある。この魔石が神々の御力を受ける受け皿になるのだ。

　小さい方が境界門の終点を示す物で、虹色レッサーくんだった魔石はすでに一度潰されて大きめのお盆のような形にされ、エアヴェルミーンの枝が突き刺さっている。

　底に魔法陣を刻み込んだら完成だ。

「できました。神々の御力の魔石に枝を刺して固定してみたのですが、いかがでしょう？」

「とても古代の大規模魔術を再現しようとしているとは思えぬ気軽さと、君らしい非常識なやり方だ。私ではとても思いつかぬ」

「お褒めに預かり恐縮です」

　褒められたことにしておく。それが精神衛生上一番だ。

「準備が終わったのであれば、少し休んでいなさい。自覚があるのか無いのかわからぬが、顔色は良くない。できれば君の自室へ戻らせて寝台で休ませたいところだが、今は側近が足りぬであろう？」

　わたしがフェルディナンドの隠し部屋に籠って作業をすることで、側近達には少しの間休憩を与えているのである。二人がまとまって隠し部屋にいれば、扉の前を守る最低限の護衛騎士だけいれば、他の人は休憩できる。

「フェルディナンド様こそ休憩が必要だと思いますよ」

「君の魔力が枯渇した後の準備を整えなければならないことを考えれば、今は休めぬ。このまま問題なく準備が進めば、魔法陣を起動させる前に鐘一つ分は休めることになっているので問題ない」

　……問題ないわけがないと思うんだけど。

「フェルディナンド様はどうしてわたくしのためにそこまでしてくださるのですか？」

　じーっとフェルディナンドを見ていると、何となく口をついて疑問が出た。

「……どうして、とはどういう意味だ？」

「だって、フェルディナンド様はハルトムート達と違って、主としてのわたしに心酔しているわけでもありませんし、マティアス達のように処刑から逃れるために主を選んだわけでもないでしょう？　このような状況ですもの。返せと言われればすぐに名を返すのに、フェルディナンド様は一度もわたくしに名を返すように言わないではありませんか。フェルディナンド様にこれだけのことをしてもらえる意味がわからないのですよ」

　フェルディナンドは「意味か……」と少し考え込む。

「意味を問われると困る。私は君の家族同然なのだから当然ではないか。それ以上の理由が必要か？」

「え？　でも、本当の家族でもそこまでしないと思いますよ。騎士団長であるお父様は養父様のため、エックハルト兄様はフェルディナンド様のためならば何でもしそうですけれど、わたくしのためにはそこまで奔走しないでしょうし、コルネリウス兄様やお母様も親身にはなってくれますけれど、貴族としてできないことの方が多いでしょう？」

　貴族の家族はそういうものだ。神々の御力で触れられないのは困ると名を捧げたり、神々に喧嘩を売ったりしない。フェルディナンドは後見人だから、家族同然でも家族からかなり遠いと思う。わたしが首を傾げると、フェルディナンドはひどく苦い顔になった。

「ローゼマイン、君の家族は……」

「何ですか？」

「……いや、今はいい」

　何かを言いかけたフェルディナンドが言葉を呑み込んで首を横に振った。その横顔がひどく傷ついているように見える。

「あの、フェルディナンド様？」

「私はここ二、三日の間、君の魔力消費量と回復量を見ていたが、アレキサンドリア全体を覆う魔法陣を起動すれば間違いなく枯渇する。あまり眠ることを恐れる必要はない。自室で休みなさい」

　フェルディナンドは魔術具で自室の護衛騎士と連絡を取り、アンゲリカを呼んでもらう。そして、わたしを部屋へ連れていくように命じた。どうしてフェルディナンドが傷ついているように見えるのかわからない。隠し部屋へ戻っていくフェルディナンドに手を伸ばしたくなったけれど、何がいけなかったのかがわからなくて手を伸ばせないまま、わたしは目を閉じた。

　起きると苦痛に苛まれることが嫌で仕方ない。体の内で膨れ上がっている神々の御力に辟易としながら、わたしはグレーティアに着替えさせてもらった。夕食を摂ったらすぐに大規模な癒しの魔術を行うことになっている。

　わたしが今いるのは、アーレンスバッハの礎の前だ。アウブが使う部屋からアウブが持つ鍵で入れる小部屋を経由してやってきた。フェルディナンドに抱き上げられて。

「本来はアウブ以外入ってはならないのですよね？」

「……まぁ、そうだが、魔力が枯渇することがわかりきっている今の君を一人にするわけにはいかぬし、ディートリンデからこの鍵を取り上げたのは私だ。付け加えるならば、今の礎は魔力的に私をアウブと認定している」

「わたくしではなく、フェルディナンド様御自身がアウブ・アレキサンドリアになることは考えないのかな？　と……。研究施設、好き放題に作れますよ？」

　すでに設置されている白い枝の前に跪きながらそう言うと、フェルディナンドはわたしのすぐ隣に座って薬品類を準備しながら鼻で笑った。

「自分で作らずとも、君が作ってくれるのであろう？　私がアウブになる必要はない」

「フェルディナンド様って本当に欲がないですよね？　欲深さだけ見れば、わたしの方がよほど魔王っぽいですよ」

「そうか？　我ながら最近はかなり欲が深くなっていると思うぞ」

　クッと魔王のような笑みを浮かべて言っているが、とてもそうは思えない。

「フェルディナンド様は図書館都市を建設して印刷される全ての本を自分の図書館に納め、いずれはどの領地の図書館の蔵書も写して印刷してわたくしの本にしてくれるわ。ほほほほって野望もないでしょう？」

「そのような野望を抱くのは君くらいであろう」

　……全図書館制覇は人類の夢だと思うけどね。

　わたしは自分の野望を諦めるつもりがないので、手始めに王宮図書館から貴族院の図書館へ移動される書籍を写本させてほしいとエグランティーヌに頼み込むつもりだ。

「野望を手にするためにも、その神々の御力を消し去らねばならぬ。始めよう」

「はい」

　わたしは虹色に光っている盆状の魔石に手を触れる。魔力を注いでいくと、盆状の魔石の中に水が溜まっていき、水鏡のようになった。水は溢れる寸前で止まり、今度は真っ白だったエアヴェルミーンの枝が虹色に染まり始める。

　エアヴェルミーンの枝から全属性の光が真っ直ぐに上へ上がっていく。礎の間にいるわたしからは外の様子が見えない。そう思っていたが、全属性の光が建物を突き抜け、外へ出た瞬間、水鏡に外の様子が浮かび始めた。

「フェルディナンド様、これ……」

「そのまま魔力を注ぎなさい。まだ魔法陣は完成していない」

「はい」

　水鏡に映る光景は大勢の貴族達がシュタープを光らせて振っているところから、明かりが多い貴族街を経て、平民達の下町へ移動し、真っ暗の海を写すようになった。真っ暗とはいっても虹色の光に照らされて水面が揺れているのはわかる。国境門前の境界門で警備に就いているシュトラール、その他の騎士達の姿が映った。驚きの表情で見上げている。

「夜空に魔法陣が描かれていく様子を見ているのであろう。間抜けな表情だ」

「わたくしがその場にいたら、もっと間抜けな顔だと思いますよ」

「さもありなん」

　……そこは否定してほしかったよ。

　水鏡に映る光景は騎士達の驚き顔から境界門にあるエアヴェルミーンの枝になった。その後はまた上空へ向かった。

　魔力がどんどんと魔法陣に吸い取られていく。少し熱が引いてきた気がした。

「今度はどこでしょう？」

「ダンケルフェルガーとの境界門であろう。陸地が近い」

　ダンケルフェルガーの境界門で空を見上げているのはエックハルト兄様と何人もの騎士だった。境界門に詰めている青いマントのダンケルフェルガーの騎士達が何故か一緒に興奮の眼差しで空を見上げて騒いでいる。ダンケルフェルガーの騎士達がエアヴェルミーンの枝に触れないようにエックハルト兄様が必死に守っているのがわかる。

　……ここの守りが一番大変かも。

　フフッと笑っている間にまた次の境界門へ向かっていく。

　魔力がぐんぐんと吸い取られていき、空腹状態が飢餓状態になってきた気がする。少し頭がくらくらとし始めた。

　次の境界門にいたのはラウレンツ達、数人の騎士だけだった。旧ベルケシュトックとの境界門である。フェルディナンドがエアヴェルミーンの枝を置きに行く時に閉ざしたようで、領主会議の後、トラオクヴァールがアウブとして赴任してから両方のアウブの力で開けることになるそうだ。

　熱が下がってきたのではなく、自分の体内で熱が作れなくて体が冷たくなってきているのではないかと思った時にフレーベルタークとの境界門に到着した。

　ここにいるのはマティアスと騎士達だ。フレーベルタークの騎士達もいたが、ダンケルフェルガーのような祭り騒ぎにはなっておらず、ただただ圧倒されたような表情で上空を見上げているだけだった。

　フレーベルタークの境界門とエーレンフェストの境界門はかなり近い。あっという間にエーレンフェストの境界門の光景が映るようになった。エーレンフェストの境界門にいるのはコルネリウス兄様のはずだ。

「……おじい様？」

　何故かおじい様が境界門にいて、コルネリウス兄様を振り回している様子が見えた。

「昼間にジルヴェスターへ連絡したところ、貴族院の継承式を見に行くことができなかったのだから、境界門へは絶対に行くと言い張って飛び出したらしい。間に合うとは思わなかったが、コルネリウスを向かわせて正解だったな。他の者では相手できまい」

　フェルディナンドの呆れたような声にわたしは小さく笑う。少し目眩がして、意識してゆっくりと呼吸しなければならないほど呼吸が浅くなってきた。

「もう少しだ、ローゼマイン」

　すぐ隣にいるはずのフェルディナンドの声が少し遠く聞こえる。暗い海を通って水鏡に映る風景がこの城に戻ってくるまで耐えきらなければならない。何度か「大丈夫」と答えているけれど、声に力が入らず、盆状になっている魔石をつかんでいた手から力が抜けてくる。

「ローゼマイン、体の力を抜いて私にもたれかかっても構わぬから手は離すな」

　隣に座っていたフェルディナンドがわたしの手を上から押さえ、力が抜けてきた体を抱え込む。普段は冷たく感じるフェルディナンドの手が熱いくらいだった。

「癒しと変化をもたらす水の女神　フリュートレーネよ　側に仕える眷属たる十二の女神よ　我の祈りを聞き届け　聖なる力を与え給え……」

　フェルディナンドが早口で祝詞を唱え始めた。魔法陣は無事に完成したようだ。フェルディナンドの祝詞を聞いても、神々の御力は動かない。魔力がほぼ枯渇したのだろう。体が冷たくなって動かないのに、わたしの中は「やっと終わった」という安心感が広がっていく。

　……フェルディナンド様、後はよろしくお願いします。

　祝詞を聞きながらわたしはゆっくりと目を閉じた。

[------------------------------------------------]

記憶　その１

　暗闇にゆらゆらと漂う意識の中で一番に感じたのは、口の中が甘いということだった。グレーティアにうがい液を準備してもらわなきゃ、と思っていると、どこからかわたしを呼ぶ声が聞こえてくるようになってきた。何度も繰り返し、繰り返し呼びかけている声は耳に馴染みがある。

「……フェルディナンド様、ですよね？」

「遅い。もっと早く答えなさい」

　呼びかけに答えたらいきなり文句を言われた。理不尽だと思うのはわたしだけだろうか。

「これでも一応気が付いた時点で答えたので、これより早く答えるのは無理です。……姿が見えないのですが、フェルディナンド様はどこにいらっしゃるのですか？」

　辺りを見回してみるが、黒一面の視界の中にフェルディナンドの姿は見えない。それが何とも不安に思えて仕方がない。

「記憶を見る魔術具を使って意識を繋げているだけだ。落ち着きなさい」

「そうでした。魔力を染め終わったら記憶を繋げる予定でしたね。こうして意識が繋がったということは、もうフェルディナンド様の魔力に染まったのですか？」

「君に魔力を流してみたが、ほとんど抵抗がない。完全とは言えぬが、ほとんど私の魔力に染まっていると思われる」

　それはよかった。もうあの神々の御力に振り回されることもないし、元の魔力に戻ったということである。口の中が甘かったのは、魔力を染めるために飲まされた薬のせいだということにやっと気付いた。

「ローゼマイン、これから私が覚えている限りの、君にとって大事な者達の記憶を見せる。だが、私に与えられるのはきっかけだけだ。君にとっての家族が誰で、どのような存在だったのか、どれほど大事にしていたのか、今の自分と当時の君とどれほど違うのか……。思い出しなさい」

　命令口調のフェルディナンドの声には懇願が交じっていた。声は普段通りに淡々としているのに、何とも言えない焦りとわたしが記憶を取り戻すことを切望している気持ちが伝わってくる。

「あの、前に同調した時はわたしの記憶を見たフェルディナンド様がわたしの感情に振り回されたとおっしゃいましたが、今回はわたしがフェルディナンド様の感情に同調するということですか？」

「非常に不本意だが、そういうことだ」

　ものすごい拒否感と躊躇いと諦めが伝わってきた。できることならば見せたくないとフェルディナンドが考えていることがわかる。普段あまり感情を見せないフェルディナンドが一体何を考えて、どんな記憶を見せてくれるのか不謹慎ながらちょっと楽しみになってきた。

　真っ暗だった視界が突然神殿になった。まるで神殿に転移してきたみたいだ。神殿の廊下を歩いて神殿長室へ向かっているところだとわかるけれど、背が高すぎるフェルディナンドの視界から見る神殿の光景は自分の目で見る神殿の風景を少し違ってとても新鮮だ。きょろきょろと周囲を見回したいけれど、フェルディナンドの視界が固定されているために自分の見たいところは見えない。

「フェルディナンド様、あちこちを見たいです」

「記憶をそのまま流し込んでいるので無理だ」

　神殿長室の前には見覚えのない灰色神官が立っていて、アルノーが取次を頼んでいる。部屋の中へ通されると、ボテッとした大きなお腹の前神殿長が視界の中で動いていた。好々爺そうな表情の中に抜け目のない嫌らしい目がギラギラとしていた。

「前神殿長は嫌いな人ですけれど、こうして見ると何だか懐かしいくらいですね。……あ、わたしが来ましたよ！」

　ギルベルタ商会の見習い服を着たわたしが見覚えのない男女と一緒に部屋へ入ってきたのがフェルディナンドの視界に映る。この視点から見ると、平民時代のわたしの頭はフェルディナンドの腰くらいの位置にあり、袖に隠れて見えなくなる身長だ。

「ちっちゃい！　わたし、めちゃくちゃちっちゃかったんですね！　フェルディナンド様から見たら、こんな感じだったのですか。うわぁ、うっかり踏みそうだと思いませんでしたか？」

「自分を見た感想が、踏みそうとは……。それより、君が注目すべきは過去の自分ではなく、共にいる者達だ。彼等は君の両親で、名前はギュンターとエーファ。ギュンターはエーレンフェストの門番で、エーファは君の専属の染色職人だ」

　あ、と思った。下町の記憶がほとんどないのは家族の記憶がないからだ、とようやく気付いた。ベンノやマルクと交わした契約や商売関係の記憶はあるのに、下町で生活をしてきた記憶がほとんどない。

　……彼等がわたしの両親？

　警戒を露わにした男女がわたしを庇うようにして、「マインを差し出せ」と言う前神殿長と対峙している。

「お断りします。孤児と同じ環境ではマインはどうせ生きられない」

「そうです。マインは身食いでなくても、非常に虚弱です。洗礼式で二度も倒れ、その後何日も熱が引かないような子供なんです。神殿で生活などできません」

　男女の返答に、その後の展開が容易に想像できたわたしは血の気が引くのを感じた。平民が前神殿長に反抗するなんて一体何を考えているのだろうか。

　……処刑されてもおかしくないよ！？

　息を呑んだ途端、案の定、平民に反抗されて激昂した前神殿長が「神官に手を上げたら、神の名の元に極刑にしてやろう」と灰色神官達を部屋に招き入れて、幼いわたしを捕まえるように命じた。さすがに男女も諦めてわたしを差し出すのかと思ったが、予想は覆された。

「マインを守ると決めた時から、それくらいの覚悟はできている」

　突然視界の中で灰色神官達が殴る蹴るの暴力にさらされ、思わず一歩引きそうになった。その途端、フェルディナンドの声が響いてくる。

「相手が神殿長であろうが、他領の貴族であろうが、どんな脅しにも一切の迷いを見せず、娘を守る男が君の父親だ。……君達家族を見た時の私の驚きがわかるか？」

　フェルディナンドの声には懐かしさと羨望が交じっている。感情を隠すことに長けたフェルディナンドには珍しい感情の発露にわたしは目を瞬いた。

「わたしは今現在形で驚いています。ビックリするほど命知らずですよね」

「誰に何を言われても私の命を諦めず、ダンケルフェルガーまで巻き込んでアーレンスバッハに殴り込みをかけた君の父親らしいであろう？」

　クッとフェルディナンドが笑う。怖いはずの暴力を振るっている男なのに、フェルディナンドの目で見ると、その光景はひどく眩しいものだった。我が子を守って上位者に盾突く男女の姿に驚愕と称賛の入り混じった感情が向けられている。

　……ここまで子を愛し、守る親がいるのか。

　そんなフェルディナンドの心情が掠めると同時に、ちらりと別の男女が視界に映った。養父様によく似た容貌で、もっと年上のもっと優しげな男が「時の女神の御導きだ」と少し困った顔で告げ、淡い色合いの髪をふんわりとまとめた穏やかそうな女性が「グリュックリテートの試練でしょうか」とそっと溜息を吐く。自分の視点が二人を見上げているので、フェルディナンドの幼い時の記憶だろうか。

　ん？　と思った次の瞬間には神殿の光景に戻っていた。気のせいと流すには、やけにはっきりと見えた。あれもおそらくフェルディナンドの過去の記憶に違いない。

「……先代のアウブ・エーレンフェストですか？」

「今は目の前の光景に集中しなさい。君の記憶を取り戻すためだぞ」

　あからさまに質問への回答を避けて、フェルディナンドが意識を今の光景に戻していく。

「君もギュンターと同じで、家族に降りかかる理不尽を呑み込める子供ではなかった」

「わたくし、これでも結構理不尽を呑み込んできたと思うのですけれど……」

　そう反論した途端、幼いわたしが前神殿長を威圧し始めた。瞳は油膜がかかったように変色し、ゆらりと体全体から淡い黄色の靄のような物が見え始める。わたしが自分の両親らしい男女を庇って全身で怒りを表していた。

「ふざけるなはこっちのセリフ。父さんと母さんに触らないで」

　……父さんと母さん。

　その呼び方が頭の中でこだまする。その呼びかけを知っているはずだ。ひどく懐かしいと感じる響きに胸が痛くなるのに、記憶が繋がらない。

　前神殿長を相手にしても躊躇いなく立ち向かってくらいに大事にしてくれる両親がいて、二人を庇って虹色に目を光らせている幼い自分を見つめているのに、わたしには当時の自分の感情が理解できないのだ。むしろ、何故ここまで敵対して家族を庇うのか、と疑問に思う。自分から家族と離れた方が結果的には家族を守れるはずなのに、と考えてしまう。

　フェルディナンドが、小さな体で必死に家族を守ろうとしているマインの姿を見つめて感嘆し、自分では庇えないレベルの罪に足を踏み入れることに危機感を覚えている。今のわたしにはフェルディナンドに共感する方がよほど容易い。

「フェルディナンド様、記憶が繋がりません。知っているはずなんです。父さんと母さんという呼び方が懐かしいのに……わかりません」

　歯痒くて悔しくて泣きたくなってくる。思い出さなければならない人達だとわかる。できることならば思い出したい。でも、繋がらない。

「……ならば、別の人物も見てみるか？」

　フェルディナンドがそう言った途端、神殿長室から神官長室に景色が変わる。神官長室は見慣れているけれど、部屋の中は見慣れた家具の配置ではなくなっていた。テーブルを真ん中に、椅子が四角に設置されている。正面には見覚えのない金髪の男の子がいて、左右にラルフの両親とベンノとマルクがいた。

「これは一体何の集まりですか？」

「ここにいる者は全て記憶にあるか？」

「目の前の男の子だけがわかりません。他は知っていますよ」

　ベンノとマルクはわかるのか、とフェルディナンドが呟いた。ベンノとマルクはわかる。下町で商品を売り込んでいった記憶があるのだ。

「彼の名前はルッツ。右手に座っている男女が彼の両親だ」

「ラルフの両親だということがわかるのにルッツだけわからないってことは、わたしにとって大事な相手なのですね」

「……あぁ。君の代わりに紙を作り、ベンノの店で勤め、神殿の工房に出入りして孤児達を森へ連れ出し、グーテンベルクとしてエーレンフェスト内に印刷を広めてきた者だ。印刷に関しては君の手足であり、君にとっては非常に大事な、家族同然の存在だ」

「家族同然？」

　フェルディナンドが「見なさい」と言った。目の前では口下手なディードが言葉を探しながら一生懸命に自分の発した言葉の意味を説明している姿がある。

「自分の夢を否定され、行動を縛られ、家から逃げ出した彼を君が庇った。できれば彼を家族と和解させたい。和解できなければ孤児院で一旦引き取り、ベンノと養子縁組をさせたいというのが君の希望だった」

「どうしてフェルディナンド様が関わっているのですか？」

　平民の家族問題にフェルディナンドが首を突っ込んでいるのが不思議で仕方がない。

「孤児院長である君が幼いため、ベンノが養子縁組を行うならば私が手を貸す必要があった。職務の一環だ」

　フェルディナンドの口はそう建前を教えてくれたけれど、別の感情も流れ込んでくる。マイン家族以外の平民の家族について知りたかったという動機もあったらしい。

　話し合いの間、フェルディナンドはじっとディードとカルラを見ていた。ぶっきらぼうで粗野な言動の端々から息子に対する思いが感じられる。それがルッツには見えていないことがフェルディナンドにはすぐにわかったようだ。

　ルッツに向けられる感情は「これだけ親に心配され、愛されているのに一体何が不満だ？」という呆れと妬みが大半を占めていた。フェルディナンドは親側の心情がなるべく歪まないようにルッツに届くように思いやりながらその場を取り仕切っている。

　話し合いが進むにつれ、ルッツの顔が強張った表情から力の抜けた表情へ変わっていき、話題はルッツの養子縁組関することになった。ベンノの申し出をディードはハッキリと断る。

「アンタは経営者としては立派だろうし、商売人としても有能だろうよ。ルッツのことで面倒をかけても、それに付き合うだけの度量も寛大さもある。だが、親にはなれん」

　ベンノに対するディードの言葉にフェルディナンドの心に少し波が立った。親にはなれないと断言されるベンノへの警戒心、平民の親子関係への興味が交じっている。

「ベンノが親になれないというのはどういう意味か説明しなさい。何か悪い評判でもあるとでも言うのか？」

「いくら仕事の評判が良くても、養子にする理由の一番に店の利益を上げるようなヤツが親にはなれん。親になるというのは利益で考えることじゃない。違うか？」

　ディードの言葉にハッとしたのはベンノだけではなかった。フェルディナンドも軽く息を呑んでいた。その頭の中に蘇って響いたのは「領地のため」「時の女神の御導き」という男の声だ。

　誰の声なのかわたしにはわからない。けれど、予想外にディードの言葉が深く刺さり、フェルディナンドの中に諦めと似た感情が広がっていくことから考えれば先代のアウブ・エーレンフェストではないだろうか。

　ゆっくりと息をして、わずかに乱れた呼吸を整えるフェルディナンドを誰も見ていない。皆が注目しているのはディードとベンノのやり取りで、親の愛情を確かに受け取ったルッツの涙だ。

「ほれ、帰るぞ、バカ息子」

　ゴンとゲンコツを落とされても嬉しそうなルッツがひどく眩しくて羨ましい。自分には絶対に手に入れられないものを生まれた時から手にしている平民の子供をフェルディナンドは羨望の目で見つめている。

　疲れた気分で家具の位置を戻す側仕え達の仕事を眺めていたフェルディナンドは自分の隣にも平民の子供がいることを思い出した。見下ろせば、最初に命じた通りにまだ盗聴防止の魔術具を握っているマインがいる。

「あの家族が壊れなくて良かったな。家族と和解させて、ルッツを家に戻す。それが君にとって最良の結末だったのだろう？」

　盗聴防止の魔術具を握ってマインにそう言えば、マインは「よかった」と言いながら大粒の涙を流し始めた。感情の赴くままに泣いたり笑ったりするのは優雅ではない。フェルディナンドが泣き止むように注意しても、嬉し涙だからいいのだとマインは笑みを浮かべて泣き続ける。

「ルッツ、よかった……」

　まるで自分のことのようにルッツを案じていたマインをじっと見下ろす。赤の他人にここまで肩入れし、血を分けた家族でなくても深い情を交わすことができるマインをフェルディナンドが本気で不思議に思っていることが伝わってきた。

　……どうすれば君は……

「ローゼマイン！　ルッツのことは思い出せたか？」

「へっ！？」

　突然思考を掻き消すような大声で問われて、わたしは目を丸くする。フェルディナンドが何を考えていたのか、わたしが何を考えていたのか一気に霧散した。

「な、何の話をしていましたっけ？」

「ルッツのことを思い出せたかどうかを尋ねている」

「いいえ、思い出せません。ただ、当時のわたしがとても大事に思っていた相手だということはよくわかりました」

　より理解したのは、フェルディナンドが家族や親という存在にとても思い入れがあることだ。今のわたしには記憶にないルッツの言動よりも同調しているフェルディナンドの心情の方がよほど気にかかる。フェルディナンドが口にする「家族同然」はわたしが考えていたよりずっと重い意味を持つ言葉なのではないだろうか。

「ルッツに関しては全く記憶にないせいか、どうにも記憶の中にあるマインの心に同調できないのです」

「記憶が全くない？　姿を見ても、声を聞いても思い出さないということか？」

「そうですね。さっきの両親の記憶はもう少しで繋がりそうだったのですけれど、ルッツはあまりそういう兆しもありませんでした」

　フェルディナンドの感情に驚愕と困惑とジリジリとした焦燥感が交じり込んだ。「それほどルッツは大事な存在か」という呆れと苛立ちに加えて、どの記憶からならば繋げやすいのか、必死に考えているのが伝わってくる。

「夢の世界の記憶はあったな？　あれからならば少しは繋げやすいか？」

　麗乃時代の記憶はあるから、別に繋げる必要はないと思う。けれど、フェルディナンドにとっては何か思い入れがあるのかもしれない。フェルディナンドの心情が知りたくて、わたしはその記憶も見せてもらうことにした。

[------------------------------------------------]

記憶　その２

　……あ、ウチのリビングだ。懐かしい。

　神殿の風景が帰りたくても帰れない麗乃時代のリビングになった。

「せっかくですから書庫や自室みたいに本が大量にあるところへ行きたいです」

「残念ながら、そこには案内されていないので私の記憶にない」

「あああぁぁ、どうして前回連れていかなかったのでしょう？　前回行った図書館や書店でもいいですよ。本があるとここへ行きましょう」

「嫌だ」

　わたしが麗乃時代の本に囲まれたくてうずうずしているというのに、フェルディナンドは「本を読むだけで時間が無駄に過ぎそうなので知らなくてよかった」と考えていた。ひどすぎる。

　本のある所へ行こうと誘ったわたしの言葉は完全に無視したフェルディナンドは、おかんアートのある棚へ向かい、レース編みを指差した。

「前回、君から説明を受けたが、これが君の髪飾りの元になったレース編みであろう？」

「その通りですけれど、一度見ただけなのによく覚えていますね」

　何をどんなふうに見せて説明したのか、わたしが覚えていないのにフェルディナンドはしっかりと覚えていた。頭の構造が違うのだろう。感心していると、フェルディナンドの感情が少しざわついた。何というか、少し緊張しているような感じになった気がする。

「どうかしましたか、フェルディナンド様？」

「ローゼマイン、君はベンノに売り込んだ最初の髪飾りをどこで誰が何のために作ったか、覚えているか？」

「え？」

　じっとわたしの回答を待っているフェルディナンドの気配を感じて、わたしは記憶を探る。紙作りが一段落して、新商品として髪飾りをベンノに売り込んだことは覚えている。ギルド長がフリーダの洗礼式のために新しい髪飾りが欲しいと言って、あの頃にしてはかなりの大金を稼いだはずだ。

　……あれ？　でも、最初はどうして作ったんだっけ？

「わかりません」

「トゥーリのためだそうだ」

「髪飾り職人ですよね？」

「私がトゥーリと顔を合わせた回数は多くないが、髪飾りの納品に居合わせたことがある」

　ふっと光景が変わった。孤児院長室でエグランティーヌのために作られた髪飾りの納品が行われることになり、フェルディナンドが同席することが会話からわかる。

「わたくし、エグランティーヌ様の髪飾りの注文を受けたことは覚えているのですよ」

「そうか。では、何故ここまで不満顔でこちらを睨んでいたのか覚えているか？」

「そんな理由は記憶が繋がっているかどうか関係なく覚えていないと思います」

　記憶の中のローゼマインが警戒心と不満たっぷりの顔でこちらを睨んでいる。忙しい中で王族に贈る物の検分をしなければならないフェルディナンドも「面倒事を抱え込んできたくせにその顔は何だ」と不満たっぷりだ。半べそになるまでぐにっと頬をつねって留飲を下げている辺り、フェルディナンドは意外と子供っぽい。

　……半分は八つ当たりだったよ！

「彼女がトゥーリだ」

　緑の髪を後ろで三つ編みにした少女が、ギルベルタ商会の面々と一緒にやってきた。トゥーリを見て、少し強張った顔になるローゼマインをフェルディナンドはじっと観察している。

　フェルディナンドの心には、ユレーヴェから目覚めて最初の顔合わせにローゼマインがどの程度衝撃を受けるのか、二年間の空白で家族との関係にどれほど変化があったのか、不安と警戒に満ちている。衝撃や感情の波で魔力を暴走させることがないように、すぐにでも魔石を取り出せるように手は革袋に添えられていた。

　そんなフェルディナンドの心配を余所に、トゥーリは視線を交わして微笑むだけでローゼマインの強張りを解した。ニコリと微笑み青い瞳は一目でわかる愛情が籠っている。大事な、大事な相手を見る目。それは、思い出せない父さんと母さんの目と共通していた。

　……わたし、この目を知ってる。

「こちらはローゼマイン様にお納めしたく存じます」

　トゥーリはユレーヴェに浸かっている間に春の髪飾りを作っていたらしい。ローゼマインが本を前にした時のように嬉しそうに微笑んで、「付けてくださる？」とトゥーリが髪飾りを付けやすいように体の向きを変える。

　トゥーリは一度フェルディナンドに視線を向けてから、丁寧な仕草で今付けている髪飾りをそっと外した。少し乱れて肩にかかっていた髪を指先で整えながら背中へと流しながら新しい髪飾りを付ける。その手の触れ方が優しい。

「似合うかしら？」

「わたくしがローゼマイン様のために作った髪飾りですもの。とてもよくお似合いですよ」

　ローゼマインがトゥーリと視線を交わして笑う。ほんのわずかな触れ合いが大切な時間なのだと二人の表情から読み取れる。

　……もっと見ていたい。

　そう思ったのはわたしなのか、フェルディナンドなのか判別が難しい程だった。引き離されてもほんのわずかな触れ合いのために必死に手を伸ばすローゼマインとその手を取ろうとしている家族の細い繋がりがフェルディナンドには眩しくてならない。同時に、他に方法がなかったとはいえ平民の家族から引き離した自分の行いや二年間の空白を作ることになった襲撃に苦い思いを噛み締めている。

「フェルディナンド様は最初の髪飾りが何のためにできたのか、ご存じなのですか？」

「ベンノから聞いたことだが、姉のトゥーリのために君が作ったそうだ。洗礼式のお祝いに家族全員で作った、と……」

　フェルディナンドがベンノとの会話を思い出したのだろうか。孤児院長室から神官長室の風景になった。目の前にベンノとマルクがいて、わたしが貴族としての洗礼式でつけた髪飾りの納品が行われている。

「こちらでいかがでしょう？　ご注文通り、最高級の糸を使って華やかに仕上げました。髪飾りは、私の店に売り込んできた子供が姉の洗礼式の祝いに作った物が始まりです。ですから、ローゼマイン様の洗礼式の祝いにはとても相応しいと考えています」

「ほぅ」

「……ずっと巫女見習いの髪飾りを作ってきたトゥーリとその母親が糸を編み、父親がこの木を丁寧に削って作られました。ローゼマイン様にはお喜びいただけると存じます」

　ベンノの笑みは勝利を確信している時のものだ。そのベンノの笑みが消えると、またリビングの光景に戻った。

「思い出せないか？　君が髪飾りをどんなふうに作っていたか。本以外には興味が薄い君のことだ。始めたは良いものの、刺繍と同じようにすぐに飽きたのかもしれない。君が何か始める時は私が警戒するように、君の両親や姉も何を始めるのか恐々と見守っていたのかもしれない。もしくは、あの家族のことだ。最初から乗り気で皆で協力し合ったのかもしれないな」

　フェルディナンドの言葉で、脳裏に何かが浮かんだ。「糸が欲しい」とねだる自分の声が響き、丁寧に削られたかぎ針で編み始めた自分の手が映る。周囲に人影がいて、自分が一人ではないことがわかる。

「……います。いました。でも、できあがった小花に触れた指先が誰のものかわかりません。すごい、と褒めてくれたのは誰だったのでしょう？」

　小さな糸口を見つけたように、フェルディナンドの感情に期待が芽吹く。

「君の家族であろう。ここにあるような籠やバッグも一緒になって作っていたかもしれぬ」

　麗乃時代の母は途中で飽きたから、最後まで完成させたのはわたしだ。平民時代に作っていたバッグは隣で一緒に作っていた人がいる。脳裏に浮かぶ人影をつかもうと、わたしは必死に記憶を探る。

「リンシャン、蝋燭、石鹸、膠、インクの類も作ったと言っていたが、君一人だけで作れるはずがない。共に作った者がいるはずだ。すぐに体調を崩して寝込む君の看病をして、虚弱な君を支えて共に作っていた者がいたであろう？　どのように作っていた？　誰が支えてくれた？　心配して小言を言う者も多かったのではないか？」

　フェルディナンドの言葉にいくつもの影が頭の中を過っていく。「こら、マイン！」「おとなしくしていなさい」「マイン、何してるの！？」「ほら、行くぞ」と何人もの声が同時に喋っている。頭が痛いくらいだ。

「わたし、すごく怒られていて心配されていて……虚弱で力もなくてお手伝いも満足にできなくて……。だから、周囲に人がいっぱいいたんです」

　そんな話をしているうちに、目には熱いものが込み上げてきて視界が歪む。大事な記憶がそこにあることがわかる。

「でも、わたし、家族を大事にしていた記憶がないんです。本が一番大事で、本より大事なのは、フェルディナンド様くらいしか……」

「本より大事な存在が私しかいないのは、メスティオノーラに記憶の繋がりを切られた後、繋げられた者が私しかいないせいだ。家族に対する君の情は溺れるほど深いぞ」

　フェルディナンドの感情にほんの少しの歓喜と諦めと悲嘆が入り混じり、早く思い出してほしいと懇願が加わる。フェルディナンドの焦燥でわたしまで胸がざわざわしてきた。

「親や家族を思う君の気持ちは、それまで私が知らなかった感情だった。自分が父親やジルヴェスターに向けていた感情とは全く違う思慕の念。薄情と言うならば、私の方がよほど薄情だったと思う。君の感情は強くて深すぎる」

　フェルディナンドの言葉と共に麗乃のお母さんと食事が出てきた。フェルディナンドの記憶のままのメニューだ。炊きたての白いご飯、豆腐とわかめのお味噌汁、ぶりの照り焼き、肉じゃが、五目ひじき、お漬物が並んでいる。

「私自身は食べたことがないのに、おいしくて懐かしいと感じたのだ」

「フェルディナンド様にとってもお母さんの料理が懐かしい味になりそうですか？」

「いや。君に同調したからそう感じるだけであろう。私が懐かしくておいしく感じるのは君の考案した料理だ。……アーレンスバッハで知った」

　毒が入っていないと安心できるだけでも素晴らしい、というのは褒められているのだろうか。結構食いしん坊でおいしい物好きだと思っていたフェルディナンドの食事に対する基準が意外と低かった。

「毒入りかどうかが基準だなんてどういう生活を……」

　わたしがそう言った途端、目の前にある食事が和食ではなくなった。ローストビーフのような肉料理があり、年を取ったディートリンデのような女が酷薄な笑みを浮かべて手元を見ている。息苦しくて、吐き出したいのを必死に堪えるフェルディナンドの苦痛が一瞬で全身に広がった。

「この馬鹿者」

　フェルディナンドの怒声と共にすぐに女の姿は消えて麗乃の母親の姿に、そして、目の前の料理は和食に戻る。

「口に出す言葉は選ぶように。余計な物を見ることになるぞ。君は自分の記憶を取り戻すことだけを考えなさい。家族の記憶を取り戻さなければならない時にあのような記憶はいらぬ」

　フェルディナンドの感情が苛立ちと憎しみで波立つ。あれがフェルディナンドの日常的な食事風景だったのだろうか。

「先程の女性がヴェローニカ様なのでしょうけれど、ちらりと見えただけでも価値はありましたよ。自分がどれだけ家族に愛されているのか、よくわかりました。わたしの家族だとフェルディナンド様が見せてくれる人達とは目が全然違います」

「……あぁ、そうだ。君は本当に大事に育てられて愛されてきた」

　目の前に座って一緒に食事を摂る母親の目には深い愛情が見て取れる。幸せだな、と思った。こうして一目でわかるくらいに愛情を注がれて育てられたのだ。胸の中に喜びと幸せが降り積もっていく。

　同調した時の記憶だからだろうか、母親から真っ直ぐに向けられる愛情に当時のフェルディナンドが戸惑いを感じていたのも伝わってきた。わたしが感じていたのは、後悔と反省と懐かしさに家族への愛情だった。複雑に絡み合った自分の想いの中、最も強い感情は家族への想い。すでに失ってしまった麗乃の家族、自分が共に過ごしている家族、両方への愛情が渦巻いている。

　……皆、大好き。

「フェルディナンド様、家族の記憶が上手く繋がらないのに、気持ちだけが戻ってきたような気分です。家族のことがすごく大事なんです、わたし。皆のことが大好きで、大好きでたまらない。……大好きなのに、わかりません……」

　顔も見た。声も聴いた。名前もわかる。すぐそこにあるのだ。大事な人達と過ごした記憶まで本当にあと少しだと思うのだ。それなのに、薄い膜の向こうにあるような記憶がつかめない。

「ねぇ、フェルディナンド様。わたし、きちんと皆に愛情を返せていましたか？　もらいっぱなしではありませんでしたか？　どんなふうに大好きでしたか？」

　わたしの問いかけでフェルディナンドの中には苦痛に近い思いが広がっていき、目の前の光景が変わった。

　……神官長室だ。養父様とお父様がいるけど、いつの記憶だろう？

　アルノーに来客を告げられ、客を迎え入れる定例の言葉を告げる。フランによって案内されて神官長室へ入ってきたのは、トゥーリと手を繋いだ父さん、赤ちゃんをスリングに入れた母さんだった。

「マイン！」

「トゥーリ」

　トゥーリが父さんの手を振り解き、輝くような笑顔で青色巫女見習いの服を着たマインに駆け寄っていく。飛びつくように抱きしめた後、バッと離れてマインに怪我がないか確認し始める。

「父さんはすごく酷い怪我をして、怖い顔で迎えに来るし、母さんとカミルまで一緒に神殿へ行くことになるなんて、マインに何かあったんじゃないかって、ホントに怖かったんだよ。マインが無事でよかった」

　トゥーリは無邪気にマインの無事を喜んでいるし、わたしは自分の中にある「大好き」がトゥーリから発せられている愛情と噛み合った気がして何だか嬉しくなってきた。

　けれど、二人を見つめるフェルディナンドは悲哀に満ちている。これからあの家族を引き離さなければならないのだ。貴族に逆らった平民達の命を救う道があることは喜ばしいが、フランやダームエルから報告を聞く度に微笑ましさや羨ましさを感じ、マインが貴族院へ入る十歳までは何とか守ろうと思っていた繋がりを自分で立ち切らなくてはならない。

　マインの両親は状況を理解しているようで、辛そうに顔を歪めながら跪く。同じように跪くように言われたトゥーリが周囲を見回して慌てて跪く。マインが跪いていない状況に気付いたようで、顔を強張らせたのがフェルディナンドの視点からは見えた。

　人払いがされて、シンと部屋の中が静まる。養父様の行動にも躊躇いが見て取れるが、養父様は領主らしい顔で跪いている家族に着席と直答を許した。それからマインが貴族となり、養女になるという話をする。

「わたしのせい！？　わたしが迎えに行ったから、襲撃されたんでしょ？」

「違うよ、トゥーリ。襲撃してきた犯人は神殿にいたから、トゥーリが迎えに来なくても、わたしは襲われたんだよ。むしろ、巻き込んでごめんね。トゥーリ、怖かったでしょ？」

　トゥーリにとっての負い目とならないように、危険だったから貴族相手に攻撃してしまったこと、その罪が家族や側仕えにも波及することを防ぐために貴族になる、とマインが一生懸命に説明している。

　……違う。私の教育が行き届かなかったせいだ。

　アルノーがフランの伝言や前神殿長の訪れを正しく伝えていれば、事前に防ぐことが可能だった。俯いてぽろぽろと涙を零すトゥーリの頭をマインが手を伸ばして撫でるのを見ながら、フェルディナンドがギリと奥歯を噛みしめる。

　……このような予定はなかった。

　後悔と屈辱感に苛まれる中、マインの家族が一人ずつ約束と抱擁を交わしていく。フェルディナンドは深い家族の情に胸を締め付けられ、引き離される家族の姿に悔恨と罪悪感で押しつぶされそうになっていた。

「約束、するよ。絶対にマインの服を作ってあげる」

「大好きだよ、トゥーリ。わたしの自慢のお姉ちゃん」

「無理だけはしないで。元気でね。……愛しているわ、わたしのマイン」

「わたしも母さん、大好き」

「カミルは覚えていられないと思うけど、カミルのために絵本だけはいっぱい作るから、ちゃんと読んでね」

「父さんはいつもわたしを守ってくれたよ。わたし、いつか結婚するなら、父さんみたいにわたしを守ってくれる人が良いもん」

「マイン、そういう時は、父さんのお嫁さんになりたいって、言うんだ」

「うん。……わたし、父さんの、お嫁さんになりたい」

　胸が痛くなるような愛情と少しでも会えるようにしたいという希望を胸に、家族から約束をもらっているのに返せているものがないように思える。

「わたし、愛情をもらってばかりじゃないですか」

　泣きたいのにフェルディナンドの記憶の中なので泣けない。早く全部思い出したい。こんな大事な人達との記憶を失ったままではいられない。

「わたし、名前も変わるし、もう父さんのこと、父さんって呼べないけど……父さんの娘だから。だから、わたしも街ごと皆を守るよ」

　そう言ったマインの指輪が光った。感情が昂ぶり、魔力が溢れていくのがわかる。フェルディナンドが即座にシュタープを握って立ち上がった。マインの魔力で家族を傷つけるようなことがあってはならない。けれど、マインは「家族を思って、溢れた魔力だから、家族のために使わなきゃダメ」と溢れる感情をそのままに祈り始めた。

「高く亭亭たる大空を司る、最高神は闇と光の夫婦神　広く浩浩たる大地を司る、五柱の大神　水の女神　フリュートレーネ　火の神　ライデンシャフト　風の女神　シュツェーリア　土の女神　ゲドゥルリーヒ　命の神　エーヴィリーベよ　我の祈りを聞き届け　祝福を与え給え」

　マインが神に祈りを捧げながらゆっくりと両手を上げれば、神の名と同時に指輪からゆらゆらとした薄い黄色の光が溢れ始めた。補助する魔法陣も神々の記号を描くともない、ただ純粋な思いと祈りだけで祝福の光が舞う。

　……体に負担がかかりすぎる！

　止めるべきかどうかフェルディナンドが迷う間にもマインは祈る。自分だけの言葉で、神々にひたむきに祈る。

「御身に捧ぐは我が心　祈りと感謝を捧げて　聖なる御加護を賜わらん　痛みを癒す力を　目標に進み続ける力を　悪意を撥ね退ける力を　苦難に耐える力を　我が愛する者達へ」

　家族への愛情だけで紡ぎあげた祝詞によって部屋中に祝福の光が舞う光景はあまりにも美しく、フェルディナンドは言葉を失っていた。わたしもただフェルディナンドの視界から祝福の光が降り注ぐ様子を見つめる。

「ひゃっ！」

「ローゼマイン、どうした？」

　祝福の光が降り注いだ瞬間、突然記憶の数々が繋がり始めた。熱に浮かされて目覚めたところから次々と繋がっていく。家族と過ごした日々、ルッツに糾弾されて受け入れられた時、紙ができた喜び、印刷機の完成に興奮した時、ベンノやマルクやフェルディナンドの記憶も一部が欠けていたらしい。

　繋がり始めたことで初めてわかる。消えていたのは大事な人の記憶だけではなかった。悪い意味でも感情が振り切っていた時の記憶が消えていたらしい。孤児院の地階で蠢いていた幼い子供達の姿が脳裏に蘇る。トロンベ討伐でナイフを向けられて脅してきたシキコーザ、トロンベに巻きつかれて死ぬかと思った時、光の帯でレッサーくんごと捕らえられて妙な薬を飲まされた時、エグランティーヌとアナスタージウスに祠を巡るように言われた時、祠巡りを終えてグルトリスハイトを手に入れて助けられると思ったのに扉に阻まれた時、フェルディナンドが毒を受けて倒れた姿、殺された瞬間魔石になった男の記憶などが次々と繋がっていく。

「……ローゼマイン、ローゼマイン！」

　フェルディナンドの呼び声が聞こえてきた。早く返事をしなければ怒られる。返事をしようとしたものの躊躇ってしまうのは、すでに声が怒っているからだ。

　……まだ頭の中がぐるぐるしてるから、ちょっと待って。

　わたしは周囲の様子を窺うために恐る恐る目を開けてみた。フェルディナンドの顔が間近にある。目が合った瞬間、眉間に皺をくっきりと刻んでいたその顔が安堵に緩んだ。そのまま抱きしめられ、溜息に混じるような「よかった……」という囁きが耳に響く。

　……え？　誰？　本人？　何があったの？　もしかして、フェルディナンド様が壊れた？

[------------------------------------------------]

記憶　その３

　一度に繋がった記憶のせいで頭がぐらんぐらんしているし、フェルディナンドと同調していたせいか、ひどく下町の家族が恋しくてならない。一体フェルディナンドに何が起こっているのかよくわからないけれど、ぎゅーしてくれるのは非常に珍しいことなので、便乗してわたしも背中に手を回す。その途端、フェルディナンドがビクッとしてバッと離れた。

「何をするつもりだ？」

　そんな嫌そうな顔で言わないでほしい。だいたい、それはこちらのセリフだと思う。わたしの目覚めと同時に抱きしめてきたのは一体誰なのか、と問いただしてもいいのだろうか。一瞬そう思ったけれど、余計なことを言ったらどうでもいい言い争いが始まるだけだし、頭が動かない今のわたしでは全く勝ち目がない。

「フェルディナンド様だけぎゅーして落ち着くのはずるいと思うので、わたくしが落ち着くまでぎゅーの延長を要求します」

「……延長だと？」

「同調した上に記憶が一気に繋がったので、頭の中も感情的にもぐちゃぐちゃなのです」

　問いただすのを止めて自分の要望を述べた結果、わたしはものすごく嫌そうな顔をしたフェルディナンドからぎゅーの延長を獲得した。ここでようやく周囲を見回す余裕ができて、未だに礎の間にいることと、片膝を立てて座るフェルディナンドに抱え込まれていることがわかった。道理で体が冷たくないわけだ。

「よいしょっと……」

　ぎゅーしやすいように少し体を捻って、フェルディナンドの背中に手を回した。慣れた匂いと人の温もりが心地良いけれど、フェルディナンドの鼓動がとても速くて、心なしか呼吸も浅い気がする。

「……こうしている内に落ち着きますよね」

「私は全く落ち着かぬ」

　溜息混じりの声と共に引き剥がされそうな気配を察知したわたしは、背中に回した手に急いで力を入れてしがみついた。

「落ち着かないのはフェルディナンド様にもまだまだぎゅーが足りないせいです、きっと。いっぱいぎゅーしていいですよ」

「そういう意味ではない」

　フェルディナンドは疲れ切った声で面倒くさそうに言うくせに、わたしの背中にまわされた片方の腕に力を込め、もう片方の手でわたしの髪をいじり始めた。絶対にぎゅーが足りないくせに相変わらず素直ではない。

「じゃあ、どういう意味があってフェルディナンド様からぎゅーしてきたのですか？」

「……あれは……突然同調を切った上に、いくら呼びかけても全く目覚めなかった君が悪い」

　本当に嫌そうな声でそう言われた。今度こそはるか高みに続く階段を上がっていたのではないか、とフェルディナンドは気が気ではなかったらしい。

「……わたくし、それほど危険な状態だったのですか？」

「ここ数日間ずっと生死の際を歩いていた君がどうしてそこまで呑気なことを口にできるのか、私には本気で理解できぬ」

　神々の御力の影響で魔力が通常状態になった時点で死んでいた。魔力を減らさなければならないが、回復薬を使うこともできないわたしは、体力と魔力のどちらが先に尽きるかという危険が常に付きまとっていた。それに加えて、枯渇と同時にわたしの魔力を染めてできるだけ迅速に魔力を回復させなければ今度は魔力枯渇で死ぬ可能性が高かった。この数日間はいつどこで死んでもおかしくない。

「それは知っています。眠るのも、魔力が回復するのも怖かったですから。でも、フェルディナンド様が何とかしてくれると思っていたので、わたくしはそれほど悲観的でもなかったのですけれど……」

　魔力さえ枯渇させたら何とかなるだろうと、わたしは比較的楽観的に考えていたが、後を任されたフェルディナンドは大変だったようだ。

「君の魔力が枯渇するや否や同調薬を飲ませ、私の魔力を液状化させた薬を飲ませ、更に記憶を覗く魔術具を使って魔力を流し込んで意識に呼びかけたにもかかわらず、君はなかなか反応を示さなかった。おまけに、記憶はなかなか戻らず、やっと糸口がつかめてきたと思えば、全属性の祝福が降り注ぐと同時に突然同調が切れたのだぞ」

　一体何があったのか、とフェルディナンドも意識を戻したけれど、先に同調を切ったわたしは意識が戻らないまま無反応だったらしい。全属性の祝福の記憶から、わたしの中にわずかに残る神々の御力に何か反応があったのではないかと絶望的な気分になっていたそうだ。

　そんなフェルディナンド側の話を聞くと、「全属性の祈りと一緒に記憶が一気に繋がり始めて、気が付くと同時に抱きしめられたのでフェルディナンド様が壊れたのかと思いました」とはちょっと言いにくい。

「フェルディナンド様のおかげで記憶は戻りました。もう心配しなくても大丈夫ですよ」

　トントンと背中を軽く叩きながらそう言っているのに、フェルディナンドの鼓動は少しも落ち着かない。わたしの髪で遊ぶように動いていた指が止まり、抱きしめる腕には更に力が籠る。心地良いから痛いくらいになってきた。何だか様子がおかしいことが心配になってわたしはフェルディナンドを見上げる。

「フェルディナンド様、どうかしましたか？

「ローゼマイン、君は……」

　掠れた声が途切れて、その後が聞こえない。わたしが「何ですか？」を聞き返すと、しばらく躊躇いの色を滲ませていたフェルディナンドが腕を緩めて少し体を離した。

「君は平民に戻りたいか？」

「はい？」

　フェルディナンドが突然何を言い出したのかわからなくて、わたしは目を瞬いて首を傾げる。

「今ならば神々の魔力が枯渇したために、君がはるか高みへ上がったように見せかけて平民に戻すことができるかもしれぬ」

　ドキリとした。同調して、平民時代の記憶が色濃く蘇っている今のわたしにはものすごく魅力的な提案で飛びつきたくなった。けれど、わたしが平民に戻ることが不可能なこともわたしはよく知っている。

「……あの、フェルディナンド様。もしかして、それって余命宣告ですか？　死ぬまであとわずかな時間しかないので、その間だけでも家族とって感じの……」

「そうではない。同調したことで理解したが、君にとって最重要な存在はルッツであろう？　君を平民に戻すことができれば、大事に思う者と添い遂げることができるのではないかと思ったのだ」

　……フェルディナンド様、本気？

　喉がひりひりとしてきて、鼓動が速くなる。わたしの呼吸まで浅くなってきた。

「平民に戻すって具体的にどうするおつもりですか？　わたくし、マインとしてはすでに死んだことになっているのですよ！？　アレキサンドリアの礎や図書館都市計画だって……」

「君が領主会議で一度アウブ・アレキサンドリアとなり、私が正式な婚約者となる。対外的に私がアウブ・アレキサンドリアになれるように形式を整え、その上で、ここしばらくの無理がたたって君が亡くなったことにすれば比較的すんなりと平民に戻せるのではないかと思われる。礎も図書館都市計画も私が実行すればよかろう」

　グーテンベルク達の移動に合わせてアレキサンドリアの平民として戻れば、基本的には事情を知っている者達だ。口を噤ませるのもそれほど難しくはなく、協力的にしてくれるだろう、とフェルディナンドは言った。

「エーレンフェストでは不可能でも、私がアウブ・アレキサンドリアとなれば君達家族を守ることが可能になるかもしれぬ」

　家族の元に戻れるかもしれないという期待と共に脳裏に浮かぶのは、わたしの家族を守るためにたった一人でアウブとして戦い続けるフェルディナンドの姿だ。誰にも弱味を見せずに全部の責任を自分だけで抱え込むこの人がどうなるのか、すぐに見当がつく。

　胸が痛い。わたしは自分の胸元を押さえる。何に対して胸が痛いのかわからない。

「フェルディナンド様はわたくしに対して罪悪感とか責任感を背負い込む必要はないのですよ？　十分にお返ししていただいていますから」

「……君の幸せは、あの家族と共にあるではないか。先程同調して思いついただけなので、詳細については色々と考えなければならぬが、一考の価値はあろう」

　全く実現できないことをフェルディナンドが口にするはずがない。躊躇いを見せていたことから考えても、難しいが全く実現不可能ではないということだろう。

　頭の中で「フェルディナンド様が戻せるって言うんだから戻ればいいじゃない！」と家族の元に戻りたいわたしが叫び、「フェルディナンド様に全部背負わせるつもり！？　そんな無責任なことしたくないよ！」と今まで貴族として生きてきたわたしが心の中でぶつかり合う。

「フェルディナンド様のおっしゃる通りですよ。わたくしは家族と少しでも一緒にいたかったし、今でも一緒にいられればいいと思っています。……でも、同じくらい、フェルディナンド様にも幸せになってほしいのです。わたくしを平民に戻すために、フェルディナンド様を犠牲にするつもりはありませんから」

　わたしがキッとフェルディナンドを睨むと、フェルディナンドが表情を消して緩く首を横に振った。

「記憶が全て繋がったのならば、君の魔石恐怖症も戻っているかもしれぬ。魔石を扱うことができなければ貴族として生きることさえ難しい。アウブならば尚更だ。おそらく魔力がほぼ同じの私がアウブとしての調合を行うことになる。君にできるのはお飾りのアウブだ。君がいてもいなくても変わらぬ」

　フェルディナンドの言葉は大半が正しいけれど、一部は正しくない。女神の化身がアウブとなり清めることになったからこそ、アーレンスバッハは反逆の領地から新しい領地として生まれ変わることが許された。わたしがアウブでなければ、アレキサンドリアが他領の貴族達からどのように思われるか、どう扱われるのか。フェルディナンドにそれがわからないはずがない。

「どんなに役立たずなお飾りアウブでも、女神の化身の肩書は必要でしょう？　わたくしを平民に戻すためにどこまでの負担を背負い込むつもりなのですか？　わたくしがそれに気付かないほど愚かで無責任だとお考えなのですか？」

「……愚かで無責任だとは思わぬが、君は家族といるべきだ。今しかないのだぞ？」

　だからといって、フェルディナンドを犠牲するつもりはないのだ。フェルディナンドがツェントやアウブの地位や権力が欲しくて堪らない野心家で、アレキサンドリアを安定させるために第一夫人どころか、第三夫人まで得ることに何の躊躇いもなく、果ては愛人まで囲い込みたいような男だったら、わたしだって何の心配もなく家族の元に帰っただろう。

「フェルディナンド様が心配すぎて戻れるわけがないでしょう！　他人に頼るのが下手で、全部自分で仕事を抱え込んで薬漬けの毎日なんて、あっという間に過労死確実ですよ」

「だが、今ここで決意して平民に戻らねば、君がルッツと添い遂げる芽はなくなり、私と結婚することになるぞ」

　顔をしかめてそう言うフェルディナンドに、わたしはそれまでの勢いを削がれてしまった。家族の元に帰りたいという話が何故ルッツと添い遂げるという話になっているのだろうか。

　……あれ？　何かずれてない？

「あの、フェルディナンド様。一体いつの間に結婚話になったのですか？　わたくしが平民に戻ったところでルッツがと結婚できるわけがありませんよ。わたくし、貴族の間では魔力も地位もあるのでそれなりの嫁候補になるかもしれませんけれど、平民から見れば不健康で子供が望めない時点で嫁候補から完全に外れますから」

　貴族と平民では妻に求めるものが全く違う。家族の元に帰りたいとは思うけれど、別にルッツと結婚したいと思ったことはない。ルッツはわたしをここに繋ぎとめてくれた大事な人だが、結婚相手としてはもっと他の女の子が相応しいと思う。わたしが相手じゃ可哀想だ。

　ちなみに、社交や刺繍が苦手なわたしは多分貴族としての嫁の基準も満たしていないと思う。政略結婚でもなければ、わたしに言い寄ってくるような変わり者はいない。

「それにしても、フェルディナンド様と結婚することになるというのは何ですか？　嫌ならば結婚しなければいいだけではありませんか」

　アウブの結婚はアウブ自身が相手を決めて、ツェントの承認を受けるのだ。フェルディナンドがそんなに嫌そうな顔でわたしと結婚をする必要はない。

「……そうだな。嫌ならば、結婚しなければ良い」

　フェルディナンドが一度目を伏せてゆっくりと息を吐く。それから、指を三本立てた。

「ローゼマイン、今の君には三つの選択肢がある。一つめは平民に戻って自分の望む者と結婚する。二つめは今までの計画通りに事を進め、私と結婚する。三つめはエグランティーヌ様に命じて王命を解消させ、私との婚約を破棄し、アウブ・アレキサンドリアに相応しい他の男と婚約する。……君はどの選択肢を選ぶのだ？」

　……はい？

　いきなり突きつけられた選択肢にわたしは目を丸くした。

「フェルディナンド様、大変申し訳ないのですが、意味がよくわかりません。フェルディナンド様の言い方ではまるでわたくしとフェルディナンド様がすでに婚約しているようではありませんか。一体いつの間にわたくしは婚約していたのでしょう？」

「君がアーレンスバッハの礎を得た時点だが？」

「へ？」

　ポカンとするわたしにフェルディナンドはトラオクヴァールに下された王命の内容について説明する。わたしがアーレンスバッハの礎を得た時点で、年若く執務になれていない独身の女性アウブになったわたしは王命の婚約者としてフェルディナンドを婿にしなければならないらしい。

「そんなこと、誰も一言も……」

「戦いの最中にわざわざ言うようなことでもないし、一連の戦いが終わった時には女神の御力で君の感情を不用意に揺らさないようにした方が良い状態だったではないか」

「あ……。だから、側近達の態度も変わったのですね」

　近付いたら文句を言われていたのに、側近達が急に何も言わなくなったことが不思議だったのだが、その謎が解けた。ポンと手を打つわたしを見ながら、フェルディナンドがそっと溜息を吐いた。

「エーレンフェストで君が政略結婚の相手として私を理想的だと言ったから、側近達がそのように動き始めたのだ。君の迂闊な言動が全ての原因ではある」

「えぇ！？」

　そんなことになっていたとは知らなかった。

「わたくしが迂闊なせいで大変なことになるところでしたね。フェルディナンド様は責任感が強いですけれど、そこまでわたくしの面倒を見なくていいのですよ。ですから、王命の解消を……」

「ローゼマイン、勘違いするな。私が望んで計画したことだ」

　フェルディナンドが何を言い出したのかわからなくて、わたしはフェルディナンドを見つめる。何の計画があったのだろうか。

「貴族と平民として離れても細い繋がりを大事にする君と、君が伸ばした手を取ろうとしている家族とのやり取りを私はずっと見てきた。そんな君が私を家族同然だと言ったのだ。そして、言葉通り、アーレンスバッハへ離れても、繋がりを途切れさせることなく手を伸ばしてくれていた。私の家族観を作ったのは君だ。同調して嫌でも知ったであろう？　私がどれほど君の家族のような繋がりを渇望していたか」

　わたしはコクリと頷いた。フェルディナンドが見せてくれた記憶は、家族への憧れと羨望。それから、わたし達家族を引き離すことになった後悔と苦渋でいっぱいだった。

「エーレンフェストでいたままならば感じなかったかもしれぬ。君と君の家族の細い繋がりを守っていければ、それで満足できたであろう。だが、エーレンフェストを離れると、君との繋がりは周囲の声で断たれていく。私は君との繋がりを失いたくなかった。……だから、君を得るためには王命の婚約を利用するのが最も効率的で実現性が高かった」

　するりとフェルディナンドの手がわたしの頬を撫でる。ぞわりと背筋が震えた。

「王命を下したトラオクヴァール様をツェントの地位から落としたのだから、すでに王命を下した当人にも私の計画は邪魔できぬ。新ツェントにも君からの命令がない限りは余計なことをするな、と脅してある」

「脅すって……フェルディナンド様」

　わたしの言葉を封じるように、頬を撫でていたフェルディナンドの指先がわたしの唇を押さえた。大して力は入っていない。ほんの少し触れているだけだ。それでも、反論は完全に防がれたし、何だか息をするのも躊躇ってしまう。

「女神の化身となった君の伴侶として周囲に異論を唱えさせないように、私は全力を尽くした。君の本物の家族という立場を他の男に渡したくなかったからだ」

　ゴクリと喉が鳴った。フェルディナンドの目にある熱を感じて怖くなってきた。そんなふうに熱を向けられても、わたしは同じ物を返せない。落ち着かなくて今すぐにここから逃げ出したくなってくる。けれど、わたしの背中にある手がそれを許してくれない。

「私の計画を崩すことができるのは、新ツェントの名を受けている君だけだ、ローゼマイン。平民に戻ることで君が家族と幸せな時間を過ごす姿を見せてくれるのか。このまま私との婚約を受け入れて、私を君の家族にしてくれるのか。それとも、新ツェントに命じて王命を排するのか。……君が選べ」

　じっとわたしの反応を伺っているフェルディナンドの薄い金色の目から目が離せなくて息が詰まる。そんなふうに言われて選択を迫られても困るのだ。この期に及んで、わたしは恋愛感情というものが理解できない。フェルディナンドがわたしを求めているのはわかる。でも、同じだけの感情を返せない。

「……どうする、ローゼマイン？」

　しばらくの沈黙の後、答えを促したフェルディナンドが一度目を伏せた。

　そっと息を吐いて視線を上げる。次に視線が合った時、薄い金色の目にあるのは諦めだった。背中にあった手が下ろされ、唇に触れていた手が離れていく。自分の希望が叶わぬことには慣れている。何よりも雄弁にそれを語る手の動きと、全てを諦めたような目に思わず首を横に振った。

　……ダメ。

　恋愛感情は理解できないけれど、このまま離れることだけは許容できなかった。滅多に自分の望みを口にすることがないフェルディナンドが諦めるのを見たくなくて、わたしはフェルディナンドに手を伸ばす。自分から抱きついた。

「ローゼマイン、何を……」

「この期に及んで何ですが、わたくし、男女間の恋愛感情なんてわかりません！」

「……男に抱きつきながら言うことではないと思うが、知っている」

　フェルディナンドの声に呆れが交じり、少し体の力が抜けた。

「私の望みは君の家族になることで、今更君に男女間の機微など期待しておらぬ。家族同然だったこれまでと同じであればそれで良い」

「……今までと同じで本当に良いのですか？」

「構わぬ」

　自分が手に入れた家族同然の立場さえ失い、他の男が本物の家族としての情を得る。それが不快で堪らないだけだとフェルディナンドは呟く。フェルディナンドの手がわたしの髪に挿された虹色魔石の髪飾りに触れた。別に恋愛感情を求めているわけではないと言われて、わたしの体からも力が抜けていく。

「わ、わたくし、魔石恐怖症が戻る可能性が高いので、できる限り努力するつもりですけれど、アウブとしても伴侶としてもお荷物になりますよ。それでもいいのですか？」

「君が平民に戻ることを選択すれば、お飾りのアウブさえいなくなるではないか。君こそ、この機会を逃せば平民に戻ることは叶わぬぞ」

「家族の元には帰りたいですけれど、わたくしに平民の生活ができるとは思えないのですよね。水汲み一つできませんでしたから、相当お荷物になりますよ。……フェルディナンド様が家族として振る舞える場を時々準備してくださるのであれば、それでいいのです」

　フェルディナンドの腕が背中に再び回された。そのままきつく抱きしめられる。

「……私を選んでいいのか、ローゼマイン？」

「その言葉、そっくりそのままお返しします。フェルディナンド様こそ後悔しないでくださいね」

[------------------------------------------------]

名捧げの石と婚約の魔石

「……あ」

　居心地の良い温もりに身を委ねているうちにハッとした。神々の御力が消えたら、人がいないところで早めにしておかなければならないことがあったのだ。

「フェルディナンド様。名捧げの石、お返ししておきます。神々の御力が消えたので、もう必要ないですよね？」

　神々の御力をまとっているわたしに触れられないのは困るという理由で、フェルディナンドはわたしに名を捧げていた。あれは返しておかなければならない。ごそごそとフェルディナンドから預かっている名捧げの石を取り出す。

　白い繭のようになっている名捧げの石を差し出したけれど、フェルディナンドはそれを手に取ろうとはせずに、少しだけ視線を逸らした。

「……私の名は必要ないのか？」

　どことなく落ち込んだ雰囲気を感じて、わたしは内心で焦る。必要ないという言い方はまずかったらしい。

「必要ないというか、フェルディナンド様の名はわたくしが持っているべきではないのですよ」

「何故だ？」

「家族関係の中に主従関係が入るのは嫌じゃないですか。家族は対等でなくちゃダメなのです」

　いずれ夫婦になるのだとすれば、尚更名捧げなんて必要ないと思う。フェルディナンドは名捧げの石とわたしを見比べるだけで、受け取ろうとはしない。

「何かご不満ですか？」

「……別に私の名を返さなくても、対等になれる方法はあるはずだが？」

　フェルディナンドにそう言われて、わたしは首を傾げた。何かあっただろうか。うーん、と考え込んでレオノーレの言葉を思い出した。確かヴェローニカ派の子供達の名捧げを受け入れるかどうかについて話をしていた時に、「愛する方に名を捧げ、捧げられ、永久の想いを誓うことには憧れます」と言っていた。

「わたくしもフェルディナンド様に名を捧げれば、ということですか？　確かに対等にはなれるでしょうし、ロマンチックかもしれませんけれど、現実的ではないでしょう？　レオノーレはそう言っていましたし、わたくしも同じように思います」

「現実的ではない、か」

「はい。だって、残される者が困るでしょう？」

「残される者とは誰の話だ？」

　よくわからないというようにフェルディナンドが眉間に皺を刻んで先を促す。

「残される者というのは……えーと、その、わたくし達がいずれ……結婚したら、ですね。こ、子供が、生まれる可能性も、全くないわけではないでしょう？」

　まずい。何だろう。「結婚」とか「子供ができる」ということを考えたり、それをフェルディナンドと話をしたりすることがどうにも恥ずかしい。自分に全く関係がないと思っていた事柄が急に身近になったせいだろうか。

　……うぅ、平常心。平常心。

「わたくしはアウブですから、血を分けた子ができなくても養子縁組などで跡継ぎは必要になるでしょうし……まぁ、そういう感じの、そう、図書館都市を守っていってくれる子達のことですよ。レティーツィア様も入るでしょうか？　王命を利用してわたくし達が婚約するのでしたら、王命の養子縁組も行いますよね？」

　わたしの言葉にフェルディナンドがフンと鼻を鳴らした。

「王命だからな。レティーツィアを領主候補生として置いておくためには先にアーレンスバッハの慣習を廃する必要があるが、君との星結びの儀式の後で養子縁組をする予定だ。ランツェナーヴェ戦で孤児になった貴族の子という意味ではレティーツィアも同様なので、養子縁組を終えるまでは基本的な生活を神殿でさせるつもりだが……」

　フェルディナンドの言葉にわたしはホッと胸を撫で下ろした。被害者であるフェルディナンドの判断に任せることにしていたが、レティーツィアの罪を隠すことに同意してくれただけでわたしは安堵する。利用されたとわかりきっている子供にきつい罰を与えずに済んでよかった。

「……それで、子供と我々の名捧げに一体どんな関係があるのだ？」

「ですから、その、わたくし達はふ、夫婦になるわけですよね？　片方がはるか高みに向かった時に名を捧げていたことで、もう片方まではるか高みへ向かうのですよ？　残された子供はとても苦労すると思います。片親を亡くしただけでも大変なのです」

　麗乃時代のわたしは父を交通事故で亡くしている。母親が仮に名を捧げていて一緒に亡くなっていたらと考えると、とても怖いではないか。こちらの世界でもベンノ、ギーベ・イルクナー、養父様のように親を亡くして苦労している者は少なくない。

「養父様も早くアウブを告ぐことになって苦労されたのでしょう？　成人していても苦労するのに、その子が未成年だったらどうなりますか？　アレキサンドリアにはおじい様のような引継ぎのできる成人の領主一族がいません。今のところはわたくし達だけですよ。レティーツィア様を入れても三人です。碌に引継ぎもできないまま、アウブ夫婦が共に亡くなる危険性は排除しておかなければならないと思いませんか？」

　フェルディナンドが意外そうなというか、考えていない部分を指摘された時の顔でわたしを見下ろす。

「なるほど。君の言いたいことは理解した。正直なところ、図書館が関わらぬ自分の将来など全く関心のなさそうな君が、そのように将来を見据えた発言をするとは思わなかったので少々驚いた」

　フェルディナンドはひどいことを言いながら、わたしに立ち上がるように促す。そのくせ、名捧げの石を手にしようとしない。わたしは「早く立ちなさい」と言うフェルディナンドを軽く睨みながら立ち上がった。

「フェルディナンド様、名捧げの石を……」

　フェルディナンドは軽く手を振りながら立ち上がると、周囲に散らばっている薬入れや様々な器具を見下ろし、「片付けは明日だな」と呟いた。

「フェルディナンド様」

「こちらへ来なさい。体調はどうだ？　魔力は落ち着いているか？」

　わたしの額や首筋に触れて健康診断を行う。睡眠前にどの薬を飲ませるのが適当かと思案し始める様子を見れば、名捧げの石を受け取る気が全くないことは嫌でもわかる。

「フェルディナンド様！」

「……二年ほど後に返してもらうので、それまでは持っていなさい。君がシュツェーリアの盾を手放す必要はなかろう」

　そう言いながらフェルディナンドは当たり前のようにわたしを横抱きにして歩き始めた。

「え？　シュツェーリアの盾？　名捧げの石で作れるのですか？」

　頭の中に疑問符が生えてくる。首を傾げてみたけれど、フェルディナンドはそれ以上何も言わずに礎の間を後にした。

「ローゼマイン様、フェルディナンド様。なかなかお戻りならないので心配しておりました」

「魔力が枯渇した後、ローゼマインの意識がなかなか戻らなかったのだ。今はもう心配ない」

　アウブの自室には側近達が集まっていたようで、急ぎ足で駆け寄ってきた。ハルトムートとクラリッサはいかに古代魔術の再現が素晴らしかったのか教えてくれる。夜空に次々と光る魔法陣が出現する様子はまさに女神の化身に相応しい大魔術だったそうだ。

「境界門へ行った騎士達はまだか？」

「そろそろシュトラール達が戻ると思われます」

「そうか。……アンゲリカ、ローゼマインを部屋へ」

　フェルディナンドはわたしをアンゲリカに渡すと、側仕えに指示を出し始めた。

「グレーティア、リーゼレータ。ローゼマインにはブレンリュース入りの回復薬を飲ませ、ゆっくりと休ませることを最優先にしてほしい。今日は入浴させずにヴァッシェンで済ませ、体調を見た上で明日以降にするように。ゼルギウスは私が戻り次第、休めるように準備を。ハルトムート、クラリッサは文官達を集めよ。ユストクスは明日以降に調合室を使えるように整えておくように」

　次々と指示を出すフェルディナンドには疲労の色が濃い。わたしは思わず手を伸ばした。

「フェルディナンド様、シュラートラウムの……」

「ローゼマイン、頼むから今日くらいは神々に祈るのを止めてくれないか？」

「……わかりました。明日にします」

　わたしはアンゲリカに抱き上げられたまま、部屋へ運ばれていく。

「畏怖を感じる神々の御力は完全に消えたようですね。銀色の布がなくても近付けます」

「ほんのりと光り輝いていらっしゃったローゼマイン様はとても神々しかったのですけれど、こちらの方が落ち着きます」

　リーゼレータ達にそう言われて、わたしはやっと神々の御力が消えたことを実感できた。

　朝起きたら気分爽快だった。よく眠れたし、魔力が回復しても苦痛がないのだ。最高である。髪を結うリーゼレータの手付きには震えもない。何というか、人間に戻った気分だ。

「ローゼマイン様。朝食を終えたらフェルディナンド様が体調を確認したいそうです」

「わかりました、グレーティア。今日は読書の時間が取れるかしら？」

「どうでしょう？　ローゼマイン様の体調次第と思われますが、たくさんの予定が詰まっていますから……」

　グレーティアがそう言いながらクラリッサに視線を向ける。予定はどうやらクラリッサが把握しているようだ。お任せください、と大きく頷いたクラリッサが書字板を開く。

「領主会議まで本当にお忙しくなりそうですよ。まずエントヴィッケルンを行って、次に新ツェントを迎えて罪人の処罰を行い、婚約式を終わらせなければならないそうです。エントヴィッケルンを行う貴族街は大変なことになっていますし、文官達はエントヴィッケルンに向けた設計図の作成に駆り出されています」

「え？　婚約式ですか！？　ちょっと待ってください。どうしてそのようなことに……？」

　昨夜、礎の間で婚約を了承したけれど、婚約式の話は聞いていない。昨日の今日でどういうことなのか、とわたしが目を丸くすると、クラリッサも青い目を丸くして首を傾げた。

「できるだけ早くエントヴィッケルンを行わなければローゼマイン様の専属であるグーテンベルク達の住まいや戦いの中で生まれた孤児達の居場所に困りますし、ランツェナーヴェの暴れた街並みに新ツェントをお迎えするのは不敬でしょう」

　エントヴィッケルンを急ぐ理由はわかった。今日の住まいに困る者達がいるならば、確かに急いだ方が良いだろう。領主会議で正式にアウブが承認されると同時にグーテンベルクと一緒にフラン達も呼び寄せようと思えば、エントヴィッケルンで作った建物に扉や窓をつけて置く必要がある。

「でも、エグランティーヌ様も領主会議の準備でお忙しいでしょう？　今お招きする必要があるのでしょうか？」

「新ツェントの訪れは罪人の処分や引き渡しに加えて、これからお住まいになる離宮と繋がっていたランツェナーヴェの館が確かに消されたことを確認する意味もあるようです。一番重要なのは、ローゼマイン様とフェルディナンド様の婚約を承認することだそうですけれど」

「ツェントによる婚約の承認は領主会議の時に行うことですよね？　この忙しい時期に前倒しにする必要があるのですか？」

　婚約式を行うには心の準備が必要だよ、と思いながらわたしが唇を尖らせると、側近達が目を見開いてわたしを見た。

「婚約式をしなくて困るのはローゼマイン様ではございませんか？　未成年のローゼマイン様がお一人で領主会議へ向かうのは少々荷が勝ち過ぎていると存じます」

「領主会議前に婚約式を行い、ローゼマイン様の正式な婚約者になっていなければエーレンフェスト籍のフェルディナンド様は領主会議へ同行することができませんよ？」

「他に領主一族がいらっしゃいませんし、ローゼマイン様はアレキサンドリアで一月も過ごしていません。以前のアーレンスバッハの事情の情報に疎く、全ての貴族と顔を合わせたこともないのですからフェルディナンド様のご協力は必須ではございませんか？」

　リーゼレータ、クラリッサ、グレーティアから口々に言われて、わたしは息を呑んだ。そんなことは全く考えていなかったが、確かに婚約式をしなければ困るのはわたしだ。大勢の貴族達の前で魔石の交換をしたり、神々の名前が次々と出てくるような壮大な愛の告白をしたりするのが恥ずかしいとか、ちょっと心の準備をする時間が欲しいなんて躊躇っている場合ではなかった。

「予定とその事情を理解しているならば話が早い」

　健康診断の後、調合室に入ったのはわたしとフェルディナンドとユストクスとハルトムートとクラリッサの五人だ。フェルディナンドの調合に慣れた者でなければ、下準備の手伝いさえ邪魔になるという理由で名捧げ済みの文官だけが調合室への入室が許された。護衛騎士は調合室の外で待機している。

「婚約式で交換する魔石と領主会議へ同行する貴族達のブローチを調合しなければならないが、君の魔石恐怖症の方はどうなのだ？」

　わたしは作業台の上に並べられた素材の中にあるいくつかの魔石を見た。すぅっと頭から血の気が引いていき、体が小刻みに震える。震える指先で魔石をつまんで、へらりと笑って見せた。

「ほ、ほら。へ、平気ですよ。嫌な記憶が怒涛のように押し寄せて一気に繋がったせいでしょうか？　個々の衝撃は少しずつ和らいだ感じですから……」

「腰が引けた涙目で震えながら言われても全く説得力はないが、気を失うことはなさそうな分、確かに以前よりはマシか。どうしようもなければ、私が代わりに作成することも考えたのだが……」

　……え？　フェルディナンド様が自分で自分用の婚約の魔石を作るってこと？

　その様子を思い浮かべて、わたしは首を横に振った。お守りをあげた時に「もらうことない」と喜びを噛みしめていたフェルディナンドの姿を覚えている。さすがに婚約の魔石をフェルディナンドに作ってもらうのは嫌だ。できる限りのことをしてあげたいと思っている。

「わたくしが作りますよ。自分がやるべきことをしなかったら後で大変なことになるというのは、今までにたくさん見てきたではありませんか。ここで逃げたら女が廃ります」

「口調は勇ましいが、婚約の魔石の作成はそのような戦いに赴く騎士のような覚悟で行うことではないぞ」

　フェルディナンドが心配そうな顔をしながら、「手を出しなさい」とわたしの前に拳を差し出した。なるべく魔石を視界に入れないようにしてくれている気遣いを感じながら、わたしは手を差し出した。

「レーギッシュの鱗から取った魔石だ。女神の化身に相応しい大きさの物を選んでいる。元々が鱗だとわかっていれば、多少は恐怖も和らぐのではないか？」

「恐れ入ります」

　ほとんど視界に魔石を入れないまま、わたしは震える手に力を入れて、魔力を流していく。この魔石を自分の魔力で染めるのだ。冷たい感触に少し背筋が震える。それでも、手の中にあって見えていないのでまだマシだ。

「あまり無理をせずに取り掛かりなさい」

「わかっています。魔石になんて負けませんから」

　わたしが自分の手を睨むようにしながら頷くと、フェルディナンドが一つ溜息を吐いて、頭を軽く何度か叩いた。

「力みすぎだ。魔力を流す前に、魔石に刻む言葉を考えた方が良いのではないか？……あぁ、私に質問してきた例の言葉は避けるように」

「入れませんよ！」

　意味を知った上で直接的な閨への誘い文句なんて刻めるわけがない。あの頃の自分の失敗に今更ながら赤面しつつ、わたしはフェルディナンドを睨む。

「ふむ。一体君がどんな言葉を刻むのか楽しみだ」

　フェルディナンドはそう言って、ユストクスとハルトムートとクラリッサに命じて、寮へ移動するために必要になる魔石のブローチの作成に取り掛かり始めた。領主会議に同行する者、領主会議前に寮を整える者など何人分も必要だ。

「アウブのお仕事なのに押し付けてしまって申し訳ございません」

「私はそのために婚約者になったのだ。君は君でなければできないことに専念しなさい」

　仕事を引き受けてくれるフェルディナンドに申し訳ない気持ちと、婚約の魔石を完璧に仕上げたいという気持ちが溢れてくる。

　……フェルディナンド様がビックリするようなすごい言葉、考えるんだから！

　魔石を染め終わると、羊皮紙を手に取る。魔石に刻む文字を決めなければならない。講義の時にヒルシュールは「わたしらしく、かつ、相手に喜ばれる言葉」を刻むように言われたけれど、どんな言葉ならばフェルディナンドが喜ぶだろうか。

　……「貴方の研究所を建てます」って、わざわざ刻まなくてももう約束してるし、「家族になりましょう」も今更って感じだよね。

「うぐぅ……」

　考えても全くいい言葉が出てこない。もう「貴方の光の女神になりたい」くらいのオーソドックスな言葉でいい気がしてきた。

「ローゼマイン様、まだ悩んでいらっしゃるのですか？」

「クラリッサはハルトムートに贈る魔石に何と刻んだのですか？」

「共にわたくし達の女神を崇めましょう、と」

　……聞くんじゃなかった。

　わたしがガクリと項垂れていると、クラリッサが「他人の言葉など参考になりませんよ」と小さく笑った。反論のしようもない。確かに全く参考にならなかった。

「ローゼマイン様がフェルディナンド様にしてあげたいことでも良いのではありませんか？」

　クラリッサにそう言われ、わたしはふっと思いついた言葉を羊皮紙にスティロで書き込む。羊皮紙に書き込む姿が見えたのだろうか。フェルディナンドが近付いて来る。

「できたのか？」

「こっちを見ないでくださいませ。当日まで内緒です」

　わたしは羊皮紙を隠して睨むと、フェルディナンドが苦笑しながらわたしが使う調合鍋から距離を取って背を向けた。ユストクスがこちらを見ながらニヤニヤと笑っている顔にパンチしたい。

「お手伝いしましょうか、ローゼマイン様？」

「二年生の講義で行うことですもの。わたくし一人で作ります」

　ハルトムートとクラリッサのお手伝いを断り、わたしは調合鍋に魔石を入れて魔力を流していった。わたしもフェルディナンドも全属性なので、特に属性の調整をしなくても良いので早い。

　虹色魔石の中に金色で文字が浮かび上がる。

「貴方のマントに刺繍をさせてください」

[------------------------------------------------]

エントヴィッケルンとエグランティーヌの訪れ

　窓がなくて真っ白な壁で四方を囲まれた礎の間には大神の貴色に輝く魔石が七つ浮かんでいる。それぞれの貴色の魔石が光を放ち、キラキラとした光の粉のような物が零れ始めた。供給の間で流され始めたフェルディナンドの魔力が礎に届いたのを合図に、わたしは金粉の詰まった革袋を手元に引き寄せる。

「さて、始めましょうか」

　今回のエントヴィッケルンは先日話し合われていた通り、城と貴族街、それから、神殿と平民達のいる下町の一部を新しくすることになっている。

　荷物をまとめて運び出さなければならないにもかかわらず、エントヴィッケルンまでにたった五日の猶予しか与えられていないため、貴族達は大変なことになっていたらしい。わたしの部屋はまだ荷物が少ないので問題ないけれど、執務室周辺は荷物の整理に大忙しだったそうだ。

　あまり使わないところから装飾品や家具が運び出され、カーペットやタペストリーが剥がされていく。ここの土地では夏場にカーペットを使う習慣がないようで、「少し早い模様替えだと思えば……」と側仕え達が言い合っていたらしい。

　わたしがうろうろすると大規模な片付けの邪魔になるので、エントヴィッケルンが問題なくできるようにフェルディナンドから復習を命じられたり、取り繕った顔で魔石に触れられるようになるための練習をさせられたり、大きくなった体に合わせて大人用のフェシュピールを扱う練習をさせられたりしていた。読書の時間を取ってくれなかったのはひどいと思う。

　でも、フェルディナンドに文句を言ったら、エントヴィッケルンの後で新しくできた図書館に本を運び込む前に文官達へローゼマイン十進分類法を教え込み、わたしの好みや考えに基づいて図書館を整えても構わないと言われたので、おとなしく読書以外のことをしていた。常に図書館をどうするのか考えていたので、フェシュピールの練習に身が入っていなくてロジーナに怒られたけれど、仕方がない。

　……建物自体は大英博物館閲覧室をモデルにしてるんだよね。うふふん、ふふん。

　城の敷地内に建てる新しい図書館は、巨大な円形の図書館だ。1852年にアントニオ・パニッツィが計画し、1857年に完成した大英博物館閲覧室を基に設計してもらった。実は、図書館内にわたしの部屋もある。アウブを引退したら、わたしはソランジュのように図書館で暮らすのだ。老後がとても楽しみになった。

　渡り廊下で繋がる研究所はフェルディナンドの好みで設計されているらしいが、詳しいことは知らない。フェルディナンドが文官達と話し合っていたようなので、自分好みにしたのだろう。わたしは設計図のままに作るだけだ。

　わたしは設計図が手の届く場所にあることを確認し、革袋に片手を突っ込んで金粉をつかんだ。礎の上に腕をまっすぐに伸ばして手を開けば金粉がサラサラと零れていく。その様子を見ながらもう片方の手にシュタープを握った。シュタープを「スティロ」で変化させ、最初に最高神の記号を空中に描いていく。

「我は世界を創り給いし神々に祈りと感謝を捧げ、創られた世界に変化を願う者なり」

　手にあった金粉が勝手に浮かび上がり、スティロのペン先に集まり、わたしが描く魔法陣を金色に彩っていく。光を帯びている魔法陣がわたしの手の動きに合わせて複雑さを増し、どんどんと大きくなってきた。くるくると回る魔法陣が礎の上に完成し、眩く光る。

「全てを吸収する力を我が闇の神　シックザントラハトの名の下に」

　わたしがシュタープを振り下ろすと、魔法陣がゆっくりと礎に向かって下りていく。魔法陣が礎に触れた。礎が光る。わたしは設計図をつかんだ。

「新たに創造する力を我が光の女神　フェアシュプレーディの名の下に」

　手を開けばバサバサと風に煽られるように設計図が魔法陣に向かって飛んでいき、その中心で金色に燃え上がった。

「御身に捧ぐは命の欠片　祈りと感謝を捧げて　大いなる夫婦の御加護を賜わらん　新たな憩いの場をこの地に」

　魔法陣が欠けないように、消えないように、わたしは魔力を注いで金粉を継ぎ足していく。魔法陣が眩く光って完全に消えるまで、ただ魔力を注ぐのがアウブとしてのエントヴィッケルンだった。

　エントヴィッケルンが終わると、新ツェントの来訪と婚約式がある。図書館に入れる本は箱詰めにされたまま書庫に積み上げられ、わたしによって本棚に並べられる瞬間を今や遅しと待っているというのに後回しにされている。せっかく新しい図書館ができたのいうのに、エグランティーヌの来訪を控えたアウブの仕事と婚約式の準備で大忙しだ。

　……ああぁぁ、わたしの図書館！　ハァ、しょんぼりへにょんだよ。

　エグランティーヌがやって来た時のタイムスケジュールの確認や騎士達の配備など、ほとんどのことをフェルディナンドが決めてくれているが、わたしは全てに目を通して全体の流れを把握しておかなければならない。

　エグランティーヌ達が国境門から来るので、境界門へ出迎えに行って、城へ転移させる。その後、一緒に昼食を摂ることでツェントをもてなし、婚約関係のお話合いをする。婚約の承認が終わってから中央に捕らえられている罪人達のメダル破棄をする貴族院の実技試験を行う。アーレンスバッハ街とアレキサンドリアの街の設計図を見比べながらランツェナーヴェの館が完全に潰れていることを確認しつつ境界門まで騎獣で向かう。

　……結構忙しいな。

「ツェント来訪時の予定は把握いたしましたが、ローゼマイン様の婚約式の衣装は決まっていらっしゃいますか？　エーレンフェストに連絡を入れて、送ってもらわなければならない荷物などはございませんか？」

　レオノーレに尋ねられて、わたしはリーゼレータ達に視線を向けた。これから婚約式までに新しく衣装を誂える時間はないので、手持ちの衣装を使うしかない。

「わたくしは王族とのお話し合いで着た、エーレンフェストの染め布にアーレンスバッハの布を重ねた衣装が一番相応しいと思うのですけれど、リーゼレータ達はどう思って？」

「エーレンフェストとアレキサンドリアの結びつきを願うローゼマイン様のお心がよく表れていると思います。それに、こちらの衣装は王族と会うことを考慮して作られていますから、婚約式でまとっても場違いになることはございません」

「そうですね。布地も最高品質の物が使われていますし、揃いの髪飾りもございます。それで決定するのでしたら、ユストクスに衣装を伝えて、フェルディナンド様の衣装を合わせていただかなくてはなりませんね」

　グレーティアがハッとしたようにそう言って、部屋を出ていく。

　……あの衣装で婚約式だって。

　王族との話し合いの時とは違って、トゥーリが作ってくれた髪飾りや、母さんが染めてくれた布とフェルディナンドに贈られた布で作られた衣装をまとうのがとても嬉しくて、自然と笑みが浮かんでくる。

「フェルディナンド様とのご婚約が決まり、ローゼマイン様がお幸せそうで何よりです」

　クラリッサの言葉に、「え、ちょっと違う」と言いかけて口を噤む。ここでそれを言ったらダメだ。

「婚約式でローゼマイン様の魔石を持って控えるのはリーゼレータでよろしいですか？」

　クラリッサの問いかけに頷き、リーゼレータに付き添いをお願いしていると、ローデリヒが「あの、ローゼマイン様」と会話に入ってきた。

「魔石の準備は終わったようですが、婚約式で述べる求婚のお言葉は決められたのですか？　事前に必ず確認するように、とフェルディナンド様から言われていますが……」

　作家をしているローデリヒが添削を命じられたらしい。わたしは当日の髪型や装飾品について話をしている側仕え達から視線を外し、ローデリヒを見た。

「困ったことに、実はまだ決まっていないのです。フェルディナンド様を婿として迎えるので、わたくしから求婚するのでしょう？　女性からの求婚の言葉は前例がすくないではありませんか。歴史上の女王の言葉を参考にするか、聖典やエーレンフェストの恋物語からそれらしい言葉を抜き出すか……とても悩んでいるのです。どちらにせよ、決めるためには読書をしなければなりませんね」

　……婚約式における求婚の言葉は領地にとっても大事なことだからね。いやっふぅ！

　困ったわ、とポーズを取りながらも口元が緩むのを止められない。わたしが心の中で拳を握っていると、ローデリヒが「ご安心ください」と微笑んだ。

「どのような意味合いの言葉で求婚するのか、ローゼマイン様から大まかな方向性を聞き出し、私が聖典などから抜き出すようにフェルディナンド様から命じられています。ローゼマイン様の予定は詰まっているので、読書の時間は取れないそうですよ」

　……ふんぬぅ！　フェルディナンド様めっ！

　先回りで手を打たれていた。悔しすぎる。わたしは読書時間がないまま、次々と積み上げられていく木札に目を通していった。

　エグランティーヌがやってくる日、わたしとフェルディナンドはそれぞれの護衛騎士を連れて境界門で待機していた。国境門が光り、門柱の扉から騎獣に乗ったツェントの側近達が次々と飛び出してくる。最終的にアナスタージウスとエグランティーヌが出てきて、エグランティーヌはグルトリスハイトを掲げて国境門を一度閉めた。

　わたし達がいる境界門の屋上へ新ツェントが降り立つと、エグランティーヌとわたしを除いた皆がザッと一斉に跪く。わたしも跪こうとしたけれど、エグランティーヌが軽く手を挙げて止めた。

「時の女神　ドレッファングーアの糸は交わり、こうしてお目見えすることが叶いましたね、ローゼマイン様」

「領主会議前のお忙しい時にご足労いただき、まことに恐れ入ります、エグランティーヌ様」

　エグランティーヌの面差しが少し変わっていた。穏やかそうな微笑みはあまり変化がないように見えるけれど、ふわふわとしたお姫様らしい雰囲気が消えた。

　……短時間でこれだけ雰囲気が変わるなんて、本当に大変なんだろうな。

「ツェント・エグランティーヌ、本日の予定はすでにお伝えしている通りです。転移陣で城へ向かいましょう」

　フェルディナンドの声に思考が途切れた。わたしは境界門の屋上にコピペしておいた転移陣に手を触れる。魔法陣が浮かび上がったことに驚きの声を上げた中央の騎士達に転移陣へ上がってもらい、城へ移動した。

　アレキサンドリアらしいお魚をたくさん使った昼食を終え、アウブの執務室へ入る。

　範囲指定の盗聴防止の魔術具。範囲内にいるのは、エグランティーヌ、アナスタージウス、フェルディナンド、わたしの四人だけだ。

「大変素晴らしいお食事でした。何度かアーレンスバッハの食事をいただいたことがあるのですけれど、ずいぶんと風味が違うので驚きました」

「アーレンスバッハの者達には悪いのですけれど、香辛料が強すぎると、わたくしが食べられないのです。エーレンフェストの料理方法に香辛料を少しずつ加えて新しい味を探しているところなのですよ」

　エグランティーヌだけではなく、アナスタージウスも満足してくれたようで、雰囲気が穏やかだ。そんなにおいしいと思ってくれたのか、とちょっと感動していると、「ここ数日間、エグランティーヌの食欲が落ちていたが、今日は食が進んだようだ」と言ってエグランティーヌを見つめる。

　……相変わらずエグランティーヌ様のことしか見てないね。

　ちょっと呆れるところもあるけれど、面差しの変わったエグランティーヌをアナスタージウスが心配するのもわかる。

「ツェントのお仕事は大変でしょうからね」

「……えぇ。今まで見えなかったもの、見ずに済ませてきたものを短期間にたくさん見ました。わたくし、フェルディナンド様やローゼマイン様に謝らなければならないことがたくさんあることに気付いたのですよ」

　フッと微笑むエグランティーヌの言葉に胸が痛くなる。今更謝られても過去は変えられないと思う気持ちと、また信用したくなる気持ちが同時に浮かんできた。そんなわたしの心を見透かすように、フェルディナンドがニコリと微笑む。

「最高神にも過去を変えることは不可能ですが、神々の御加護により未来をより良きものに変えることは可能ではございませんか。そのためにもこちらの書類に承認のサインをお願いします」

　謝罪で過去は変わらないからわかりやすい誠意を見せろ、とヤクザのような意味合いのことを言いながらフェルディナンドが婚約と領主会議への同行の承認を求める。

　フェルディナンドの差し出した書類に目を通していたエグランティーヌが頬に手を当ててコテリと首を傾げた。

「ローゼマイン様とフェルディナンド様の婚約は王命によるものですから、廃するのではない限りわたくしの承認は必要ございませんけれど……」

「そちらは王命であることを証明する書類です。ツェントが変わったこと、他領の貴族達への周知を容易にするために一応承認をいただきたく存じます」

　フェルディナンドの言葉にエグランティーヌはまだ納得していないような表情をしつつ、書類にスティロでサインしていく。

「書類にサインするくらいは構いません。でも、わたくし、本日のお招きは星結びの儀式を早める相談だと思っていたのですが……」

「はい！？」

　エグランティーヌが突然何を言い出したのかわからなくて、わたしは目を見開いた。

「ローゼマイン様に宿った神々の御力を消すために冬の到来を早めたのですから、星結びの儀式を早めたいというご相談ではないのですか？」

　……ぎゃーっ！　やっぱり誤解されてる！

「冬なんて到来していませんっ！　違うのです、エグランティーヌ様！」

「ローゼマイン、落ち着きなさい」

「このような誤解をされて落ち着けませんよ。だって、そんな……」

　完全に誤解されている上に、星結びの儀式を早めたいと考えているなんて思われるなんて恥ずかしすぎるではないか。落ち着けと言われても、どうすれば落ち着けるのか。わたしはこういう時にどうすればいいのかわからない。

「エグランティーヌ様、私は冬の到来を早めていません。数種類の薬を使ってローゼマインを染めました。御存じでしょうが、冬の到来ではあれほど短時間に染まりません」

「確かに驚くほど短時間でしたね」

　……ねぇ、止めて！　冬の到来を話題にするの、ホントに止めて！

　頭を抱えているのはわたしだけではなかったようだ。アナスタージウスが慌てた様子でエグランティーヌを止める。

「誤解だったのであれば、星結びの儀式はローゼマインの成人後でよかろう。この話は終わりだ。染まる早さなどこれ以上話題にするのではない！」

　夫に止められたエグランティーヌが「そうですね」と微笑む。

「お二人は王命による婚約を受け入れるようですけれど、トラオクヴァール様から下された王命はそれだけはございませんよね？　レティーツィア様の件はどうなさるおつもりですか？」

　レティーツィアの教育係となり、次期アウブに育て、次期アウブ・アーレンスバッハにするというのがもう一つの王命だった。

「アレキサンドリアがアーレンスバッハの慣習を引き継ぐ必要はないので、我々はローゼマインがアウブ就任後もレティーツィアを領主候補生として遇するつもりです。そして、私は王命通り、レティーツィアの教育係として次期アウブに相応しい教育を受けさせるつもりですし、星結びの儀式の後で養子縁組をしても構わないと考えています」

　貴族として生活するためには後ろ盾が必要になる。レティーツィアが領主候補生としての義務を果たすならば養子縁組をするし、次期アウブに相応しい実力があれば跡継ぎに据えても構わないとフェルディナンドは考えているらしい。

「ただし、レティーツィアをアウブ・アーレンスバッハにせよという命令は、アーレンスバッハが消えるため、私だけの力では実行不可能です」

　少なくとも自分が受けた王命の中に、レティーツィアを次期アウブ・アレキサンドリアにせよというものはなかった、とエグランティーヌを見つめてフェルディナンドがニコリと笑う。

　面倒事を丸投げする時の作り笑いだと思ったので、わたしはそのまま成り行きを見守ることにした。フェルディナンドが抱える面倒事は少ない方が良い。

「トラオクヴァール様の新しい領地をアーレンスバッハと名付けてヒルデブラント様との結婚後にレティーツィアをアウブとするのか、レティーツィアの成人後にアーレンスバッハという名の領地を作って与え、ヒルデブラント様を婿入りさせるのか……。王命を実行する方法はいくつかあります」

　フェルディナンドが口にしたのは、どれもこれも王族に負担がかかる提案ばかりだ。アナスタージウスが少しばかり嫌な顔になった。

「フェルディナンド、実行不可能な王命として廃するという方法が抜けている」

　指摘を受けたフェルディナンドが毒々しい笑みを浮かべ、アナスタージウスとエグランティーヌを見つめる。

「実行不可能な王命として廃することは簡単ですが、安易な王命の廃止は今後の王命が重みを失うことにも繋がります。トラオクヴァール様を始めとした王族の方々には、自分達が下した王命の重さというものをぜひとも背負っていただきたいものです」

　……面倒事を丸投げする時の作り笑いじゃなかった。報復する時の笑顔だったよ、これ。

　青ざめた二人からわたしは視線を逸らす。王族はフェルディナンドに対して色々としでかしたのだから、少しくらい報いを受けることに関しては特に何も思わない。レティーツィアに不利益がない限りは自業自得と思って王命を実行してほしいものである。

「そういえば、罪人達の取り調べは終わりましたか？」

「えぇ……。エーレンフェストやフェルディナンド様から説明があった通り、トルークが蔓延していたようですね。記憶を探っても肝心なところがわからない者が多くて難儀いたしましたけれど、一通り終了しました」

　ディートリンデを始めとするアーレンスバッハの貴族達の記憶を読むのは大変だったようだ。次期ツェントになるつもりだったディートリンデは「不敬だ」と騒ぎ、エグランティーヌがグルトリスハイトを得たことを聞くと「わたくしの物を盗むなんて！」と憤慨していたらしい。記憶を読む担当者は精神的にひどく大変だったようだ。

「こちらが取り調べを終えたアーレンスバッハの貴族の魔力です。ローゼマイン様、彼等のメダルの破棄をお願いします。メダルの破棄が終わった後は魔力を供給する者として、各領地に引き渡す予定です」

　エグランティーヌの言葉にアナスタージウスが名前の書かれた紙を出した。取り調べを終えた犯罪者の名前が並んでいる。

「貴族院の実技と変わらぬ。気楽にしなさい」

「……メダルの破棄を気楽になんてできませんよ」

　フェルディナンドが準備させていたメダルの入った箱を睨むようにしながらわたしはシュタープを出した。自分以外の者達が盗聴防止の魔術具の範囲から出るのを待って、アナスタージウスの置いて行った紙をトンと押さえる。

「アオスヴァール」

　紙に書かれた名前が光り、箱から次々とメダルが飛んでくる。それを手にして、わたしは一度きつく目を閉じてゆっくりと息を吐いた。

「グルトリスハイト」

　メスティオノーラの書を出して魔法陣をコピペすれば魔法陣はすぐに完成する。盗聴防止の魔術具の範囲の向こうで試験官を兼ねさせられているエグランティーヌがこちらを見ていた。

　ツェントになったエグランティーヌは見たくないものを直視し、ツェントの重責を担っている。アウブになったわたしが罪人の処罰から逃げるわけにはいかない。

「高く亭亭たる大空を司る、最高神たる闇の神よ　世界を作りし、万物の父よ　我が闇の神　シックザントラハトの名の下に　光の女神の定めを破りし者達へ　相応しき罰を」

　黒い靄が出始めた魔法陣にメダルを次々と投げ込んでいく。黒い魔法陣にメダルがピタリと貼りつき、燃え始めた。

「御身が御座す　はるか高みへ続く階段を閉ざし給え」

　メダルの破棄が終わったことを確認し、「実技は合格です」とエグランティーヌが宣言したことでアナスタージウスが「これを試験にするなど正気か？」とフェルディナンドを見ていたが、そういうことはもっと前に言ってほしいものである。

「こちらが街の設計図です。境界門までお送りしながら、新しくなったアレキサンドリアの街をご覧にいれましょう」

　フェルディナンドはアーレンスバッハとアレキサンドリアの貴族街の設計図を取り出し、ランツェナーヴェの館の場所がどこなのか、どのように変わったのかをエグランティーヌとアナスタージウスに説明し始める。完全にランツェナーヴェの館がなくなり、離宮と繋がるところがないことを二人は確認しなければならないのだ。

　騎獣に乗り込んで新しい街の上空を駆けた。ランツェナーヴェの館があった場所は貴族街の一部になっているのが一目でわかる。新しくできた城で生活を始めているわたしも、エントヴィッケルンを終えたアレキサンドリアの街をこうして上空から見るのは初めてだ。城、図書館、研究所を中心にした貴族街と、神殿や平民達の中心施設が集まる辺りの上空をぐるりと巡り、境界門へ向かう。

「本当にこの短時間でエントヴィッケルンを終えたのだな。一部とはいえ大変だったであろう」

　境界門へ一度降り立つと、街を見て回ったアナスタージウスが感心したような声を出した。エグランティーヌが「ローゼマイン様の優秀さがよくわかるでしょう？」と微笑んで頷く。

「わたくしではなく、全ての調整を行ってくださったフェルディナンド様が優秀なのですよ。わたくしは言われるままに実行しただけなのです」

「あら。では、図書館が中心の図書館都市をフェルディナンド様が設計されたのですか？」

「そうです。いつもわたくしの望みを実現可能な形にしてくださるのはフェルディナンド様ですから」

　フェルディナンド様はすごいでしょう、とわたしが胸を張ると、エグランティーヌがフェルディナンドを見上げてクスクスと笑う。フェルディナンドが嫌そうに顔をしかめたけれど、お構いなしだ。

「お二人が作っていくアレキサンドリアをまた訪れたいものですね」

「その頃には平民達の過ごすところもエントヴィッケルンが終わって、神殿教室が始まっているかもしれません。納本制度によって図書館には本が溢れるほどになっているかもしれませんし、図書館と繋がっているフェルディナンド様の研究所だけではなく、魔木、魔魚、魔獣の専門研究所もできているかもしれません」

　ランツェナーヴェの館を潰し、乱闘で傷んだ貴族街を整えるために急いでエントヴィッケルンをしたけれど、まだまだやりたいことはいっぱいだ。

「どれもこれも夢物語では済ませません。全部実行するのです。ね、フェルディナンド様？」

「……いずれ、の話だ」

　フェルディナンドの返答にアナスタージウスが何とも言えない表情で、エグランティーヌの肩を叩いた。

「行こう、エグランティーヌ。私はあまり長居したくない」

「あらあら、微笑ましいではありませんか」

　そう言いながらもエグランティーヌは国境門を開くためのグルトリスハイトを出す。

「……では、ローゼマイン様。時の女神 ドレッファングーアの御導きを心待ちにしていますね」

[------------------------------------------------]

婚約式

　婚約式だから、と薄く化粧が施され、髪が結われていく。トゥーリの髪飾りと虹色魔石の髪飾りが挿し込まれ、シャラリと微かな音が耳元で響いた。

　数人がかりで着せられた衣装は春らしい若葉が染められ、淡い緑のスカート部分に晴れた青空のような薄い布が重ねられている。薄い布を少しつまみ上げてから指を離せば、ふわりと羽のような動きを見せた。

　衣装が整うと、そっとヴェールが被せられてピンで留められる。アーレンスバッハの慣習を引き継ぐ必要はないが、そちらの文化も尊重していくという意思を示すためだ。衣装より淡い青のヴェールは誕生季の色で、透ける布にレースで縁取りがされている様子はマリアヴェールを連想させた。

　……なんかちょっと花嫁っぽい？　あ、いや、婚約式だからそんな感じなのかもしれないけど。でも、ダメだ。そういうことを意識したら、恥ずかしくなってくる。

「お美しいですよ、ローゼマイン様」

「フェルディナンド様もさぞ驚かれることでしょう」

　リーゼレータとグレーティアの指示で側仕え候補の女性達が化粧道具を片付けたり、衣装や靴を準備したりしている中、クラリッサが部屋に入ってきた。

「続々と貴族達が城へ集まってきています、ローゼマイン様。ギーベは全員到着したそうですよ。新しいお城の中を見回っている者もいるようです」

「急に決まったことですから、ギーベ達には来ても来なくても構わないと言ったのですけれど……」

　あまり人が多いのも緊張するんだけど、とわたしは思うけれど、領地全てを癒した女神の化身を見られる機会を逃す者がいるはずない、とクラリッサが鼻息も荒く主張する。

「ねぇ、クラリッサ。養父様達は到着したのかしら？」

「はい。アウブ夫妻、騎士団長夫妻、ボニファティウス様がいらっしゃいました」

　領主会議を控えた時期の婚約式である。いくらわたしの親とはいえ、婚約式のために何日も領地を離れることはできる立場ではない。けれど、今は神々の御力が詰まった魔石が大量にあるので、それを利用して転移陣を使用することで参加が可能になったのだ。

「そうそう、ダームエルもボニファティウス様の護衛騎士に交じって来ていますよ。残念ながら未成年はお留守番だそうです。フィリーネとユーディットにものすごく恨みがましい目で見られたと聞きました」

　フィリーネ達には何かお土産が必要かもしれない。わたしはクラリッサにお土産を見繕ってもらえるようにお願いしておく。

「準備ができたのでしたらエーレンフェストからの客人へお披露目しましょう。今の時間を逃せば、お言葉を交わすことも難しくなります。きっとアウブ夫妻もカルステッド様達もローゼマイン様に会えることを楽しみにしていらっしゃるでしょう」

　レオノーレに促され、わたしはコクリと頷いた。婚約式が終わったら、皆はすぐに帰ることになっている。アーレンスバッハとの騒乱があり、養女であるわたしがアーレンスバッハの礎を奪った上に女神の化身となって新ツェントを選出したのだ。領主会議に向けての準備が大変であることは考えなくてもわかるだろう。

　新しくできたばかりのアレキサンドリアはエーレンフェストに輪をかけて大変だ。正直なところ、アウブという立場の客人を何日ももてなす余裕がこちらにない。

「まぁ、ローゼマイン。婚約おめでとう。なんて美しいのかしら」

　お母様が華やいだ声で祝ってくれると、皆が口々に今日の装いを褒めてくれる。

「えぇ、本当にエルヴィーラの言う通り。少し見ないうちにとても女性らしく綺麗になったように思えますね」

「少し化粧をするだけでずいぶんと大人びて見えるぞ。口を開かなければ、な」

　養母様にはお礼を言うけれど、養父様のことは軽く睨む。黙っていれば立派なアウブに見える人に言われたくない。

「養父様こそ口を開かないでくださいませ。せっかくのアウブの装いが台無しですよ」

「あら、ジルヴェスター様。ローゼマインの美しさはお化粧だけのせいではありませんよ。闇の神を得た光の女神の輝きなのです。……それで、ローゼマイン。どのような経緯でフェルディナンド様とお心を通わせたのです？」

　……お母様、絶好調だね。目がキラキラだよ。

「うおおぉぉぉ、ローゼマイン！　何故だ！？　何故フェルディナンドなのだ！？」

「父上、往生際が悪すぎます！」

　お父様と協力し、おじい様の護衛騎士達が必死に止めようとしているが、おじい様は全く止まっていない。

「今日のお父様は騎士の装いではないのですね」

「其方の実父という立場で婚約式に参加するからだ。父上がうるさくして済まぬ。留守番をさせる予定だったのだが……一日くらいならば自分達が留守番できるのでボニファティウス様も行けばいい、とヴィルフリート様がおっしゃってな」

　ツェントの戴冠式に参加できず、落ち込んでいたおじい様を不憫に思ったヴィルフリートの申し出により、おじい様の同行が決まったらしい。ずっと吠えるように叫んでいるおじい様を見ていると、「余計なことを」と思ってしまうのはわたしだけだろうか。

「其方、懸想はしておらぬと言ったではないか！　あれは嘘だったのか、ローゼマイン！？」

「……嘘は言っていません。わたくし、フェルディナンド様に懸想していませんから」

　皆が一斉に息を呑んで、ものすごい顔でこちらを振り向いた。「何を言っているのか」と無言の叫びが聞こえる気がする。皆からすごい勢いで咎められている気がして、わたしは慌てて言葉を付け加える。

「あ、あの、懸想はよくわかりませんけれど、フェルディナンド様はわたくしに男女の機微は期待していないとおっしゃいました。今まで通りで構わないから本物の家族になりたい、と。ですから、本物の家族になるために婚約するのです」

　皆がじっとこちらを見ている。まだ言葉が足りないだろうか。無言の圧力を感じてわたしが思わず一歩下がると、おじい様が青い瞳を厳しく光らせた。

「つまり、この婚約はフェルディナンドの希望を叶えるためだということか？　ローゼマインが幸せになれぬような婚約は……」

「違います、おじい様。わたくしの望みを叶えるためでもあります。フェルディナンド様以外にわたくしの理想を現実と擦り合わせてくださる方はいらっしゃいませんもの。それに、フェルディナンド様がいてくださるだけで安心できます。わたくし、ヴィルフリート兄様の時やジギスヴァルト王子との婚約話が持ち上がった時と違って、この婚約が嫌だとは全く思っていないのです。ですから、安心してくださいませ」

　おじい様と養父様が揃って頭を抱えて深々と溜息を吐いた。何か失敗しただろうか。やはり懸想していなければ婚約や結婚してはダメなのだろうか。何だか養父様から「この婚約は止めておけ」と言われるような気がして、わたしは泣きたくなってきた。

「フェルディナンド様の研究所を造ったり、研究に必要な魔力を提供したり、おいしい料理を考えて健康的な生活を送らせたり……。わたくしにできる限りフェルディナンド様を幸せにするつもりです。それだけはお約束しますから……婚約に反対はしないでくださいませ」

　沈黙が下りる中、養母様が「ジルヴェスター様、婚約式を前に不安にさせるものではございませんよ」と軽く養父様の腕を叩く。

「反対などする気はない。これまでの自分を振り返っていただけだ。……私の弟を頼む」

　その後、お母様達から婚約のお祝いを受け、側近達からも祝福を受ける。普通に祝福してくれるマティアス達と違って、おじい様と一緒にエーレンフェストからやってきたダームエルは何とも微妙な顔をしている。

「非常に喜ばしいとは思いますが、フェルディナンド様とローゼマイン様がご婚約というのは何とも不思議な気分ですね。私はローゼマイン様を洗礼式前から存じているので、尚更そう感じるのかもしれません」

「ダームエルとフィリーネも似たようなものでしょう？」

　洗礼式の時から知っているフィリーネとの仲はどうなっているのだろうか。わたしが首を傾げると、ダームエルは「そうですね」と言いながら何度か頷いた。

　……何かあった？

「婚約おめでとう。ローゼマインがフェルディナンド様との婚約を望んでいるならば、私は兄として祝福するよ。でも、容易に流されてはダメだ。フェルディナンド様に毅然とした態度を取ることも時には必要だぞ」

　コルネリウス兄様が真剣な目でわたしにそう言った。さすがに冬の到来を心配されているのがわかる。

「フェルディナンド様はそのようなことをしないのに、皆心配しすぎですよ。わたくしの心配をしているようですけれど、レオノーレは毅然とした態度でコルネリウス兄様に対応しているのですか？」

「……レオノーレと私のことは関係ないだろう？」

　……あれ、そこで視線を逸らしちゃうんだ？　へぇ。

　大広間にはたくさんの貴族達が集まっている。アーレンスバッハが大領地だったので当然のことながらエーレンフェストよりずっと貴族の数が多い。壇上に上がればそれがよくわかる。

　フェルディナンドが側近達と入場してきた。アーレンスバッハの様式で仕立てられた衣装だ。袖口に違いはあるけれど、グルジアの民族衣装に似た雰囲気の上着がフェルディナンドの長身に非常に似合っている。深緑の上着の上にまきつける布にはエーレンフェストの染め布が使われていた。

　壇の右手にわたしと側近達がいるので、左手にフェルディナンドが側近達を連れて上がってきた。フェルディナンドは公の場における婚約式なので、見事に社交的な微笑みを浮かべている。わたし達の間、ちょうど中央に立っているのはハルトムートだ。

「この度、王命によりローゼマイン様とフェルディナンド様の婚約が決まりました」

　エグランティーヌにサインをもらった書類を大きく広げ、婚約式を取り仕切っている。儀式の進行といえば自分しかいないと張り切っていたので任せてあるが、少々暴走が不安になるのはわたしだけだろうか。

　本来ならば、領主会議でツェントの承認を受け、星結びの儀式の時に婚約式を併せて行うけれど、領主会議に向けて正式に婚約しておく必要がある、と婚約式を急いで行う理由が説明される。そこから先日の古代魔術の再現と女神の化身による大規模な癒しについての話を始めた。このまま暴走するのかと身構えたが、ハルトムートは特に暴走せず、「では、魔石の交換を」とわたしを促した。

　わたしが立ち上がると、リーゼレータが魔石の入った箱を差し出してきた。わたしは箱から魔石を出して手にすると、なるべく優雅に見えるようにフェルディナンドの前へ進み出る。

「わたくしの闇の神よ。天上の最上位におわす夫婦神のお導きにより、この婚姻は決まりました」

　王命による婚約だと皆に対して宣言する。そう簡単に覆すことができるものではないという言葉だ。

「フェアドレンナの雷と共に春を迎え、ブルーアンファが舞い踊ります。若葉が青さを増してゆく中、ライデンシャフトの御導きがございました」

　後見人として、教育してくれた師匠として接してくれていたフェルディナンドへの感謝を述べ、これから先も導いてほしいという内容でローデリヒに注文を出していたはずだが、何故かブルーアンファが舞い踊っているし、最終的には闇の神の袖やマントがバッサバッサ翻っている。暗記しながら解読してみたが、どう考えてもわたしの意向に沿っているとは思えない。

　でも、側近達は婚約式に相応しいと言ったし大広間の皆が感心していたり、ほぅと溜息を吐いていたりするので、暗記したまま突き進むしかない。即興で自分の言いたいことを神様表現できる文才など、わたしにはないのだ。

「貴方の世界を明るく照らしていくことを望み、この魔石をわたくしの闇の神に捧げます」

　わたしは「貴方のマントに刺繍をさせてください」と刻まれた魔石を差し出した。お貴族様的に「家族になりましょう」と刻んでみたのだが、喜んでくれるだろうか。マントに刺繍できるのは家族だけだ。フェルディナンドは神殿へ入る時に父親からもらったマントをヴェローニカに取り上げられたり、新しくジルヴェスターからもらったマントを「アーレンスバッハで正式にもらうまでは」と喜んでいたりするので、ちゃんとしたマントを準備してあげたいと思ったのだ。

　フェルディナンドがわたしの魔石を見て、軽く息を呑んだのがわかった。社交的な笑みが崩れ、ほんの一瞬、幸せを噛みしめるような素の笑みで婚約の魔石を握り込む。すぐに社交的な笑みに戻ったけれど、ものすごく喜んでくれたことが一目でわかった。

　ふふっと笑うと、フェルディナンドが「図案は私が決める」と口をへの字にする。もしかすると、ここは耳が赤いと指摘するところだろうか。「簡単な図案でお願いします」と言うべきだろうか。

「フェルディナンド様」

　ユストクスが小声で呼びかけた。フェルディナンドが後ろをちらりと見て、丁寧にわたしの魔石を箱に入ると、代わりに自分の魔石を手にした。

「ユルゲンシュミットにグルトリスハイトをもたらした英知の女神の化身であり、私の光の女神よ。全てを呑み込む闇はどこまでも広がり、果てがありませんでした」

　フェルディナンドの言葉には次々と神様の名前が出てくる。手紙で書いてくれたら、ゆっくりと解読していくのだけれど、言葉ですらすらと言われると理解できない。でも、お母様が目をギラギラさせていて、女性が口元を押さえて震えているのが見えるので、かなり破壊力の強い愛の言葉を述べているらしい。

　……とりあえず、闇を照らす光の女神、変化をもたらす水の女神、全ての悪意から守る風の女神、全てを受け入れる土の女神という感じで、わたしを全ての女神にたとえたのはわかったよ。うん。大袈裟すぎてどこまで信用していいのかわからないけど。

「この魔石を私の光の女神に捧げます」

　フェルディナンドがそう言って、魔石を差し出した。わたしは魔石を手に取った。全属性の魔石の中に金色の光る文字がある。

「アレキサンドリアの領地ごと君を守る」

　かつて父さんに言われた言葉や約束を思い出してドクンと胸が高鳴った。フェルディナンドはできないことは最初から口にしない。する気がないことも言わないことを知っている。だからこそ、こういうところでそんな約束をするのはずるいと思う。ずっとそばにいてくれるという確信と安心感があるのに、鼓動が速くなってきて、魔石を持つ手が震え、喉の奥が痛くなってきた。顔が紅潮して目が潤んできたのが自分でもわかる。

「フェルディナンド様……。あの、わたくし……」

　何と言えばいいのかわからないけれど、自分の気持ちを伝えなければならない気分になる。けれど、言葉にならない。喉の奥、すぐそこまで言葉が来ているのに出てこない。

　フェルディナンドが立ち上がり、袖を広げるようにしてわたしを皆の視線から隠すと、素早く目尻の涙を拭う。

「このようなところで泣くのではない。慰めようがなかろう」

「……狙ってこの言葉を刻んだとしか思えませんよ」

　小声でやり取りしていると、歓声とも悲鳴ともつかない声が貴族達の間で上がった。予想外のことにビクッとして一瞬で涙が止まった。

「何事ですか？」

　わたしが辺りを見回すと、フェルディナンドが苦い顔になった。

「……失敗したな」

「な、何の失敗をしたのでしょう？」

「聞くな」

　……なんで！？

　フェルディナンドが溜息混じりにわたしから離れると、ハルトムートが困った顔になっていた。ユストクスが必死に笑いを堪えていて、リーゼレータは少し赤面して視線がオロオロとさまよっている。

　お母様は一人だけ歓喜の笑みを浮かべてシュタープを光らせて振っているのが見える。養父様は生温かい笑みを浮かべていて、おじい様はシュタープではなく、拳を振り上げており、お父様とコルネリウス兄様を始めとした護衛騎士達が必死に押さえようとしている。

「ハルトムート、其方の仕事だ。進めよ」

　フェルディナンドの言葉に、一度呼吸を整えたハルトムートが口を開く。

「正式に婚約が調ったお二人に祝福を！」

　貴族達がシュタープを出し、一斉に光らせた。

[------------------------------------------------]

アレキサンドリアの始まり

「婚約式の終了に伴い、領主会議への出席者が確定しました。貴族院へ向かう者にアウブよりブローチの授与を行います」

　実際にはハルトムート達が下準備をしてフェルディナンドが作ったブローチだが、渡すのはわたしだ。最初にわたしとフェルディナンドの側近達へ授与する。

「皆の助力がなければ、わたくしもフェルディナンド様も今この場にはいなかったでしょう」

　ユストクスとエックハルト兄様がいなければフェルディナンドは一年半アーレンスバッハで過ごすことができなかっただろう。アーレンスバッハで付けられた側近達がいなければ、この短期間で領地内をまとめることはできなかったはずだ。

　わたしの側近達が躊躇なく動いてくれなければフェルディナンドを助けることができなかった。すぐにはこの地の貴族を登用できないため、人手不足の中で頑張ってくれている側近達を労う。

「まだしばらく忙しい日が続きますが、よろしくお願いします」

　側近達への授与が終わると、領主会議へ向かうためにシュトラールが選別した騎士団の者達、フェルディナンドが選別した文官達、ゼルギウスとフェアゼーレが選別した側仕え達の番だ。フェルディナンドがアーレンスバッハに滞在していた期間に信用できると判断した者が中心になっている。アレキサンドリアにおけるわたしの側近も彼等の中から選ぶように言われている。

「側仕え達は先に寮へ出入りして中を整えなければならないでしょう？　下働きの者達の選出もお任せしますね。アウブ、領地名、色など変更が多いため、今年の領主会議は大変でしょうけれど、大領地の文官としての実力に期待しています。騎士達の強さと粘り強さは戦いで共に行動してきたわたくしがよく知っていますもの。領主会議の期間中、よろしくお願いいたします」

　ブローチを渡されると、領主会議が間近に迫った実感が湧いてきたようだ。どの顔も真剣そのものになっている。

　わたしが貴族達へブローチを渡している間に、ハルトムートからランツェナーヴェの騒動によって生まれた孤児達の扱いについて説明がされた。基本的にはエーレンフェストの粛清で生まれた孤児達と同じだ。

　アウブであるわたしが孤児達の後見人となること。すでに洗礼式を終えている子供は神殿で青色見習いとして過ごすこと。洗礼前の子供は孤児院に入ること。魔力があって自分の魔術具を持っている子供は貴族として洗礼式を受けることが可能であること。持っていない子供もやる気と能力によっては魔術具が与えられ、孤児院から貴族に取り立てることもあり得ること。

「レティーツィア様もランツェナーヴェの騒動によって寄る辺を失くした者として、他の孤児達と共に神殿で過ごしていただきます。王命によって星結び後に養子縁組を予定していますが、その、わたくしが星結びの儀式を迎えるのはどれだけ早くても二年後ですから」

　ざわりと貴族達が声を上げる。「レティーツィア様を領主候補生のままにしておくのか」という声と「領主候補生を神殿へ入れるなど……」という声が耳に届く。

「幼い者が神殿に出入りし、神々にお祈りを捧げることは御加護を増やすためにも必要なことです。神殿で生活し、日常的に祈りを捧げることで将来的には貴族として振るえる力は大きくなります」

　領地対抗戦での研究発表や貴族院で行われる奉納式で周知されていることだ。けれど、ディートリンデの意向によって碌に奉納式に参加していないアーレンスバッハの貴族達の中には神殿や神事の見方が変わりつつあることを知らない者もいる。

「わたくしはアレキサンドリアの子供達が神々から少しでも多くの御加護を賜るために神殿への出入りと神事への参加を推奨します。同時に、身分にかかわらず均等な教育が受けられるように神殿教室を開く予定です。わたくしの目標は平民も含めてアレキサンドリアの識字率を100％にすることですから！」

　は？　という声が聞こえたような気がするし、心なしか貴族達がポカーンとしている。フェルディナンドが少し呆れた顔でコホンと咳払いした。ちょっと飛ばしすぎたらしい。わたしもコホンと咳払いをして気を取り直すと、アレキサンドリアの現状について説明することにした。

「皆様もご存じのように、アーレンスバッハはランツェナーヴェとの交易によって他領より優位に立ってきましたが、今回の騒動のため国境門を閉じることになりました。けれど、新ツェントがグルトリスハイトを得たことのですから、他の国境門は近いうちに開くことになるでしょう」

　唯一国境門が開いている領地というアドバンテージはなくなる。逆に、唯一国境門が開かない領地になる可能性が高い。その立場だったエーレンフェストを嘲笑ってきたアーレンスバッハの貴族にそれがどういうことなのかわからない者はいないはずだ。

「以上のことから、他領から尊重される大領地としてアレキサンドリアを育んでいくためには新しい産業が必要であることはご理解いただけるでしょう」

　わたしの言葉に貴族達は納得の顔を見せた。ちらりとフェルディナンドの様子を窺えば、そのまま続けても構わないというように小さく頷く。わたしは視線を前に向けた。

「エントヴィッケルンで城の敷地内に新たに建てた研究所では、有志の文官達が行っていたランツェナーヴェの香辛料や砂糖をこの地で栽培するための研究が全てまとめられました。砂糖に代わる甘味を探す研究も行われる予定で、これから研究が進むことが期待されています。砂糖の栽培ができるようになればアレキサンドリアの優位性は上がるでしょう。けれど、これらの研究はすぐに結果がわかるものではありません」

　安定した供給ができるようになるまでにはかなり時間がかかる。その間、アレキサンドリアはどうしなければならないのか。

「今までわたくしはエーレンフェストで新しい産業を起こしてきました。それらをこちらでも行いたいと考え、アウブ・エーレンフェストより自分の専属達を移動させる許可をいただきました。製紙業、印刷業をアレキサンドリアでも行う予定ですし、新たな食事処も作るつもりです」

　貴族達がざわめき、養父様達へ視線が向けられる。他領に流すようなことではない、と貴族達が考えていることが丸わかりだ。養父様は全く動じていない顔でコクリと頷く。

「エーレンフェストから産業を奪うのではありません。共に栄えていくために協力し合うのです。価格を下げるためには市場に多く出回る必要があるため、原材料の調達を考えると製紙業を一つの領地だけで独占するのは不可能です」

　山に木がなくなってしまう。癒しの魔術で成長させることは可能だけれど、伐採の度に何人もの貴族が必要になる。

「印刷業も同じです。エーレンフェスト内にはすでに複数の印刷工房がありますけれど、全てで同じ本を印刷しているわけではございません。それぞれの工房では別の本を印刷しているのです。アレキサンドリアに印刷工房が増えたところで、エーレンフェストの印刷業が潰れるわけではありません」

　この辺りはエーレンフェストからやって来ているアウブ夫妻の側近達に聞かせるためでもある。アレキサンドリアに全ての産業を奪われたとエーレンフェストの貴族達に思われるのは本意ではない。

「印刷工房を増やして新しい本をたくさん作ることが大事なのです。複数の領地で印刷業を行うことができれば、納本制度によりわたくしの図書館はより一層充実するでしょう」

「ローゼマイン、本音が漏れている」

　……失敗、失敗。ちょっと漏れちゃったね。

　フェルディナンドに軽く睨まれたけれど、笑って誤魔化しながらわたしは続ける。

「それから、食事処についてですけれど、エーレンフェストとアレキサンドリアでは風土が違うため、全く同じ料理を作ることはできません。その土地、その土地に合わせた料理が大事なのです。アレキサンドリアでは海の幸を中心にした新しいレシピを考えるつもりです」

　エーレンフェストと完全にぶつかり合うことはないと主張しつつ、わたしは貴族達を見回す。

「それらの新しい産業を支えるのは平民達です。アレキサンドリアでは平民との連携を取りながら産業を育てていくことになります。領地の発展のためには平民達への教育が必須なのです」

　識字率の上昇の重要性を訴え、神殿教室の大まかな計画を発表した。授業料は安いけれど、平民と共に学ぶことに難色を示す貴族が出た。孤児院の子供達が無料で同じ教育を受けられることに疑問を示す者もいる。わたしが後ろ盾なので、わたしが負担しているのと同じだが、納得できない者もいるのだろう。

「……今はまだ皆様にはご理解いただけないと存じますが、自分達と違う立場の者との交流はとても重要です。もちろん、今まで通りに各家庭で教育を受けさせることを否定するつもりはありません」

　教師達の仕事を奪うつもりはないし、神殿教室で教育できるのは貴族院の中学年くらいまでの範囲で、中級貴族くらいの教育しかできない。領主一族や上級貴族の教育には足りないのである。

「下級貴族では良い教師に巡り合えず、子供達の能力を伸ばせないこともございます。わたくしはエーレンフェストの冬の子供部屋でそれを目の当たりにしてきました。平民の教育に力を入れるのですから、当然貴族の教育にも力を入れていきたいと思っています。貴族にとっての重要な教育にお祈りが加わる以上、神殿への認識は改めていただきたいと存じます」

　平民に負けるわけにはいかないという貴族のプライドがあれば勉強にも身が入るかもしれないし、神殿教室で幼い頃から平民と交流があれば将来的に役立つこともある。神殿に通ってお祈りだけでもするのは、子供にとって重要だ。

「それから、孤児院の子供達ですが、決して無料ではありません。わたくしは孤児達の後ろ盾ですけれど、費用の全てを負担するわけではないのです。彼等が働き始めたら返してもらう予定ですから」

　魔力を奉納する青色神官や青色巫女に与えられる補助金、祈念式や収穫祭への参加による作物の現物支給、自分で稼いだお金などで孤児達は生活しなければならないのだ。決して楽な生活ではない。

「少しでも彼等を応援するために、エーレンフェストで行っていたのと同様、わたくしは各地のお話をアレキサンドリアでも集めるつもりです。孤児達も図書室にある本を写本したり、神殿教室で共に勉強する平民達から聞いたことを書き留めたり、自分達が物語を書いたりして自力でお金を稼いでもらう予定なのです」

　慈悲深いと噂されているわたしだが、皆が勝手にそう思い込んでいるだけで別に慈悲深いわけではないのだ。

「孤児からだけではありません。ギーベの館に残された古い文献を写した者、平民達を含めて口伝で残されているお話をまとめた物、貴族院の蔵書の写し、自分達で書いた物語、研究成果をまとめた文献……。皆様からも相応の金額で買い取りましょう」

　……どんどん持ち込んでくるといいよ！

　わたしの言葉に貴族達が再び唖然とした顔になったが、その程度で驚かれては困る。この辺りはエーレンフェストですでに通った道だ。アレキサンドリアの貴族達にもさっさと到達してもらいたい。

「フェルディナンド様、よろしいのですか？」

　リーゼレータが貴族達の反応を見て、助けを求めるようにフェルディナンドへ視線を向けた。フェルディナンドがちらりとわたしを見た。

「フェルディナンド様、リーゼレータ。何事も始めが肝心なのです。アウブであるわたくしの目標と進む方向を皆に知ってもらい、わたくしのやり方に慣れてもらう必要があります」

　ハルトムートは「ローゼマイン様のおっしゃる通りですね」と微笑んでいるけれど、フェルディナンドに嫌な顔をされてしまった。でも、止める気はさらさらない。

「フェルディナンド様が以前おっしゃったではありませんか。アーレンスバッハを潰すのも発展させるのもわたくしの好きにすれば良い、と。最初にどのような領地にするのか宣言しておけば、きっと貴族達も早い内に諦めが付くでしょう」

　わたしにはユルゲンシュミット中の書物を自分の図書館に入れるという大きな野望がある。そのためには女神の化身という肩書を利用することも辞さない。エグランティーヌにお願いして王宮図書館に収蔵されていた蔵書を写させてもらう約束もしているくらいだ。手段を選ぶつもりはない。

「わたくし、英知の女神　メスティオノーラの化身として、アレキサンドリアを図書館として栄えさせ、わたくしの図書館をユルゲンシュミットで最も蔵書量が多く、最も幸せな場所にするためにアウブ兼司書として全力を尽くします。共にアレキサンドリアを素晴らしい図書館都市として作り上げていきましょう」

　わたしが声高らかに宣言すると、ハルトムートが進み出た。

「では、皆。アレキサンドリアの発展を願い、高く亭亭たる大空を司る最高神　広く浩浩たる大地を司る五柱の大神　水の女神　フリュートレーネ　火の神　ライデンシャフト　風の女神　シュツェーリア　土の女神　ゲドゥルリーヒ　命の神　エーヴィリーベ、そして、英知の女神の化身であるローゼマイン様に祈りと感謝を捧げましょう」

「神に祈りを！」

　半数以上の貴族達がハルトムートに合わせてビシッと祈りを捧げた。わたしも一緒に祈りを捧げた。図書館への迸る愛が祝福となり、大広間に広がる。

　ハルトムート達と接する機会がなかったギーベ達が驚愕の顔になる中、アレキサンドリアという領地の歴史が幕を上げた。

[------------------------------------------------]

家族に繋がる道

「やりすぎだ、馬鹿者。ギーベ達の大半が置き去りにされていたぞ」

「早くお祈りに慣れてくれればいいですね。わたくしとしてはきちんとお祈りをできる貴族が予想外に多くて、ハルトムート達の教育の成果に驚きましたけれど……」

「お褒めに預かり光栄です」

　婚約式を終え、わたしは新しくできた研究所と図書館の見学に来ていた。大きな温室に香辛料の木が並んでいて、植物園という感じがする。見たことがないたくさんの木の中で、文官からこれまで研究してきた成果についての報告を受けた。やはり砂糖の栽培はまだ厳しいそうだ。

「温室がなければ枯れるので、大規模な栽培は難しいかもしれません。ただ、魔力を受けることで世代交代の度に少しずつ変化が見受けられます」

「代替わりで目に見える変化があるというのは面白いですね。わたくしも魔力を注ぎましょうか？」

　魔力を注ぐだけならば得意だ。わたしは文官達に協力を申し出たけれど、フェルディナンドに止められた。

「待ちなさい。女神を降臨させたことがある君の魔力は少々特殊だ。対照実験のためにも魔力を与える対象を限定してみたい。少し準備が必要になるので、後日にしよう」

　フェルディナンドがどの品種にわたしの魔力を注ぐのか、どこで魔力を注げば他に影響が出ないかなど、文官達と話し合いを始めた。

　わたしはその間にユストクスに案内されて研究所内のフェルディナンドの部屋に入った。まだ魔術具は少ないけれど、薬品が調合できるようになっているので隠し部屋の雰囲気とよく似ている。

　……側仕えが入れるから書類が綺麗に片付いてるけどね。

「それにしても、わたくしは今日初めて図書館へ入るというのに、どうしてフェルディナンド様は研究所の自室がこれだけ充実しているのでしょうね？」

　エグランティーヌの来訪、婚約式、領主会議の準備で間違いなくわたしよりも忙しい日々を過ごしているはずなのに、研究室の充実っぷりに驚く。「きちんと寝ているのですか？」とユストクスに尋ねると、ユストクスが苦笑した。

「毒を受けて倒れる前に比べれば、睡眠時間は増えていますし、薬の量も減ってきています。ローゼマイン様と共に摂るので、昼食と夕食は必ず食べるようになりました。良い傾向です」

　領主会議が終わればもう少し落ち着くでしょう、とユストクスが言った。そうですか、とわたしが頷くとユストクスが「まだ呼び方に慣れませんか？」と小さく笑う。

「リヒャルダと同じように、姫様と呼んでいたのはユストクスだけでしたから……」

「正式な婚約を済ませた方を、姫様と呼んでいてはその母上に叱られます」

　明らかに面白がっているユストクスを睨んでも全く効果なしだ。

「そういえば、エックハルト兄様はアンゲリカとのお話をどうなさるのですか？　領主会議までに結論を出すように、とお母様がおっしゃったでしょう？」

　実は、エックハルト兄様とアンゲリカの婚約話が再度浮上したのだ。主が二人ともアレキサンドリアに落ち着くとこになり、婚約したのだから二人も復縁すればどうか、と。これにはおじい様が全力で賛成していた。

「エックハルト兄様とアンゲリカは仕事の姿勢など気が合う部分もありますからね。でも、アンゲリカの気持ちも一応確認してくださいませ」

　わたしがそう言うと、エックハルト兄様は「そうだな」と頷き、アンゲリカに向き直る。

「どうする？　まだ私はフェルディナンド様を陥れたアーレンスバッハの貴族を許していない。縁談を持ち込まれるのを防ぐにはちょうど良い」

「先日わたくしも弱い騎士から申し出を受けて、何と言って断れば角が立たないのか考えるのが面倒だったのでちょうどいいです」

　……え？　ちょっと待って。あっという間に話し合いが終わったよ！？

　事の顛末を聞いたらお母様がガッカリしそうなあっさり具合で二人は再び婚約することに決めてしまった。「お姉様らしいこと」とリーゼレータが微笑んでいるけれど、そんな理由で決めてしまっていいのだろうか。

「あら、ローゼマイン様と同じでしょう？　どちらにも懸想はしていないけれど、弱い騎士の方はお断りしたくて、エックハルト様とのお話は断りしないのですから」

「……そう言われてみればそうですね」

　何となくアンゲリカと一緒にされるのは釈然としない。わたしは一応フェルディナンドと家族になりたいと思ったし、ここまであっさりと結婚を決めたわけではないのだ。

　むぅっと唇を尖らせながら、わたしはフェルディナンドの部屋を出る。

「フェルディナンド様、わたくし図書館へ向かいますね」

　エントヴィッケルンが終わってまだ日が浅く、温室以外はほとんどが空室の研究所を見ても別に楽しくない。フェルディナンドの部屋の位置だけ覚えれば十分だ。

　……図書館はもっと空っぽなんだけど。

　研究所の渡り廊下を歩いているうちにフェルディナンドが追い付いてきた。ユストクスが鍵を開けて図書館へ入る。

「わぁ！」

　本棚にはまだ一冊も本が入っていないけれど、写真で見たり、脳内に思い浮かべたりしていた大英博物館閲覧室のような図書館が目の前にあることに感動する。ぶわっと祝福が飛び出したけれど、今更図書館に興奮するわたしを気にする者はここにはいない。

「この図書館はすごいのですよ。天井が半球状になっていて、窓がずらりと並んでいるでしょう？　採光性をできる限り高めているのですけれど、同時に、本にはできるだけ日が当たらないように壁がぐるっと本棚になっているのです」

　明かりをつける魔術具はあるけれど、図書館で日常的に使うには魔力の無駄だと却下されるのが今のアレキサンドリアの実情である。そのため、図書館の設計は日光の利用を最大限に活かす物にしたのである。

「天井の下、放射線状に閲覧机があることでどの机にも光がほぼ均等に当たるのです。貴族院の図書館のキャレルのように時間帯や位置によって採光性に大きく差が出るということがありません。そして、あの中心には貴族院の図書館と同じように魔術具があり、閉館時間を光で示すことになっているのです」

　わたしはこの図書館の素晴らしさを語りながら、放射状にある閲覧机の中心部分を指差した。

「わたくし、あそこをオパックやケンサクの待機場所にする予定で……」

「待ちなさい。耳慣れない言葉が出てきたが、何の話だ？」

　フェルディナンドに咎められて、わたしは首を傾げる。

「検索専用の図書館の魔術具の名前です。これだけの広さですし、壁と本棚が同化していて人の手では取れないところも多いので、複数の魔術具が必要でしょう？」

　コルネリウス兄様が「まだその名前を諦めていなかったのか」と肩を落とした。とても機能がわかりやすい名前だと思うが、フェルディナンドにも「耳慣れず、響きが美しくない」と却下された。特にケンサクがダメらしい。

「アーレンスバッハの城にあった本はそれほど多くない。魔術具はしばらく一体あれば十分だと思うぞ」

「検索用と、本の無断持ち出しをしたり、図書館で暴れたりするような不心得者を追い出す警備用に別に作るつもりなのです」

　わたしがどのくらい必要かな？　と考えていると、クラリッサが恐る恐るという感じで、わたしに言った。

「エーレンフェストの防衛のために作った魔術具よりは攻撃力を控えめにしましょう、ローゼマイン様」

「……構いませんけれど、改良するのはクラリッサかハルトムートかライムントに頼みますよ」

「任せくださいませ」

　クラリッサだけではなく、ライムントも請け負ってくれる。この図書館に合わせて改良してくれるそうだ。

「でも、ローゼマイン様。これだけ大きな図書館を作ったところで収納する本がありませんよ。もっと狭くてもよかったのでは？」

　ライムントが広大な図書館を見回しながらそう言った。エントヴィッケルンには多大な魔力が必要なのに、無駄に思えて仕方がないそうだ。

「人間が作った構造で本より長持ちする物はない、とアイアンクィルも言っています。いくら余裕があるように見えても、いずれ本が入りきらなくなるのです。わたくしはその日が今から楽しみです」

　この図書館から本が溢れるくらいになる頃には、平民の識字率も上がっているはずだ。今度は平民のための図書館を作ってもいいし、貴族街の端に新しく図書館を増設してもいい。貴族ならば騎獣で簡単に移動できるし、物を転移させる転移陣を設置しておけば、別館からの本の貸し出しはそれほど大変ではないはずだ。

　そんな話をしながら閲覧室を横切り、研究所への渡り廊下から図書館のエントランスへ移動する。そこから司書達の部屋のある棟へ向かった。階段を上がったところにある扉の前でハルトムートが足を止めた。

「こちらがローゼマイン様のお部屋になります」

　まだ何も入っていない部屋に案内される。ここに家具を入れて、図書館で暮らせるようにするのだ。

「本を読むための机と椅子、寝そべるための長椅子は必須ですね」

「図書館で興奮しすぎたり、作業して疲れて倒れたりした時のために、本を読むための机と椅子より寝台の準備を優先すべきではないか」

　フェルディナンドに指摘されて、側近達が揃って頷く。何だか相変わらずフェルディナンドも側近達も過保護である。

「長椅子さえあれば大丈夫だと思うのですけれどね……」

　生活できるように色々な設備があることを確認し、どこからどこまで整備するのかリーゼレータに問われる。

「基本的な生活は城でするので、しばらくは本を読むための机と椅子があれば他は特に必要ないと思いますよ」

「いつでも使えるように、初めにきちんと整えなさい。君はそういうところを面倒がるから必要な時に準備ができていなくて慌てることになるのだ」

　フェルディナンドにそう言われて、側仕え達がわたしの部屋を整えるための話し合いを始める。

「ローゼマイン、隠し部屋を作っておくぞ」

「……お部屋だけで十分だと思うのですけれど？」

「この図書館に君にとって大事な物を入れるためには必要なのだ」

　フェルディナンドに急き立てられ、わたしは隠し部屋を作る。壁に赤い魔石を押し付けるフェルディナンドの手に自分の手を重ねて魔力を流し、二人分の魔力を登録した。

「隠し部屋へ二人で入るのはお待ちくださいっ！」

　コルネリウス兄様が慌てたようにそう言った時にはフェルディナンドに手を引かれて、わたしは隠し部屋の中にいた。

「またコルネリウス兄様に叱られますよ、わたくし」

「今度脅して黙らせておくので安心しなさい」

「ちょっと待ってください。全く安心できません。脅さなくてもいいですから！」

　わたしが必死に止めると、フェルディナンドはフンと鼻を鳴らし、メスティオノーラの書を出して転移陣を設置し始めた。隠し部屋に設置される、人が移動するための転移陣の使い道は一つしか思い浮かばない。

「フェルディナンド様。この転移陣……もしかして……」

「……平民の街にある君の部屋に繋がるようにしている。君の家族に繋がる扉のようなものだ」

　完成した転移陣を見下ろす。跪いて触れれば魔力が通って魔法陣が光った。城と貴族院の寮のように行き先を限定している転移陣だ。

「この先に家族の家があるのですか？」

「あぁ。エーレンフェストから彼等に移動してもらわねばならぬし、予定の擦り合わせなどもあるので、いつでもというわけにはいかぬと思うが、君が帰るための道だ」

　わたしがアウブでなくなり、城で生活することがなくなってもその道が消えないように、フェルディナンドは図書館の部屋に隠し部屋を作り、メスティオノーラの書でなければ使えない転移陣を設置してくれたらしい。

　胸の奥が熱くなった。自分と一緒にいてくれるのがこの人で良かったと思う。わたしは立ち上がると、フェルディナンドに抱きついた。

「……一緒に行きましょうね。わたくしが家族に会いに行く時は、フェルディナンド様も一緒ですよ」

「いや、私は……家族の時間を過ごす上で邪魔になるので良い」

　やや狼狽え気味に離れようとするフェルディナンドを睨み、わたしは抱きついた腕に力を籠める。家族関係には後ろ向きなことが多いフェルディナンドを離したくない。

「邪魔なんかじゃありません」

「ローゼマイン、離れなさい」

「嫌です。一緒に行ってくれると言うまで離しません」

「貴族である私が行けば、君の家族が困るではないか。気を遣わせるだけだ。それに、私がいれば君も家族に甘えにくいであろう？」

　視線を逸らし、溜息混じりにそう言われ、わたしは言葉に詰まる。確かにそうかもしれない。けれど、わたしはフェルディナンドと婚約したのだ。

「貴族の家族は婚約式に出席してくれたけど、下町の家族は婚約式に出られないし、わたしが婚約したことを知らないじゃないですか。わたし、ちゃんと家族に紹介したいです。フェルディナンド様のことを、わたしが結婚する人だって。……わたしの家族に紹介されるのは嫌ですか？」

　じっと見上げていると、少し視線を下げたフェルディナンドと目が合った。しばらくの逡巡の後、フェルディナンドが「……嫌ではない」と抵抗を諦めたように目を伏せる。口元がほんの少し綻んでいるように見えた。

[------------------------------------------------]

帰宅

　夏の終わりの火の日。

　今日はオレの成人式だった。エーレンフェストよりずっと人が多いアーレンスバッハの神殿へ、親ではなく旦那様やトゥーリ達に送り出されたのだ。

　……成人式が終わってから移動してもいいって言われたけどさ。

　春の終わりにグーテンベルク達が一斉に移動することになった時、「家族と成人式を過ごしてからルッツ一人だけ後で移動するか？」と旦那様に尋ねられた。家族へ思い入れの深い誰かさんらしい気遣いだが、そんなことができるわけがない。

　母さんには「トゥーリやギュンターが一緒だからまだ安心だけどさ、トゥーリとの星結びまでは見たかったね」と溜息を吐かれたけれど、父さんは「一人前になろうって時に仕事から離れるつもりか？」とわかりにくい言葉で激励してくれた。

「くぅ～、ここの神殿は大きすぎじゃないか！？　ちっとも中の様子が見えなかったじゃないか。ルッツ、どうだったんだ？」

　ギュンターおじさんはオレが神殿から出ると同時にガシッと肩をつかんで揺さぶってきた。オレの成人を祝ってくれるはずのおじさんが真剣な目が見据えているのは、オレを完全に通り越して神殿だし、望んでいる答えが神殿長の情報だ。相変わらずすぎる。

「ちょっと、父さん。今日はルッツの成人式だったんだから、先に一言くらいはお祝いしなきゃ」

「トゥーリの言う通りよ、ギュンター。ディードやカルラの代わりにわたし達がルッツのお祝いするって約束したでしょ？　成人おめでとう、ルッツ」

　トゥーリとおばさんに叱られてしょげるおじさんの肩を叩き、いつまでたってもマインのことが頭から離れないおじさんに神殿での様子を教える。

「噂通りすごい祝福だった。広い神殿全体に青い光がぶわっと広がってさ……」

「今日はルッツがいたから張り切ったんじゃない？」

　トゥーリがクスクスと笑ってオレの隣に並ぶと、オレの左腕を取って「帰ろうよ」と歩き始めた。カミルが右側を歩きながら訳知り顔で得意そうに「グーテンベルクの神事では必ず祝福が大きくなるって話だからな」と言う。

「この間、鍛冶工房へお使いに行った時に聞いたけどさ、ザックの星結びもすごかったってさ」

　プランタン商会の見習い服を着ているカミルは、マインと似た色の髪に薄い茶色の目をしているけれど、顔立ちがおじさんに似ているのであまりマインとは似ていない。カミルの後ろを歩き始めたのは旦那様とマルクさんだ。オレはダプラなので、わざわざ来てくれた。

「まぁ、街中で大暴れしていた余所の蛮族を蹴散らした上に、平民の意見を聞きながら新しい街の計画を立ててくれるローゼマイン様のおかげで、俺達は新しい街の割に仕事がしやすいんだ。お前もちゃんと感謝しておけよ、カミル」

「はい、旦那様」

　ランツェナーヴェとの交易が消えたので、古くからの商人達は新しい産業に乗っかろうと必死だ。その新産業のためにアレキサンドリアに呼ばれたオレ達は、予想していた程の摩擦もなく街に迎えられた。季節一つと経たないうちにプランタン商会はお貴族様との交渉窓口になっている。今までのお貴族様と違いすぎて、この街の商人には勝手がわからないそうだ。

　……商人だけじゃなくて、貴族の文官達も勝手がわかってなさそうだけど。

　商人との話し合いの場にローゼマイン様は滅多に姿を現さない。さすがに領主様がほいほいと平民達の街までやって来ることはできないのだと思う。ただ、どの会合にもハルトムート様は必ず出席されるので、顔見知りのオレは非常にやりやすい。

「それにしても、ローゼマイン様ってここに来たばっかりなのに、平民にめちゃくちゃ人気がありますよね、旦那様？　漁師達は誰が獲ってきたどの魚を領主様に献上するのか港でよくケンカしてるらしいけど、そんなのエーレンフェストじゃ聞いたことがないし……」

　カミルの言葉にオレも街の様子を思い出して頷いた。どこに行ってもグーテンベルクが快く迎えられるのは平民達がすっげぇ魔術を行った新しい領主を心から歓迎しているせいだ。「港ではそんなことになってるんだ？」とトゥーリがクスクスと笑った。

「わたしは新しい領主様の魔術で、暗くなった夜空一面にたくさんの魔法陣が並んで、一気に光が降ってきた話を聞くことが多いよ。次の日には海の水が透き通って魚が跳ね、土が肥えて木々が芽吹き、葉っぱが青々としてたって聞いたよ。ローゼマイン様の専属なのに見られなかったのは残念だったね、だって」

「その話、何回聞いてもわけがわからないよな？」

　笑いながら皆で歩けばすぐにプランタン商会とギルベルタ商会に着く。神殿のすぐ近くで、店は隣同士なのだ。中心部にほど近い職人区画にグーテンベルクの鍛冶工房、木工工房、印刷工房などが集まっている。中心部にグーテンベルク関係がまとめられていることからもローゼマイン様に優遇されていることは一目瞭然だ。

　……街の噂によると、扉や窓も問題なく付いているか、お貴族様がわざわざ確認に来たらしいからな。

　お貴族様がわざわざ来るなんてあり得ないと街の人達は言っていたが、孤児院や工房に出入りするお貴族様が何人も思い当たるオレにはあまり違和感がない。

「着替えたらウチへ来てくださいね。お祝いの昼食を準備していますから」

　おばさんがそう言うと、旦那様とマルクさんがニコリと笑う。成人式の後は家族で祝うのが普通だ。オレの両親はエーレンフェストにいるので、婚約者であるトゥーリの家族や後見人の旦那様とマルクさんが祝ってくれることになっている。

「これから先も使うんだもん。カルラおばさんが作ってくれた晴れ着が汚れたら困るよ」

　トゥーリがオレの腕から離れながら、晴れ着を少し撫でる。母さんが「最後にできること」と言って、トゥーリと一緒に刺繍して作ってくれた晴れ着だ。大事にしなきゃ、と思う。

　オレは旦那様やマルクさんと一緒にプランタン商会の二階へ戻った。トゥーリはダプラなのでギルベルタ商会の二階に住んでいて、三階におじさんとおばさんとカミルが住んでいる。グーテンベルクとローゼマイン様の専属の家族はだいたいご近所さんである。

　手早く着替えてギュンター宅へ向かい、ごちそうを食べてからゆっくりと食後のお茶を飲む。おばさんとトゥーリが一緒に食後の片付けをしていた。その姿を見ながら、オレは髪をくしゃっと崩す。

　……本当だったら、アイツも成人式のはずなんだよな。

　神殿長の衣装を着て壇上で祝福を贈っていた本人こそ、本当ならば成人式で一緒に祝福を受けているはずだった。洗礼式は一緒に受けたのだから。

　でも、ローゼマイン様は一年後にもう一度洗礼式をして、領主の養女になった。確かお貴族様は冬の終わりに貴族院で揃って成人式だから、オレの一年半くらい後で成人することになる。

「次の神事はルッツとトゥーリの結婚の時だけど、そろそろ結婚準備しなくていいのか？」

「止めろ、カミル！　俺はそんな言葉を聞きたくないんだ！」

「トゥーリは来年にはちゃんと結婚した方が良いんだから、父さんは黙っててくれよ。ローゼマイン様はアレキサンドリアでも印刷業を広げる予定なんだろ？　前と同じように領地中に振り回されたら、来年だって結婚できるかどうか怪しいじゃないか。さっさと準備して、さっさと結婚しておいた方がいいって、絶対」

　カミルの言い方に旦那様とマルクさんが笑った。

「カミルの言うことも正しいが、俺達は印刷業を広げるために呼ばれたんだ。ルッツはまたグーテンベルク達とあちこちへ行くことになる。でも、先に予定を言っておけば、ちゃんと考慮してくれるさ。ザック達にそういう話が出た時に、ローゼマイン様はきちんと考慮してくれたからな」

　そんな話をしていると、ガチャと何かの音が響いてきた。まるで扉を開けるような音だ。オレ達は思わず顔を見合わせた。おじさんが立ち上がり、扉の前に足早に向かい、重心を低くしながら他の皆に下がるように手で指示する。

「玄関とは別方向から聞こえなかったか？」

「……全員ここに揃ってるよな？」

　警戒して皆が物音を立てないようにシンとする中、カツカツと靴の音が聞こえ始めた。二人分の足音で、弾むような小さな音と、敢えて靴音を響かせているような音が近付いて来る。

「今日は成人式だから絶対にいるはずなんですよ。……あ、静かにしないとバレちゃいます。足音を抑えてください。そーっと移動しましょう」

　お前が一番うるさいぞ！　と思わず突っ込みたくなる呑気な声は聞き覚えがある。でも、ここにいるはずがない。わけがわからなくてオレは思わず周囲を見回した。

　旦那様とマルクさんが遠い目になっていて「何の連絡も受けてないぞ」と呟いたのが聞こえた。おじさんもおばさんもトゥーリもわずかに口を開き、目を瞬かせている。そこにいるのが誰なのか確信を持っている顔だ。カミルだけは皆の反応がわからないというように困惑した顔になっている。

　ドアノブが動き、バーンと勢いよく扉が開いた。

「ただいま、皆！　マインだよ！」

　神々の寵愛を受ける女神の化身と名高い美少女。夜空の色の髪を彩るのはトゥーリが作った髪飾りと不思議な色に光る石がいくつもついた髪飾り。ハルトムート様によると、神々によって作り上げられた完璧な美貌。その中にあるのは感情をよく映す月のような金の瞳。数多の賛美を受けるせっかくの容貌を全て台無しにする言動。どこからどう見てもマインだった。

「おかえりっていうか……お前、契約魔術は！？　マインだよ、とか言っていいのかよ！？」

　契約魔術がどう反応するのかわからなくて口を開いたり閉じたりしているマインの家族の代わりにオレが怒鳴ると、マインは得意そうに「うふふん」と笑った。

「あの契約魔術はね、エーレンフェスト限定だからアレキサンドリアにいる時は大丈夫。わたしが領主になったから、もうそんな契約を結ぶことなんて絶対にないもん」

「マジか……」

　突然知らされた契約魔術の範囲の衝撃が大きくて声が出ない。でも、マインはそんなオレ達の反応にコテリと首を傾げた。

「それにしても、突然帰ってきたのに意外と驚いてないね。うわぁ！　とか、お前は誰だ？！　みたいなのを想像してたんだけど……」

「お前の声、丸聞こえだったからな」

「え？　ホントに！？」

　周囲を見回しながらそう言って、マインは不満そうに頬を膨らませて背後を振り返る。

「ほら、フェルディナンド様のせいで気付かれちゃったじゃないですか。せっかく驚かそうと思ったのに」

「皆が気付いたのは明らかに君の声であろう」

　……へっ！？

　フェルディナンド様の声が聞こえた方に驚いた。おじさんもおばさんもトゥーリも目を見開く。

「は？　フェルディナンド様だと！？　どうしてここに！？」

　おじさんの声にマインが扉で隠れている部分に向かって手招きする。姿を現したのは無表情のフェルディナンド様だった。フェルディナンド様の袖をつかむと、マインが頬を赤らめて視線をさまよわせながら言葉を探し始める。

「あ、えーとね。その……わたしね、実は……」

　何というか、その甘ったるい空気だけでマインが何を言いたいのかすぐにわかった。マインがもじもじしている様子におじさんが頭を抱えて溜息を吐き、おばさんとトゥーリはフェルディナンド様が来たという緊張から解放されてように顔を見合わせて肩を竦める。

「つまり、フェルディナンド様に決まったってことだろ？　知ってる」

　旦那様とマルクさんは笑いながらそう言った。カミルは一人だけまだ目を白黒させて、「何だ、これ？　どういうこと？」とオロオロしている。

「うぇっ！？　なんでベンノさん達が知ってるの？　平民向けにはまだ公表してないよね？」

「オレがトゥーリに聞いて報告したから」

「なんでトゥーリが知ってるの！？」

　オレはトゥーリに視線を向けた。マインが帰ってきたという驚きの顔から呆れの顔になってしまったトゥーリがハァと溜息を吐いて頭を振りながらマインを見つめる。

「ハンネローレ様の髪飾りの注文を受けた時にマインが言ったんじゃない。フェルディナンド様に懸想してるとか、フェルディナンド様なら政略結婚でもいいとか、家族同然は夫婦同然とか……」

　その話を聞いた時にはめちゃくちゃ驚いたし、感慨深い気分になったもんだ。本しか見えてなさそうなマインにもそういう相手ができたのか、と。

「待って、待って、トゥーリ！　単語、単語は合ってるけど、ところどころが違うし、わたしが言ったことじゃないよ、それ！」

「だいたい合ってれば大丈夫だって。そんなちょっとの違いを気にするなんてマインらしくないよ」

「ちょっとの違いで大違いじゃない！」

　マインがフェルディナンド様とトゥーリを見比べながら、「違う、違うんです！　わたくし、そんなこと言ってませんから」と必死に首を振っている。フェルディナンド様の表情は全く変わらないので何を考えているのかわからないけれど、マインの反応が面白すぎた。何というか、マインにもこんな恋する女の子の顔ができるのかと思わず感心してしまうような表情になっている。

　……やるな、フェルディナンド様。

「え～？　大違いって言うけど、フェルディナンド様との結婚が決まったんだよね？」

「それはそうなんだけど……あの時話していた内容は全然違うでしょ！？」

「そう？　まぁ、結果として結婚するなら同じだし、特に問題ないじゃない」

　トゥーリは何ということもない顔でそう言ったけれど、マインには大いに問題があったようだ。真っ赤になった頬を押さえながらトゥーリを睨む。

「も、問題あるよ。それじゃあ、まるでわたしがフェルディナンド様のこと好きみたいじゃない。懸想なんてしてないって言ってるのに、誰も信じてくれないし！」

　……はぁ？　何言ってんだ、こいつ？

　絶対に皆の心の声は共通していたと思う。どこからどう見てもフェルディナンド様のことが好きなようにしか見えない。旦那様とマルクさんも生温い目を向けているくらいだ。トゥーリにもわかっているのだろう。呆れが半分、からかい半分の顔でマインを見ているのがわかる。おばさんは口元を押さえて笑いを必死に堪えている。おじさんは……「俺は聞きたくないぞ」と耳を押さえて涙目になりながら逃げるようにおばさんのところへ移動している。

　……うわぁ、後がすっげぇ面倒そうだな。

　トゥーリとの婚約が調った後のおじさんの様子を思い出したオレは、トゥーリとマインのじゃれ合いを見ながらちょっとげんなりしてしまう。

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、マインはフェルディナンド様のことが嫌いなの？」

「嫌いじゃないよ」

「じゃあ、好きなんでしょ？」

「あ、その、好きだけど、そういう意味の好きじゃなくて……」

　……じゃあ、どういう意味だよ？

　ツッコミたいけど、下手にツッコんだら妙な屁理屈をこねて、変な着地点に降り立ちそうだ。トゥーリは明らかに面白がっている顔になっているので、マインをからかうのはトゥーリに任せておこう。

「はいはい、もういいよ。わかったから」

「トゥーリ、絶対にわかってないでしょ！？」

　手をパタパタとさせるトゥーリをマインが睨んだ。金色の瞳が涙目になっているのを見ると、からかうのもそろそろ終わりにした方がよさそうだ。

「え～？　わかってるよ。マインはフェルディナンド様のことが嫌いじゃなくて、結婚したいくらい好きってことでしょ？」

「ふぇっ！？」

　マインが首まで真っ赤になった。何の反応もなく静かにマインを見降ろしているフェルディナンド様に「あ……あぅ。ちが……わないけど……違うんです」と弁解するように言いながらじりじりと離れ、背を向けるとダッと駆け出した。

　鈍くさくて走るのが遅い上に、すぐに動けなくなるマインが標的にしたのは、扉に比較的近いところで固まって呆然と姉妹のやり取りを見ていたカミルだ。マインはカミルをぎゅっと抱きしめてぐりぐりと頭に頬ずりしながら泣きつく。

「……うぅ～、カミル～。トゥーリが意地悪を言うよぉ」

「は？　え？……ちょ……まっ、待って。」

　マインにぎゅっと抱きつかれたカミルが今度は赤面して涙目になって手をバタバタし始めた。カミルにとっては見知らぬお姉さんの胸に抱きしめられて撫で回されているのだ、完全混乱状態であることは明白だ。

「何だ、これ？　何だよ、これ！？　誰だよ？　どういうことだよ！？うわーっ！　ルッツ、助けて！」

「うんうん、誰だかわからないよね？　マインおねえちゃんだよ、カミル。ハァ、ホントに大きくなったね。わたし、ずっとこうしてぎゅーってしたかったの。わたしが抱っこしたら泣くところは変わってなくて安心したよ」

　……そこで安心していいのかよ？

　からかわれた照れ隠しの面が大きいマインはカミルがいくら混乱していても動じないし、おばさんやトゥーリも微笑ましく見ている。だが、さすがに何の説明もなく「ローゼマイン様」に抱きつかれているのは可哀想だ。

「マイン、カミルがめっちゃ混乱してるからそろそろ放してやれよ」

「嫌。七年分はぎゅーを堪能したいもん」

　うりうりとマインは頬ずりしているが、カミルはオレに向かって必死に手を伸ばしている。頭の中にお貴族様という意識があるから、力任せに振り払うこともできないのだろう。

「カミルは何の事情も聞かされてないんだ。七年分を堪能するなら、あっちに適任がいるからさ」

　うずうずしているおじさんを指差せば、マインはむぅ、と唇を尖らせて「後で覚えてて」とカミルから離れた。おじさんに向かって駆けだしていく。ぐしゃぐしゃになるくらいに撫でられた髪を整えながらカミルが「ルッツ、これってどういうことさ？」と恨めしそうな目でオレを睨んだ。

「旦那様とマルクさんも事情を知っているみたいなのに、オレだけ知らないなんて……」

「契約魔術に反したら死ぬ危険があったから、カミルには教えない方がいいっておじさんが判断したんだ」

「マインは他領のお貴族様に狙われて、家族が連座で処刑されるのを防ぐために二度と家族としては関わらないという契約魔術を交わして領主の養女になった。契約魔術には範囲があったみたいでアレキサンドリアは範囲外だから家族としても接することができる。間違いなくお前の姉だ」

　オレと旦那様の簡単な説明にカミルが涙目のままで「わけがわからない！」と叫んだ。旦那様とマルクさんが揃って頷き、同意を示した。

「まぁ、カミルの混乱はわかる。マインについては何に関してもだいたいそんな感想が出てくるからな」

「そうですね。本当に近くで見ていても、遠くで話を聞いていてもわけがわかりませんから」

　店では最も頼りになり、わけがわからないという顔を見せたことがない二人の深い頷きにカミルが青ざめていく。

「……それより、カミルは心の準備をした方がいいぞ。すぐに次のぎゅー攻撃が来るからな。あいつの七年分、お前にとっては一生分の愛情がドーンとお前に向かうことになる。覚えとけって言われただろ？」

「一生分！？　何かすっげぇ怖い響きなんだけど！」

　ビクッとしたカミルを見て、オレは笑う。マインの七年分の愛情に押しつぶされればいい。神殿でちらりと見る姿しか知らなかったカミルに対するマインの愛情はとんでもないことになっているはずだ。

「父さん、ただいま！」

「……マイン、おかえり。よく帰ってきた。……本当によく帰ってきてくれたな」

　二度とこうして抱きしめることは叶わないと諦めていたマインの帰りに、おじさんの目から大粒の涙が零れていく。

「フェルディナンド様のおかげなんだよ。わたし、いっぱい助けてもらって……。ここに来るための転移陣も作ってくれてね……」

「そうか……。そうか……」

　おばさんが二人の様子を見ながらエプロンの端で目尻を拭っていた。ふっと何かに気付いたように視線を動かしたのを見て、オレもつられて視線を向けた。フェルディナンド様がマインとおじさんを見ていた。無表情で静かにじっと。

　一見しただけではフェルディナンド様が何を考えているのかわからない。でも、マインが言った「フェルディナンド様のおかげ」という言葉と、おじさんとマインの抱擁をただただ見守る様子から、これがこの人が望んだ光景なのだと何となく察した。

「マイン」

「うぅ～……。何、母さん？」

　ぐすぐすと泣きながらマインがおばさんを見た。おばさんも涙目だけれど、わざと呆れたような声を出す。

「何じゃないわよ。いつまでも未来の旦那様を廊下に放っておいてどうするの？　せめて、中に入っていただくとか、きちんと紹介するとかしなさい」

「あ、そうだね」

　マインがパタパタと駆け出して、フェルディナンド様の腕を取る。その瞬間、フェルディナンド様の眉間に皺が刻まれた。

「いや、私はここで構わぬ」

「ダメです」

　……なぁ、マイン。実はお前との結婚、フェルディナンド様にはめちゃくちゃ嫌がられてないか？

　それほど何度も顔を合わせているわけではないが、普段から小難しい顔をしているフェルディナンド様の眉間に皺がくっきりだ。大丈夫なのか、とオレは不安になった。

　だが、マインはお構いなしでフェルディナンド様を引っ張ってきて、泣き腫らした目で家族をぐるりと見回した。

「わたしの婚約者のフェルディナンド様です。父さんみたいに、領地ごとわたしを守ってくれる人。……貴族間のお披露目はしたけど、こうして、ちゃんと皆に紹介したかったの」

「こら、落ち着きなさい。あまり感情的になるものではない」

　泣き腫らした目からまた涙が零れているマインの様子を見ていたフェルディナンド様がさっと魔石を持たせ、ハンカチを出してマインの目元を拭い始めた。何というか、ものすごく手慣れた感じに見えるのは気のせいだろうか。お貴族様というか、フェルディナンド様がやることだとは思えなくて、呆然としてしまう。

　……なんでだろうな？　仏頂面のくせに雰囲気がやたら甘いような気がするんだけどさ。

「だって、ホントに皆とこうしていられるなんて思ってなかったから、嬉しくて……」

「わかったから、少し感情を抑えなさい。……ルングシュメールの癒しを」

　フェルディナンド様がマインの目元を覆って祝福をすると、泣いて赤くなっていた目元が治った。この後もまだまだ泣きそうだから、治すのは帰る前でいいんじゃねぇ？　と思ってしまう。

「ねぇ、成人式しよう！　せっかく成人式の日にマインが帰ってきたんだもん。髪を結って、皆でお祝いするだけでもいいじゃない。マインの成人式をしようよ。わたし、髪を結う道具、取って来るから」

　トゥーリが飛び出していくと、おじさんが食器棚のカップを手にして、軽く振る。

「トゥーリがやる気になってるが、マイン、時間はあるのか？」

「えーと……フェルディナンド様？」

　酒に誘うおじさんの仕草を見たマインがフェルディナンド様を振り返る。少し考え込んだフェルディナンド様が「六の鐘までには戻らねばならぬが、それまでならば問題なかろう」と言った。まだ五の鐘も鳴っていない。結構時間がありそうだ。

「よし、マルク。ウチから酒を取ってこい。エーレンフェストから持ってきた秘蔵のやつだ」

「かしこまりました、旦那様。せっかくですから、夜に開ける予定だったアレキサンドリアのお酒も持って来ましょう。カミル、手伝ってくれますか？」

「はい、マルクさん」

　カミルがこの場から逃げるようにマルクさんの後ろに続く。

「ただいま！　座って、マイン。髪を結うから。あ、でも、この辺りの垂らされてる部分だけね。髪飾りの辺りは整髪料で固められてるから」

　店から色々と道具を持ってきたらしいトゥーリがテーブルの上にドンと木箱を置くと、マインをスツールに座るように促す。マインは自分のスツールの隣の椅子をポンポンと叩いてニコリと笑った。

「フェルディナンド様はこちらに座ってくださいね」

　少しの躊躇いを見せた後、フェルディナンド様が座る。おばさんが「お酒の準備ができるまで」と言いながらフェルディナンド様にお茶を勧めると、マインが横から手を伸ばして一口くぴっと飲んだ。

　マインが客用のお茶を取ったことにおばさんが目を丸くして「マイン」と咎める声を出したが、マインはそちらに視線を向けず、口の付いた部分を指で拭ってフェルディナンド様に見せた後、カップを置く。それからそっと丁寧な仕草でお茶を勧めた。

「はい、どうぞ。フェルディナンド様」

「……ここでは必要ない」

「そうですか？」

　マインが神殿巫女見習いの頃にお貴族様の習慣について話をしていたから知っている。あれは毒見だ。それを当然のことと考えて行うマインに、平民の頃とはずいぶん変わったな、と改めて思った。

「じゃあ、お願い。トゥーリ」

　お茶の毒見を終えたマインが肩にかかっていた髪を背中にすっと払ってそう言うと、トゥーリがいそいそとマインの髪に触れる。するりとトゥーリの手から夜の色の髪が滑った。

「うわぁ、マインの髪って綺麗で、すごく触り心地が良いね」

「でしょ、でしょ？　側仕え達が頑張ってくれてるからだよ」

「そこはウチのリンシャンのおかげって言ってよ」

　トゥーリが頬を膨らませると、マインがポンと手を打った。

「あ、こっちにもリンシャンの工房はあるんでしょ？　エーレンフェストの工房に比べて品質はどう？　気になってたし、直接聞きたいと思ってたけど、さすがに気軽に出かけられる立場じゃないからね」

　髪を結いながらの二人の会話はギルベルタ商会の仕事についてだ。旦那様も身を乗り出すようにして商売関係の話を始める。

「印刷業をどんどん進めろって言われているが、どの程度の計画が立っている？　この街にはどのくらいの印刷工房を増やすんだ？」

「ローゼマイン工房以外に二つは早急に欲しいです。貴族院に向けて孤児院の子供達向けに秋の洗礼式の後から神殿教室を始める予定なのは知ってますよね？」

　フラン達が移動してきて、神殿の中もエーレンフェストの時のように整えられている。孤児院の子供達への教育と一緒に富豪の子供達への教育も同時に始めたいという言葉は聞いた。

「ウチからはカミルを行かせるつもりだ。今のところは貴族との付き合い方がわからなくて、大店のダルアはあまり乗り気じゃないようだな。貴族との繋がりができるという利益と子供の粗相で処分を受けるのを天秤に乗せている感じだ」

　教育費が少なくても、危険の方が大きいという判断がされている。プランタン商会とギルベルタ商会がアレキサンドリアで新しく入れたダルア見習いを入れることになっているので、他の商人達がどうするのかはそれを見てからになるだろう。

「あぁ、やっぱり実際に現場を見たいですね。もどかしいです。できるなら養父様を見習ってお忍びでうろつきたいですよ」

「余計なことを考えるな、阿呆！」

　旦那様とオレの声が揃った。マインの変わらなさに頭を抱えたい。

　下町の森にお忍びでやって来るジル様、工房で作業をしたがるユストクス様、下町に聖女の素晴らしさを広げるにはどうすればいいのか相談してくるハルトムート様の対応に振り回されてきたのはオレだ。

「まったく、君は……」

　眉間に皺を刻んだフェルディナンド様がそう言った。同じように叱り飛ばしてくれる立場の人がいることに安堵し、オレは叱る役を譲る気分でフェルディナンド様を見る。

「今まさにお忍びでここにいることを自覚しているか？」

「あ、そうでしたね」

　……今がお忍びだったのか。そうか。つまり、フェルディナンド様は許可しちゃったってことだよな？

　マインが帰ってきたのが嬉しかったので完全に意識の外になっていたが、フェルディナンド様がお忍びを許可する人だとは思っていなかった。よくよく考えてみれば、無表情で顔に出ないからわかりにくいが、この人はマインから一度も目を離していない。今もトゥーリに髪を結われているマインを見ている。

　……これってもしかしたら結構ヤバい状況じゃないか？

　この先、マインがここに出入りすることが増えたら、フェルディナンド様の許可付きで外に出ることもあり得るかもしれない。オレは旦那様と顔を見合わせて、未来予測に頭を抱えた。

「せっかく新しい図書館を作ったんだけど、まだわたしの図書館がスッカスカで寂しいんだよね。プランタン商会には本当にいっぱい本を作ってほしいの。頑張ってね、ルッツ」

　どんどん作って本棚をいっぱいにするんだ、と金色の目をキラキラに輝かせているマインに旦那様が「残念ながら無理だ」と肩を竦める。

「ルッツは一年から二年くらい出張に出さんから、その辺りを配慮して計画を立てろよ。ルッツとトゥーリの結婚が控えているからな」

　これまでは祝福防止のために隠していたのに、旦那様にさらりと暴露された。マインが目を丸くしてオレを見て、トゥーリを振り返ろうとする。

「マイン、頭は動かさないで！」

「だって、トゥーリとルッツが結婚するって言ったよね！？　わたし、聞いてないよ！？」

「派手な祝福をされたら困るから時期を見計らってたんだよ」

　トゥーリの呆れたような声にオレも頷いた。文官達がたくさんいる会合の場でぶわっと報告なんてされては困る。

「じゃあ、ホントのことなんだね！？　うわぁ、どうしよう！？　すごく嬉しい！　神にいの……」

「止めなさい、馬鹿者！　ここから祝福の光が漏れたら二度と来られなくなるぞ！」

「そ、それは困ります！　あ、あ、でも、祝福したいです」

「当日にしなさい。レティーツィア達への教育にもちょうど良い。それに、私も行う。君の家族の結婚式なのだから」

　フェルディナンド様によると、アレキサンドリアは神々に祈りを捧げるのを日常的に行えるように貴族達を教育していく方針だそうだ。そのため、マインのお祈りは特大になろうが構わないとされているらしい。結婚式の日はとんでもない量の祝福を浴びることになりそうだ。

　……でも、そうか。マインとフェルディナンド様が結婚するってことは、トゥーリと結婚するオレはフェルディナンド様と親族になるのか。……マジかよ。

　ローゼマイン様とフェルディナンド様の婚約についてはわかっていたが、マインとして戻ってくることを想定していなかったし、さっき聞いた時も脳が考えることを拒否していたらしい。どこからどう見てもお貴族様のフェルディナンド様と親戚付き合いをすることになるらしい。オレにできるだろうか。

　そんなことを考えている間に、お酒や肴を抱えたマルクさんとカミルと手伝いに駆り出されたおじさんが店とここを何往復もしてお祝いの準備を整えていく。おばさんは時折トゥーリがマインの髪を結う様子を見ながら、酒の肴を作っていた。

「できたー！　どう？　イイ感じだと思わない？」

　マインの髪が結い上がる。トゥーリの時にも思ったが、髪を上げただけで一気に大人の女に見えるようになるのが何とも不思議だ。トゥーリが横から後ろからとマインを見て、「うんうん、イイ感じ。可愛いよ、マイン」と嬉しそうに褒めた。

「おぉ、さすがマイン！　俺の娘！　世界一可愛い。エーファと同じくらい美人だ。一気に大人になったな。こういう姿を見ることができたなんて父さんは嬉しいぞ！」

「父さん、大袈裟だよ」

「いや、本当に。エーファが初めて髪を上げた時にも思ったが、女の子はほんのちょっとのことで急に綺麗になるんだ。今日のマインはとびきり美人だぞ」

　マインがちょっと照れたように笑うけれど、目尻を下げたおじさんがその笑顔を含めて褒めちぎる。へへっと笑ったマインがフェルディナンド様に視線を向けた。

「どうですか、フェルディナンド様？　わたし、大人っぽいですか？」

「悪くはない」

　フェルディナンド様が無表情で頷いた瞬間、おじさんの目がギラリと光った。テーブルに身を乗り出し、剣呑な表情でフェルディナンド様を睨む。

「こら、ちょっと待て。悪くはないとは何だ？　ウチの娘は世界一だぞ」

　……ちょっと待つのはおじさんだ！　何言ってんだよ！？

　オレは一瞬で血の気が引いた。お貴族様に対して何を言うのか。さすがにあまりにも無礼な態度である。オレは恐る恐るフェルディナンド様に視線を向けた。フェルディナンド様は無表情のままだ。何かことが起こる前におじさんを抑えようと、オレと旦那様が立ち上がる。

「ギュンター、落ち着け」

「旦那様の言う通りだ。相手はフェルディナンド様だぞ？」

「それが何だ？　こいつはマインを奪っていく男だぞ？　マインを大事にしないのは、相手が貴族だろうが、神様だろうが俺が許さん！」

　完全に目が据わっているおじさんがテーブルをドンと叩いた。ぎょっとして息を呑んだ瞬間、マインがクスクスと笑い出す。

「さすがわたしの父さんって感じ。ねぇ、フェルディナンド様？」

「あぁ、そうだな。本当に君はギュンターとよく似ている」

　するりとマインの頬を撫でたフェルディナンド様がおじさんに向き直った。表情が変わらないので、怒っているのかいないのかさえもわからない。

「ギュンター、エーファ」

　呼びかけに周囲で見ているオレ達の方がビクッとする。だが、おじさんは喧嘩腰の態度のままだし、おばさんは普通の顔だ。

「私は其方等の深い愛情を受けて育ったマインに救われた。貴族と平民で立場を違え、契約魔術に縛られて尚、細い繋がりを大事にする其方等には尊敬の念さえ覚える。家族の在り方を私に教えたのはマインだが、正確にはマインを育て、守ってきた其方等だ」

　フェルディナンド様の顔には表情がない。それなのに、静かに語られる声には聞いている者の心を揺さぶるような情があった。マインの家族だから尊重しているのではなく、おじさんとおばさんに対する思いがそこにはある。

「其方等が思い合い、守り合っていたように、私も彼女を守る。すでに彼女には領地ごと守ると誓った。其方等にもマインを何よりも大事にすると誓う。だから、マインの家族である其方等に……私がマインの家族になることを認めてほしい」

　貴族としての家族になりたいわけではなく、マインの家族になりたいのだとフェルディナンド様が言う。

　マインがじっとおじさんとおばさんを見つめている。金の瞳が幸せそうに潤んでいるのを見れば、「認めない」などと言えるはずがないだろう。

「フェルディナンド様にマインを預けた判断は間違っていなかったということね。ちゃんとマインを大事にしてくれる人でよかったわね、ギュンター」

　おばさんが嬉しそうにそう言って木製の杯をおじさんとフェルディナンド様の間にコトリと置いた。おじさんが鼻の上に皺を刻みながら、おばさんに渡された瓶から杯に酒を注いでいく。

　酒の瓶をドンと置かれたフェルディナンド様がどうするのか問うようにマインを見た。マインが目を瞬く。普通は酒の瓶を置かれたら注ぐものだが、側仕えに給仕されるのが当たり前の二人にはわからないのかもしれない。それとも、一つしか杯がないから戸惑っているのだろうか。

「その杯にフェルディナンド様も酒を注ぐんだよ。平民が婚約を交わす時にするんだ」

「ルッツ」

「オレもトゥーリとの婚約が決まる時にしたんだ。貴族のやり方は知らないけど、フェルディナンド様が平民側に合わせるならどうすればいいのか教えることはできる」

「助かる」

　フェルディナンド様がそう言って瓶を手に取り、杯に注いでいく。トクトクと音を立てて注がれる酒は約束の印だ。

　おじさんが杯を手に取った。グッと大きく一口飲んで、杯をフェルディナンド様に差し出す。

「マインを頼む」

「約束する」

　フェルディナンド様が受け取った杯を飲み干す。マインとフェルディナンド様の婚約が成立した。

　その後はマインの成人祝いと婚約の祝いで六の鐘が鳴る寸前まで、皆で騒いでいた。

　婚約したなら口付けくらいしてやれよ、と旦那様に囃し立てられてマインが動揺したり、「フェルディナンド様の水の女神はマインだったのですね」とマルクさんが言って「私にとっては全ての女神がマインだが？」と真顔で返答されて反応に困ったり、カミルが再びマインに抱きしめられて皆に助けを求めたり、フェルディナンド様がおじさんにねだられて離れていた間のマインについて語っていたり、トゥーリとマインとおばさんが新しい衣装について話し合っていたり、オレとトゥーリの馴れ初めについてマインに根掘り葉掘りきかれたり……。楽しい時間はあっという間に過ぎた。

「またいらっしゃい。もちろんフェルディナンド様も一緒にね」

「今度はお前が酒を準備しろよ」

　陽気に酔っぱらったおじさんがフェルディナンド様の頭をガシガシ掻き回しながらそう言った。フェルディナンド様はおじさんにされるがままで「秘蔵の酒を持ってこよう」と返す。フェルディナンド様の表情は変わらなく見えたが、マインによるととても柔らかい表情をしているらしい。

「ここに来ることを側近達にも話せないから連絡が難しいことはわかったから、今度からは必ずこれを着てくるのよ、マイン。こっちがフェルディナンド様の分だからね」

　トゥーリは富豪の娘が着るような平民の服をいくつかマインに渡していた。いくら他の衣装に比べるとひらひらした部分が少なくて格段に動きやすいとはいえ、貴族の執務服で来られると、他の人に見られた時に困るのだ。

「ありがと、トゥーリ。季節に一度くらいは遊びに来られるように頑張ってお仕事するよ。……カミル、次に来る時までにマインおねえちゃんって呼べるように練習しててね。楽しみにしてるから」

　寂しそうな声でマインにそう言われて、最後までマインから逃げ回っていたカミルがオレの後ろからきまずそうに顔を出した。カミルが逃げ回っていたのは別にマインのことが嫌なわけじゃない。突然できた美人で可愛いねえさんにどう反応していいのかわからなかっただけだ。

「オレはもうおねえちゃんなんて呼ぶ年じゃないから……トゥーリと同じように名前で呼ぶよ、マイン」

　マインが嬉しそうに笑いながら壁に手を当てる。その途端、今まではなかった扉が姿を現した。魔術で隠されていた扉を開く。

「またな、マイン」

「うん。またね、皆！」